

FD Review vol.3

2007 年度の総括



前期授業公開

教員と学生との距離が近い授業。学生も集中力が高まる。



前期授業公開

パワーポイントを使用したビジュアルな授業を提供。
言葉のイメージと実像を一致させる。



後期授業公開

狭い空間を想定した場所での車椅子の操作を学ぶ。
学生は空間のとらえ方や操作の可能性を実感する。



後期授業公開

教員が他学部の授業を参観する。
教員は積極的なFD活動を実施している。



後期授業公開

理論と実践を交えた授業を展開。
学生は指導のあり方を感じながら学ぶ。



入学前教育 自校教育

学長自ら自校教育を行なう。
社会に貢献することの大切さが伝えられる。



入学前教育 学びの導入

各学部で教員によるガイダンスが実施される。
入学後の学びと自身の未来像を重ねる入学予定者たち。



入学前教育 体験授業

緊張気味の入学予定者も教員の和やかな談話でほぐれる。
入学予定者は大学での深い学びを実感し入学に臨む。



目 次

はじめに 学習者が自らの学びをデザインする……………	教授法開発室長 達富 洋二	
2007 年度の総括 ……………	教授法開発室員 榎本 福寿	1
英語基礎力調査……………	教授法開発室員 持留 浩二	5
学生の基礎学力の現状と組織的対応の必要性……………	教授法開発室員 近藤 敏夫	47
授業アンケート……………	教授法開発室員 小林 隆	55
授業公開……………	教授法開発室員 有田 和臣	77
e – Learning の活用 －教授法としての 成果と課題－ ……………	教授法開発室長 達富 洋二	85
入学前教育の実施結果報告および課題……………	教授法開発室員 榎本 福寿	99
フォーラム参加報告 ……………		
〔○(財)大学コンソーシアム京都主催「第13回FDフォーラム」 ○京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第14回大学教育研究フォーラム」 ……………2007・2008年度 教授法開発室員 / 事務局〕		
(清水 稔・達富 洋二・松本 真治・近藤 敏夫・有田 和臣・岸田 恩・ 山本 博子・小林 隆・藤松 素子)……………		167
FD 活動における「初年次教育」の重要性 － 学生たちの「達成感」と「満足感」を導くために－ ……………	教学部長 八木 透	185
活動記録……………		187
教授法開発室……………		191

FD Review

FD Review

はじめに

はじめに 学習者が自らの学びをデザインする

教授法開発室長 達富洋二

【「大学卒業時の力」－（マイナス）「大学入学時の力」＝（イコール）4年間の学び】と考えたとき、この4年間の学びは「知らず知らずのうちにできていく」という無自覚なものであってはいけない。学ぶ者の主体的な姿勢に期待する部分が多いが、教える者からの確実な教授法によって、この学びはより価値あるものになり、学習者が4年間の成果として自覚できるものになると考えられる。そのために大学として行わなければならないことからは少なくない。

本誌「佛教大学FDレビュー第3号」の内容（目次）は以下の通りである。

- ・ 2007年度の総括
- ・ 英語基礎力調査
- ・ 学生の基礎学力の現状と組織的対応の必要性
- ・ 授業アンケート
- ・ 授業公開
- ・ e-Learningの活用
 - －教授法としての成果と課題－
- ・ 入学前教育の実施結果報告および課題
- ・ フォーラム参加報告
- ・ FD活動における「初年次教育」の重要性
 - －学生たちの「達成感」と「満足感」を導くために－
- ・ 活動記録

どの内容も、本学のFD活動（2000年より開始）の確かな軌跡である。また、これからの佛教大学のありようを明らかにするために、現在の本学の学生の「学びの姿」の実態を真摯に見つめ、その成果と課題を明らかにしたものである。授業にかかわる学生の姿の「今」を知り、授業にかかわる教員の「今」を作るためには、このような日常のFDを繰り返すことが必要だと考えられる。

それぞれの内容の詳細については、それぞれの内容に詳しいが、いずれもが、教員が学生の姿を知るとともに、教員自身の授業を振り返り改善を図るために生かすことができるものばかりである。

一方で、学生の「今」を考えたとき、これまでにない現状がある。その実態は決して憂うものばかりではない。たくましさやしなやかさを備えた学生の姿もある。しかし、これまでと同じ「大学の教育」では対応できないことがらがあることも事実である。

学べない学生というわけではない。大学教育の守備範囲の変容である。特に、入学期における初年次教育の必要性を強く感じる。

例えば、学びの共同体を作るための仲間意識の問題である。学びのつながりとしての「なかま (peer group)」作りの機会を意図的に設定することで、その後の学習の効果は高まる。そうであれば、その機会を作ることに積極的でありたい。

次に、主体的な学習を作るために、シラバスの読み方を含めた学習計画を立てることである。学生が自身の手で、4年間の学びをデザインすることは学習の自覚化につながる。

さらに、主体的な学び (active learning) の「かたち」を具体的な行為として経験するためにも、大学生としての読解力 (critical Reading) と記述力 (paragraph writing) の定着を図りたい。表現力 (presentation skill) の習得も同様である。

最後に、「なかま (peer group)」及び自分自身による、学びの成果の評価である。このことが、当初のデザインの修正にはたらくとともに、新たなデザインを生み出すことになる。

ここでは、初年次教育の詳細な考察はひかえるが、教職員及び学生の誰もが考える「今」の姿であろう。初年次教育だけでなく、「英語基礎力調査」「基礎学力調査」「授業アンケート」「授業公開」「e-Learning」「入学前教育」など、どの取り組みについても、それぞれに大きな成果を見出すことができるが、同時に発展的な今後の課題も明確である。

学生・授業・教員の「今」を確かなものにしていくためにも、学生とともに作り上げる提案型のFD活動のさらなる深化に向け、本学のFDを価値あるものにしていきたい。忌憚のないご意見ご批判を賜りたい。

FD Review

總括

FD Review

2007年度の総括

教授法開発室員（前教学部長） 榎本福寿

去る6月30日付の朝日新聞朝刊は教育面に、FDの義務化に対応した各地の動きを特集記事として報じている。山形大学が近年精力的に取り組んでいるFDの大学間連携の動きを中心に、各地で同じようなネットワーク化が進んでいるという。その一面トップの特集記事の見出しには「授業の質 連携で高めろ」と掲げているが、もう一つの小さい方の見出しに「中教審『成果は不十分』」と掲げる記事が、FDをめぐる実態を、審議会や担当者の本音を拾い上げるかたちで伝える。

FDに対する取り組みには、それこそさまざまな困難や問題がつきまとう。FDの義務化に伴い、文科省の2006年度の調査では、全体の約86%の628大学が実施（上記記事）という現状にもかかわらず、課題が多く、大学間連携によるFDの取り組みは、そうした障壁を乗り越える試みでもある。もはや一つの大学内の単独の取り組みの限りでは解決できないほど教育を取り巻く環境や事態が深刻化していることを、それは逆に強く印象づける。そこでFDをめぐる、いま全国の大学が実際にどのような課題に直面しているのかを見るに、中教審の大学分科会制度・教育部会に設置された「学士課程教育の在り方に関する小委員会」による「学士課程教育の再構築に向けて」と題する審議経過報告（平成19年9月18日）の中には、「様々な調査結果などを踏まえると、例えば次のような課題があると考えられる」として7つの項目を挙げる。

- ア 一方向的な講義に止まり、個々の教員のニーズに応じた実践的な内容に必ずしもなっておらず、教員の日常的教育改善の努力を促進・支援するものに至っていないこと。
- イ 教員相互の評価、授業参観など、ピアレビューの評価文化が未だ十分に根付いていないこと。
- ウ 研究面に比して教育面の業績評価などが不十分であり、教育力向上のためのインセンティブが働きにくい仕組みになっていること。
- エ 教学経営のPDCAサイクルの中にFDの活動を位置づけ、教育理念の共有や見直しに生かしていく仕組みづくりと運用がなされていないこと。
- オ 大学教育センターなどFDの実施体制が脆弱であること（FDに関する専門的人材の不足、各学部の協力を得る上での困難、発達途上のFD担当者のネットワークなど）。
- カ 学協会による分野別の質保証の仕組みが未発達であり、分野別FDを展開する基盤が十分に形成されていないこと。
- キ 非常勤教員や実務家教員への依存度が高まる一方で、それらの教員の職能開発には十分目が向けられていないこと。

課題は、まさに多岐にわたる。しかし、このなかのどこにも、授業改善の文字を見出す

ことができない。報告でも、FDの「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」という従来の一般的な見解（FDの義務化を定めた大学設置基準の改正条文に基づく。本学でも、学則第61条の2項に「本学は、授業の内容および方法の改善を図るための組織的な研修および研究を実施するものとする」と規定する）を踏襲しているにもかかわらず、アに「教員の日常的教育改善」という。それと明示的ではないけれども、FDをめぐる課題に対しては、授業改善にとどまらない、より広くこの大教教育の改善に向けた新たな活動や取り組みが求められていることを、ア以下に列挙した各項目の内容以上にそれが雄弁にものがたる。

これに関連した新たな動きが、すでに数年前から始まっている。そのなかの一つ、お隣の立命館大学では「FDの再定義」を掲げる。『大学教育と情報』（私立大学情報教育協会。Vol.15、No.4、2007）が「特集・教育改善のための教育・学習支援」として組んだ特集に、沖裕貴氏（立命館大学大学教育開発・支援センター教授）が次のように報告している。

今後FDが義務化された際、その対象領域を授業内容と方法論に限ることは、日々教職員が力を注いでいる教育改善活動や学習支援活動を矮小化してとらえる危険性をはらんでいる。また「研修」という言葉から連想される「研修会や講演会への参加」のみがFD活動と誤って認識される危険性も指摘されよう。

大学設置基準の規定のはらむ問題をこう指摘した上で、「FDの目的が教育における理念や目標を実現することであり、対象領域が個々の授業のみならずカリキュラムも含むこと」を強調する。そして報告のなかに、京都大学高等教育研究開発推進センターの田中毎実氏らが新FD研究会で進めている取り組みの最重要課題にFDの再定義を挙げ、FD義務化の実施に伴う新たな方向への転換を説く田中氏の次の発言を紹介している。

これまでの研修会・講演会への参加や学生授業評価の実施などの「イベント的・制度化型」のものから、学部や研究科で日常的に行われるすべての教育改善活動、学習支援活動を組織化した「相互研修型」に転換していかざるをえないと述べている。

FDの義務化を契機に評価にも変化が生じると沖氏はみる。同報告中に、今後は、認証評価においても「研修会・講演会への参加率や学生授業評価の実施率などではなく、教育改善に対する効果の検証が求められる時代が来ることは間違いない」と指摘している。

さて、翻って本学のFD活動や取り組みだが、2007年度の各個別の活動については、それぞれ分担して本レビューに詳細な報告を行っているのでそれに譲り、ここでは専ら本学のFDをめぐる全般的な取り組みを振り返ってみる。過年度との違いは、FD活動を推進・支援する体制や組織を整備してその下で活動が始まった点である。初年度に当たり、なお模索の段階を完全には脱しきれてはいないが、新設した教育開発課と従来からFD活動を担ってきた教授法開発室との業務、事務その他にわたる連携も順調に機能している。当然、担当領域も拡がる。その成果の一つが、入学前教育の新たな展開である。詳細は本レビューの入学前教育の項を参照していただくとして、その他、授業公開については、学長が率先して参観し、さらに授業終了後は参観者を交えた研修（研究）会がもたれて活発な議論が

交わされる段階を迎えている。eラーニングも、教育研究連携推進部メディア教材開発・知財課と連携した新しい取り組みが始まっている。

教学に関しても、2007年度に教育開発委員会が新たに立ち上がった意味は大きい。教育開発課長がこの委員会の事務取り扱いに当たる。教育開発課、教授法開発室の事業、入学前教育、学習支援等を審議し、教授会と直接繋がるこの委員会は、本学のFDをめぐる活動やそのありかたの方向を決定づける。そしてなかならず重要なのが、学習支援についても、この委員会および教育開発課や教授法開発室が所管する点である。京都大学高等教育研究開発推進センターの田中毎実氏が提唱するFDの再定義や、それを具現化する教育改善活動と学習支援活動とを組織化した「相互研修型」FD活動へ展開する下地だけは、ほぼ整備を終えている。^(注)

問題は、しかし実質である。FDの実質化ということ、実はまさにこれこそが、本学のみならず全国の大学が直面する大きな課題である。前掲中教審の「学士課程教育の在り方に関する小委員会」報告のなかに、それについて次のように指摘する。

今、必要なことは、制度に止まらず、FDの実質化を図っていくこと、そのための条件整備を国として進めていくことである。その際、FDを単なる授業改善のための研修と狭く解するのではなく、我が国の学士課程教育の改革が目指すもの、各大学が掲げる教育目標を実現することを目的とする、教員団の職能開発として幅広く捉えていくことが適当である。また、FDの実質化には、教員団の自主的・自立的な取り組みが不可欠であることに留意することが大切である。教員の個人的・集団的な日常教育改善の努力を促進・支援し、多様なアプローチを組織的に進めていく必要がある。

このFDの実質化のためには、教育業績の適切な評価が不可欠としてもいるが、国の政策を無視したFD活動や取り組みがありえない以上、本学もこの事業を、課題解決に向けた優先的な取り組みとして展開する必要がある。2007年度がその嚆矢に当たる年度となるのか否か、教育に携わる佛大教職員すべての意識にかかっていると決しても決して過言ではない。

(注) あくまでも下地の整備を一通り終えただけに過ぎないというのが実態である。FDの義務化とほぼ時を同じくして、「教育研究上の目的の明確化」や「成績評価基準等の明示等」が大学設置基準の一部改正によりこれまた義務化されている。前者は、学部、学科ごとに人材養成に関する目的その他の教育研究上の目的を明示、公表することを定めたものだが、これに関して、学部・学科の養成する人材像・教育目標等を明確化し、これにそくした体系的な教育課程（カリキュラム）の編成が必要となる。後者は、授業内容、計画のほか、成績評価、卒業認定等の客観性及び厳格性確保のための基準などについて、同様にこれを明示、公表することを定めたもの、登録単位数の上限の見直しやシラバスの充実、GPAの導入等も課題となる。教育開発の戦略的・司令塔的機能・役割のもとでは、当然、これらもFD活動と不可能の取組対象になるはずである。

FD Review

英語基礎力調查

英語基礎力調査

教授法開発室員 持 留 浩 二

1. はじめに

佛教大学ではカリキュラム改革が実施された2004年度より、全新1回生を対象にして、入学時と1回生終了時にTOEIC Bridge IPテストを使用した英語基礎力調査を実施している。この調査は本学における英語教育プログラムをより効果的なものへと改善させていく上で大きな役割を果たしている。

現在のカリキュラムにおいて全学共通科目・必修外国語「英語」（文学部のみ選択必修）で習熟度別クラスを編成しているが、これはこの調査結果をもとになされている。1回生では「Basic Reading」、「Basic Listening」、「Basic Communication」の3科目が必修となっており、受講生は春、秋学期にそれぞれの授業を同じ指定クラスで受講することになる。2回生では「Intermediate Communication」を1回生終了時の調査結果をもとに指定されたクラスで受講することになっている。

ここでは、2007年度の英語基礎力調査結果を紹介するとともに、2004年度からの調査結果と比較し新1回生の英語力がどのように変化してきているのか、また各学部、学科別の調査結果及び一年間の学修後の学力の変化を見ながら本学における今後の英語教育の課題を考えてみたい。

2. TOEIC Bridge TEST IP について

TOEIC BridgeとはTOEICの特長を備えつつ初・中級レベルの英語能力測定に照準を合わせて設計されたテストで、テスト時間と問題数はTOEICテストの半分に設計されている。問題はリスニングセクション（25分間・50問）と、リーディングセクション（35分間・50問）からなっており、スコアはリスニング10点～90点、リーディング10点～90点、トータル20点～180点の2点刻みで表示される。TOEICテストよりも日常的で身近なコミュニケーション場面や素材をテスト問題に採用しており、リスニングセクションの出題スピードはTOEICテストより遅く、ネイティブスピーカーが「注意深く」話す際のスピードとなっている。また、TOEIC Bridgeでは、各セクションスコア、トータルスコアの他に5分野3段階のサブスコアが表示され、英語能力の各スキル別の力が分かるようになっている。IP TESTとはTOEIC運営委員会が実施する公開テストではなく、実施団体が独自に運営・管理する団体特別受験制度のことである。

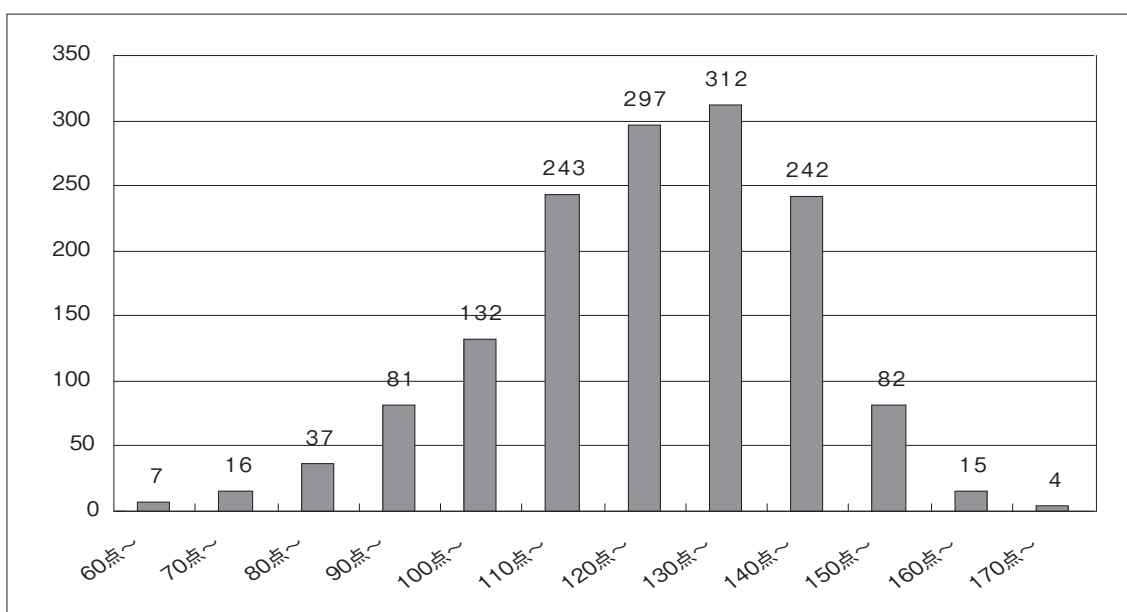
TOEIC TESTとの相関性については、TOEIC運営委員会が以下の比較表を公開している。

TOEIC Bridge	90	100	110	120	130	140	150	160
TOEIC	230	260	280	310	345	395	470	570

3. 入学時のスコア

3.1 全体の傾向

		第 1 回			
		2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
Total	平均点	117.6	122.4	124.2	124.8
	標準偏差	18.2	17.5	17.5	18.5
	最高点	170	168	178	178
	最低点	62	38	66	60
Listening	平均点	56.8	58.6	59.6	60.4
	標準偏差	9.8	8.4	9.2	9.1
	最高点	86	88	90	90
	最低点	28	20	30	28
Reading	平均点	60.7	63.8	64.6	64.4
	標準偏差	10.7	11	10	11.3
	最高点	88	86	90	88
	最低点	30	12	24	26



入学時にスコアについて『FD Review Vol.2——2006 年度の総括——』で紹介されたデータでは、調査が開始された 2004 年度以降では 2006 年度がリスニング、リーディング、トータルスコアにおいて最も好成績だったことが指摘されている。2007 年度の結果は上の表のようになっており、最も成績の良かった 2006 年度と比べると、リスニングは 60.4 点で前年度より 0.8 点の上昇、リーディングは 64.4 点で逆に 0.2 点の下降、トータルでは 124.8 点で 0.6 点の上昇となっている。トータルスコアにおいて、調査が開始された 2004 年度以降では最も高いものとなっている。

3.2 学部学科の傾向

第1回学部別スコア

第1回					
	文学部	教育学部	社会学部	社会福祉学部	保健医療技術学部
受験者数	494	224	373	297	83
Total					
平均点	121.3	136.2	120.8	123.3	137.8
標準偏差	17.9	16.6	18.4	16.8	13.8
最高点	164.0	178.0	168.0	170.0	166.0
最低点	66.0	64.0	66.0	60.0	106.0
Listening					
平均点	59.4	65.4	58.2	59.6	65.3
標準偏差	8.8	9.2	8.9	8.3	8.4
最高点	88.0	90.0	84.0	86.0	84.0
最低点	34.0	28.0	28.0	28.0	44.0
Reading					
平均点	61.9	70.8	62.6	63.7	72.4
標準偏差	11.0	9.4	11.4	10.6	7.9
最高点	82.0	88.0	84.0	84.0	88.0
最低点	26.0	36.0	28.0	32.0	52.0

第1回学科別スコア

第1回										
	人文	中国	英米	教育	臨床	現社	公共	福祉	理学	作業
受験者数	362	55	77	157	67	240	133	297	45	38
Total										
平均点	119.8	115.7	132.3	136.1	136.4	122.0	118.7	123.3	142.5	132.2
標準偏差	17.6	16.4	15.9	14.9	20.2	18.7	17.7	16.8	13.1	12.4
最高点	156.0	150.0	164.0	178.0	176.0	168.0	150.0	170.0	166.0	166.0
最低点	66.0	76.0	78.0	88.0	64.0	66.0	66.0	60.0	112.0	106.0
Listening										
平均点	58.7	57.8	64.2	65.2	65.7	58.4	57.7	59.6	67.3	62.9
標準偏差	8.7	7.7	8.5	8.4	10.8	9.0	8.8	8.3	8.5	7.6
最高点	78.0	78.0	88.0	90.0	88.0	84.0	76.0	86.0	80.0	84.0
最低点	34.0	40.0	46.0	46.0	28.0	30.0	28.0	28.0	46.0	44.0
Reading										
平均点	61.2	57.9	68.1	70.9	70.7	63.5	60.9	63.7	75.2	69.2
標準偏差	10.8	10.5	10.1	8.5	11.4	11.4	11.3	10.6	7.0	7.7
最高点	82.0	78.0	82.0	88.0	88.0	84.0	80.0	84.0	88.0	82.0
最低点	30.0	36.0	26.0	40.0	36.0	28.0	30.0	32.0	54.0	52.0

まず学部別のトータルスコアを見てみると、2006年度同様教育学部と保健医療技術学部が高いスコアを記録しており、この2学部が全体の平均スコアを上回っている。続いて社会福祉学部、文学部、そして社会学部という順序でスコアは低下していくが、学部別平均スコアのこの傾向は2006年度と変わっていない。全体的にリスニングよりリーディング

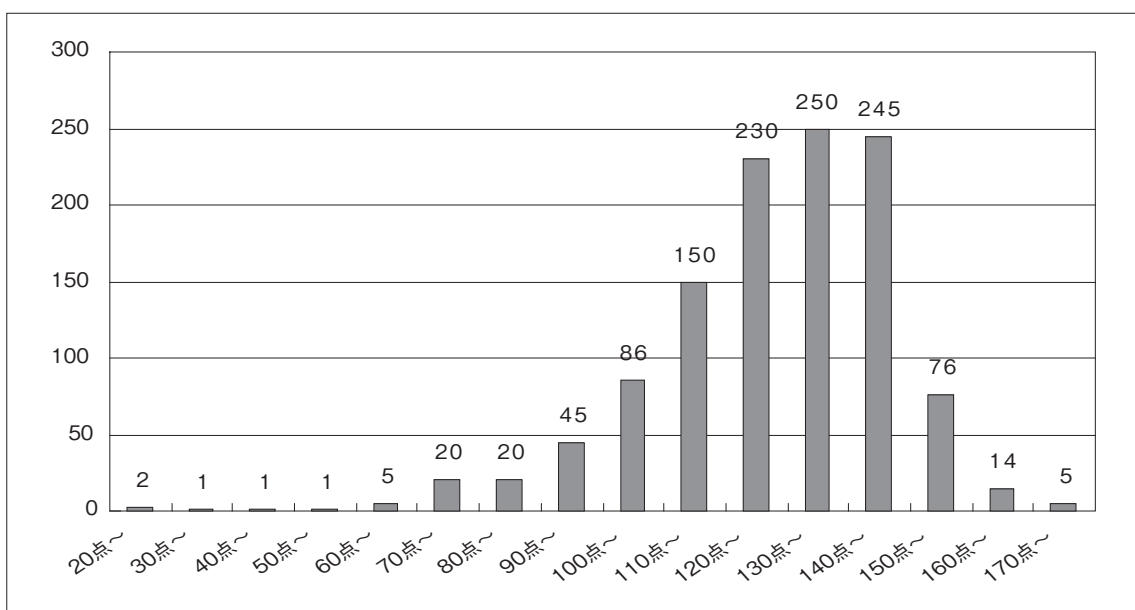
グの方が良いという傾向も調査が開始された 2004 年度以降同じである。

学科別に見ると、理学療法学科が最も高いという傾向は 2006 年度と同じであるが、2006 年度の平均スコア 138.2 点を上回り、140 点台の平均スコアを記録している。続いて臨床心理学科、教育学科、英米学科、作業療法学科と続き、そこまでが全体の平均スコアよりも高いスコアを記録しているが、前年度と比べると教育学科と英米学科の順位が入れかわっている。

4. 1 回生終了時のスコア

4.1 全体の傾向

		第 2 回			
		2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
Total	平均点	124.4	126.9	126.0	126.9
	標準偏差	20.6	18.8	22.5	19.7
	最高点	172.0	176.0	176.0	176.0
	最低点	26.0	46.0	36.0	22.0
Listening	平均点	61.6	61.6	62.4	62.8
	標準偏差	10.0	8.6	11.1	9.0
	最高点	86.0	86.0	86.0	88.0
	最低点	14.0	28.0	20.0	10.0
Reading	平均点	62.8	65.3	63.6	64.1
	標準偏差	12.1	11.7	12.7	12.3
	最高点	88.0	90.0	90.0	90.0
	最低点	12.0	18.0	14.0	12.0



前年 2006 年度のトータルスコアは残念ながら前々年 2005 年度のトータルスコアよりも低くなってしまったのであるが、2007 年度のトータルスコアは再び過去最も高かった 2005 年度のトータルスコアに並んでいる。リスニングでは過去最高のスコアを記録しているものの、リーディングでは 2005 年度に及ばず、トータルでは同スコアとなっている。入学時、1 回生終了時両方のスコアを総合的に見てみると、入学時のスコアが過去最高、1 回生終了時のスコアが過去最高の 2005 年度と同スコアであったわけで、2007 年度の英語基礎力調査は良好な結果を残したと言える。

4.2 学部学科の傾向

第 2 回学部別スコア

第 2 回					
	文学部	教育学部	社会学部	社会福祉学部	保健医療技術学部
受験者数	285	185	332	273	80
Total					
平均点	126.1	137.0	122.4	124.6	133.5
標準偏差	19.2	17.3	19.1	20.3	16.1
最高点	166.0	176.0	158.0	172.0	172.0
最低点	68.0	80.0	42.0	22.0	76.0
Listening					
平均点	62.7	67.2	60.7	62.1	65.1
標準偏差	8.8	8.2	8.2	9.5	8.5
最高点	84.0	88.0	82.0	88.0	88.0
最低点	40.0	40.0	26.0	10.0	28.0
Reading					
平均点	63.4	69.8	61.7	62.6	68.4
標準偏差	12.0	10.8	12.5	12.5	9.5
最高点	86.0	90.0	80.0	88.0	90.0
最低点	26.0	30.0	16.0	12.0	40.0

第2回学科別スコア

第2回										
	人文	中国	英米	教育	臨床	現社	公共	福祉	理学	作業
受験者数	230	0	55	124	61	219	113	273	45	35
Total										
平均点	122.8		139.8	136.1	138.7	123.8	119.7	124.6	138.8	126.7
標準偏差	18.7		15.0	16.8	18.1	18.9	19.4	20.3	13.1	17.1
最高点	166.0		162.0	176.0	176.0	154.0	158.0	172.0	172.0	154.0
最低点	68.0		100.0	80.0	84.0	66.0	42.0	22.0	114.0	76.0
Listening										
平均点	60.9		70.3	66.9	67.8	60.9	60.1	62.1	67.3	62.2
標準偏差	8.2		6.9	7.8	9.0	8.0	8.5	9.5	7.2	9.1
最高点	82.0		84.0	86.0	88.0	78.0	82.0	88.0	88.0	76.0
最低点	40.0		54.0	40.0	40.0	34.0	26.0	10.0	54.0	28.0
Reading										
平均点	61.9		69.6	69.3	71.0	62.8	59.6	62.6	71.5	64.5
標準偏差	11.7		10.7	10.6	10.9	12.5	12.2	12.5	7.8	10.1
最高点	84.0		86.0	90.0	90.0	80.0	76.0	88.0	90.0	78.0
最低点	26.0		34.0	30.0	44.0	30.0	16.0	12.0	50.0	40.0

学部別にトータルスコアを見てみると、教育学部と保健医療技術学部が平均を上回っており、続いて文学部、社会福祉学部、社会学部と続いていく。2006年度においては1回生終了時に文学部がわずかながら保健医療技術学部を追い抜くという現象が見られたが、保健医療技術学部の下がり幅がそれ程大きくなかったため2007年度は入学時と変わらず保健医療技術学部が文学部よりも上位を維持している。

学科別トータルスコアについては、2006年度同様英米学科が最も高いが、2006年度ほどは高くない。続いて理学療法学科、臨床心理学科、教育学科となり、そこまでが全体の平均以上のスコアとなっている。2006年度では英米学科、臨床心理学科、教育学科、理学療法学科の順になっていたのだが、2007年度では英米学科の次に理学療法学科が続いているのは、入学時から1回生終了時にかけての理学療法学科のスコア下落が2006年度ほどひどくはなかったためである。

5. スコアの伸び

5.1 全体の傾向

		2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
Total	第 1 回	117.6	122.4	124.2	124.8
	第 2 回	124.4	126.9	126	126.9
	伸び	6.8	4.5	1.8	2.1
Listening	第 1 回	56.8	58.6	59.6	60.4
	第 2 回	61.6	61.6	62.4	62.8
	伸び	4.8	3	2.8	2.4
Reading	第 1 回	60.7	63.8	64.6	64.4
	第 2 回	62.8	65.3	63.6	64.1
	伸び	2.1	1.5	-1	-0.3

2006 年度は、入学時のスコアが高かったということもあり、スコアの伸びは過去最悪であった。とりわけリーディングセクションにおいてはマイナスの伸びを示してしまい、大きな課題が突きつけられた結果となった。残念ながら、2006 年度よりは若干改善が見られるものの、2007 年度においても同じような結果が出ている。入学時スコアが良かった分伸びが悪いという傾向も、2006 年度よりは小幅であるもののリーディングでマイナスの伸びを示しているという傾向も前年度を踏襲したものとなっている。

5.2 学部学科の傾向

学部

	全体	文学部	教育学部	社会学部	社会福祉学部	保健医療技術学部
Total	2.1	4.7	0.8	1.6	1.3	-4.2
Listening	2.4	3.3	1.8	2.5	2.5	-0.2
Reading	-0.3	1.5	-1.0	-0.9	-1.1	-4.0

学科

	全体	人文	中国	英米	教育	臨床	現社	公共	福祉	理学	作業
Total	2.1	2.9		7.5	0.0	2.3	1.8	1.0	1.3	-3.6	-5.5
Listening	2.4	2.2		6.0	1.7	2.0	2.5	2.4	2.5	0.0	-0.7
Reading	-0.3	0.7		1.5	-1.6	0.3	-0.7	-1.4	-1.1	-3.6	-4.8

学部からトータルスコアを見ていくと、保健医療技術学部以外の全学部でスコアの上昇が見られた。2006 年度にマイナスの伸びを示していた社会学部は 2007 年度にプラスの伸びに転じている。2007 年度唯一マイナスの伸びを示している保健医療技術学部においても前年度の -6.7 点から -4.2 点へとマイナスの幅を狭めている。その一方で 2006 年度は高い伸びを示していた教育学部の伸びがすっかり止まってしまっている。2006 年度は 4.3 点の伸びを示していたのだが、2007 年度はわずか 0.8 点の伸びにとどまっている。

学科別にトータルスコアを見てみると、英米学科の伸び率が高いのは例年の傾向どおりである。ただ2006年度に10,9点の伸びを示していた英米学科も2007年度は7,5点の伸びにとどまっている。今回の全体的な伸びの傾向として、上がり幅も下がり幅も小幅にとどまっているということが言える。例えば2006年度は-8,9点というかなりの下がり幅を見せていた理学療法学科も今回の下がり幅は-3,6点に収まっている。2006年度と比較して伸びが止まってしまっている教育学部について言えば、2006年度は4,8点という伸びを見せた臨床心理学科の伸びがその半分程度の2,3点に、教育学科に関しては2006年度の4点から2007年度はプラスマイナスゼロへという伸び率の低下を示している。そんな中現代社会学科と公共政策学科は2006年度から2007年度にかけてマイナスからプラスの伸びへと転じ、人文学科は2006年度のわずか0,8点の伸びから2007年度は2,9点の伸びへと良い結果を残している。

6. TOEIC Bridge 150 点以上

6.1 全体の傾向

	2004 年度		2005 年度		2006 年度		2007 年度	
	第 1 回	第 2 回	第 1 回	第 2 回	第 1 回	第 2 回	第 1 回	第 2 回
150 点以上	52	111	51	92	93	122	101	95
割合	3.5%	9.2%	3.6%	8.5%	6.1%	10.2%	6.9%	8.2%
受験者数	1469	1211	1424	1085	1526	1191	1471	1155
平均点	117.6	124.4	122.4	126.9	124.2	126	124.8	126.9

本学の英語プログラムの教学目標は、2年間の学修でTOEIC 500点に到達することである。前に示したTOEICとTOEIC Bridgeの比較表を見ると、TOEIC Bridgeの150点がTOEIC 470点に相当するので、そのスコアを超える人数を集計したのが上の表である。2007年度について言うと、入学時では人数においても割合においても過去最高の数字となっている。しかし1回生終了時では150点以上を取った受験者数の割合は全体の8,2%にとどまっている。これは1回生終了時の数字としては過去最悪である。2006年度は全体の10,2%が150点以上に到達しており過去最高の結果であったのだが、2007年度はトータルスコアの平均点では2006年度よりも良かったにもかかわらず、高得点取得者の割合は減少してしまっている。2007年度の全体的な伸びの傾向として、上がり幅も下がり幅も小幅にとどまっていると先ほど指摘したが、その傾向がここにもよく表れている。

6.2 学部学科別の傾向

学部

	文学部	教育学部	社会学部	社会福祉学部	保健医療技術学部
第1回	20	43	12	8	18
101人中	19.8%	42.6%	11.9%	7.9%	17.8%
第2回	24	40	8	12	11
95人中	25.3%	42.1%	8.4%	12.6%	11.6%

学科

	人文	中国	英米	教育	臨床	現社	公共	福祉	理学	作業
第1回	10	2	8	27	16	10	2	8	17	1
101人中	9.9%	2.0%	7.9%	26.7%	15.8%	9.9%	2.0%	7.9%	16.8%	1.0%
第2回	8		16	27	13	6	2	12	9	2
95人中	8.4%		16.8%	28.4%	13.7%	6.3%	2.1%	12.6%	9.5%	2.1%

学部別に見ると、2006年度では保健医療技術学部以外の学部で人数の増加が見られたのだが、2007年度では文学部、社会福祉学部以外の学部で人数が減少している。

学科別に見ると、人数の増加が見られるのは英米学科と社会福祉学科と作業療法学科だけである。英米学科における人数の増加が著しい理由は明らかだと思うが、社会福祉学部で150点以上の数が増えているのは興味深い事実である。実は2006年度も社会福祉学部は150点以上取得者の数が入学時10人であったのが1回生終了時には倍の20人になっている。そして今回も他学科ではほとんど増やせなかった150点以上の人数を増加させているのである。

7. サブスコア

TOEIC Bridge は受験者の英語能力向上に役立てるため5分野3段階の診断情報をサブスコアとしてフィードバックしている。リスニング、リーディング、トータルスコアの他に下記の5つのカテゴリーごとに1～3の評価が提示されるが、各カテゴリーの数値が高いほど他の受験者に比べて評価が高いことを意味している。各カテゴリーは次の通りである (TOEIC 運営委員会, <http://www.toEIC.or.jp/bridge/about/score/>)。

Listening Strategies

(聞く技術)

英語を聞いて、必要な情報を聞き取る、話の要旨をつかむ、内容を推測する、アクセント・発音・時制などを正しく聞き分けることができる。

Functions

(言葉のはたらき)

どのような目的と意図（例：何かの申し出・要求・時間を伝える・指示・情報収集など）で英語が使用されているのかを理解できる。

Reading Strategies

（読む技術）

英語を読んで、必要な情報を読み取る、さっと読んで意味をつかむ、話の要旨を見極める、内容を推測する、文章内の構造が理解できる。

Vocabulary

（語彙）

日常生活、嗜好、趣味、娯楽、旅行、健康、簡単な商取引などに関する単語や語句、及び文脈における意味を把握できる。

Grammar

（文法）

文法を理解し、用法も把握している。

2007年度のサブスコアと伸び

		Listening Strategies	Functions	Reading Strategies	Vocabulary	Grammar
第1回	平均	1.78	1.60	2.18	2.18	2.30
	標準偏差	0.57	0.55	0.69	0.68	0.67
第2回	平均	1.92	1.90	2.25	2.09	2.24
	標準偏差	0.64	0.57	0.73	0.63	0.67
伸び		0.14	0.29	0.07	-0.08	-0.06

もう一度2007年度の調査における全体のスコアを見てもらえると分かるが、リスニングセッションでは入学時から1回生終了時にかけて2.4点の伸びを示している一方、リーディングセッションでは-0.3点の伸びとなってしまっている。上のサブスコアを見ると、語彙と文法の力が1年間の学修を経て低下していることが分かる。おそらくこの辺りの学力低下がリーディングセッションにおける成績低下に結びついているのであろう。

8. 英語基礎力調査アンケート

一年に二回1回生対象に英語基礎力調査を行なう際、同時に英語学習に関するアンケートを行なっている。詳しいアンケート結果については、学科別、あるいは得点別に集計されたものを掲載しているのでもらいたい。

英語の教員には二つの果たすべき目的があると私は考えている。学生の英語力を向上させることと学生の英語学習へのモチベーションを上げることである。英語基礎力調査の結果からは、学生の英語力の変化は見る事が出来るが、モチベーションの変化は見ることは出来ない。モチベーションが大切な理由は、学生の英語力を上げるためには、授業時間内だけの学習だけでは不十分なので授業時間外にも学生に学習をさせる必要があるのだが、そのためには学習への強い動機付けが必要になってくるからだ。

今回の英語基礎力調査アンケート結果の中から、学生のモチベーションの変化、つまり情意的変化に注目してみたい。「あなたは英語力を伸ばしたいですか」という質問項目があり、学生による入学時と1回生終了時の回答数が出ている。各学科ごとに入学時と1回生終了時それぞれの数及びをパーセンテージで表すと以下の表になる。

入学時

	もっと伸ばしたい	伸ばしたい	できるなら伸ばしたい	その必要はない	満足ではないが 伸ばしたとも思わない	合計
人文	109	76	149	8	14	356
	31%	21%	42%	2%	4%	100%
英米	57	15	1	2	0	75
	76%	20%	1%	3%	0%	100%
教育	66	39	47	3	1	156
	42%	25%	30%	2%	1%	100%
臨床	22	24	16	0	4	66
	33%	36%	24%	0%	6%	100%
現社	72	61	98	3	5	239
	30%	26%	41%	1%	2%	100%
公共	35	45	43	3	6	132
	27%	34%	33%	2%	5%	100%
福祉	54	98	132	6	5	295
	18%	33%	45%	2%	2%	100%
理学	19	16	6	1	0	42
	45%	38%	14%	2%	0%	100%
作業	7	12	14	0	2	35
	20%	34%	40%	0%	6%	100%
合計	454	401	528	26	37	1446
	31%	28%	37%	2%	3%	100%

1 回生終了時

	もっと伸ばしたい	伸ばしたい	できるなら伸ばしたい	その必要はない	満足ではないが 伸ばしたとも思わない	合計
人文	68	47	99	3	8	225
	30%	21%	44%	1%	4%	100%
英米	40	7	4	1	2	54
	74%	13%	7%	2%	4%	100%
教育	37	28	40	7	10	122
	30%	23%	33%	6%	8%	100%
臨床	20	21	12	5	3	61
	33%	34%	20%	8%	5%	100%
現社	64	46	84	7	14	215
	30%	21%	39%	3%	7%	100%
公共	30	26	42	4	10	112
	27%	23%	38%	4%	9%	100%
福祉	54	44	146	11	17	272
	20%	16%	54%	4%	6%	100%
理学	12	11	18	0	3	44
	27%	25%	41%	0%	7%	100%
作業	3	8	19	3	1	34
	9%	24%	56%	9%	3%	100%
合計	328	238	464	41	68	1139
	29%	21%	41%	4%	6%	100%

全体の結果を見ると、入学時は、「もっと伸ばしたい」31%、「伸ばしたい」28%、「できるなら伸ばしたい」37%、「その必要はない」2%、「満足ではないが伸ばしたいとも思わない」3%となっている。続いて1回生終了時は、「もっと伸ばしたい」29%、「伸ばしたい」21%、「できるなら伸ばしたい」41%、「その必要はない」4%、「満足ではないが伸ばしたいとも思わない」6%となっている。全体的に見ると、一年間の学修を通してモチベーションはやや下降している。ただこの数字だけではよく分からないので、入学時と1回生終了時の数値の変化を表にしてみた。それが以下の表である。

「あなたは英語力を伸ばしたいですか」への回答数の変化

	もっと伸ばしたい	伸ばしたい	できるなら伸ばしたい	その必要はない	満足ではないが 伸ばしたとも思わない
人文	-0%	-0%	2%	-1%	-0%
英米	-2%	-7%	6%	-1%	4%
教育	-12%	-2%	3%	4%	8%
臨床	-1%	-2%	-5%	8%	-1%
現社	-0%	-4%	-2%	2%	4%
公共	0%	-11%	5%	1%	4%
福祉	2%	-17%	9%	2%	5%
理学	-18%	-13%	27%	-2%	7%
作業	-11%	-11%	16%	9%	-3%
合計	-3%	-7%	4%	2%	3%

これを見ると興味深いことが分かる。教育学科、理学療法学科、作業療法学科においてモチベーションの低下が激しいことが分かるが、この3学科は今回の基礎力調査における英語力の伸びにおいてワースト3の結果を出しているのだ。教育学科はプラスマイナスゼ

ロ、理学療法学科は -3.6 点、作業療法学科は -5.5 点の伸びを示している。

これらの学科において、英語力を伸ばしたいが伸びなかった学生も多くいただろうが、それ以前に英語力を伸ばしたいというモチベーション自体が大きく低下しているという傾向が見てとれるのだ。その原因がどこにあるのか、専門科目があまりにもハードなせいなのか、英語の授業自体のせいなのか、それを今後明らかにする必要があるだろう。そのためにも今後、基礎力調査と共により効果的なアンケート調査を続けていきたい。

9. おわりに

『FD Review Vol.2——2006 年度の総括——』では、2006 年度の英語基礎力調査の結果を受けて 2006 年度 1 回生の英語力の全体的な傾向は「伸び悩み」と総括されている。2007 年度の結果を見ると、やはり同じような総括が出来るが、入学時、1 回生終了時ともにトータルスコアにおいて過去最高の平均スコアを残していることは明るいニュースだと言える。2006 年度データと比較すると、2006 年度はマイナスの伸びを示していた社会学部がプラスの伸びに転じ、大きなマイナスの伸びを示していた保健医療技術学部でマイナスの幅が減少したことは良い傾向だと言える。その一方で 2006 年度は大きなプラスの伸びを示していた教育学部で 2007 年度はそれほど伸びが見られなかった。何度も指摘しているが、2007 年度の全体的な伸びに関しては上がり幅も下がり幅も小幅にとどまっているという傾向があり、2006 年度との比較で言うと、まさにこの傾向が全てを言い表している。

今回、サブスコアのスコアの結果及びその伸びに言及した。2007 年度はリーディングセクションにおいて 1 回生全体でマイナスの伸びを示しているが、語彙と文法の学力低下がその理由であることが分かる。中学、高校においても、そして大学においても現在の英語教育はコミュニケーションに重点が置かれているが、その一方で文法や語彙は軽視されがちである。しかし本来コミュニケーションとは相手の言いたいことを正しく理解し、自分の意思を相手に正しく伝えることである。文法や語彙の力がなければ高度なコミュニケーションは不可能である。

とはいうものの、文法語彙中心のかつての英語教育に戻るわけにもいかない。今の主流であるコミュニケーション中心の英語教育を積極的に評価した上で、それをどう改善していくかを考えるべきだろう。実際、学生による授業評価アンケートの自由記述欄を見ると、英語の授業に関して、受講生は授業内でなるべく多く英語が使われることを評価している（その反対にそれほど英語力がない学生からは「教員の話す英語の指示が分からない」等の理由で改善すべきポイントに挙げられることも多い）。

2007 年度の調査結果と過年度の調査結果との比較から本学における今度の英語教育の課題を考えてみると、一つはリーディングの力（特に文法と語彙の力）の強化、そしてもう一つは学力の低下が激しい学部学科における英語学習へのモチベーション維持と言えるだろう。いずれにせよ授業運営を改善しながら継続した学力調査を続けることによって、より効果的な英語教育の姿が徐々に明らかになってくるのではないかと考えられる。

（集計：山本理絵）

英語基礎力調査 アンケート集計結果

英語基礎力調査アンケート（春学期分）

*回答項目は最もあてはまるもの1つだけ選んでください。

【Ⅰ】あなたは英語が得意ですか。

- | | |
|--------------|------------------|
| 0. 得意である | 1. どちらかといえば得意である |
| 2. あまり得意ではない | 3. 苦手である |

【Ⅱ】あなたは英語でコミュニケーションできますか

- | |
|-------------------------------|
| 0. あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる |
| 1. 日常生活レベルである程度のコミュニケーションができる |
| 2. 片言で話せる程度 |
| 3. 挨拶などの簡単な表現をしっている程度 |
| 4. 全く話せない |

【Ⅲ】あなたは英語力を伸ばしたいですか。

- | | | |
|-------------|-----------------------|---------------|
| 0. もっと伸ばしたい | 1. 伸ばしたい | 2. できるなら伸ばしたい |
| 3. その必要はない | 4. 満足ではないが伸ばしたいとも思わない | |

【Ⅳ】自分が目標とする英語コミュニケーション能力はどの程度ですか。

- | |
|-------------------------------|
| 0. あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる |
| 1. 仕事に支障のない程度にコミュニケーションができる |
| 2. 日常生活に困らないくらいコミュニケーションができる |
| 3. 片言で話せる程度 |
| 4. 話せなくてもよい |

【Ⅴ】英語は必要だと思いますか

- | | | |
|-------------|----------|------------|
| 0. とても必要だ | 1. 必要だ | 2. やや必要だ |
| 3. あまり必要でない | 4. 必要でない | 5. 全く必要でない |

【Ⅵ】英語は何に役立つと思いますか。次のうちから1つだけ選択してください。

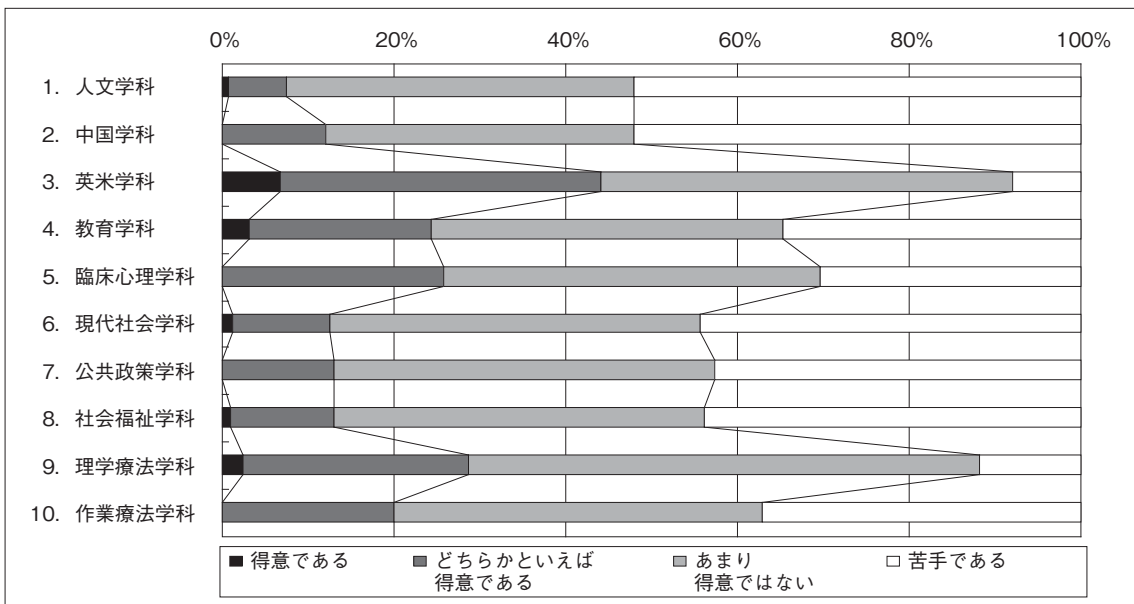
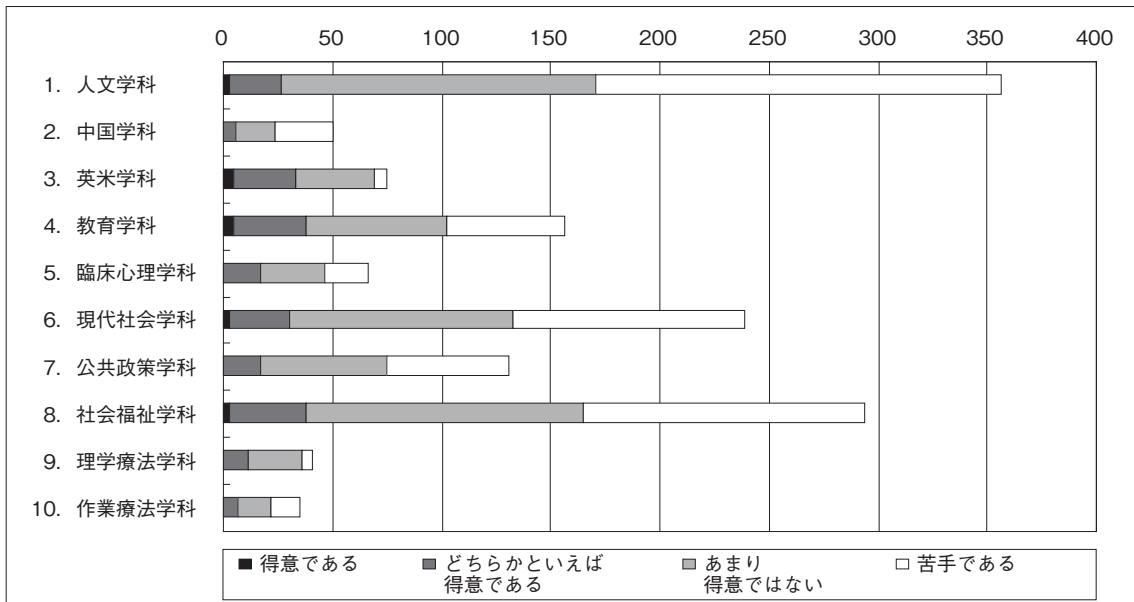
- | | | | | |
|------------|--------|--------------|-------|---------------|
| 0. 学問 | 1. 進学 | 2. 留学 | 3. 就職 | 4. 公務員、教員採用試験 |
| 5. 国際交流・貢献 | 6. その他 | 7. 役立つとは思わない | | |

※このアンケートに対する回答は、解答用紙の「属性欄」に記入してください。

2007 年度春学期 英語基礎力調査アンケート集計結果（学科別）

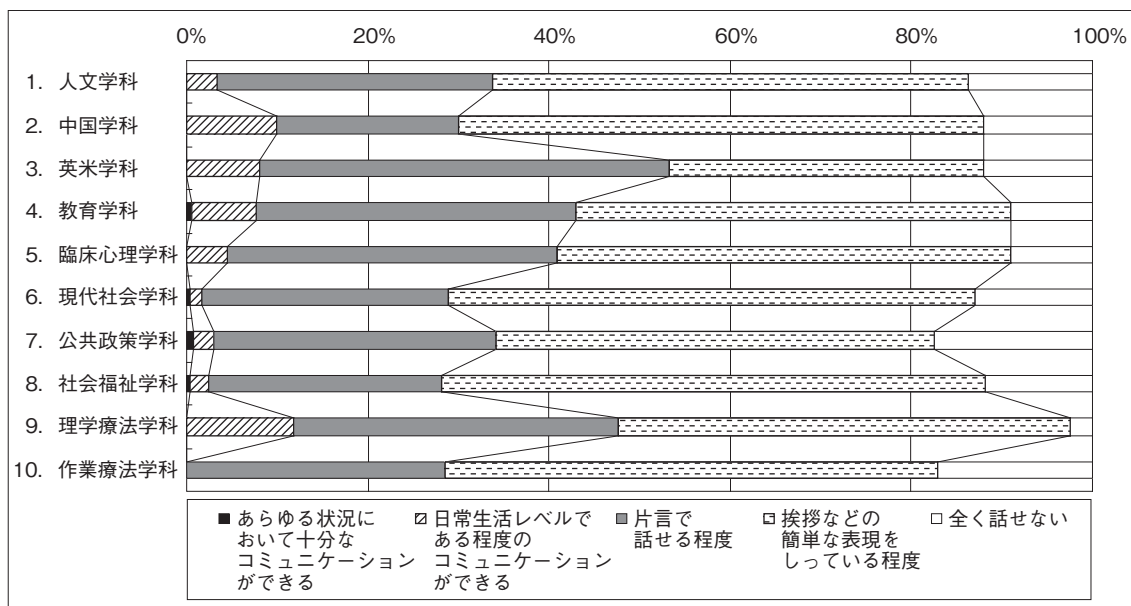
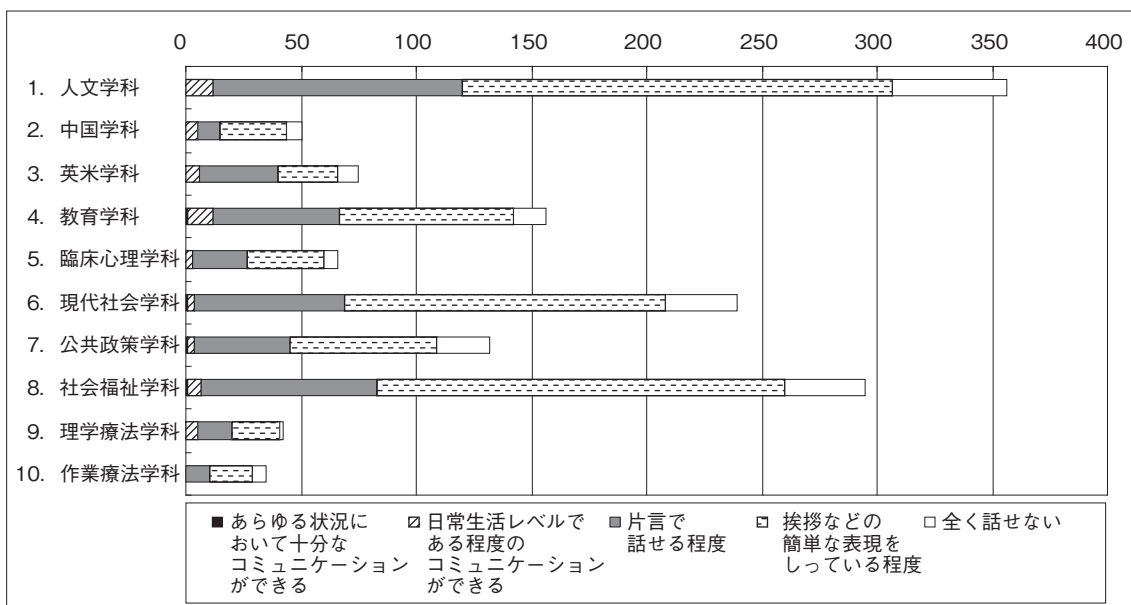
I あなたは英語が得意ですか

	得意である	どちらかといえば得意である	あまり得意ではない	苦手である	合計
1. 人文学科	3	24	144	185	356
2. 中国学科	0	6	18	26	50
3. 英米学科	5	28	36	6	75
4. 教育学科	5	33	64	54	156
5. 臨床心理学科	0	17	29	20	66
6. 現代社会学科	3	27	103	106	239
7. 公共政策学科	0	17	58	56	131
8. 社会福祉学科	3	35	127	129	294
9. 理学療法学科	1	11	25	5	42
10. 作業療法学科	0	7	15	13	35
合計	20	205	619	600	1444



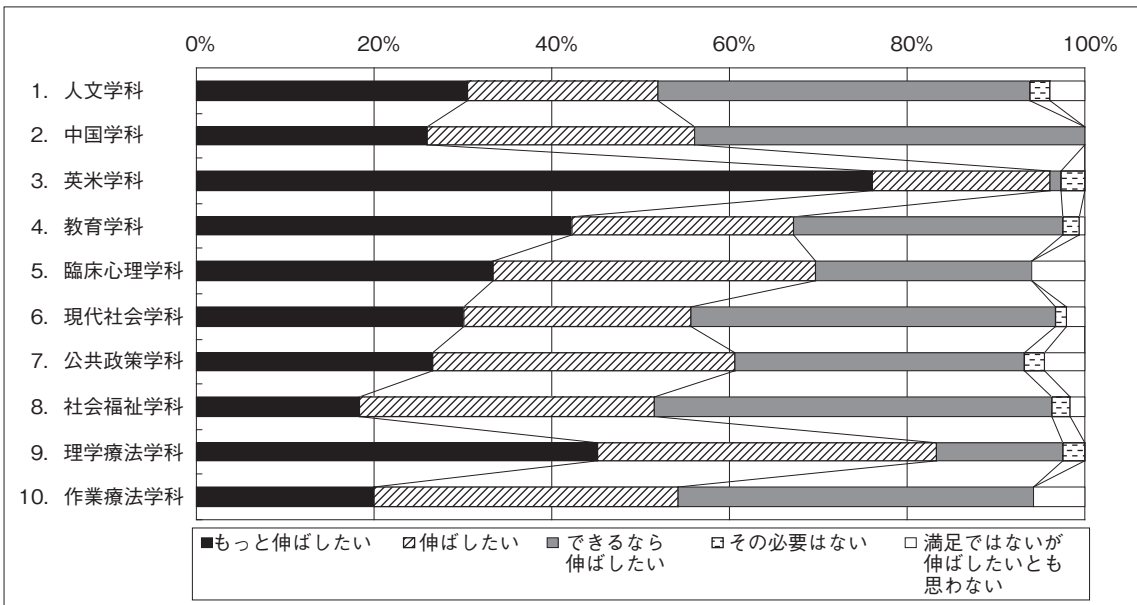
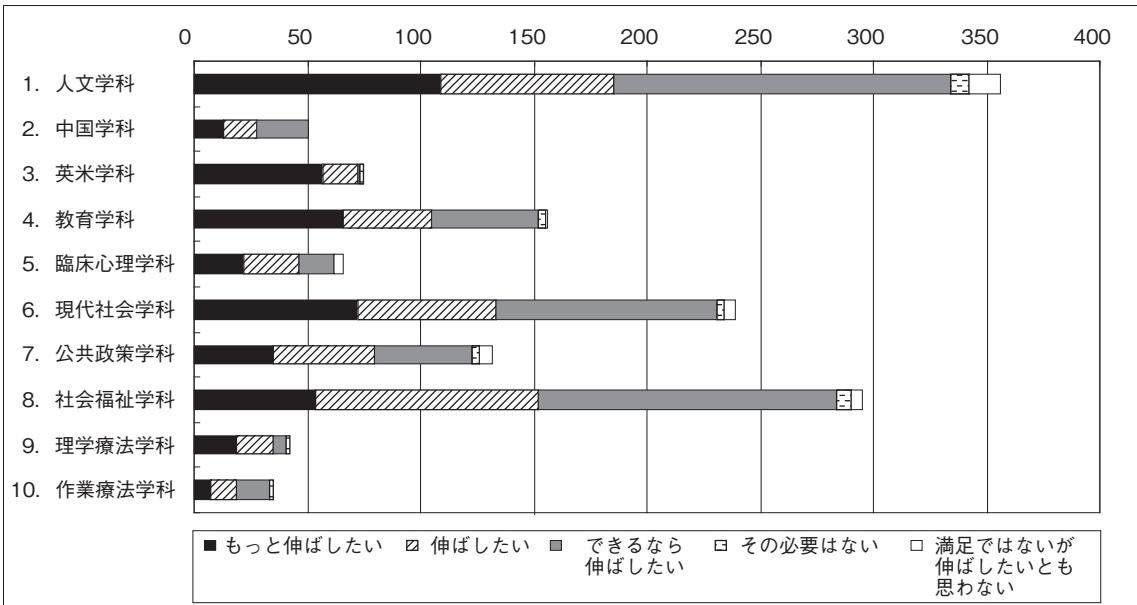
Ⅱ あなたは英語でコミュニケーションできますか

	あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる	日常生活レベルである程度のコミュニケーションができる	片言で話せる程度	挨拶などの簡単な表現をしている程度	全く話せない	合計
1. 人文学科	0	12	108	187	49	356
2. 中国学科	0	5	10	29	6	50
3. 英米学科	0	6	34	26	9	75
4. 教育学科	1	11	55	75	14	156
5. 臨床心理学科	0	3	24	33	6	66
6. 現代社会学科	1	3	65	139	31	239
7. 公共政策学科	1	3	41	64	23	132
8. 社会福祉学科	1	6	76	177	35	295
9. 理学療法学科	0	5	15	21	1	42
10. 作業療法学科	0	0	10	19	6	35
合計	4	54	438	770	180	1446



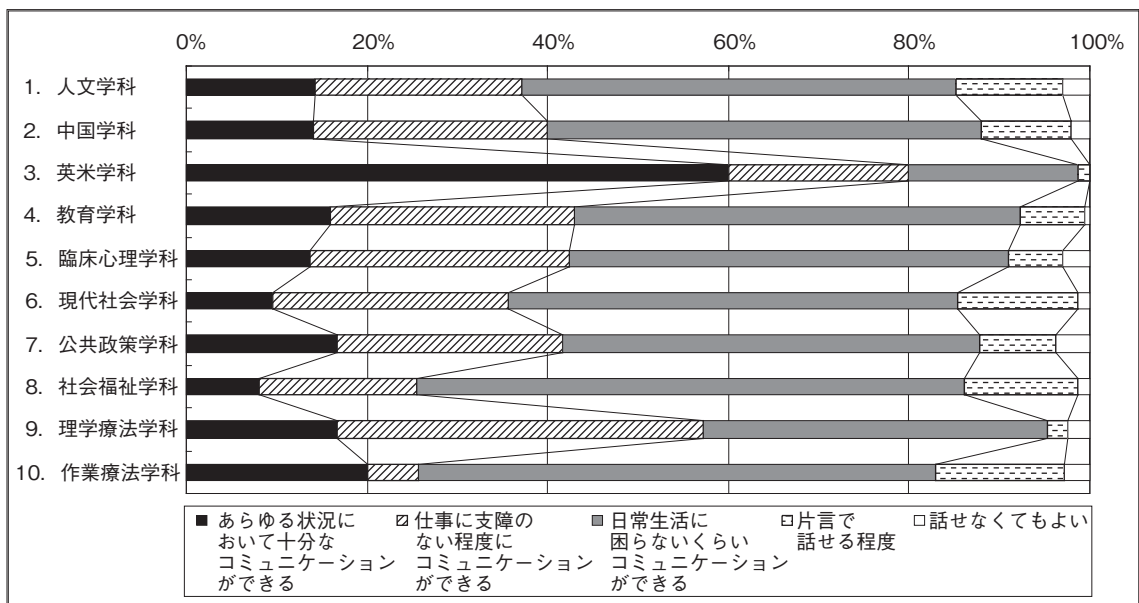
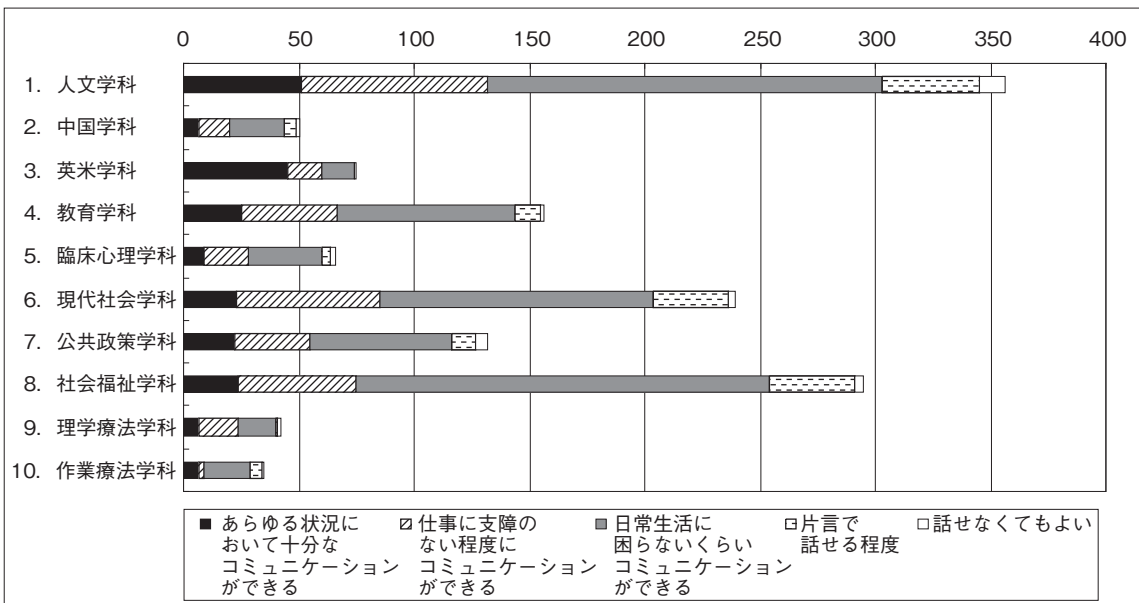
Ⅲあなたは英語力を伸ばしたいですか

	もっと伸ばしたい	伸ばしたい	できるなら伸ばしたい	その必要はない	満足ではないが伸ばしたいと思わない	合計
1. 人文学科	109	76	149	8	14	356
2. 中国学科	13	15	22	0	0	50
3. 英米学科	57	15	1	2	0	75
4. 教育学科	66	39	47	3	1	156
5. 臨床心理学科	22	24	16	0	4	66
6. 現代社会学科	72	61	98	3	5	239
7. 公共政策学科	35	45	43	3	6	132
8. 社会福祉学科	54	98	132	6	5	295
9. 理学療法学科	19	16	6	1	0	42
10. 作業療法学科	7	12	14	0	2	35
合計	454	401	528	26	37	1446



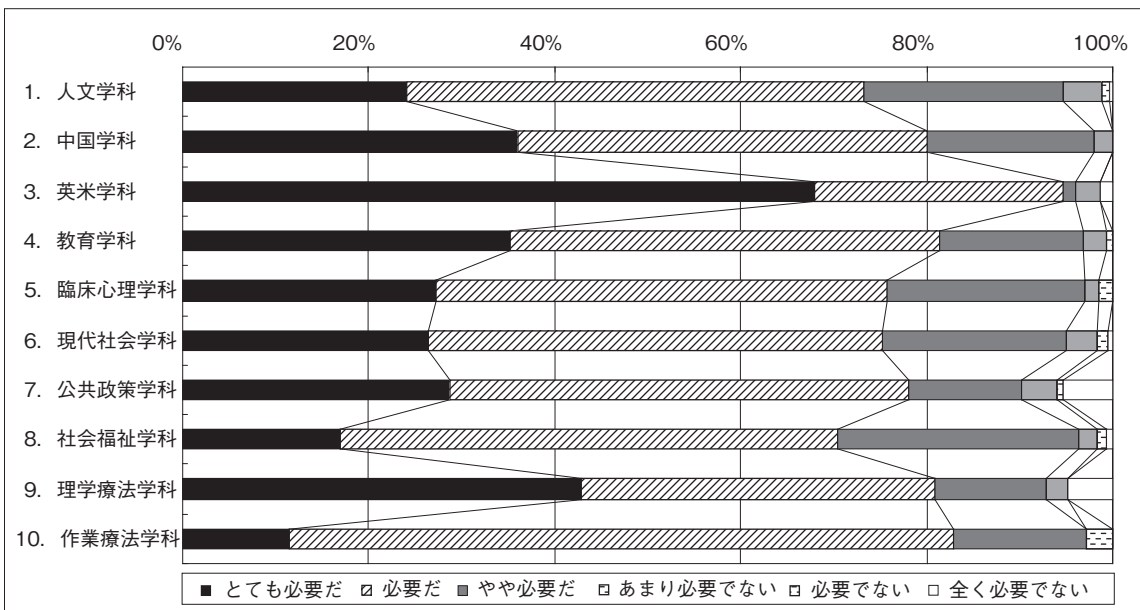
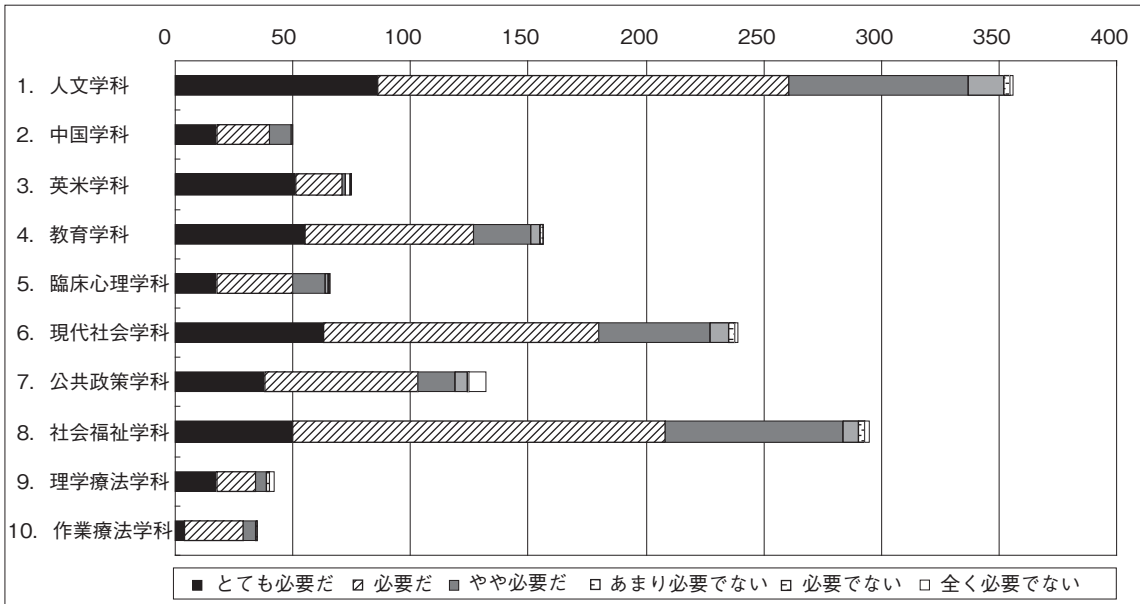
Ⅳ自分が目標とする英語コミュニケーション能力はどの程度ですか

	あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる	仕事に支障のない程度にコミュニケーションができる	日常生活に困らないくらいコミュニケーションができる	片言で話せる程度	話せなくてもよい	合計
1. 人文学科	51	81	171	42	11	356
2. 中国学科	7	13	24	5	1	50
3. 英米学科	45	15	14	1	0	75
4. 教育学科	25	42	77	11	1	156
5. 臨床心理学科	9	19	32	4	2	66
6. 現代社会学科	23	62	119	32	3	239
7. 公共政策学科	22	33	61	11	5	132
8. 社会福祉学科	24	51	179	37	4	295
9. 理学療法学科	7	17	16	1	1	42
10. 作業療法学科	7	2	20	5	1	35
合計	220	335	713	149	29	1446



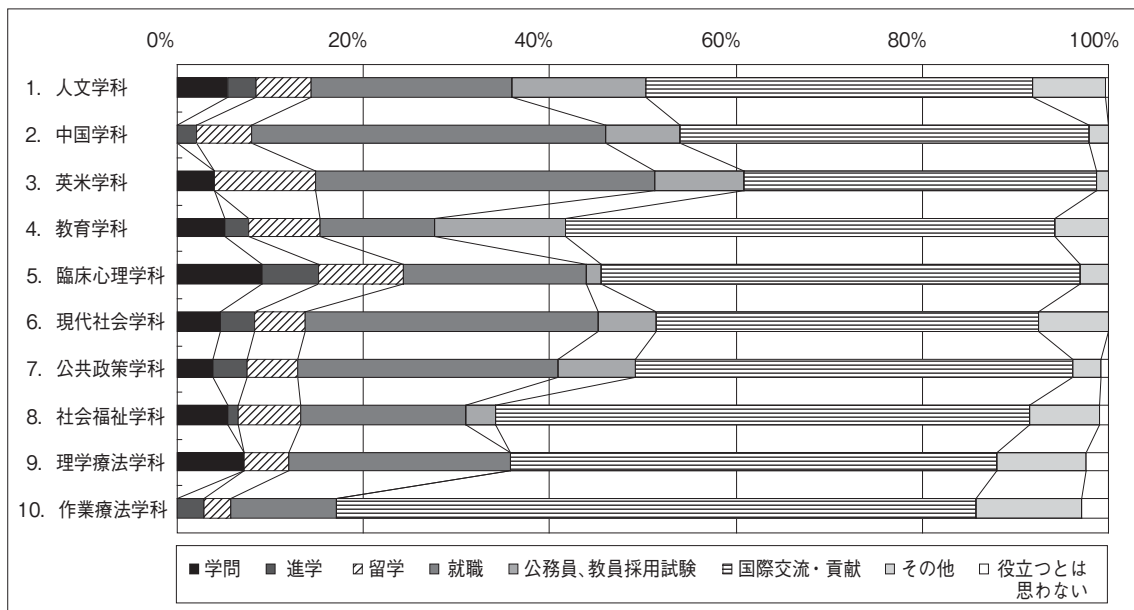
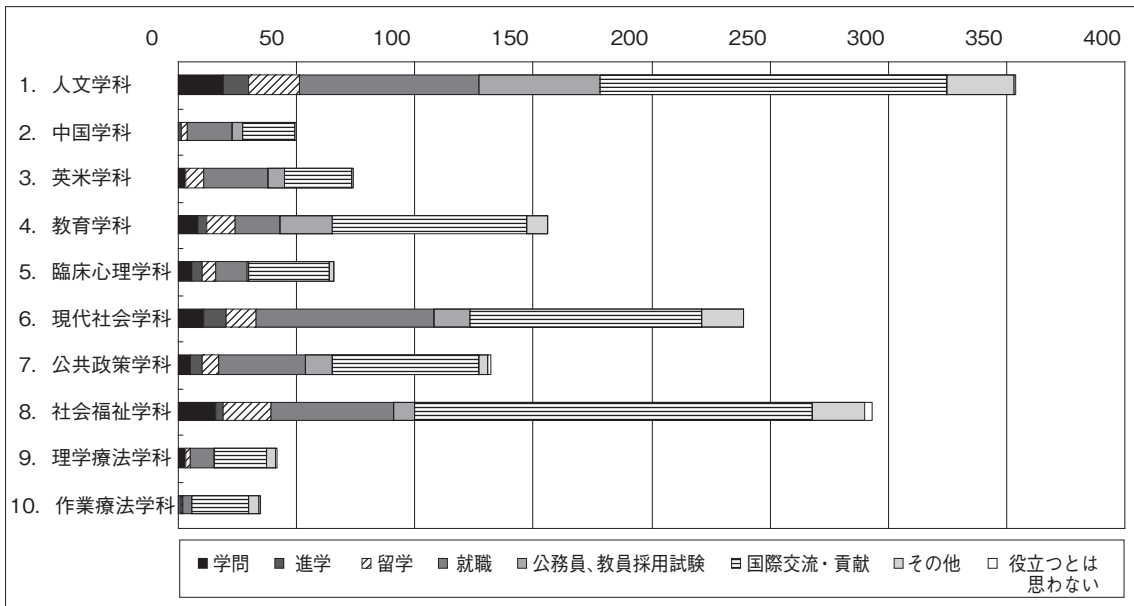
V 英語は必要だと思いますか

	とても必要だ	必要だ	やや必要だ	あまり必要でない	必要でない	全く必要でない	合計
1. 人文学科	86	175	76	15	3	1	356
2. 中国学科	18	22	9	1	0	0	50
3. 英米学科	51	20	1	2	0	1	75
4. 教育学科	55	72	24	4	1	0	156
5. 臨床心理学科	18	32	14	1	1	0	66
6. 現代社会学科	63	117	47	8	3	1	239
7. 公共政策学科	38	65	16	5	1	7	132
8. 社会福祉学科	50	158	76	6	3	2	295
9. 理学療法学科	18	16	5	1	0	2	42
10. 作業療法学科	4	25	5	0	1	0	35
合計	401	702	273	43	13	14	1446



Ⅵ英語は何に役立つと思いますか。次のうちから1つだけ選択してください

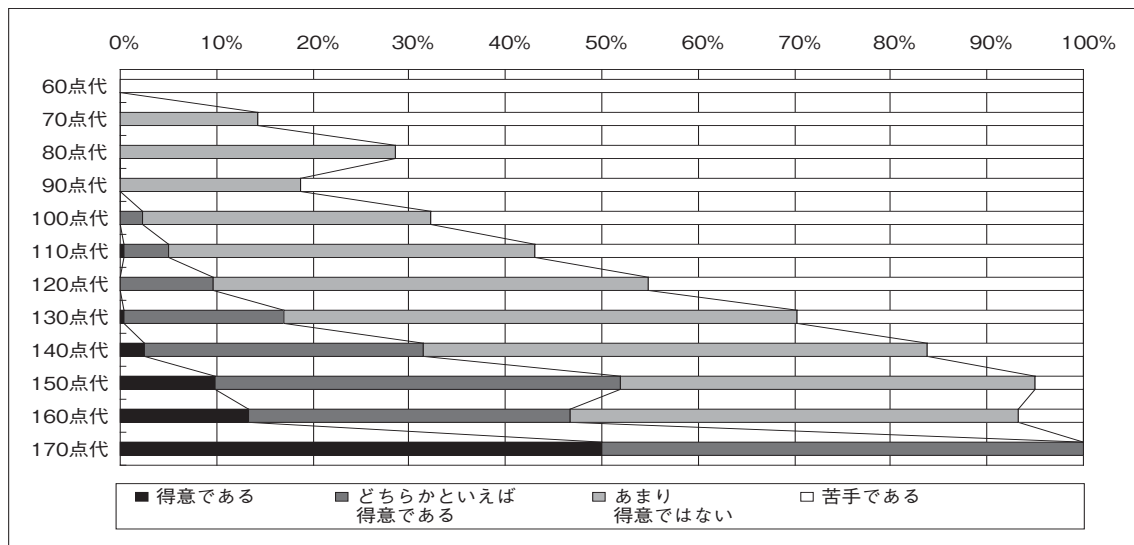
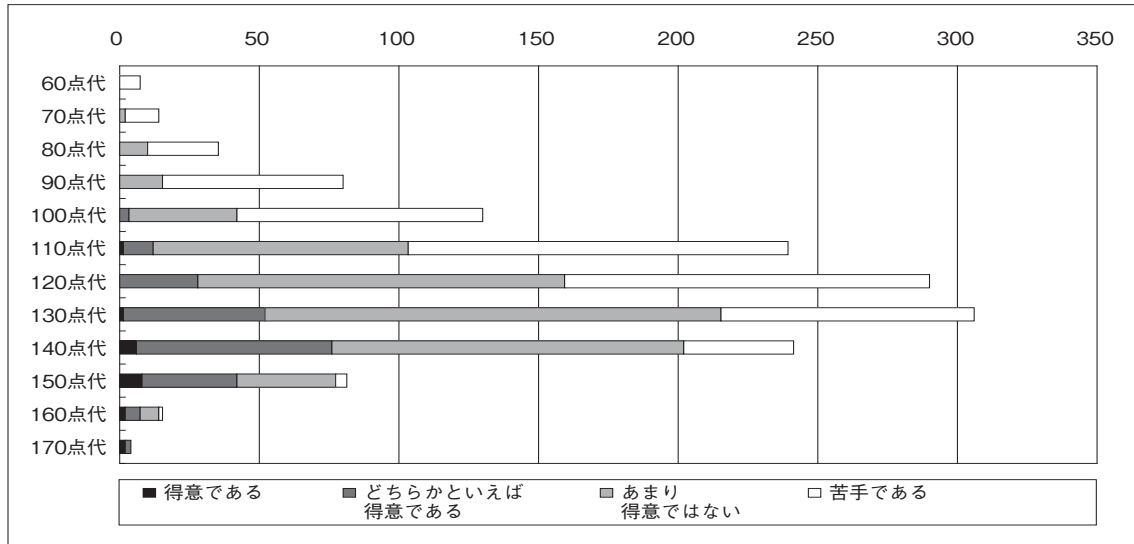
	学問	進学	留学	就職	公務員、教員採用試験	国際交流・貢献	その他	役立つとは思わない	合計
1. 人文学科	19	11	21	76	51	147	28	1	354
2. 中国学科	0	1	3	19	4	22	1	0	50
3. 英米学科	3	0	8	27	7	28	1	0	74
4. 教育学科	8	4	12	19	22	82	9	0	156
5. 臨床心理学科	6	4	6	13	1	34	2	0	66
6. 現代社会学科	11	9	13	75	15	98	18	0	239
7. 公共政策学科	5	5	7	37	11	62	4	1	132
8. 社会福祉学科	16	3	20	52	9	168	22	3	293
9. 理学療法学科	3	0	2	10	0	22	4	1	42
10. 作業療法学科	0	1	1	4	0	24	4	1	35
合計	71	38	93	332	120	687	93	7	1441



2007 年度春学期 英語基礎力調査アンケート集計結果（得点別）

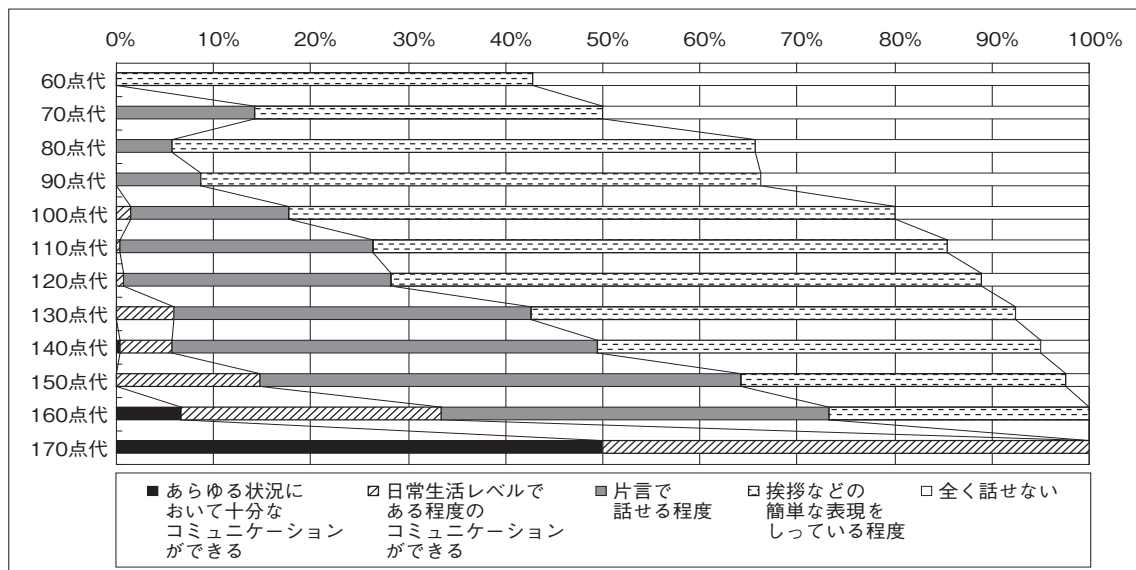
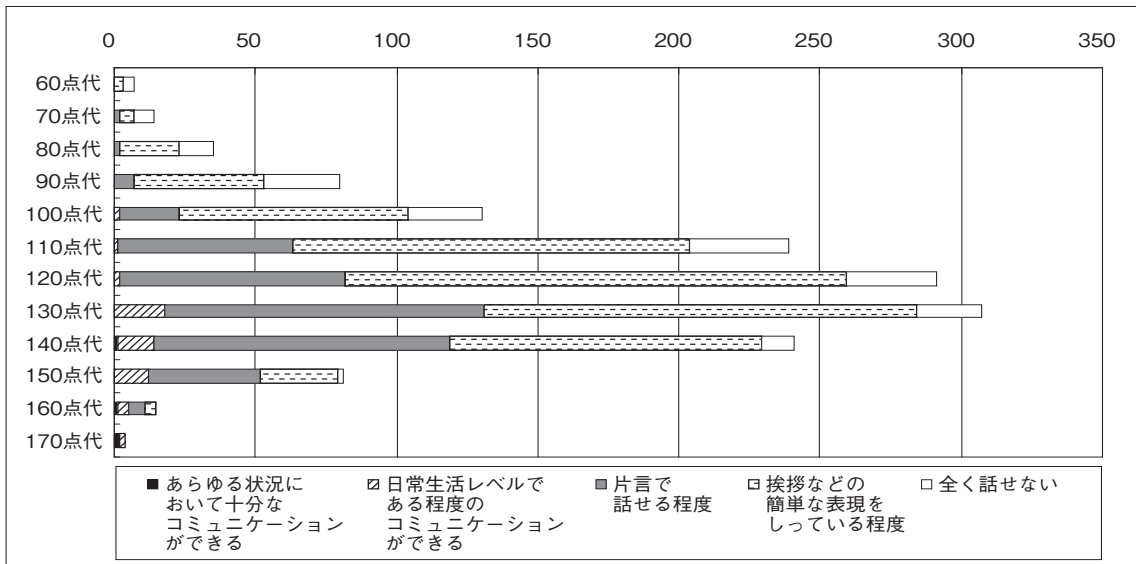
I あなたは英語が得意ですか

	得意である	どちらかといえば得意である	あまり得意ではない	苦手である	合計
60 点代	0	0	0	7	7
70 点代	0	0	2	12	14
80 点代	0	0	10	25	35
90 点代	0	0	15	65	80
100 点代	0	3	39	88	130
110 点代	1	11	91	136	239
120 点代	0	28	131	131	290
130 点代	1	51	163	91	306
140 点代	6	70	126	39	241
150 点代	8	34	35	4	81
160 点代	2	5	7	1	15
170 点代	2	2	0	0	4
合計	20	204	619	599	1442



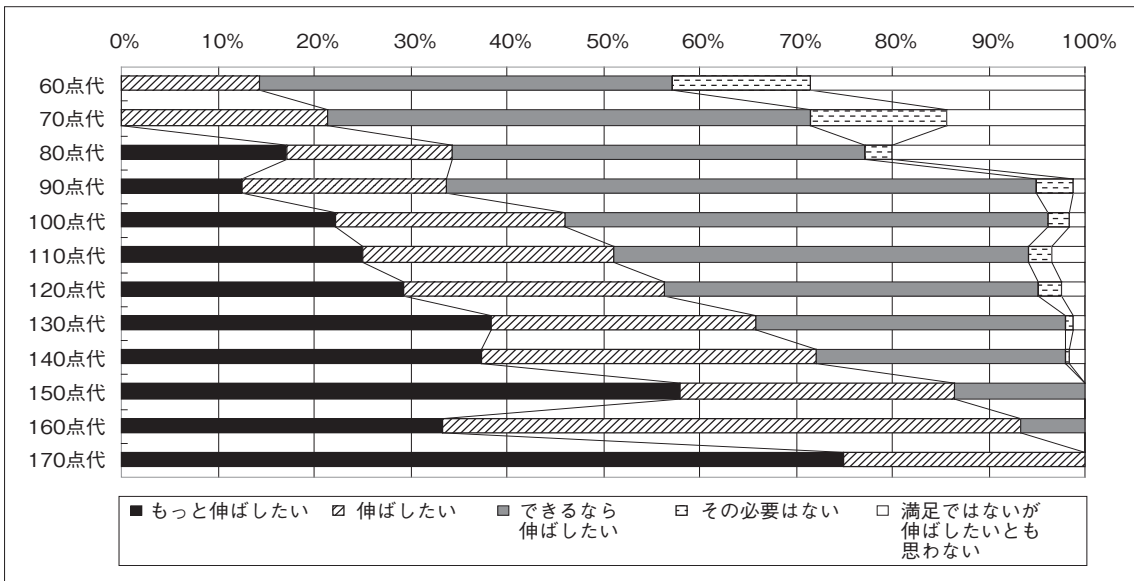
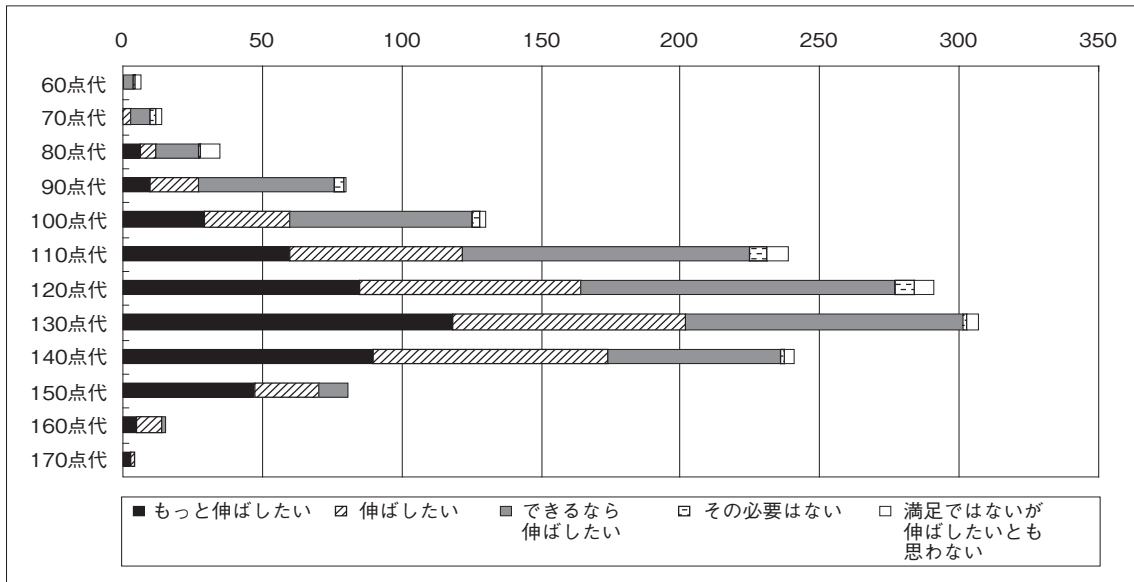
Ⅱ あなたは英語でコミュニケーションできますか

	あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる	日常生活レベルである程度のコミュニケーションができる	片言で話せる程度	挨拶などの簡単な表現をしている程度	全く話せない	合計
60点代	0	0	0	3	4	7
70点代	0	0	2	5	7	14
80点代	0	0	2	21	12	35
90点代	0	0	7	46	27	80
100点代	0	2	21	81	26	130
110点代	0	1	62	141	35	239
120点代	0	2	80	177	32	291
130点代	0	18	113	153	23	307
140点代	1	13	105	110	12	241
150点代	0	12	40	27	2	81
160点代	1	4	6	4	0	15
170点代	2	2	0	0	0	4
合計	4	54	438	768	180	1444



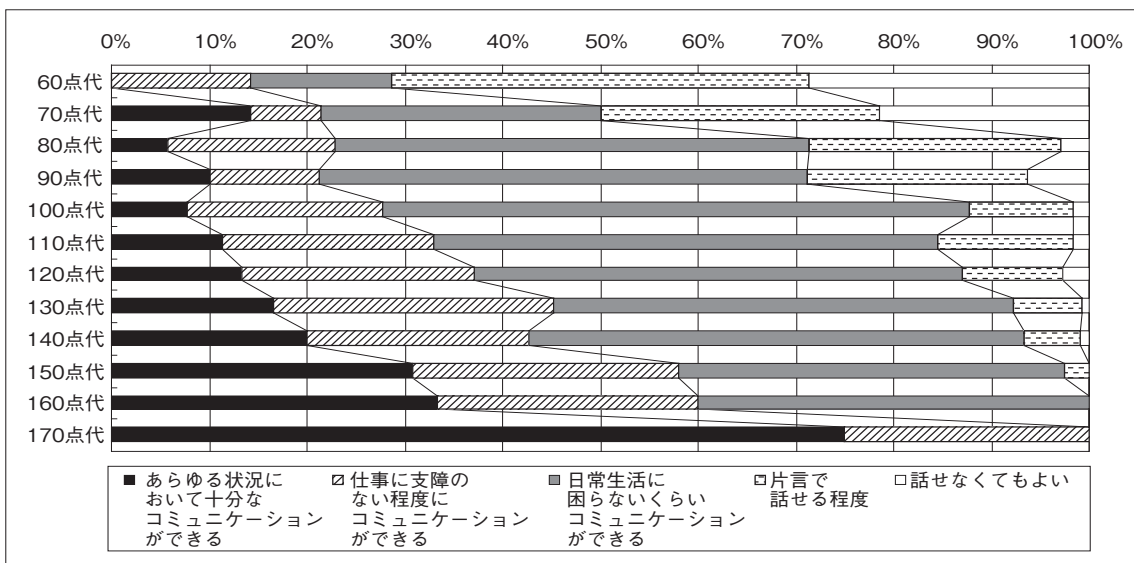
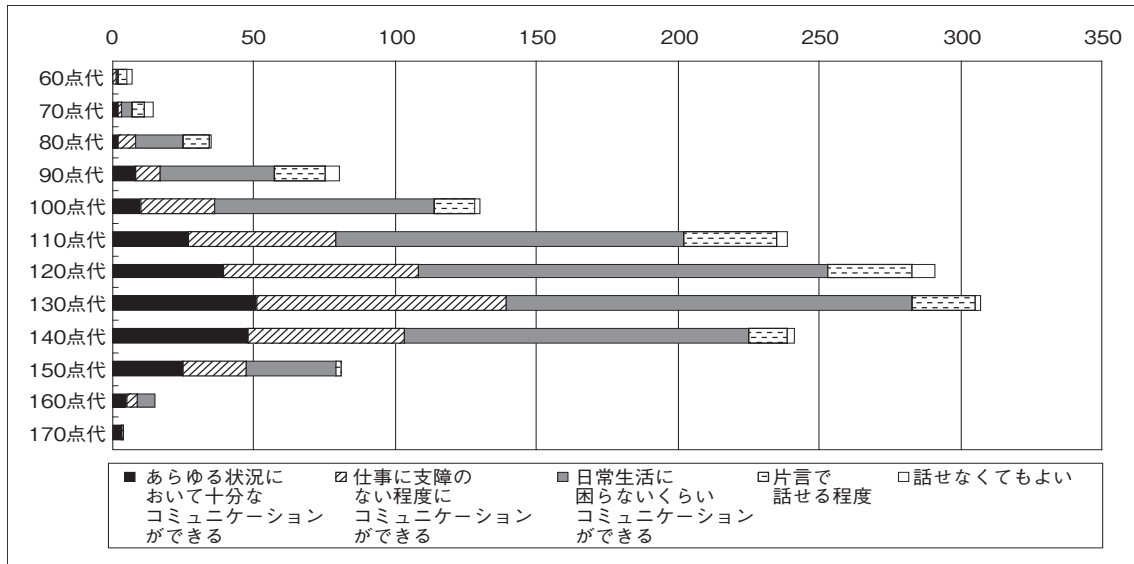
Ⅲあなたは英語力を伸ばしたいですか

	もっと伸ばしたい	伸ばしたい	できるなら伸ばしたい	その必要はない	満足ではないが伸ばしたいとも思わない	合計
60点代	0	1	3	1	2	7
70点代	0	3	7	2	2	14
80点代	6	6	15	1	7	35
90点代	10	17	49	3	1	80
100点代	29	31	65	3	2	130
110点代	60	62	103	6	8	239
120点代	85	79	113	7	7	291
130点代	118	84	99	2	4	307
140点代	90	84	62	1	4	241
150点代	47	23	11	0	0	81
160点代	5	9	1	0	0	15
170点代	3	1	0	0	0	4
合計	453	400	528	26	37	1444



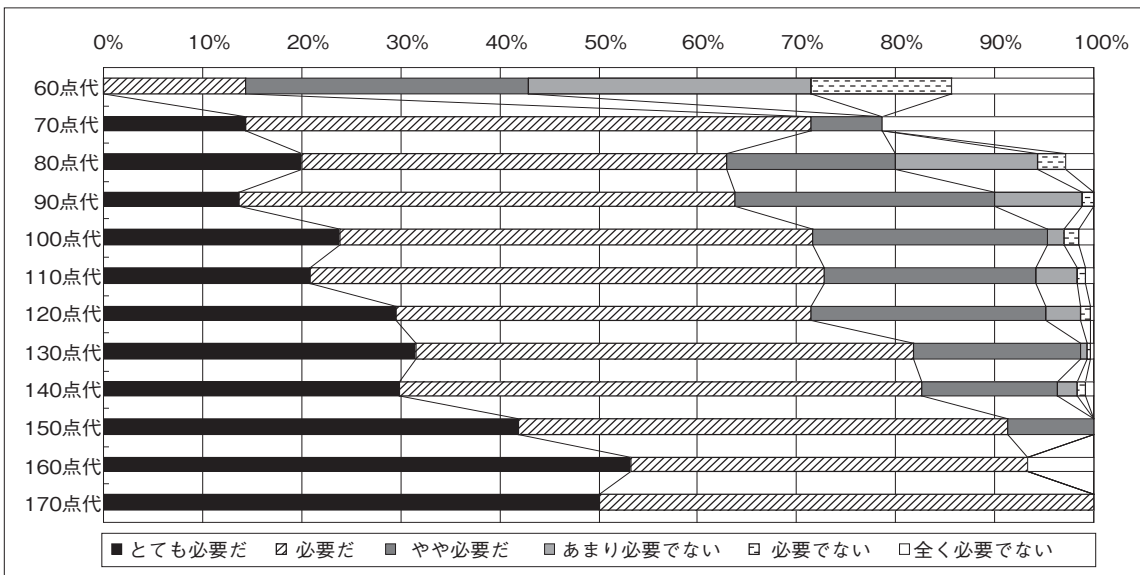
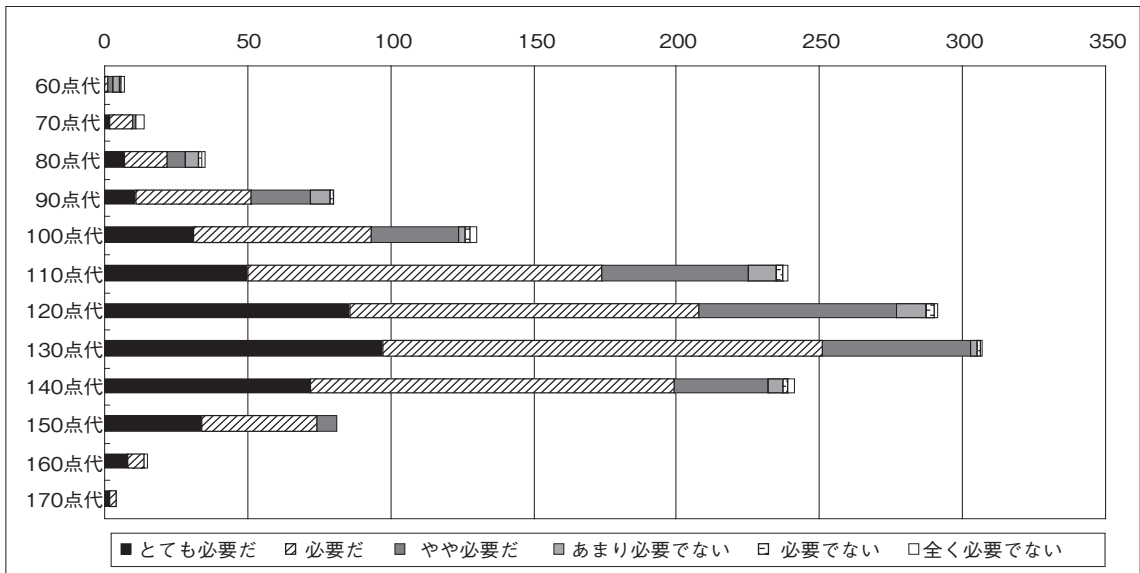
Ⅳ自分が目標とする英語コミュニケーション能力はどの程度ですか

	あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる	仕事に支障のない程度にコミュニケーションができる	日常生活に困らないくらいコミュニケーションができる	片言で話せる程度	話せなくてもよい	合計
60点代	0	1	1	3	2	7
70点代	2	1	4	4	3	14
80点代	2	6	17	9	1	35
90点代	8	9	40	18	5	80
100点代	10	26	78	14	2	130
110点代	27	52	123	33	4	239
120点代	39	69	145	30	8	291
130点代	51	88	144	22	2	307
140点代	48	55	122	14	2	241
150点代	25	22	32	2	0	81
160点代	5	4	6	0	0	15
170点代	3	1	0	0	0	4
合計	220	334	712	149	29	1444



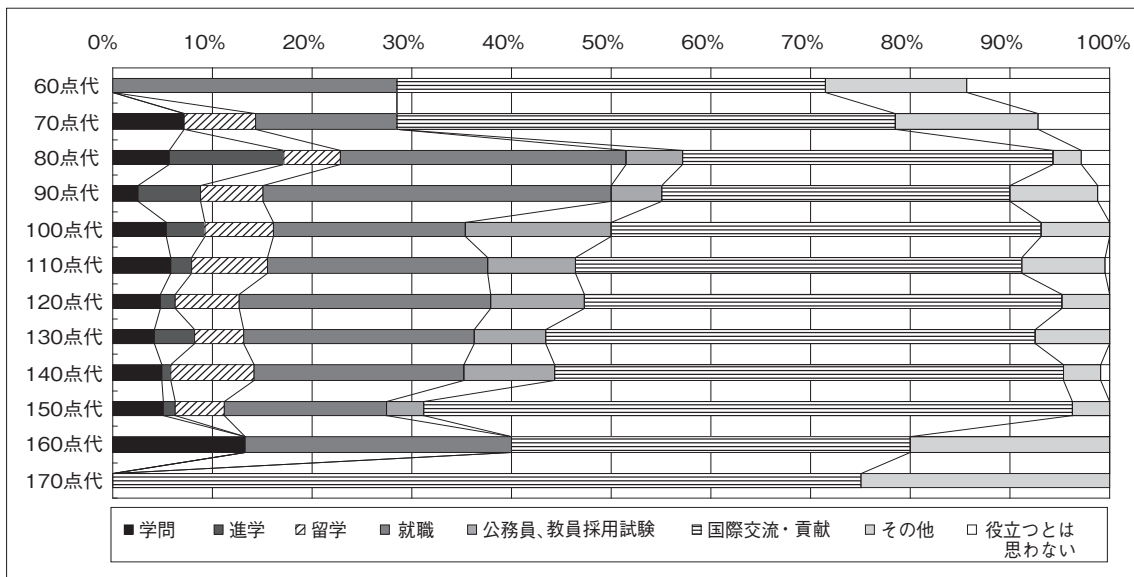
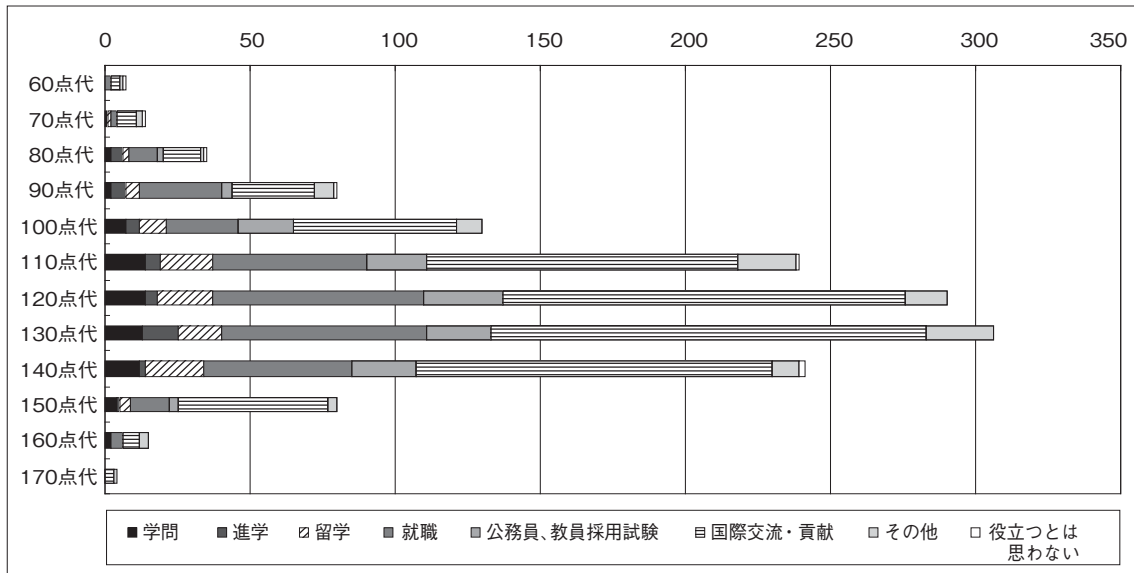
V 英語は必要だと思いますか

	とても必要だ	必要だ	やや必要だ	あまり必要でない	必要でない	全く必要でない	合計
60点代	0	1	2	2	1	1	7
70点代	2	8	1	0	0	3	14
80点代	7	15	6	5	1	1	35
90点代	11	40	21	7	1	0	80
100点代	31	62	31	2	2	2	130
110点代	50	124	51	10	2	2	239
120点代	86	122	69	10	3	1	291
130点代	97	154	52	2	1	1	307
140点代	72	127	33	5	2	2	241
150点代	34	40	7	0	0	0	81
160点代	8	6	0	0	0	1	15
170点代	2	2	0	0	0	0	4
合計	400	701	273	43	13	14	1444



Ⅵ英語は何に役立つと思いますか。次のうちから1つだけ選択してください

	学問	進学	留学	就職	公務員、教員採用試験	国際交流・貢献	その他	役立つとは思わない	合計
60点代	0	0	0	2	0	3	1	1	7
70点代	1	0	1	2	0	7	2	1	14
80点代	2	4	2	10	2	13	1	1	35
90点代	2	5	5	28	4	28	7	1	80
100点代	7	5	9	25	19	56	9	0	130
110点代	14	5	18	53	21	107	20	1	239
120点代	14	4	19	73	27	139	14	0	290
130点代	13	12	15	71	22	150	23	0	306
140点代	12	2	20	51	22	123	9	2	241
150点代	4	1	4	13	3	52	3	0	80
160点代	2	0	0	4	0	6	3	0	15
170点代	0	0	0	0	0	3	1	0	4
合計	71	38	93	332	120	687	93	7	1441



英語基礎力調査アンケート（秋学期分）

入学時に英語基礎力調査を受験していただきましたが、1年を経て再度受験するにあたり、この1年間の意識の変化についてお答えください。

*回答は最もあてはまるものを1つ選び、解答用紙A面の「属性欄」にマークしてください。

【Ⅰ】あなたは英語が得意になりましたか

0. 一年前から得意だった
1. 非常に得意になった
2. 得意になった
3. 少し得意になった
4. 得意にならなかったし、苦手にもならなかった

【Ⅱ】あなたは英語でコミュニケーションができるようになりましたか

0. 以前から、あらゆる状況において十分なコミュニケーションができた
1. あらゆる状況において、十分なコミュニケーションができるようになった
2. 日常生活レベルで、ある程度のコミュニケーションができるようになった
3. 片言で話せる程度になった
4. 挨拶などの簡単な表現を話せるようになった
5. 全く話せないままである

【Ⅲ】あなたは英語力を伸ばしたいですか

0. もっと伸ばしたい
1. 伸ばしたい
2. できるなら伸ばしたい
3. その必要はない
4. 満足ではないが伸ばしたいとも思わない

【Ⅳ】自分が目標とする英語コミュニケーション能力はどの程度ですか

0. あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる
1. 仕事に支障のない程度にコミュニケーションができる
2. 日常生活に困らないくらいコミュニケーションができる
3. 片言で話せる程度
4. 話せなくてもよい

【Ⅴ】あなたにとって、英語は最も何に役立つと思いますか

0. 学問
1. 進学
2. 留学
3. 就職
4. 公務員・教員採用試験
5. 国際交流・貢献
6. その他
7. 役立つとは思わない

【Ⅵ】○「英語」履修者にお聞きします

・あなたが受講した英語の授業で、最も満足したものはどれですか

1. Basic Reading
2. Basic Listening
3. Basic Communication

○英語以外の外国語履修者にお聞きします

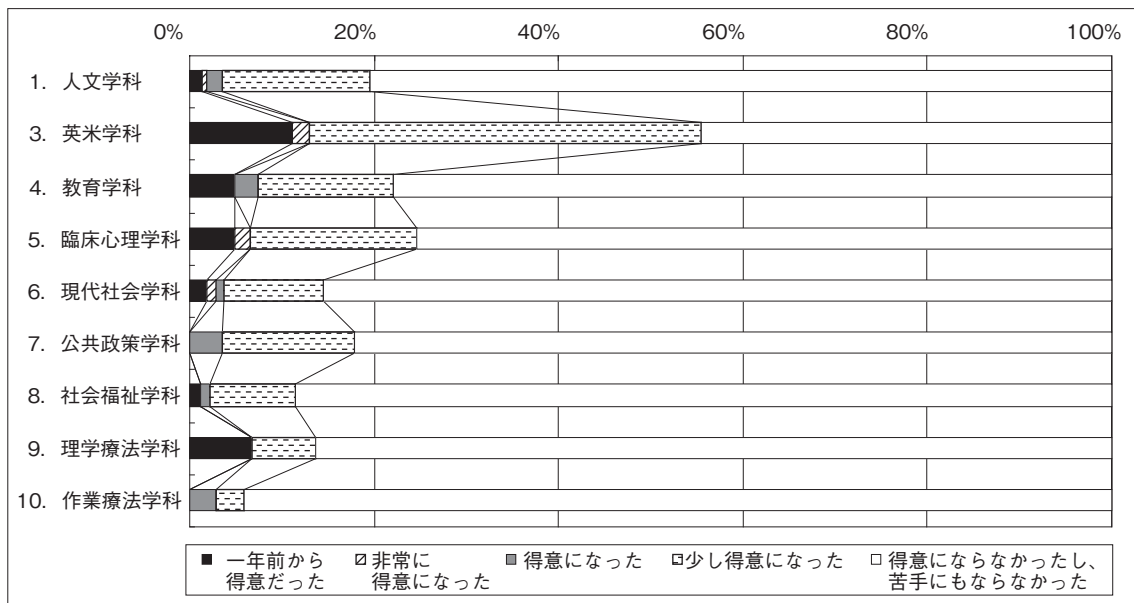
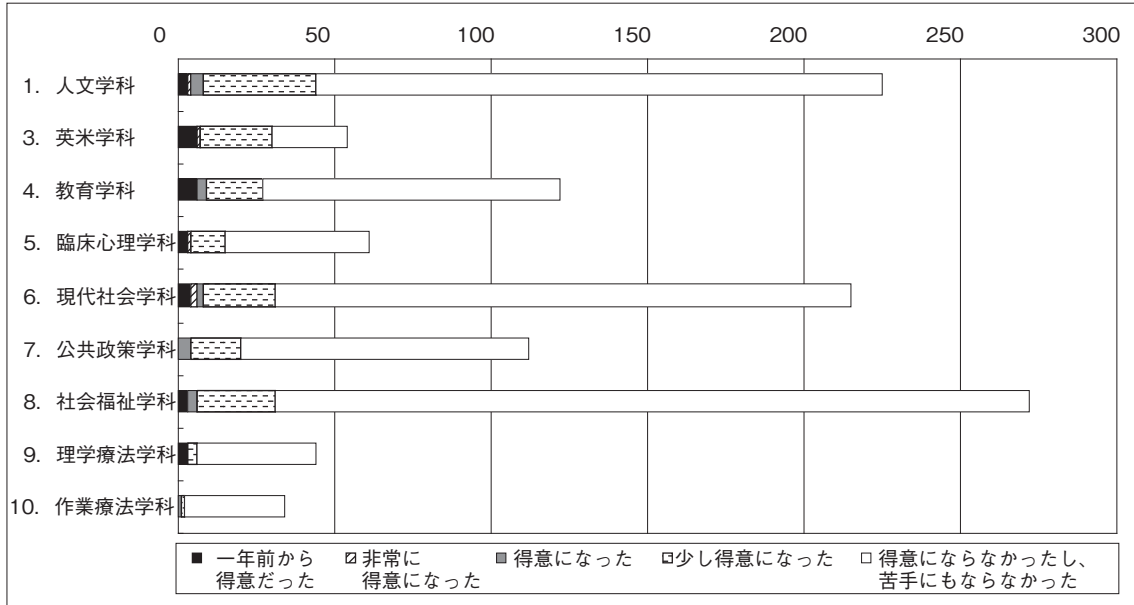
・英語を勉強するなら、どの分野を一番勉強したいですか

1. 文法
2. リスニング
3. リーディング
4. コミュニケーション
5. その他
6. したくない

2007 年度秋学期 英語基礎力調査アンケート集計結果（学科別）

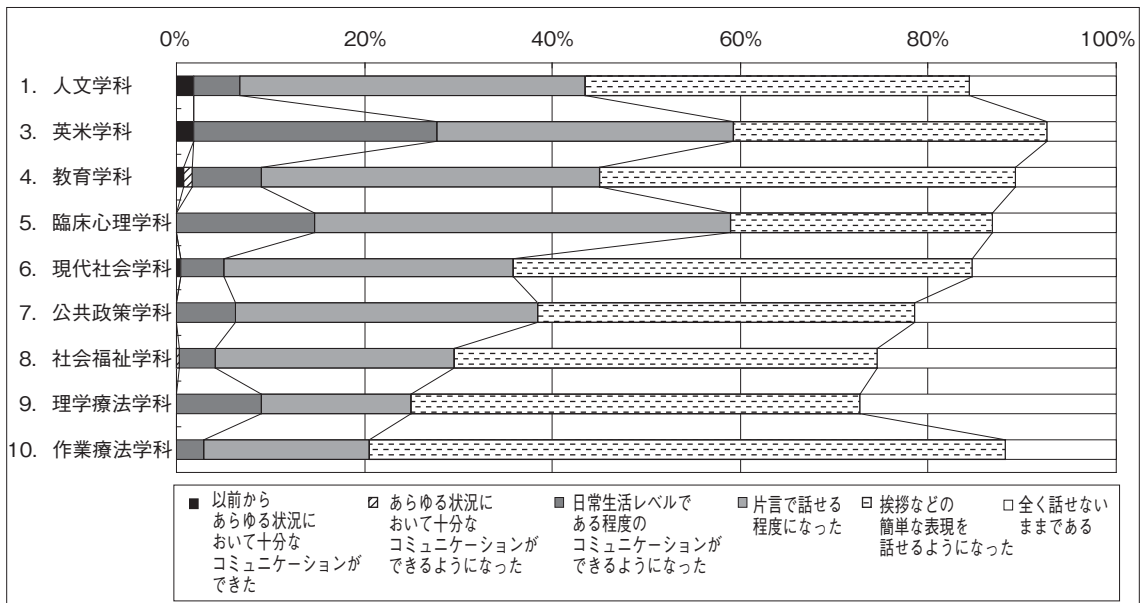
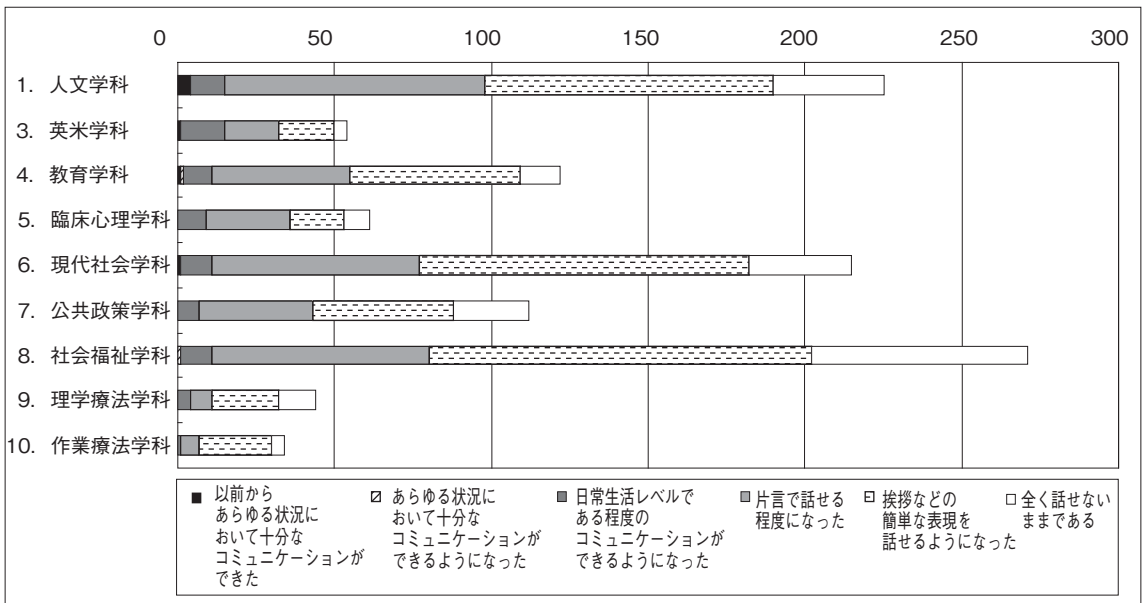
I あなたは英語が得意になりましたか

	一年前から得意だった	非常に得意になった	得意になった	少し得意になった	得意にならなかったし、苦手にもならなかった	合計
1. 人文学科	3	1	4	36	181	225
3. 英米学科	6	1	0	23	24	54
4. 教育学科	6	0	3	18	95	122
5. 臨床心理学科	3	1	0	11	46	61
6. 現代社会学科	4	2	2	23	184	215
7. 公共政策学科	0	0	4	16	92	112
8. 社会福祉学科	3	0	3	25	241	272
9. 理学療法学科	3	0	0	3	38	44
10. 作業療法学科	0	0	1	1	32	34
合計	28	5	17	156	933	1139



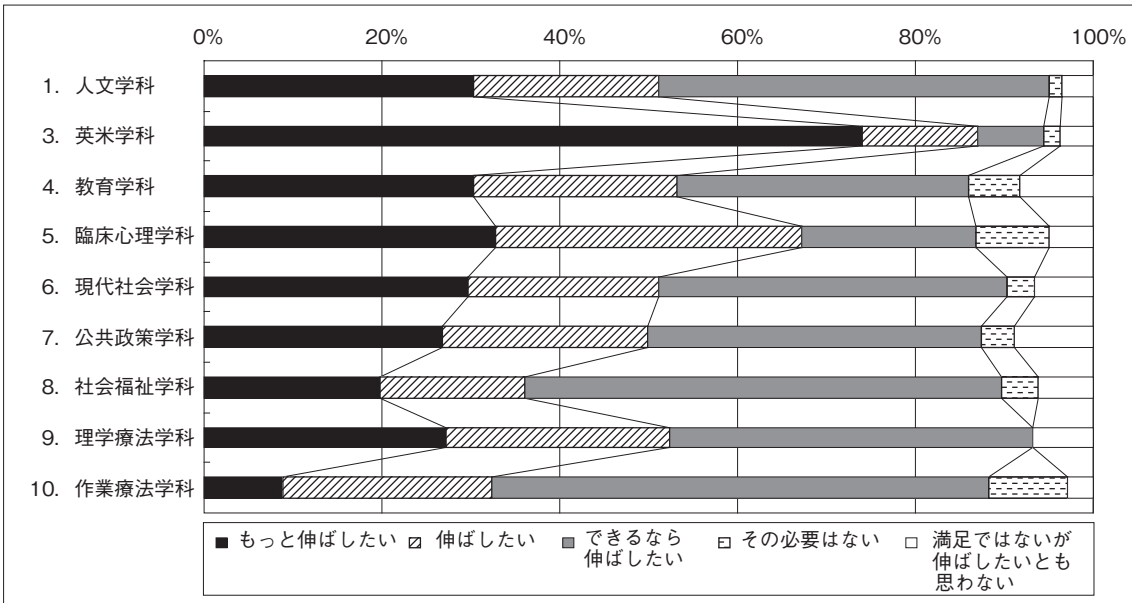
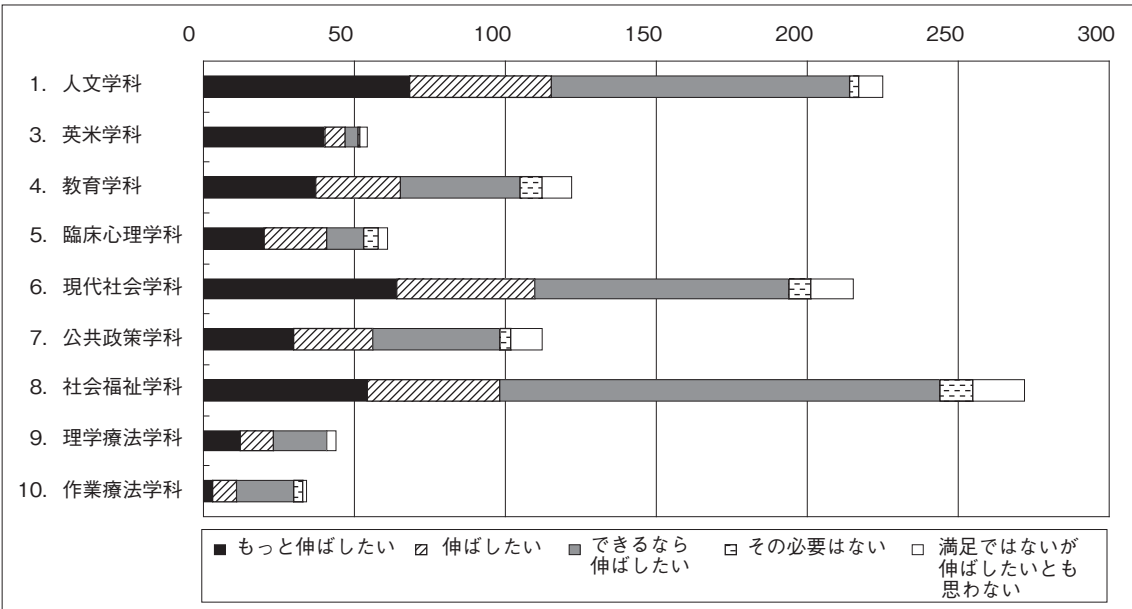
Ⅱ あなたは英語でコミュニケーションができるようになりましたか

	以前からあらゆる状況において十分なコミュニケーションができた	あらゆる状況において十分なコミュニケーションができるようになった	日常生活レベルである程度のコミュニケーションができるようになった	片言で話せる程度になった	挨拶などの簡単な表現を話せるようになった	全く話せないままである	合計
1. 人文学科	4	0	11	83	92	35	225
3. 英米学科	1	0	14	17	18	4	54
4. 教育学科	1	1	9	44	54	13	122
5. 臨床心理学科	0	0	9	27	17	8	61
6. 現代社会学科	1	0	10	66	105	33	215
7. 公共政策学科	0	0	7	36	45	24	112
8. 社会福祉学科	0	1	10	69	122	69	271
9. 理学療法学科	0	0	4	7	21	12	44
10. 作業療法学科	0	0	1	6	23	4	34
合計	7	2	75	355	497	202	1138



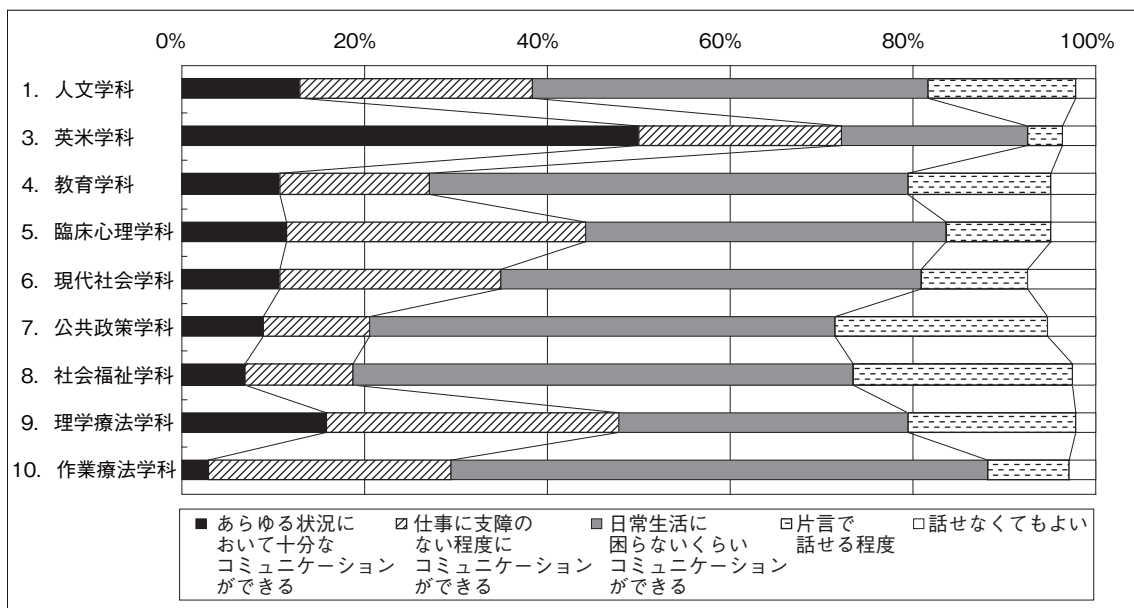
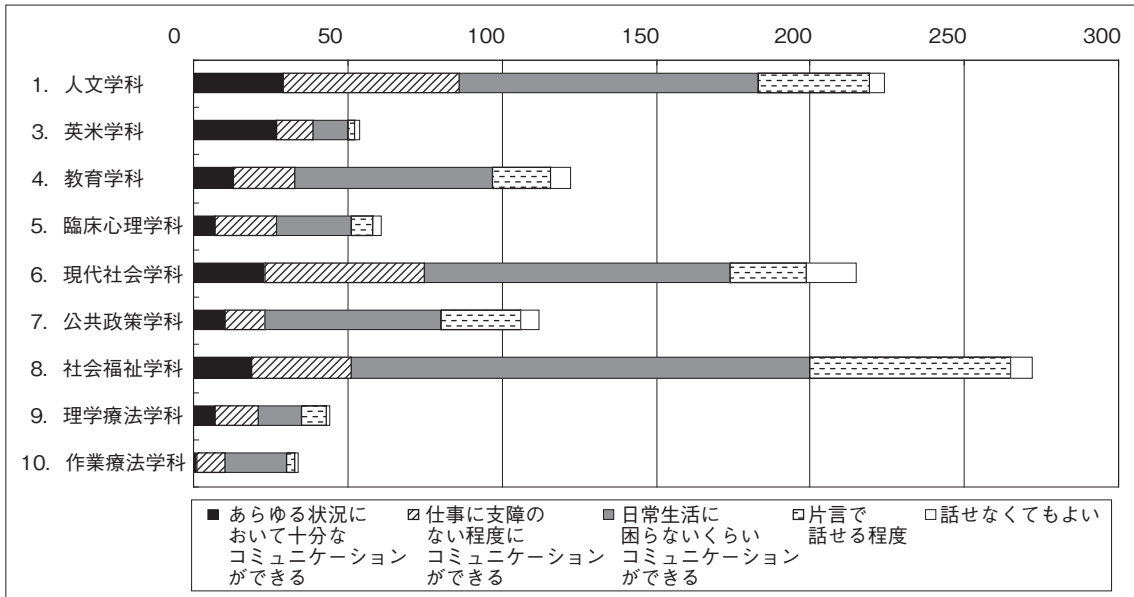
Ⅲあなたは英語力を伸ばしたいですか

	もっと伸ばしたい	伸ばしたい	できるなら伸ばしたい	その必要はない	満足ではないが伸ばしたいとも思わない	合計
1. 人文学科	68	47	99	3	8	225
3. 英米学科	40	7	4	1	2	54
4. 教育学科	37	28	40	7	10	122
5. 臨床心理学科	20	21	12	5	3	61
6. 現代社会学科	64	46	84	7	14	215
7. 公共政策学科	30	26	42	4	10	112
8. 社会福祉学科	54	44	146	11	17	272
9. 理学療法学科	12	11	18	0	3	44
10. 作業療法学科	3	8	19	3	1	34
合計	328	238	464	41	68	1139



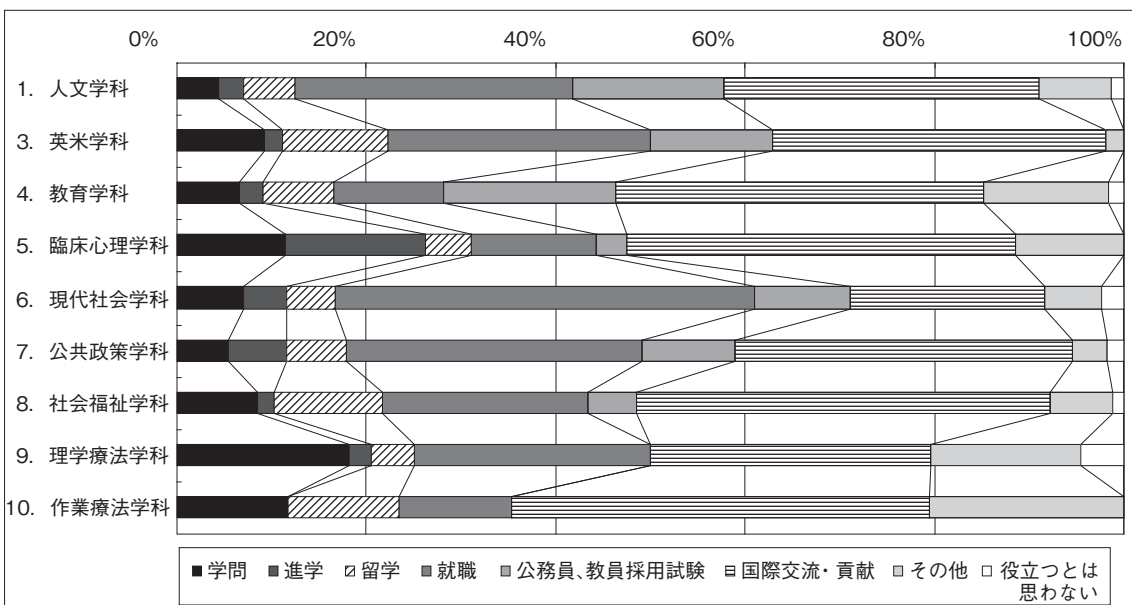
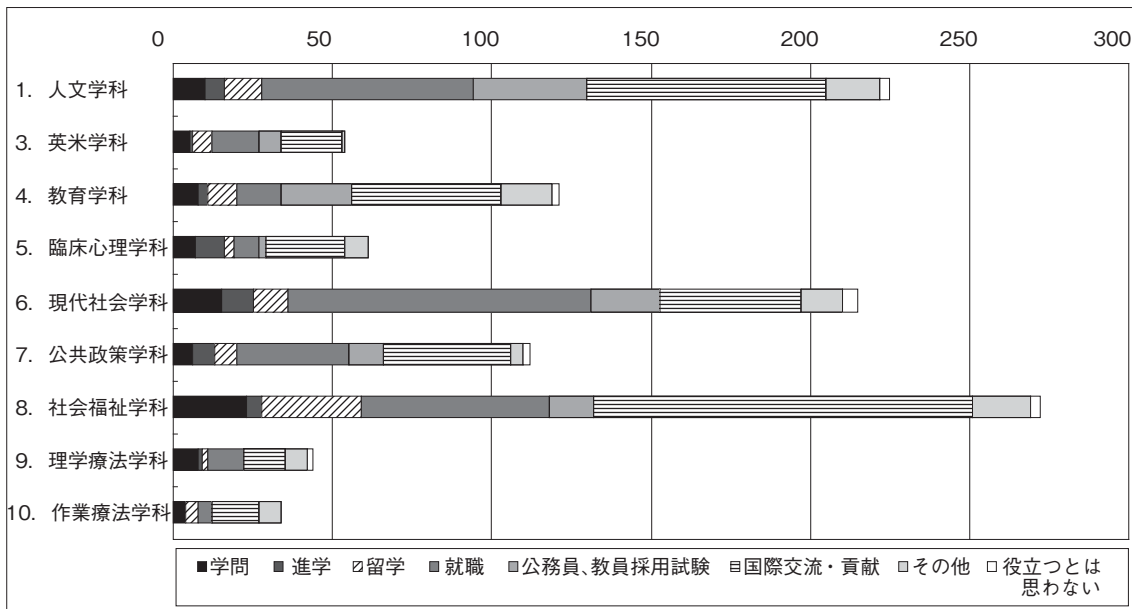
Ⅳ自分が目標とする英語コミュニケーション能力はどの程度ですか

	あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる	仕事に支障のない程度にコミュニケーションができる	日常生活に困らないくらいコミュニケーションができる	片言で話せる程度	話せなくてもよい	合計
1. 人文学科	29	57	97	36	5	224
3. 英米学科	27	12	11	2	2	54
4. 教育学科	13	20	64	19	6	122
5. 臨床心理学科	7	20	24	7	3	61
6. 現代社会学科	23	52	99	25	16	215
7. 公共政策学科	10	13	57	26	6	112
8. 社会福祉学科	19	32	149	65	7	272
9. 理学療法学科	7	14	14	8	1	44
10. 作業療法学科	1	9	20	3	1	34
合計	136	229	535	191	47	1138



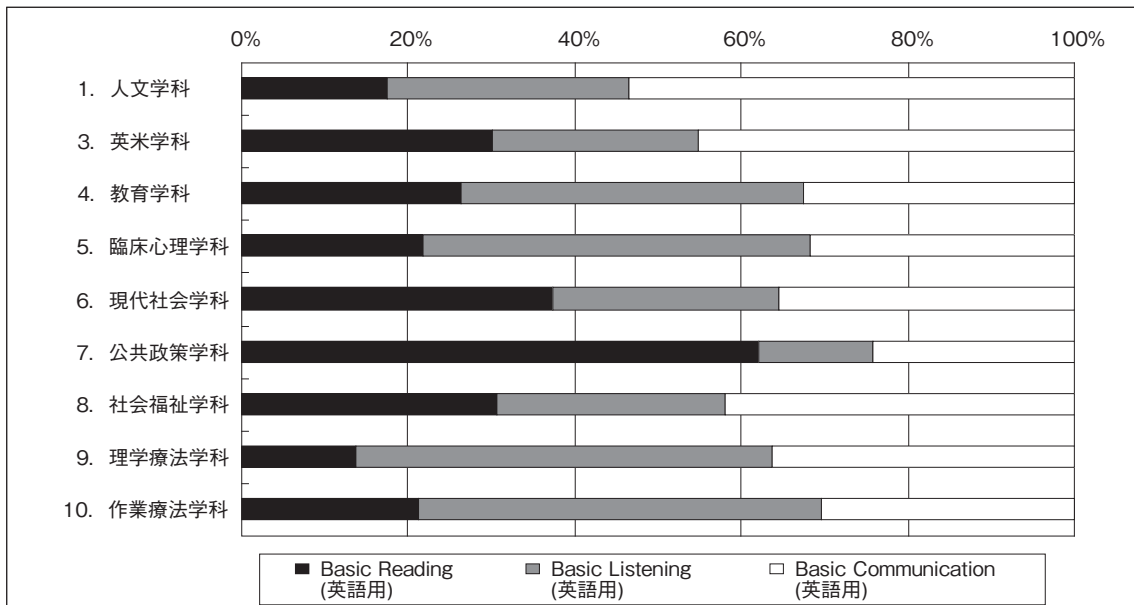
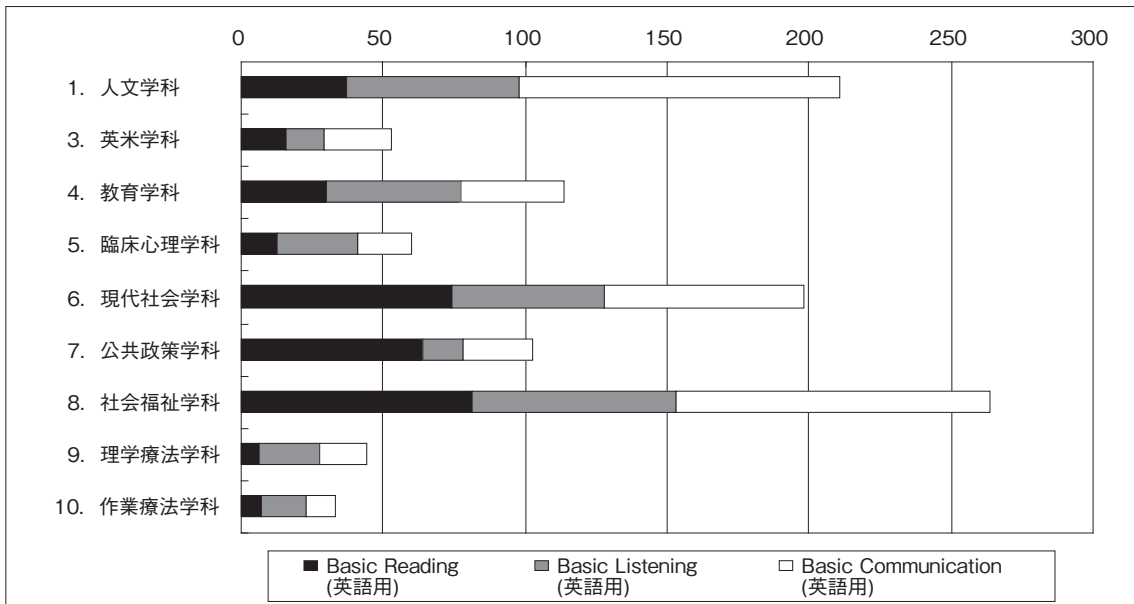
▼あなたにとって、英語は最も何に役立つと思いますか

	学問	進学	留学	就職	公務員・ 教員採用 試験	国際交流・ 貢献	その他	役立つとは思わない	合計
1. 人文学科	10	6	12	66	36	75	17	3	225
3. 英米学科	5	1	6	15	7	19	1	0	54
4. 教育学科	8	3	9	14	22	47	16	2	121
5. 臨床心理学科	7	9	3	8	2	25	7	0	61
6. 現代社会学科	15	10	11	95	22	44	13	5	215
7. 公共政策学科	6	7	7	35	11	40	4	2	112
8. 社会福祉学科	23	5	31	59	14	119	18	3	272
9. 理学療法学科	8	1	2	11	0	13	7	2	44
10. 作業療法学科	4	0	4	4	0	15	7	0	34
合計	86	42	85	307	114	397	90	17	1138



Ⅵあなたが受講した英語の授業で、最も満足したものはどれですか（英語用）
英語を勉強するなら、どの分野を一番勉強したいですか（英語以外用）

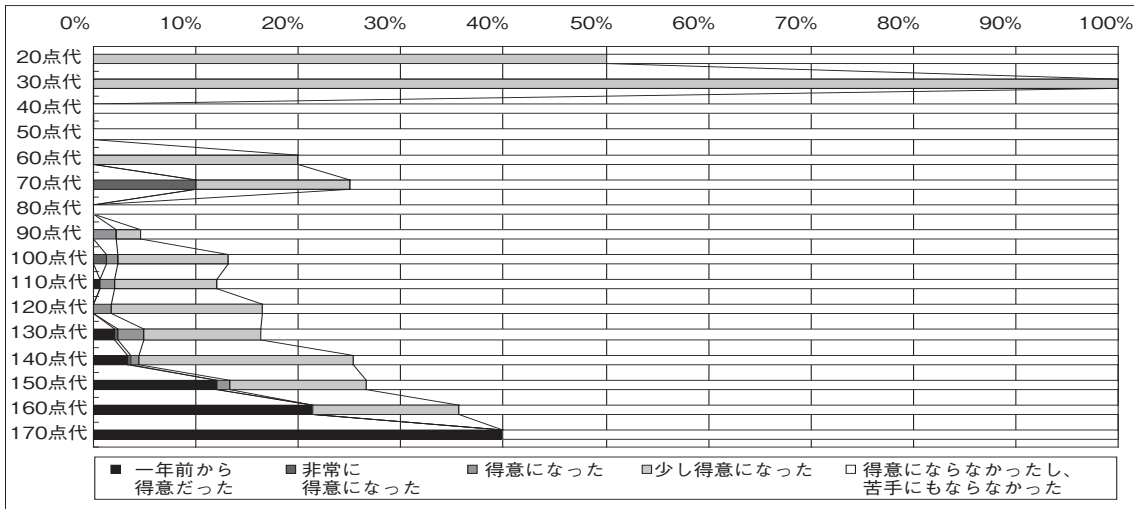
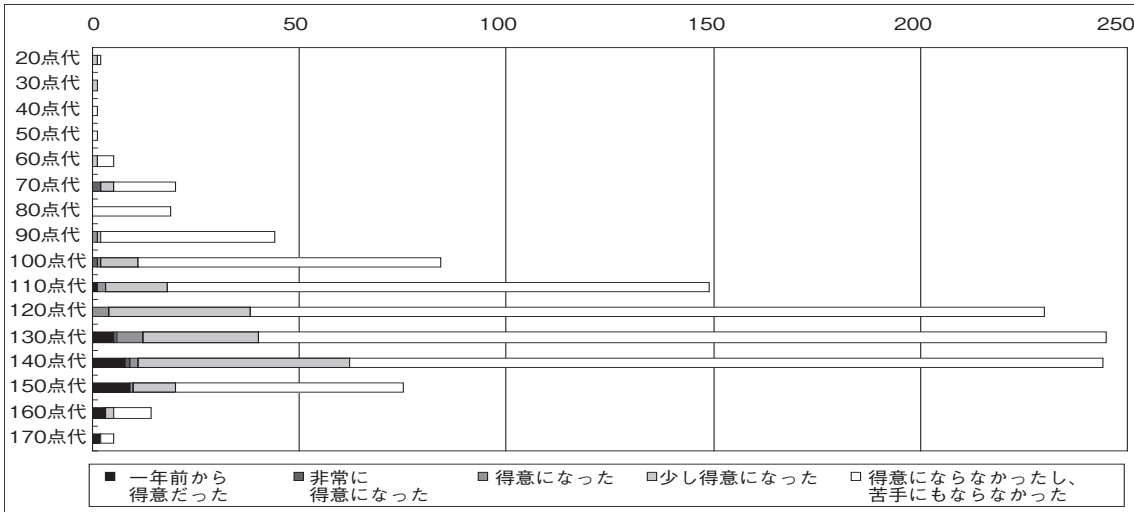
	BasicReading(英語用)	BasicListening(英語用)	BasicCommunication(英語用)	合計
1. 人文学科	37	61	113	211
3. 英米学科	16	13	24	53
4. 教育学科	30	47	37	114
5. 臨床心理学科	13	28	19	60
6. 現代社会学科	74	54	70	198
7. 公共政策学科	64	14	25	103
8. 社会福祉学科	81	72	111	264
9. 理学療法学科	6	22	16	44
10. 作業療法学科	7	16	10	33
合計	328	327	425	1080



2007 年度秋学期 英語基礎力調査アンケート集計結果（得点別）

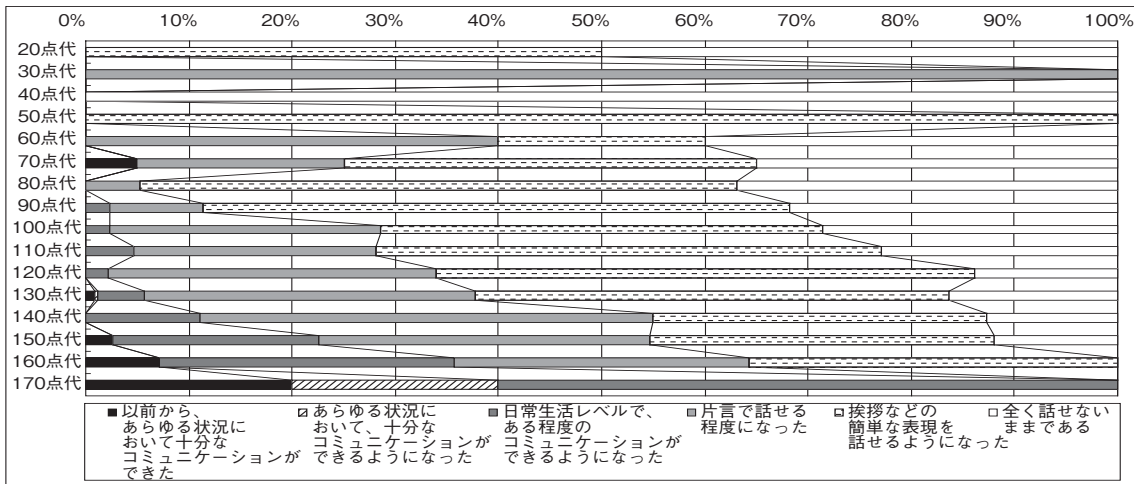
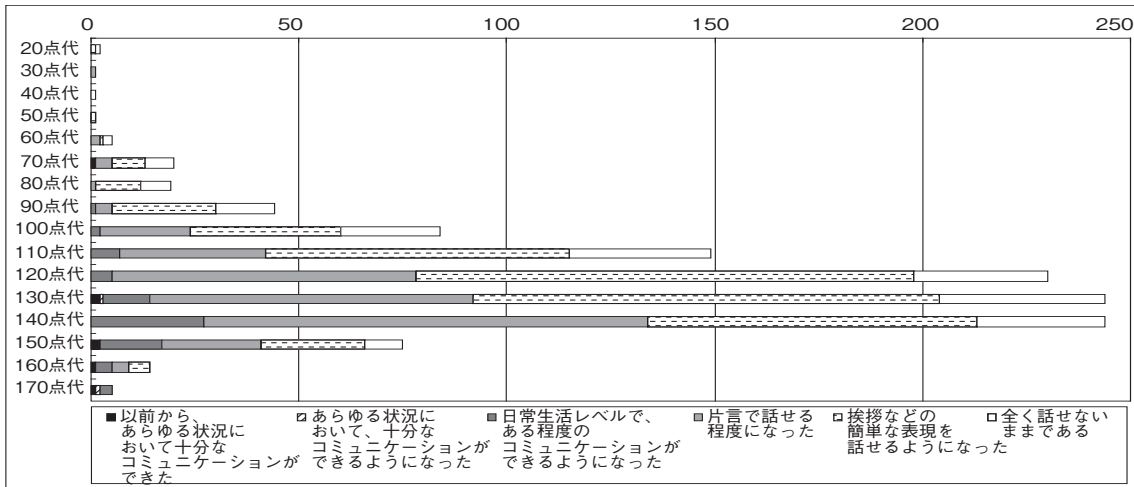
I あなたは英語が得意になりましたか

	一年前から得意だった	非常に得意になった	得意になった	少し得意になった	得意にならなかったし、苦手にもならなかった	合計
20点代	0	0	0	1	1	2
30点代	0	0	0	1	0	1
40点代	0	0	0	0	1	1
50点代	0	0	0	0	1	1
60点代	0	0	0	1	4	5
70点代	0	2	0	3	15	20
80点代	0	0	0	0	19	19
90点代	0	0	1	1	42	44
100点代	0	1	1	9	73	84
110点代	1	0	2	15	131	149
120点代	0	0	4	34	192	230
130点代	5	1	6	28	205	245
140点代	8	1	2	51	182	244
150点代	9	0	1	10	55	75
160点代	3	0	0	2	9	14
170点代	2	0	0	0	3	5
合計	28	5	17	156	933	1139



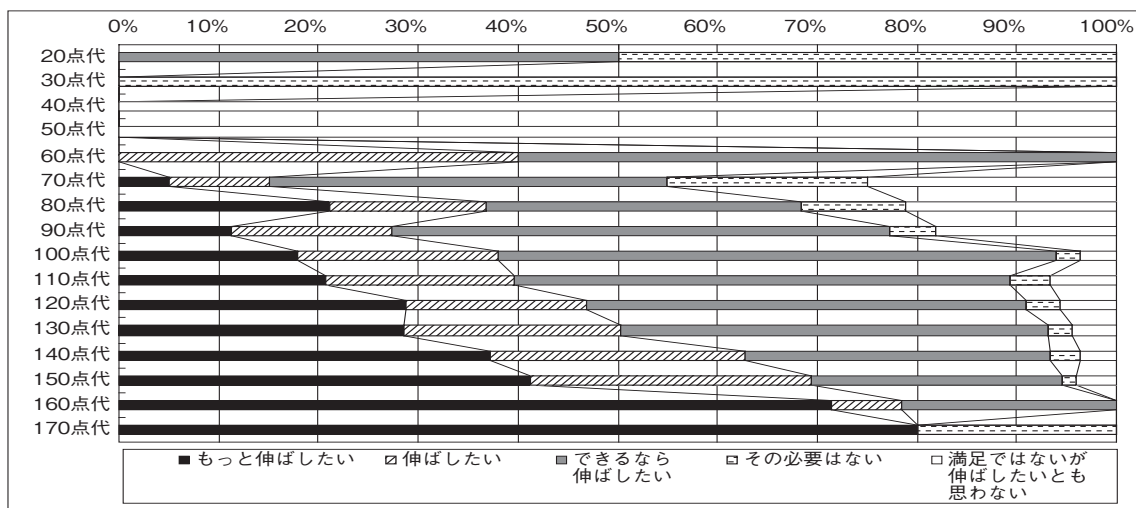
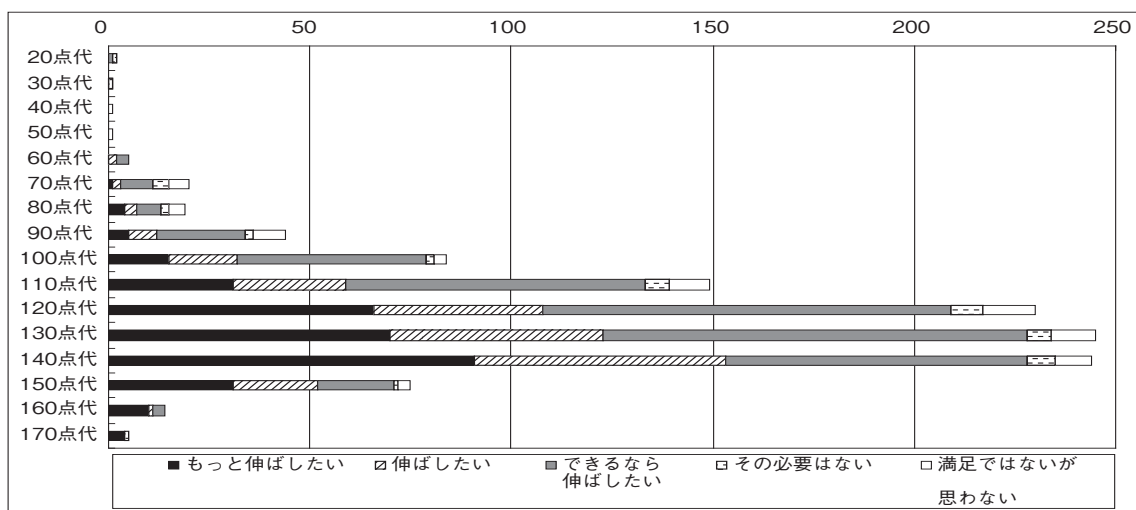
Ⅱ あなたは英語でコミュニケーションができるようになりましたか

	以前から、あらゆる状況において十分なコミュニケーションができた	あらゆる状況において、十分なコミュニケーションができるようになった	日常生活レベルで、ある程度のコミュニケーションができるようになった	片言で話せる程度になった	挨拶などの簡単な表現を話せるようになった	全く話せないままである	合計
20点代	0	0	0	0	1	1	2
30点代	0	0	0	0	1	0	1
40点代	0	0	0	0	0	1	1
50点代	0	0	0	0	1	0	1
60点代	0	0	0	2	1	2	5
70点代	1	0	0	4	8	7	20
80点代	0	0	0	1	11	7	19
90点代	0	0	1	4	25	14	44
100点代	0	0	2	22	36	24	84
110点代	0	0	7	35	73	34	149
120点代	0	0	5	73	120	32	230
130点代	2	1	11	78	112	40	244
140点代	0	0	27	107	79	31	244
150点代	2	0	15	24	25	9	75
160点代	1	0	4	4	5	0	14
170点代	1	1	3	0	0	0	5
合計	7	2	75	355	497	202	1138



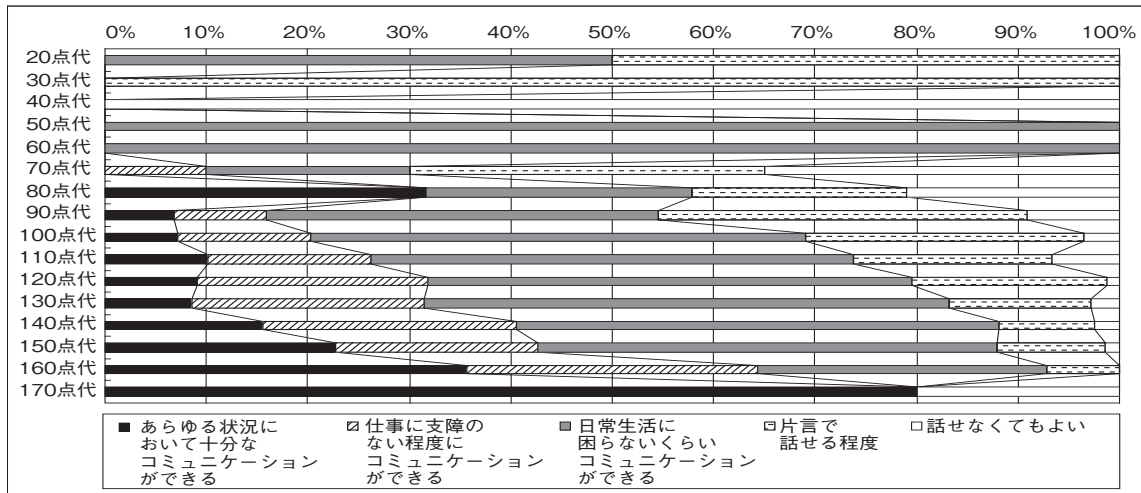
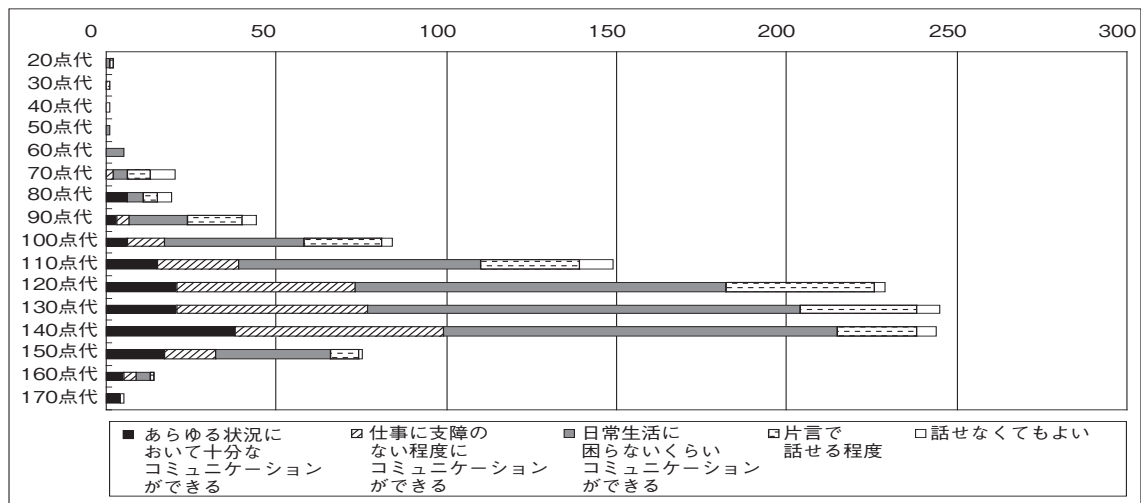
Ⅲあなたは英語力を伸ばしたいですか

	もっと伸ばしたい	伸ばしたい	できるなら伸ばしたい	その必要はない	満足ではないが伸ばしたいとも思わない	合計
20点代	0	0	1	1	0	2
30点代	0	0	0	1	0	1
40点代	0	0	0	0	1	1
50点代	0	0	0	0	1	1
60点代	0	2	3	0	0	5
70点代	1	2	8	4	5	20
80点代	4	3	6	2	4	19
90点代	5	7	22	2	8	44
100点代	15	17	47	2	3	84
110点代	31	28	74	6	10	149
120点代	66	42	101	8	13	230
130点代	70	53	105	6	11	245
140点代	91	62	75	7	9	244
150点代	31	21	19	1	3	75
160点代	10	1	3	0	0	14
170点代	4	0	0	1	0	5
合計	328	238	464	41	68	1139



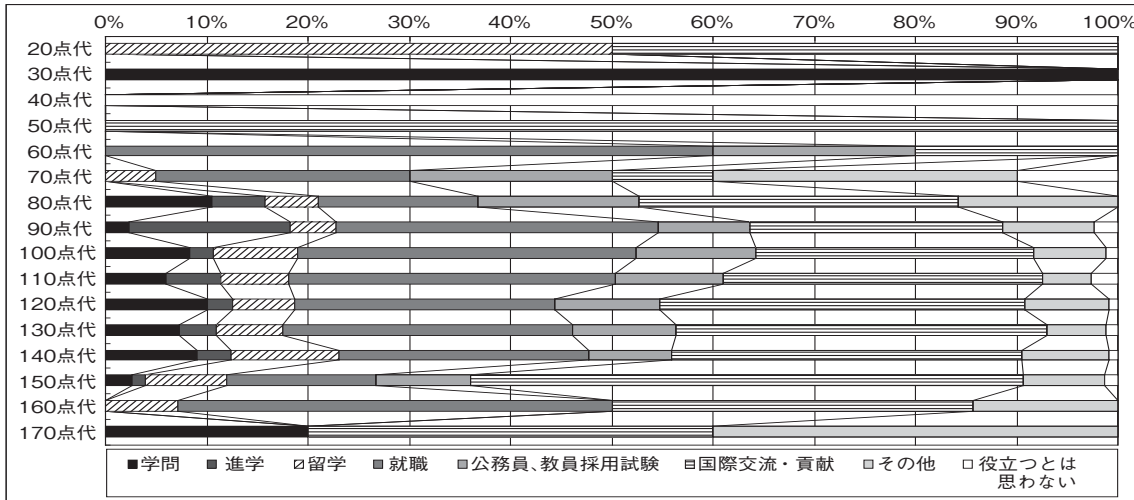
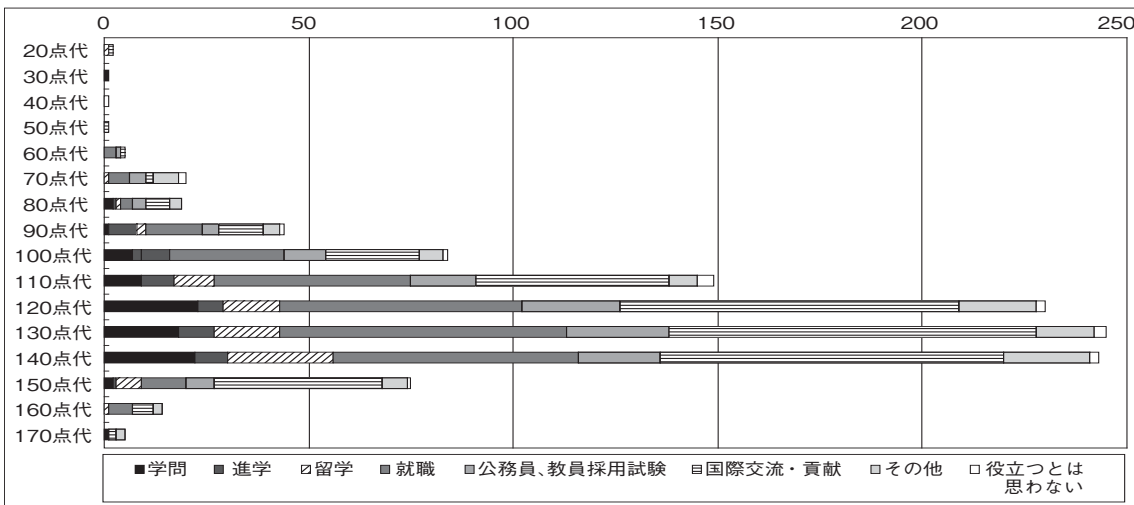
IV自分が目標とする英語コミュニケーション能力はどの程度ですか

	あらゆる状況において十分なコミュニケーションができる	仕事に支障のない程度にコミュニケーションができる	日常生活に困らないくらいコミュニケーションができる	片言で話せる程度	話せなくてもよい	合計
20点代	0	0	1	1	0	2
30点代	0	0	0	1	0	1
40点代	0	0	0	0	1	1
50点代	0	0	1	0	0	1
60点代	0	0	5	0	0	5
70点代	0	2	4	7	7	20
80点代	6	0	5	4	4	19
90点代	3	4	17	16	4	44
100点代	6	11	41	23	3	84
110点代	15	24	71	29	10	149
120点代	21	52	109	44	3	230
130点代	21	56	127	34	7	245
140点代	38	61	116	23	6	244
150点代	17	15	34	8	1	75
160点代	5	4	4	1	0	14
170点代	4	0	0	0	1	5
合計	136	229	535	191	47	1139



Vあなたにとって、英語は最も何に役立つと思いますか

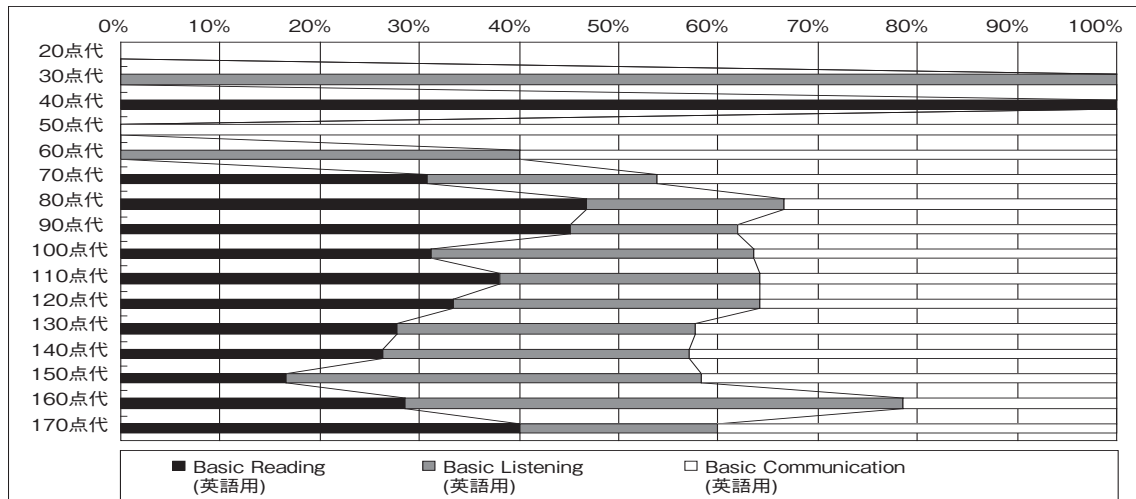
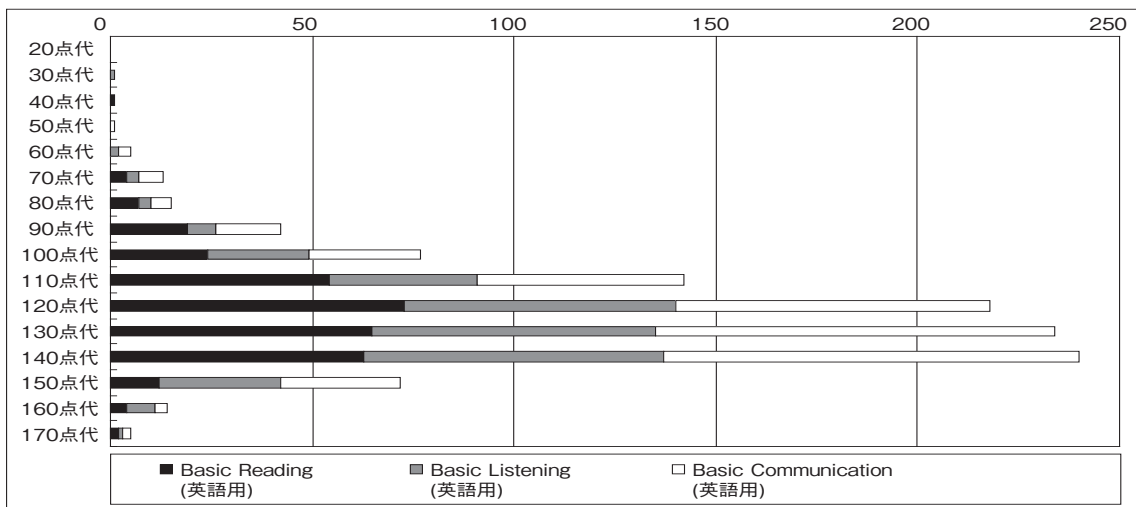
	学問	進学	留学	就職	公務員・ 教員採用 試験	国際交流・ 貢献	その他	役立つとは思わない	合計
20点代	0	0	1	0	0	1	0	0	2
30点代	1	0	0	0	0	0	0	0	1
40点代	0	0	0	0	0	0	0	1	1
50点代	0	0	0	0	0	1	0	0	1
60点代	0	0	0	3	1	1	0	0	5
70点代	0	0	1	5	4	2	6	2	20
80点代	2	1	1	3	3	6	3	0	19
90点代	1	7	2	14	4	11	4	1	44
100点代	7	2	7	28	10	23	6	1	84
110点代	9	8	10	48	16	47	7	4	149
120点代	23	6	14	59	24	83	19	2	230
130点代	18	9	16	70	25	90	14	3	245
140点代	22	8	26	60	20	84	21	2	243
150点代	2	1	6	11	7	41	6	1	75
160点代	0	0	1	6	0	5	2	0	14
170点代	1	0	0	0	0	2	2	0	5
合計	86	42	85	307	114	397	90	17	1138



Ⅵあなたが受講した英語の授業で、最も満足したものはどれですか（英語用）

英語を勉強するなら、どの分野を一番勉強したいですか（英語以外用）

	BasicReading(英語用)	BasicListening(英語用)	BasicCommunication(英語用)	合計
20 点代	0	0	0	0
30 点代	0	1	0	1
40 点代	1	0	0	1
50 点代	0	0	1	1
60 点代	0	2	3	5
70 点代	4	3	6	13
80 点代	7	3	5	15
90 点代	19	7	16	42
100 点代	24	25	28	77
110 点代	54	37	51	142
120 点代	73	67	78	218
130 点代	65	70	99	234
140 点代	63	74	103	240
150 点代	12	30	30	72
160 点代	4	7	3	14
170 点代	2	1	2	5
合計	328	327	425	1080



(集計：山本 理絵)

FD Review

基礎學力調查

学生の基礎学力の現状と組織的対応の必要性

教授法開発室員 近藤敏夫

1. 基礎学力調査実施の背景 …基礎学力の不足と学習意欲の低下

本学加盟の私立大学情報教育協会（私情協）が2007年度に実施したアンケート調査の結果をみると、私立大学教員は「授業で直面している問題点」として学生の「基礎学力がない」ことをあげる者が最も多い（表1）。ついで、学生に「学習意欲がない」ことを指摘する教員も多い。基礎学力の不足と学習意欲の低下は2004年度調査でも同様に指摘されており、私情協では大学が対策を取るべき問題としている。

表1 授業で直面している問題点（学生に関する問題）

	総計 (19,605人)	人文科学系 (3,574人)	社会科学系 (3,948人)	保健系 (4,107人)	教育系 (998人)
基礎学力がない	56.3%	60.2%	53.4%	48.5%	42.9%
学習意欲がない	37.2%	32.6%	36.2%	42.8%	29.4%
教員の言葉が理解できない	13.0%	11.7%	14.5%	11.8%	12.4%

出典：『平成19年度 私立大学教員の授業改善白書』平成20年5月 社団法人私立大学情報教育協会 p.1より
ただし、4年制大学のデータのみ抽出し、理学系その他の学部・学科については省略

高校教育の未履修であれば大学の補習授業で対応できるが、例えば読解力の不足などは補習授業以前の問題であり、大学の授業を進める上で大きな障害となっている。学生の基礎学力向上のためには、初年次教育等による組織的な対応が必要とされるのである。実質的に大学全入時代といわれる現在、多様な入試制度とあいまって、基礎学力が不足する学生が増加している（詳細については『FD Review』2号参照）。基礎学力の向上と学習意欲の動機づけには授業デザインや授業技術の工夫が求められる。しかし、一教員でこれらの問題に対応することは困難な状況になってきており、FDの義務化がスタートした2008年度以降、大学が組織的に取り組むべき問題とされている。基礎学力調査は、その組織的対応を図るためのデータを収集することが目的となる。

教授法開発室では、2000年度に基礎学力調査の基本方針を立てたが、その第一は「学生自身に、自らの基礎学力、一般教養学力について自覚させ、自律的学習への課題を明確にさせる」こと、第二が「学生の学力実態データを学科教員に提供し、カリキュラム構想や学習指導への資料として活用してもらう」こととされた。残念ながら、この2つの基本方針は実現されることはなかったが、これまでの基礎学力調査の問題点を反省し、今後の基礎学力調査のあり方を考えてみたい。

2. 過去の基礎学力調査の経緯

教授法開発室では基礎学力調査の方針に沿って試験問題を開発する案も検討されたが、種々の理由で就職対策用の業者試験が代用されることになった。業者試験の利点は全国レベルで学生の基礎学力を把握可能なことである。教授法開発室では、数社の業者テストを収集し、それらを比較・検討した結果、A社の就職総合テストを選定した。2000年12月に予備調査が実施され、2001年度の春学期オリエンテーション時から新生を対象にして本格実施がスタートした。

2002年度からは、対象者を3回生にも広げることとし、新生と在学生の基礎学力の違いをみることになった。これにともない試験問題もかねてより就職部が3回生を対象に実施してきたB社の一般常識試験対策テストに変更されることになった(表2)。B社の試験の実施時間は40分と短く、オリエンテーションの時間割に組み入れやすいこと、また、B社の試験が3回生の就職対策試験と兼ねることができることも魅力であった。以後、2008年度までB社の試験が継続して使用されている。なお、調査の経緯の詳細については『FD Review』2号を参照されたい。

表2 基礎学力調査実施概要

	実施日	対象者	受験者数(受験率)	使用試験問題
1回目	2000年12月	1回生	779人	A社(70分)
(予備調査)	2000年12月	上回生	104人	A社(70分)
2回目	2001年4月9日	1回生	1,369人	A社(70分)
	—	—	—	—
3回目	2002年4月8日	1回生	1,498人(93.6%)	B社01版(40分)
	2002年4月9日	3回生	990人(59.8%)	B社01版(40分)
4回目	2003年4月7日	1回生	1,436人(93.4%)	B社01版(40分)
	2003年4月9日	3回生	936人(61.4%)	B社01版(40分)
5回目	2004年4月6日	1回生	1,470人(98.3%)	B社02版(40分)
	2004年4月5日	3回生	1,021人(65.0%)	B社02版(40分)
6回目	2005年4月4日	1回生	1,427人(93.1%)	B社01版(40分)
	2005年4月6日	3回生	946人(60.9%)	B社01版(40分)
7回目	2006年4月4日	1回生	1,528人(98.1%)	B社01版(40分)
	2006年4月5日	3回生	936人(62.5%)	B社01版(40分)
8回目	2007年4月3日	1回生	1,468人(98.5%)	B社01版(40分)
	2007年4月4日	3回生	885人(61.0%)	B社01版(40分)
9回目	2008年4月3日	1回生	1,476人(98.1%)	B社02版(40分)
	2008年4月4日	3回生	905人(56.7%)	B社02版(40分)

3. 基礎学力調査の設題の分類

教授法開発室では学生の基礎学力を基礎常識と社会常識の2つに分けて調べることになった。A社、B社の試験は就職対策用に一般常識を試す問題からできているが、便宜的に基礎常識と社会常識の2つの領域に分けることが可能である。基礎常識の領域は高校ま

での学習科目に対応する科目群である。A社では「英語」、「国語」、「数学・理科」、「地理・歴史」、「社会・思想」、「政治・経済」に相当し、B社では「英語」、「国語」、「数理」、「社会」に相当する。基礎常識は高校の学習科目に基づいて作成されているため、多様な入試システムで入学してきた新入生の学力を把握するための基準になりえる。第2の領域は社会常識である。これは社会人としての知識と教養を問う質問項目からなり、A社では「文学・芸術」、「マナー総合」、「時事問題」に相当し、B社では「日常生活」と「時事問題」に相当する（表3）。

表3 問題の分類

領域	質問項目の特徴	科目群
基礎常識	高校で学習してきた科目 (A社60問、B社80問)	A社：「英語」、「国語」、「数学・理科」、「地理・歴史」、「社会・思想」、「政治・経済」(各科目とも10問)
		B社：「英語」「国語」「数理」「社会」(各科目とも20問)
社会常識	社会人としての知識と教養 (A社40問、B社40問)	A社：「文学・芸術」(10問)、「マナー総合」(10問)、「時事問題」(20問)
		B社：「日常生活」(20問)、「時事問題」(20問)

A社、B社の試験とも大学の教養科目（現行カリキュラムの共通科目、基礎科目、専門基礎科目）のレベルで作成されている。それゆえ、A社、B社の試験を専門教育前の基礎学力を調べるための問題としてみなしてよいだろう。なお、A社、B社とも学生には試験結果の個人別データが郵送され、卒業後の志望分野に応じて学習のアドバイスを得ることができるようになっている。

A社の試験結果（2000年度予備調査および2001年度調査）を踏まえて、教授法開発室では学生の基礎常識を確認し、それらを発展させる教育をすることが課題となった。その対応策として、基礎学力向上プログラムの開発および入試システムとの連動を図ることになった。しかし、教授法開発室と学部・学科との連携や入試部との連携がなされなかったため、基礎学力調査の結果を生かす対策はとられてこなかった。なお、A社、B社の試験結果の詳細は『FD Review』1号および2号を参照されたい。

4. B社試験の設問内容 ——深刻な基礎学力不足——

2002年度からはB社の試験が継続して用いられている。以下、B社試験で本学学生の基礎学力の実態をみてみよう。

B社の試験問題は「01版」と「02版」の2種類があり、それぞれの版はほぼ同一の設問から構成されている（「時事問題」は年度によって設問が更新されている）。2004年度と2008年度の基礎学力調査には「02版」が使用されたが、それ以外は「01版」が使用されている。設問数は制限時間40分で120問と多い。どの設問も最初に短い質問文があり、続いて5択の選択肢が示される形式である。したがって、どの設問も5分の1(20%)以上の正解率が期待できるはずである。ところが、正解率が10%を下回る設問がかなりある。これは学生の多くが解答用紙にマークを付けなかったケースであると考えられる。とくに

100 題目以降の設問で大幅に正解率が下がり、試験の制限時間内に解答できなかった学生が多いことが予測できる。それゆえ、正解率については 100 題目までが学生の基礎学力をほぼ反映しているものとみなしたい。以下、この点に留意して「基礎常識」に相当する「国語」と「社会」について、その出題傾向と学生の基礎学力をみてみよう。

B社では就職試験の一般常識の中でも「国語」が最も大きな比重を占めているとみなしている。設問としては、漢字の読み書き、四字熟語・ことわざ・慣用句、接続詞の使い方など、国語の語彙力が試されており、また文学史の知識や長文読解力の設題も出されている。以下、2008 年度の B 社試験「02 版」で回生別の試験結果をみてみよう。設問が平易であるにもかかわらず正解率がかなり低くなっていること、また 1 回生と 3 回生の正解率の差に注意していただきたい。学生の基礎学力の不足がいかほど深刻であるかが分かっているだけであろう。なお、B 社試験「01 版」の設問については『FD Review』1 号、2 号を参照されたい。

[問] 次のカタカナを漢字に直したものとして、最も適切なものはどれか。

この味はシコウに合わない

ア. 指向 イ. 嗜好 ウ. 試行 エ. 至高 オ. 志向

正解「イ」 正解率：1 回生 78.7% 3 回生 53.8%

著名な先生のコウエンを聞く

ア. 高遠 イ. 好演 ウ. 後援 エ. 公演 オ. 講演

正解「オ」 正解率：1 回生 89.1% 3 回生 54.7%

[問] 次の□に当てはまる文字として、最も適切なものはどれか。

有□転変（世間のすべての現象の変化が激しいこと）

ア. 終 イ. 無 ウ. 為 エ. 移 オ. 似

正解「ウ」 正解率：1 回生 37.8% 3 回生 25.1%

才色兼□（頭も顔もよいこと）

ア. 任 イ. 用 ウ. 美 エ. 持 オ. 備

正解「オ」 正解率：1 回生 41.3% 3 回生 25.3%

晴□雨□（悠々自適の生活をする事）

ア. 喜・悲 イ. 自・他 ウ. 開・閉 エ. 耕・読 オ. 蒔・掘

正解「エ」 正解率：1 回生 74.6% 3 回生 44.9%

[問] 次の文の（ ）に当てはまる語句として、最も適切なものはどれか。

人間は、自分というものを他人を通じて理解するのである。だから、自分では社会的であると思っていた人物が、ある仲間からすると付き合いの悪い人だと

思われることはごく当たり前のことといえる。()、他人から変化の指摘があったとしても性格の変化の証拠にはならない。

ア. また イ. そして ウ. とはいえ エ. したがって オ. しかし

正解「エ」 正解率：1回生 36.8% 3回生 23.8%

上記の正解率をみると、2008年度の3回生は常識的な国語の語彙力が著しく不足していることが分かる。この程度の語彙力で、大学レベルの本を読解したり、教員の話を理解したり、答案やレポートを書いたりすることが可能であろうか。国語の語彙力が不足する学生に文系の大学教育を受けさせるには配慮が必要であろう。とくに3回生は専門教育に本格的に入ってくる時期であるが、自主的に専門書を読み、自分の力でレポートや論文を書くことができるかどうか疑問である。

また、1回生の正解率は3回生よりも高いが、過去7年間の基礎学力調査のデータをみる限り、入学後に学生の基礎学力が伸びることはない。国語の基礎学力が不足する学生にはリメディアル教育等での組織的対応が必要であろう。

つぎに「社会」の基礎学力についてみてみよう。B社試験の「社会」の設問は、政治・経済、歴史、地理、思想・文化の設問に分けられるが、それらの設問は中学や高校の教科書の知識があれば解答可能である。以下に例示する「社会」の設題は基礎的レベルであるが、正解率はかなり低く、とくに3回生の正解率が低くなっていることに注意されたい。

[問] 念仏を唱えるだけですべての人が救われるとの悟りに基づいて、一遍が開いた仏教の一派を何というか。

ア. 浄土真宗 イ. 臨済宗 ウ. 日蓮宗 エ. 曹洞宗 オ. 時宗

正解「オ」 正解率：1回生 30.6% 3回生 18.5%

[問] 次の文章が説明している国として、最も適切なものはどれか。

19世紀からイギリスの流刑植民地として開発され、牧羊と牧牛が主な産業である。先住民のマオリ民族はイギリス文化と同化している。

ア. ケニア イ. ボリビア ウ. 南アフリカ共和国
エ. ニューゼaland オ. オーストラリア

正解「エ」 正解率：1回生 44.1% 3回生 28.7%

[問] 大日本帝国憲法の草案を作成し、後に首相を務めたものの、韓国において暗殺されたのは次のうちの誰か。

ア. 岩倉具視 イ. 板垣退助 ウ. 伊藤博文 エ. 大隈重信 オ. 陸奥宗光

正解「ウ」 正解率：1回生 70.9% 3回生 38.8%

「国語」と同様に「社会」でも3回生の基礎学力の不足は深刻である。本学の3回生は高校までに学習した知識が教養として身につけていないようである。「社会」の教養は「時事問題」に関する知識の基礎にもなるが、過去の基礎学力調査で本学学生は全国レベルで

みて「時事問題」の学力が著しく低いのである（詳細は『FD Review』1号、2号参照）。本来ならば、学生が幅広く読書をしたり、新聞・TV、週刊誌などから情報を収集したりすることが望ましい。しかし、学生の自学自習に加えて、中学・高校の社会科教育に沿ったりメディア教育の工夫が必要な段階にきているといえよう。

5. 基礎学力調査の課題

基礎学力調査は学生の基礎学力を向上させるという課題に応える可能性をもつ。ただし、そのためには就職対策用の業者試験を代用しては限界がある。全国共通の基礎学力判定用の業者試験があれば、その試験に変更することが望ましい。現行のB社試験の問題点を整理しておこう。第一にB社の試験が就職対策用であること、第二にB社で元データが処理されるため分析や活用の段階で使えないということである。

B社試験は就職対策用に特化して作られている。そのため、大学生の基礎学力を測定するのに不都合な点がある。まず、試験時間が40分と短いにもかかわらず問題数が120問と多く、学生がすべての問題を回答する時間がない。平均して1問につき20秒で回答しなければならない。すばやく問題を解くことが就職試験では求められるのであろうが、基礎学力の測定にはそぐわないであろう。

つぎに、B社試験の元データを入手できないことも不都合である。例えば、学部・学科別や回生別にデータを分析しようとしても、分析の過程で元データを参照できないので信頼性が得られない場合が多々ある。B社試験の結果はエクセルのデータに変換された簡略版が送られてくる。7年連続でデータが蓄積されてきたが、時系列で分析してみると解釈不可能な数値が散見されることが明らかになってきた。また、単年度みても統計的には有り得ない数値が出てくることがある。これは統計分析ではよくみられることだが、このような場合、元データに戻って確認する必要がある。しかし、B社試験ではそれが不可能である。本来ならば、回収された解答用紙を参照しながらデータの入力ミスや変換ミスを修正しなければならないのである。

最後に、過去の「教授法開発室だより」で指摘してきたが、学生ひとりひとりの学力を伸ばすためには、クラス編成そのものを刷新した教育も必要であろう。すなわち、従来までの学部・学科・コースを単位にして構成されるクラスだけではなく、学生の基礎学力に合わせたクラス編成や、自学自習を含めたりメディア教育のシステムの構築が有効であろう。その指針を得るためには、基礎学力調査とその他の学生のデータをリンクさせた分析が必要である。入学時から卒業時までの学生の学業成績や進路などのデータを収集し、基礎学力調査とリンクさせなければ、学生の学力実態と教育成果を把握することはできない。現行のB社試験は要領よく就職試験をパスするための模擬試験であると考えた方がよい。しかし、受験テクニックが大きく反映するデータを分析してもあまり意味はない。学生の学力をより正確に把握し、自学自習システムを含めたサポート体制とカリキュラム編成の方針に資する基礎学力調査のデータが必要になろう。

全国的に1回生から3回生にかけて基礎学力を身に付けさせることが大学教育の課題になっている。入学時の基礎学力を測定し、自学自習の資料にするとともに、大学のカリキュ

ラム編成に役立てることが求められている。本学では、1回生と3回生に同一の試験を実施しており、大学教育の成果を測定する仕組みができています。ただし、本来の目的が達成されていない。その原因は基礎学力調査に就職対策用の業者試験を代用してきたこと、また基礎学力調査の結果を生かす授業がなかったことがあげられる。学生の自学自習の奨励とともに初年次教育の見直しが必要ならば、学生の基礎学力を伸ばすことは難しいであろう。また、理工系の大学と同様、文系の大学でもリメディアル教育を取り入れる時期にきているといえよう。

FD Review

授業了らへんト

授業アンケート

教授法開発室員 小林 隆

1. 授業アンケートの目的・内容・方法

本学の授業アンケート調査は2001年度から始まり、2007年度で7年目を迎えた。当初の授業アンケートはFDの創生期にあたり、「とにかくアンケートを」という風潮の中で始まった。毎年、教授法開発室会議において授業アンケートの目的・内容・方法等が議論されてきたが、その結果、2007年度は以下のような目的・内容・方法で授業アンケートを行うこととなった。

【目的】

- アンケート調査の目的は教員の評価にあるのではなく、あくまでも学生の理解力・能力を高める（ひいては大学のさらなる質的向上の）ための授業の改善に役立てることにある。
- 評価と命名されることからくる誤解をなくするために「授業アンケート」とする。

【内容】

- 授業アンケートの設問は以下に示す通りである。

1. あなた自身のこの授業への取り組みについて

- (1) 1回の授業につき、事前事後の学習（予習・復習）をどのくらいしましたか？
- (2) 熱心に教員の話聞いた。
- (3) これまでのこの授業での欠席回数は何回ですか。
- (4) 授業内容が分からなかった時、どのように解決していますか？
- (5) 履修理由について。

2. 講義概要（シラバス）について

- (1) 講義概要は、この授業を履修する上で参考になった。
- (2) この授業のテーマや目的が明確に示されている。
- (3) 授業内容は、講義概要に対応していた。

3. 授業について

- (1) 教員は授業を妨げる行為（私語・携帯・遅刻等）に対しては、適切な対処してくれた。
- (2) 板書やパワーポイントは見やすかった。
- (3) 補助教材（レジュメ・ビデオ・e-learning等）が効果的に使われていた。
- (4) 授業に工夫があり、熱意が感じられた。
- (5) 学生とのコミュニケーション（質問・討論含む）への配慮があった。

- (6) 教員は、学生の反応や理解を見ながら授業を進めた。
- (7) 授業の開始・終了時間は守られていた。
- (8) 授業の内容がよく理解できた。
- (9) 履修して興味が増した。
- (10) 総合的に判断して、この授業に満足している。

4. 自由記述

- (1) この授業の良かった点があれば記入してください。
- (2) この授業の改善点があれば記入してください。

【方法】

- アンケート調査対象は、教員（専任・非常勤）の担当科目1科目以上とする。
- アンケート調査の結果がその Semester 内で学生に報告できるようにするために、調査時期を調整する。
- 集計・分析結果を教員に返し、授業改善に役立てていただく。

【その他】

以下の点については、2006年度の授業アンケートに関する報告書で提言されていたが、本年度は実施できなかった。

- 学長・副学長・学部長に対し大学運営会議を通じてアンケート調査の重要性を訴え、その実施にむけて陣頭に立つことを要請する。
- アンケート調査を含めて授業の改善問題が教授会の議題として取り上げられ、教員相互の教育に対する研鑽をつめるようにする。
- 大学院の授業改善に対してもアンケート調査を有効に活用する。
- アンケート調査を Web 上で実施するための予備的調査を行う。
- アンケート調査の目的は教員の評価にあるのではなく、あくまでも授業の改善につなげることにある。ただ将来的にはその改善の「努力」を教員の評価につなげるものとして位置づけるのがのぞましい。

2. 授業アンケート調査の集計・分析・考察

授業アンケート調査の集計・分析・考察は、以下の点に絞って行う。授業アンケートの設問が2006年度とほぼ同様で集計結果も大差がないため、分析の詳細は vol.2 を参考にされたい。

- (1) 授業アンケートの実施状況
- (2) 授業アンケートの結果（全体）
- (3) 総括

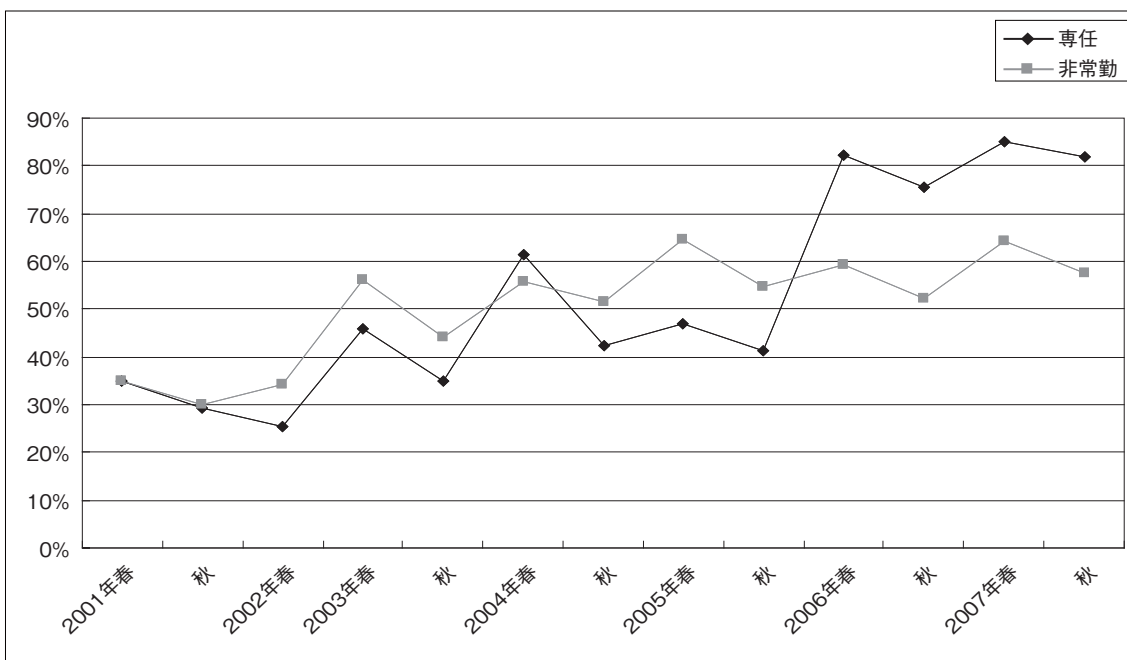
(1) 授業アンケートの実施状況

【表1：授業アンケート実施者数・実施率の推移】

		2001年春	秋	2002年春	2003年春	秋	2004年春	秋
専任	実施者数	59	49	44	77	59	107	74
	総数	169	168	173	168	168	174	174
	実施率	34.9%	29.2%	25.4%	45.8%	35.1%	61.5%	42.5%
非常勤	実施者数	151	130	181	308	242	300	277
	総数	434	434	527	550	550	538	538
	実施率	34.8%	30.0%	34.3%	56.0%	44.0%	55.8%	51.5%

2005年春	秋	2006年春	秋	2007年春	秋
87	76	140	129	153	146
185	184	170	171	180	178
47.0%	41.3%	82.4%	75.4%	85.0%	82.0%
321	294	352	309	311	277
496	538	593	593	485	481
64.7%	54.6%	59.4%	52.1%	64.1%	57.6%

総数：研修者・実習指導講師・未開講者を除いた数



【表2：2007年度授業アンケート実施状況（専任教員）】

	春学期			秋学期		
	教員数	実施者数	実施率	教員数	実施者数	実施率
人文学科	49	40	81.6%	49	39	79.6%
中国学科	7	6	85.7%	7	6	85.7%
英米学科	9	9	100.0%	9	9	100.0%
文学部	65	55	84.6%	65	54	83.1%
教育学科	30	26	86.7%	31	26	83.9%
臨床心理学科	10	5	50.0%	10	5	50.0%
教育学部	40	31	77.5%	41	31	75.6%
現代社会学科	17	15	88.2%	17	14	82.4%
公共政策学科	15	14	93.3%	15	12	80.0%
社会学部	32	29	90.6%	32	26	81.3%
社会福祉学科	27	25	92.6%	27	23	85.2%
社会福祉学部	27	25	92.6%	27	23	85.2%
理学療法学科	5	5	100.0%	5	5	100.0%
作業療法学科	7	7	100.0%	6	6	100.0%
保健医療技術学部	12	12	100.0%	11	11	100.0%
外国人契約教員	4	1	25.0%	2	1	50.0%
計	180	153	85.0%	178	146	82.0%

※専任総数 209 名のうち以下の人数を除く

研修期間 12 名
 実習指導講師 15 名
 未開講者（保健医療技術）2 名
 計 29 名

実施率は総数に対する割合で算出

※専任総数 207 名のうち以下の人数を除く

研修期間 11 名
 実習指導講師 15 名
 未開講者（保健医療技術）3 名
 計 29 名

※実施率は総数に対する割合で算出

専任教員の実施率は、授業アンケート実施初年度の 2001 年度では 30 パーセント前後であった。一時、25 パーセントほどに落ち込んだが、2006 年度より 8 割を超す実施率となっている。特に、2007 年度の「英米学科」「理学療法学科」「作業療法学科」の実施率は 100 パーセントであり、先生方の意識の高さがうかがえる。「社会学部」「社会福祉学部」の実施率も 9 割を超えている。このような高い実施率の要因は、先生方の授業改善に対する意識の向上と、授業アンケートが先生方に認知されてきた結果と考えられよう。今後とも、先生方が学生の学習状況をつかむなかで、ご自身の授業改善に生かされるような、質の充実した授業アンケートを提供していきたい。

また、教授会での話題提供や学部・学科内における授業研究会などの開催を呼びかけるなどの方策も考えられる。いずれにしても、学生の学習効果をあげるために、先生方にも意欲をもって取り組んでいただけるような実質的・現実的な取り組みが求められる。

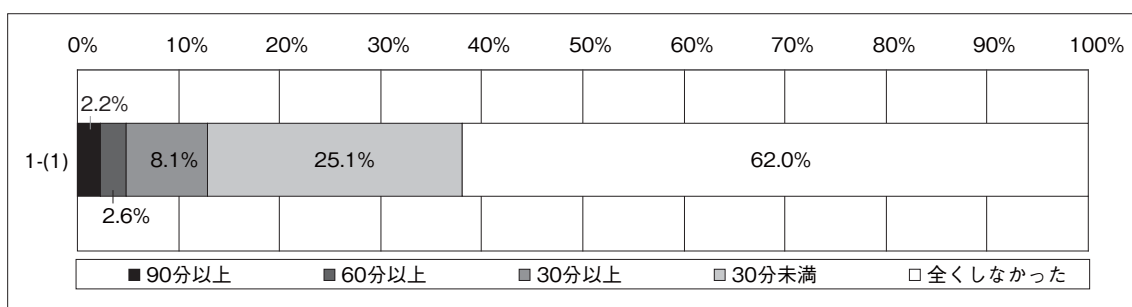
専任教員の実施率に比べ、非常勤講師の実施率があまり伸びていない。2008 年度は、非常勤講師の先生方への授業アンケート調査に対する周知も徹底していきたい。また、通信教育課程にも授業アンケートを拡大していく方向性を考えれば、非常勤講師の先生方への働きかけを具体的に考えていく必要もあろう。

(2) 授業アンケートの結果（全体）

1. あなた自身のこの授業への取り組みについて

(1) 1回の授業につき、事前事後の学習（予習・復習）をどのくらいしましたか？

90分以上	60分以上	30分以上	30分未満	全くしなかった	合計
995	1,182	3,620	11,275	27,839	44,911

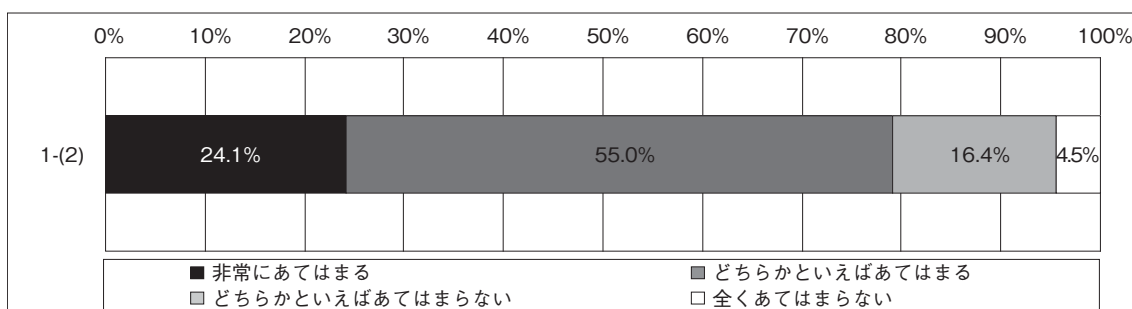


依然として、事前・事後の学習状況が芳しくない。「全くしなかった」という学生が全体の6割を占める。また、他の項目で「講義概要を読んでいない」学生が35パーセントを占めていることから、授業に何の準備もせずに臨み、授業を受けっぱなしで事後の復習もしていない学生が多数いる状況がうかがわれる。知識や技能の定着という点で大変憂慮する結果である。課題の提示などをして学生の学習習慣を今一度確立すると共に、学習が毎回の授業だけで完結するのではなく、発展的に広がっていくような工夫をすることが求められる。また、授業における動機付けが新たな学習に発展していく働きかけもしたい。例えば、e-learningを活用して、授業後も学生同士が意見を交流させる場を設けたり、疑問や不明な点を質問できる環境を整えていくのはどうであろうか。

もちろん、1回の授業につき90分以上の学習をしている学生も少なからずいる。これらの学生の事前・事後学習が課題によるものなのか関心・意欲によるものなのかにも興味がある。クロス集計の結果、学習時間が長いほど授業に対する満足度が高く、短いほど満足度が低かった。これは、学生が必ずしも「楽勝科目」に流れているわけではなく、真に知的欲求を満たし、技能の向上を目指したいとの思いをもっているものと考えられる。

(2) 熱心に教員の話聞いた。

非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	合計
10,788	24,577	7,330	2,000	44,695



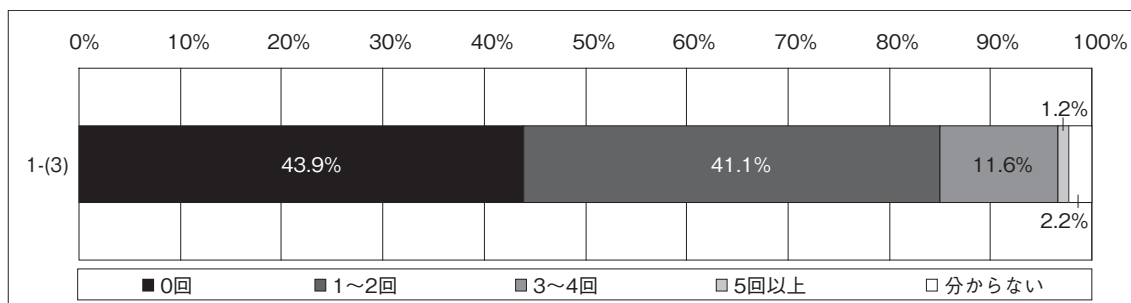
事前・事後の学習状況に比べ、授業中の取り組みは熱心な学生が多い。「非常にあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」をあわせると8割にのぼる。ただ、この結果は、学生が与えられた枠組みの中で取り組むことに慣れているとも解釈できる。設問(1)とも関連させて、主体的な取り組みのできる学生の育成を目指したい。

「全くあてはまらない」の学生が4.5パーセントいることも気になる。事前・事後の学習をせず、授業中も無気力な学生なのであろうか。これらの学生には、キャリア教育とも関連させて将来に向けての見通しを具体的に持たせる働きかけをしたい。また、学生生活上の問題とも関連している場合が考えられるので、学生部との連携も必要であろう。

例年、「学生カルテ」を作成し、ひとりひとりの学生の情報を学内で共有して学生生活・学習・進路を総合的に支援していこうという議論がある。個人情報保護の問題もあるが、前向きに考えていただきたい。また、各学部・学科での会議の折に学生の様子を情報交換する場を設けるなどして、気になる学生の支援にあたっていくことも考えられる。

(3) これまでのこの授業での欠席回数は何回ですか。

0回	1～2回	3～4回	5回以上	分からない	合計
19,736	18,462	5,196	520	999	44,913

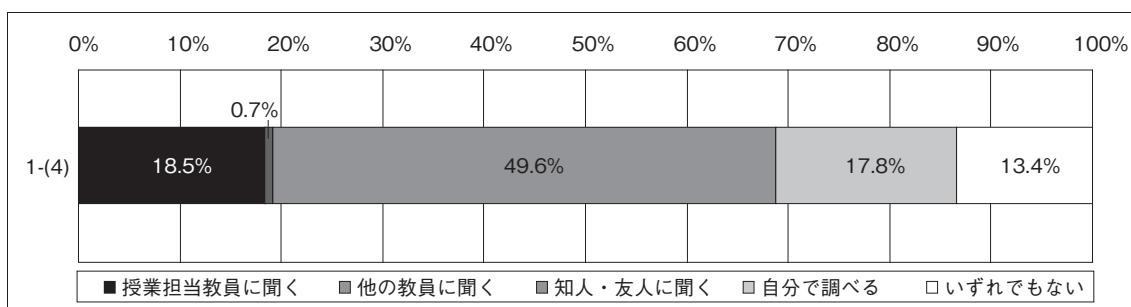


欠席が2回以内の学生が全体の8割を超える。設問(2)同様、授業自体には大変真面目に取り組んでいる学生の様子があがえる。ただ、これら欠席回数にあらわれないものとして、現場実習やインターンシップ系の科目履修による授業への欠席があげられる。例えば4週間の教育実習であれば4回の欠席となり、科目全体の約4分の1の欠席となる。他の学生とは別に課題を与えるなどして対応しているケースが多いが、履修単位数やカリキュラム編成の折に考慮していくべき課題である。

そして、ここでも気になるのは「5回以上」の欠席者が少なからずいることである。(2)で前述したような、総合的な支援を考えていきたい。

(4) 授業内容が分からなかった時、どのように解決していましたか？

授業担当教員に聞く	他の教員に聞く	知人・友人に聞く	自分で調べる	いずれでもない	合計
8,209	327	21,989	7,894	5,958	44,377



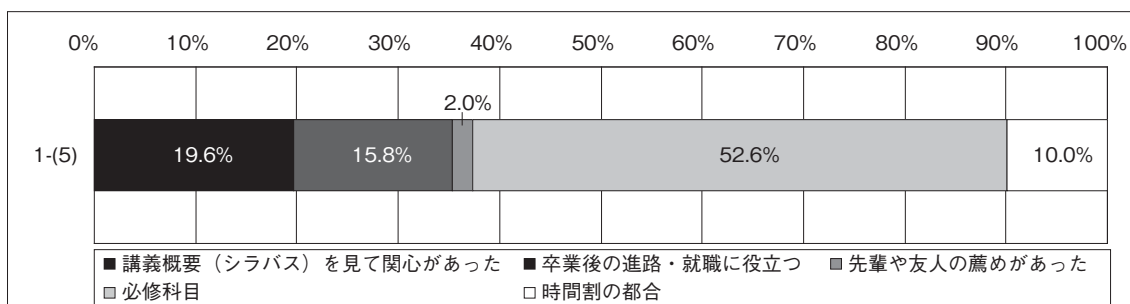
ここでは、「授業担当教員に聞く」よりも「知人・友人に聞く」が圧倒的に多く、全体の約半数を占めている。授業担当教員に聞く雰囲気が出ていないという解釈よりも、私は、学生が知人・友人とのネットワークを生かした、自立した学習をしているものと解釈したい。授業は、単なる教員の知識の切り売りではなく、教員・学生相互が繋がりがあいい、お互いに意見や考えを交流する場としたい。そういう意味では、「授業担当教員に聞く」「知

人・友人に聞く」「自分で調べる」が同数くらいになるのが理想ではなからうか。

ただ、クロス集計の結果、どの学部においても「授業担当教員に聞く」ことが多い授業は理解度や満足度が高い。やはり学生の学習効果の向上は、教員と学生のコミュニケーションに鍵があるものと考えられる。

(5) 履修理由について。

講義概要(シラバス)を見て関心があった	卒業後の進路・就職に役立つ	先輩や友人の薦めがあった	必修科目	時間割の都合	合計
8,743	7,019	903	23,439	4,441	44,545

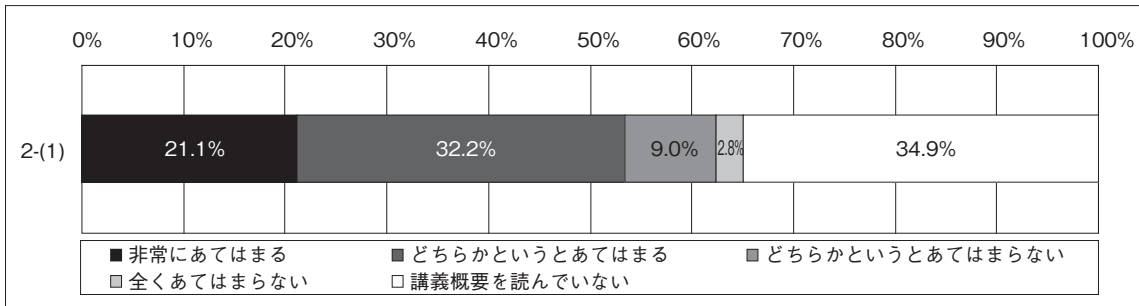


特に目を引くのが、「先輩や友人の薦めがあった」の割合が極端に少ないことである。これは、学生ひとりひとりが、他の学生の意見に左右されることなく、自立して授業を選択して履修している様子をあらわしている。「必修科目」(52.6パーセント)が多いのももちろんであるが、「講義概要(シラバス)を見て関心があった」(19.6パーセント)、「卒業後の進路・就職に役立つ」(15.8パーセント)など、自身の興味・関心や将来の進路を見通して履修しているようである。クロス集計によると、やはりそのような科目は理解度や満足度が高い結果となっている。ここでもキャリア教育の重要性が見て取れるのではないだろうか。

2. 講義概要（シラバス）について

(1) 講義概要は、この授業を履修する上で参考になった。

非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	講義概要を読んでいない	合計
9,451	14,426	4,010	1,237	15,622	44,746

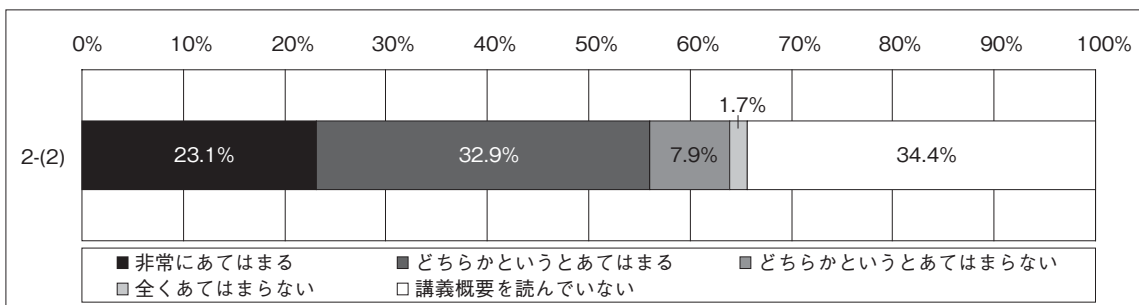


「非常にあてはまる」（21.1パーセント）、「どちらかといえばあてはまる」（32.2パーセント）をあわせると全体の半数をこえ、講義概要が科目履修の際に一定の役割を果たしていることがわかる。ただ、例年、新入生や編入生の履修ガイダンスが入学式から間もない時期に設定されているので、講義概要を読んでいる時間的なゆとりがない。この点を何らかの形で改善していきたい。

「講義概要を読んでいない」学生が35パーセントにのぼる。講義概要には授業の目的や評価基準、各回の計画などが掲載されている。少なくとも、事前に読んで授業に参加させたい。履修ガイダンスのあり方や、Web履修登録をWeb上の講義概要とリンクさせるなどの工夫が考えられる。

(2) この授業のテーマや目的が明確に示されている。

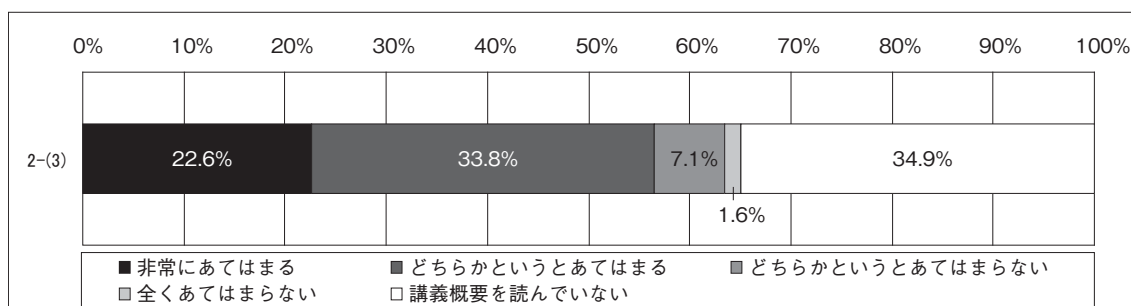
非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	講義概要を読んでいない	合計
10,331	14,721	3,510	770	15,369	44,701



「非常にあてはまる」(23.1パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(32.9パーセント)と授業のテーマや目的が明確に示されている科目が全体の半数をこえている。一方、「まったくあてはまらない」は1.7パーセントとごく少数であることから、講義概要を事前に読んで授業に臨めば、授業のおおよその内容の見当が付き、学習効果が更に向上するものと考えられる。その意味からすると、「講義概要を読んでいない」学生が3割をこえているのは大変残念である。(1)でも述べたように、履修ガイダンスのあり方や、Web履修登録をWeb上の講義概要とリンクさせるなどの工夫をしていく必要がある。

(3) 授業内容は、講義概要に対応していた。

非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	講義概要を読んでいない	合計
10,100	15,093	3,152	720	15,576	44,641



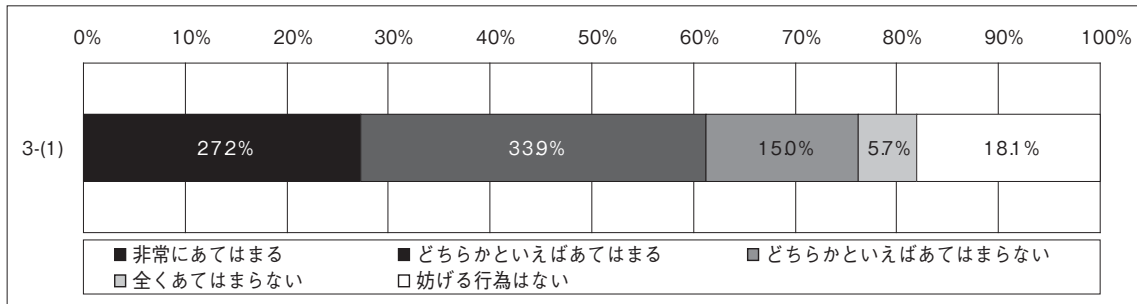
「非常にあてはまる」(2.6パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(33.8パーセント)と講義概要が授業内容と対応している科目が全体の半数をこえている。

「講義概要を読んでいない」(34.9パーセント)学生を除くと、ほとんどの授業で講義概要と授業内容が一致している。講義概要は、いわば科目に関する学生と教員との契約である。先生方のご尽力に感謝したい。

3. 授業について

(1) 教員は授業を妨げる行為（私語・携帯・遅刻等）に対しては、適切な対処をしてくれた。

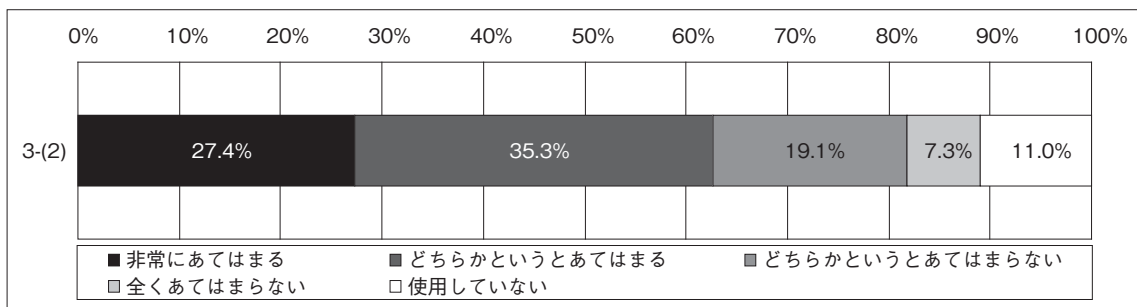
非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	妨げる行為はない	合計
12,217	15,218	6,747	2,559	8,093	44,834



「非常にあてはまる」(27.2パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(33.9パーセント)、「妨げる行為はない」(18.1パーセント)をあわせると、約8割の授業で秩序ある学習環境づくりがなされている。ただ、このような学習環境づくりは学生数や教室の規模によって労力に差が出てくる。やはり、多人数による大教室での授業では、学習の環境づくりに多くの労力をはらわれている先生方が多いのではなかろうか。また、授業を妨げる行為に対して教員が適切な処理をするのと同時に、学生が自身の責任において目的を持って授業に参加していくという意識づくりをしていきたい。「講義概要を読む」→「事前学習をする」→「目的を持って整然と授業に臨む」→「事後学習をする」。これは理想であろうか。教員の側も大教室であるから講義式の斉授業という固定観念から脱する必要があろう。

(2) 板書やパワーポイントは見やすかった。

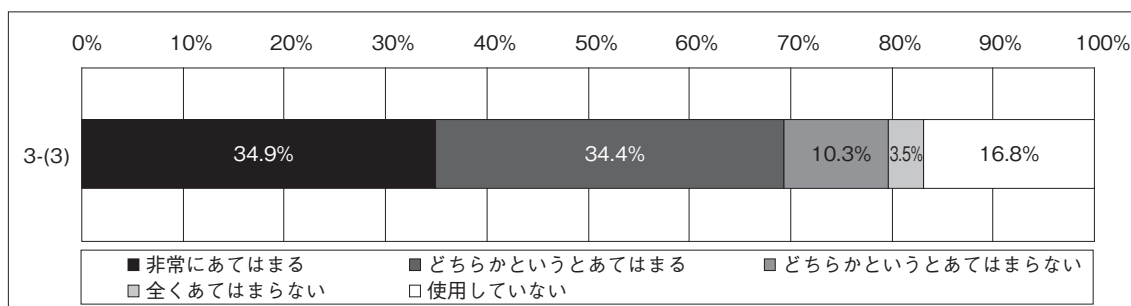
非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	使用していない	合計
12,242	15,806	8,537	3,248	4,920	44,753



「非常にあてはまる」(27.4パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(35.3パーセント)をあわせると全体の6割をこえる。ただ、他の質問項目に比べると「どちらかといえばあてはまらない」(19.1パーセント)、「全くあてはまらない」(7.3パーセント)の割合が高く、学生の視点からすると改善に対する要望が多い項目であるとも解釈できる。板書であれば、例えば「丁寧に読める字で書いてもらいたい」や「黒板の構成を考えてもらいたい」「たくさん、しかも早いスピードで書いていくので、ノートを取ることで精一杯」などの声が聞こえる。90分の授業で適量と思われる板書を意図的・計画的に構成していくことが求められる。パワーポイントであれば、例えば「字が小さくて見えない」「文字ばかりで理解しにくい」「画面が変わるスピードが速く、ついていけない」「画面の資料をプリントアウトして配布して欲しい」などの声が聞こえる。以前、パワーポイント万能論により、とにかくパワーポイントを使えば良い授業ができるとの誤解が生じた時期があるようにも思う。パワーポイントもその長所・短所を良く理解し、意図的・計画的に使用していきたいものである。いずれにしても、このような視覚教材は学生の学習効果をあげていくために有効な手段ではある。なお、集計において、各学部間の大きな差異は認められなかった。

(3) 補助教材（レジュメ・ビデオ・e-learning等）が効果的に使われていた。

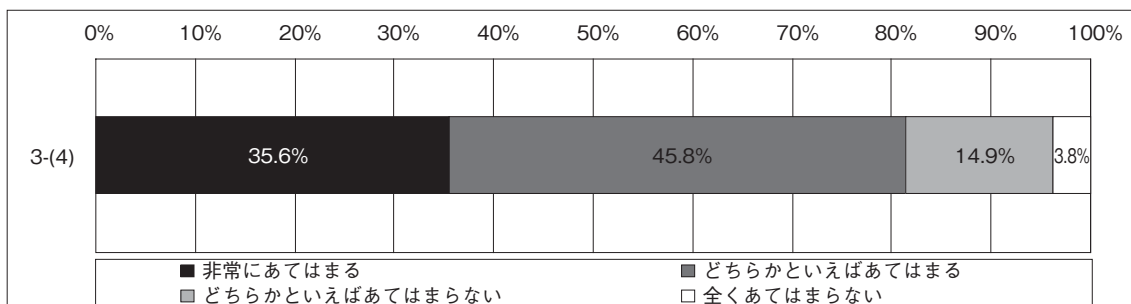
非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	使用していない	合計
15,622	15,409	4,600	1,573	7,526	44,730



「非常にあてはまる」(34.9パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(34.4パーセント)をあわせると、全体の約7割にのぼる。つまりここからは、先生方がレジュメ・ビデオ等の補助教材を工夫して使用している様子がうかがえる。e-learningには、主として「教材箱」「掲示板」「フォーラム」などの機能がある。学生の学習状況を把握するとともに、授業後も学生の発展的な学習を支援する仕組みとして使用していきたい。クロス集計によると、このような補助教材を使用した授業において、学生の理解度や満足度が高い傾向がある。なお、集計において教育学部と社会福祉学部で「非常にあてはまる」の割合が多かった。

(4) 授業に工夫があり、熱意が感じられた。

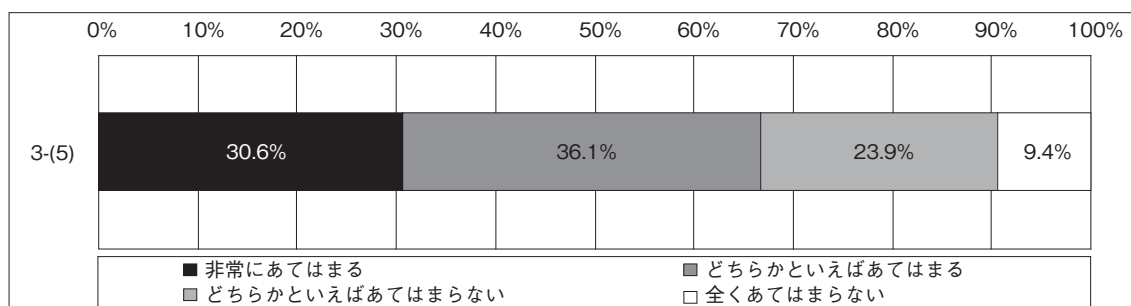
非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	合計
15,896	20,464	6,637	1,688	44,685



「非常にあてはまる」(35.6パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(45.8パーセント)をあわせると、全体の約8割にのぼる。先生方の熱意が学生に届いていることがデータからわかる。クロス集計によると、授業の理解度や満足度が高い学生ほど先生方の熱意を感じている。また、特に保健医療技術学部の学生が先生方の熱意を感じている。これは、各先生方のご尽力によるものと同時に、少人数によるアットホームな学部運営にも要因があるものと解釈できる。学生の学習効果をあげるためには、授業の技術に加えて、やはり人間的な暖かさが必要にも思う。

(5) 学生とのコミュニケーション（質問・討論含む）への配慮があった。

非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	合計
13,713	16,156	10,698	4,199	44,766

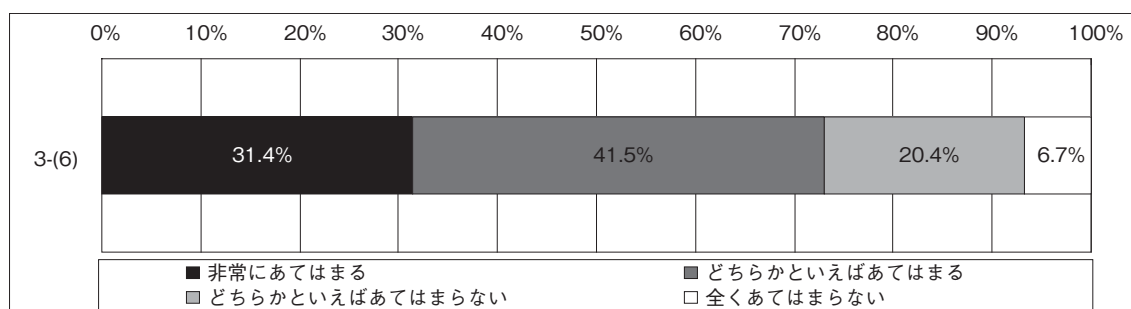


「非常にあてはまる」(30.6パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(36.1パーセント)をあわせると、全体の66パーセントである。半数以上の学生があてはまると答えているが、「(2) 板書やパワーポイントは見やすかった。」に次いで学生が改善を求めている項目とも解釈できる。文学部・社会学部は昨年が続いて40パーセント台、教育学部と

社会福祉学部が60パーセント台、保健医療技術学部が70パーセント近くとなっている。これは、保健医療技術学部では少人数による実習系の授業が多いことにもよると考えられるが、先述のように、大教室であるから講義式の一斉授業という固定観念から脱する必要もあろう。授業は知識や技能の伝達という側面もあるが、お互いの意見や考えを交流し、本当の「わかった」に深めていく場でもある。なお、クロス集計によると、学生とのコミュニケーション（質問・討論含む）への配慮があった授業ほど、学生の理解度や満足度が高く、学習効果もあがっている。

(6) 教員は、学生の反応や理解を見ながら授業を進めた。

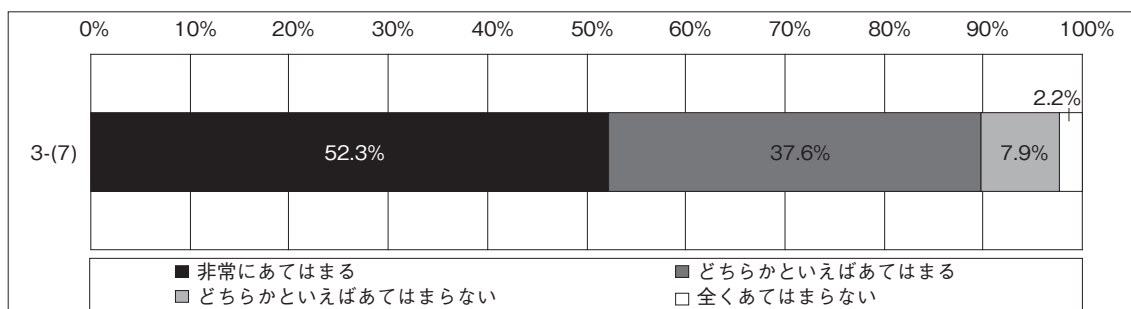
非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	合計
14,071	18,607	9,115	2,997	44,790



「非常にあてはまる」(31.4パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(41.5パーセント)をあわせると、全体の7割をこえる。逆に3割の学生が「あてはまらない」と答えており、教員の一方的な授業がまだまだあることをあらわしている。クロス集計によると「あてはまらない」授業では、学生の理解度や満足度が低い。授業の質を下げる必要はないが、学生の理解度や実態に即した授業をしていかないと学習効果もあがっていない。教員側の「このレベルまで学生を引き上げたい」という熱意を学生の学習効果につなげるためには、学生の反応を見ながら授業に様々な工夫を加えていく必要がある。

(7) 授業の開始・終了時間は守られていた。

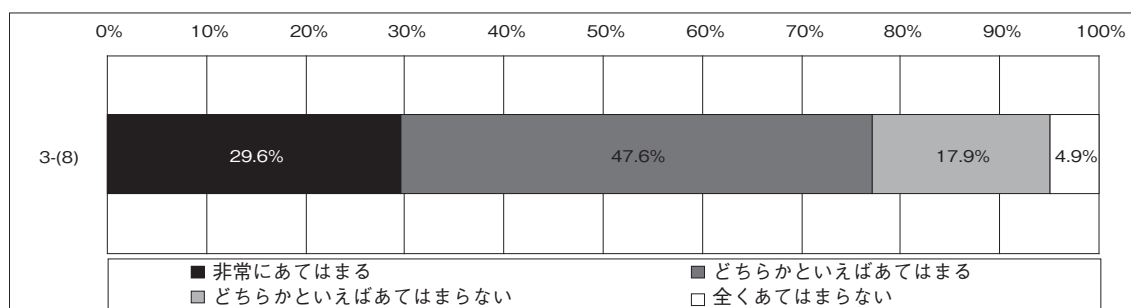
非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	合計
23,414	16,841	3,541	1,005	44,801



「非常にあてはまる」(52.3パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(37.6パーセント)をあわせると、全体の約9割をしめる高い数値である。ほとんどの先生方が多忙な中、時間を守って授業運営なさっている様子があらわれている。

(8) 授業の内容がよく理解できた。

非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	合計
13,261	21,319	8,014	2,197	44,791



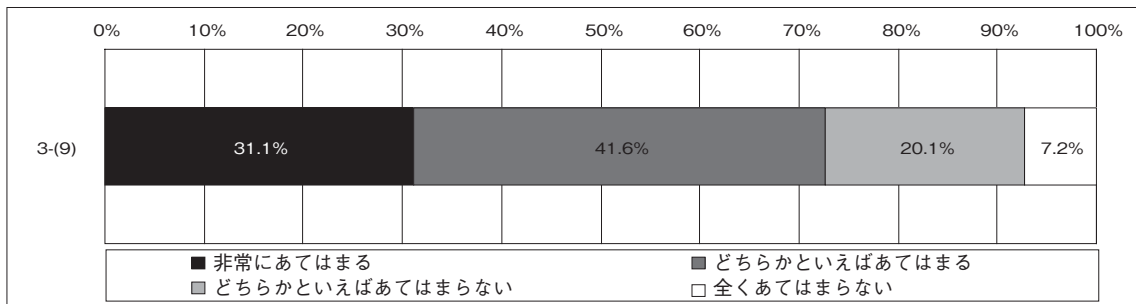
「非常にあてはまる」(29.6パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(47.6パーセント)をあわせると、全体の約8割近くにのぼる。ただ、「非常にあてはまる」が3割を切っている結果は少し気にかかる。

クロス集計からは、「講義概要(シラバス)を見て関心があった」「卒業後の進路・就職に役立つ」など、自身の興味・関心や将来の進路を見通して履修している科目は、理解度が高いことが読み取れる。このような科目は、免許・資格に直結する教育学部・社会福祉学部・保健医療技術学部によく見られる。学問や科学の本質を追究する面白さと重要性を学生に伝えるとともに、文学部や社会学部も含めて、全学的なキャリア教育の必要性が見

て取れるのではないだろうか。また、例えば1時間目の授業で、本科目を学ぶ意義を学生とともに考えるなどして、授業に対する動機付けをしていくことも考えられる。このように、学生が学ぶ意義を見出して、目的を持って授業に臨むような仕掛けをしていきたい。

(9) 履修して興味が増した。

非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	合計
13,911	18,633	8,975	3,231	44,750



「非常にあてはまる」(31.1パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(41.6パーセント)をあわせると、全体の7割をこえる。学生には、授業だけで学習を完結することなく、以後も継続して学び続けていてもらいたい。興味が増すためには幾つかの要素があげられる。例えば、

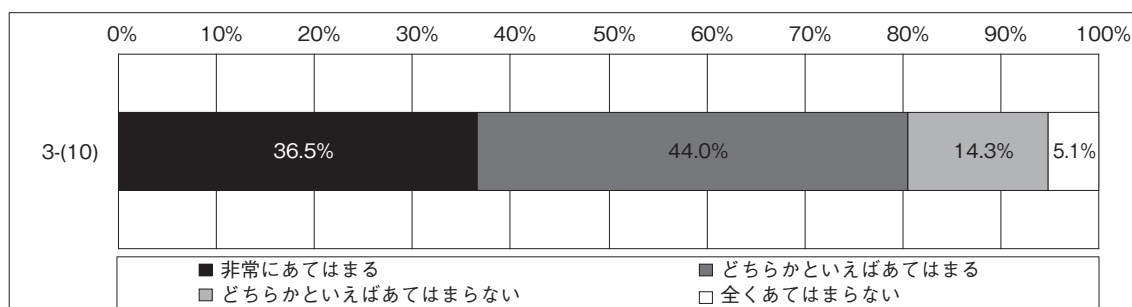
- ①わかったという実感がもてたとき
- ②様々な考え方にふれたとき
- ③更にわからないことがでてきたとき
- ④今までの概念を覆されたとき
- ⑤本質を追究する面白さに気づいたとき
- ⑥自身の生き方に影響を与えると実感できたとき

があげられよう。学生が「あてはまる」と回答した授業には、先生方の授業運営に対する熱意と工夫の結果、これらの要素が含まれていたものと思われる。

また、クロス集計からは、(8)の設問と同様に、「講義概要(シラバス)を見て関心があった」「卒業後の進路・就職に役立つ」など、自身の興味・関心や将来の進路を見通して履修している科目は、授業後にも興味・関心が高まっていることが読み取れる。

(10) 総合的に判断して、この授業に満足している。

非常にあてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	全くあてはまらない	合計
16,355	19,708	6,423	2,285	44,771



「非常にあてはまる」(36.5パーセント)、「どちらかといえばあてはまる」(44.0パーセント)をあわせると、全体の約8割が満足している。昨年度の同様の設問では、約75パーセントの学生が「あてはまる」と回答していたことを考えると、総合的に見て学生の授業に対する満足度は向上している。このような結果は、先生方の授業改善に対する熱意と工夫の賜であり、全学的なFD活動が根付いてきた証左である。クロス集計を見ても、当然ながら学生の授業に対する満足度は、自身の目的意識の有無と教員の授業に対する熱意と工夫に比例している。

(3) 総括

以上のような集計・分析・考察から、学生の学習効果を更にあげていくためには、以下の項目について今後も考え続けていく必要がある。

①学生の学習環境に関すること

- ・授業の適正人数と教室の適正規模
- ・教室設備や備品

②学生の学習に対する動機づけ

- ・キャリア教育
- ・「学生カルテ」による全学的な学生支援

③教員による授業充実

- ・授業アンケートによる学生の学習状況の把握と授業改善の視点の発見
- ・公開授業や学部・学科における授業研究会

3. 授業アンケート調査の課題と 2008 年度に向けての提案

- ① 2006・7 年度に行った「授業アンケート」は、「授業評価アンケート」から「評価」を外したものの、その中身は依然として「授業評価」に関するものが混在した。



「授業評価」が主目的ではなく、まずは「学生の学習の状況」を把握し、その中で効果的な教授法のあり方を分析・考察・提案する手がかりとしての情報提供・情報共有をすることを目的とする。

- ② 学生の学習効果をあげるためには様々な授業方法・形態があるが、これまでの授業アンケートでは、「良い」あるいは「理想とされる」授業方法・形態に固定化が見られたこと。例えば、パワーポイントの万能観など。



学生の学習効果をあげるための様々な授業方法・形態を類型化し、その効果的な運用の仕方に関する情報提供・情報共有をする。

- ③ 学部・学科や授業形態によって、同一の設問では限界があるのではないかと指摘。



今後は、学部・学科別の授業アンケートも考えられるであろう。

- ④ 大学院や通信教育課程にも授業アンケートを拡大する。



大学院委員会や通信教育委員会とも連携し、全学的な FD 活動に取り組んでいく。

以上のような考察の結果、2008 年度の授業アンケートの設題として、次ページからのように提案した。

【2008 年度 授業アンケート】

●本アンケートは、学生の皆さんの「学習の状況」を測るアンケートです。以下の設問について、あてはまるものを選び回答して下さい。

1. あなた自身の取り組みについて

(1) 履修理由について、あてはまるものを全て答えて下さい。

- ①講義概要（シラバス）を読んで関心があった ②卒業後の進路・就職に役立つ
③先輩や友人の薦めがあった ④必修科目 ⑤時間割の都合

(2) これまでのこの授業での欠席回数は何回ですか。

- ①0回 ②1～2回 ③3～4回 ④5回以上 ⑤分からない

(3) 授業を妨げる行為（私語・携帯・遅刻・途中退室等）はしませんでしたか。

- ①しなかった ②時々していた ③常にしていた

(4) 1回の授業につき、事前事後の学習（予習・復習）をどのくらいしましたか。

- ①90分以上 ②60分以上 ③30分以上 ④30分未満 ⑤全くしなかった

(5) 熱心に授業に取り組むことができましたか。

- ①できた ②どちらかといえばできた
③どちらかといえばできなかった ④できなかった

(6) 授業内容を理解することはできましたか。

- ①できた ②どちらかといえばできた
③どちらかといえばできなかった ④できなかった

2. 授業について

(1) 授業（内容）の難易度

- ①かなり難しかった ②少し難しかった ③自分に合っていた
④少し簡単だった ⑤かなり簡単だった

(2) 授業の進度

- ①かなり速かった ②少し速かった ③自分に合っていた
④少し遅かった ⑤かなり遅かった

佛 教 大 学 授 業 ア ン ケ ー ト

科 目 名	曜 日	講 時
-------	-----	-----

※このアンケートで得られた情報は、授業改善のために用いられ、それ以外の目的に利用しません。
※学科・回生は必ず記入してください。

●あなたの所属について記入してください。

- 学科 ① 人文 ② 中国 ③ 英米 ④ 教育 ⑤ 臨床 ⑥ 現社 ⑦ 公共 ⑧ 福祉
⑨ 理学 ⑩ 作業 ⑪ 別科 ⑫ その他

※2003年度以前の入学者は以下の①～⑫で回答してください。

- | | |
|----|--|
| 学科 | ① 仏教 ② 史 ③ 日文 ④ 中文 ⑤ 英文 ⑥ 教育 ⑦ 生涯 ⑧ 臨床
⑨ 社会 ⑩ 応社 ⑪ 福祉 ⑫ 健康 ⑬ 別科 ⑭ その他 |
| 回生 | ① 1回生 ② 2回生 ③ 3回生 ④ 4回生 ⑤ 5回生以上
⑥ 大学院(修士課程) ⑦ 大学院(博士後期課程) ⑧ その他 |

●以下の設問について最もあてはまるものを1つ選び回答してください。

1. あなたの自身のこの授業への取り組みについて

- (1) 1回の授業につき、事前事後の学習(予習・復習)をどのくらい行いましたか?
 ① 90分以上 ② 60分以上 ③ 30分以上 ④ 30分未満 ⑤ 全くしなかった
- (2) 熱心に教員の話を聞いた。
 ① 非常にあてはまる ② どちらかといえばあてはまる
 ③ どちらかといえばあてはまらない ④ 全くあてはまらない
- (3) これまでのこの授業での欠席回数は何回ですか。
 ① 0回 ② 1～2回 ③ 3～4回 ④ 5回以上 ⑤ 分からない
- (4) 授業内容が分からなかった時、どのように解決していますか?
 ① 授業担当教員に聞く ② 他の教員に聞く ③ 知人・友人に聞く
 ④ 自分で調べる ⑤ いずれでもない
- (5) 履修理由について。
 ① 講義概要(シラバス)を見て関心があった ② 卒業後の進路・就職に役立つ
 ③ 先輩や友人の薦めがあった ④ 必修科目 ⑤ 時間割の都合

●以下の設問は、次の基準に従って回答してください。

- ④ 非常にあてはまる ⑤ どちらかといえばあてはまる
 ⑥ どちらかといえばあてはまらない ⑦ 全くあてはまらない

2. 講義概要(シラバス)について(講義概要を読んでいない人は⑥を選択してください)

- (1) 講義概要は、この授業を履修する上で参考になった。 ① ② ③ ④ ⑤
 (2) この授業のテーマや目的が明確に示されている。 ① ② ③ ④ ⑤
 (3) 授業内容は、講義概要に対応していた。 ① ② ③ ④ ⑤

3. 授業について

- (1) 教員は授業を妨げる行為(私語・携帯電話・遅刻等)に対しては、適切な対応してくれた。
 (妨げる行為がない場合は⑥を選択してください) ① ② ③ ④ ⑤
 (2) 板書やパワーポイントは見やすかった。 ① ② ③ ④ ⑤
 (使用していない場合は⑥を選択してください)
 (3) 補助教材(レジュメ・ビデオ・e-learning等)が効果的に使われていた。
 (使用していない場合は⑥を選択してください) ① ② ③ ④ ⑤
 (4) 授業に工夫があり、熱意が感じられた。 ① ② ③ ④ ⑤
 (5) 学生とのコミュニケーション(質問・討論含む)への配慮があった。 ① ② ③ ④ ⑤
 (6) 教員は、学生の反応や理解を見ながら授業を進めた。 ① ② ③ ④ ⑤
 (7) 授業の開始・終了時間は守られていた。 ① ② ③ ④ ⑤
 (8) 授業の内容がよく理解できた。 ① ② ③ ④ ⑤
 (9) 履修して興味が増した。 ① ② ③ ④ ⑤
 (10) 総合的に判断して、この授業に満足している。 ① ② ③ ④ ⑤

4. 自由記述

- (1) この授業の良かった点があれば記入してください。

- (2) この授業の改善点があれば記入してください。

●ご協力ありがとうございました。●

FD Review

開業公衆授

授業公開

教授法開発室員 有田和臣

序

2007年度秋学期は、バラエティに富む曜日校時の授業を参観できるよう、春学期より大幅増の12の授業で授業公開にご協力頂いた。参観する際の選択の幅も広がり、多くの教員にご参加頂こうと積極的にアナウンスも行った。2007年度授業公開実施科目は、次の通りである。

〈2007年度春学期 授業公開実施科目一覧〉

担当教員	所属学科	実施日・講時	実施科目	受講者数	参観教員数
田中 典彦	人文学科	7月 3日・1講時	ブッタの教えH 1	156	5
中田 智恵海	社会福祉学科	7月 5日・2講時	セルフヘルプ論H	101	6
西之園 晴夫	教育学科	7月 6日・3講時	教育方法学H a	136	3
植村 善博	人文学科	7月 6日・5講時	自然地理学1 H	131	3
水谷 隆之	人文学科	7月 9日・4講時	近世文学講読1 H a	48	1
上田 道明	公共政策学科	7月10日・2講時	行政学H	47	6
マイケル・デービス	外国人契約教員	7月18日・3講時	Basic Communication 1 H 5	41	3

〈2007年度秋学期 授業公開実施科目一覧〉

担当教員	所属学科	実施日・講時	実施科目	受講者数	参観教員数
牧 剛史	臨床心理学科	12月 3日・1講時	臨床心理学2 A	76	2
笹田 教彰	人文学科	12月 4日・1講時	法然の生涯と思想A 1	157	3
的場 信樹	公共政策学科	12月 5日・2講時	経済学A 1	412	2
岡本 晴美	社会福祉学科	12月 6日・3講時	児童ケア論A	113	2
得丸 敬三	理学療法学科	12月 6日・3講時	福祉用具論A	39	1
山口 孝治	教育学科	12月10日・3講時	初等教育教科専門体育(小) A b	35	1
大束 貢生	現代社会学科	12月11日・2講時	男女共同参画社会論A	87	3
達富 洋二	教育学科	12月11日・4講時	初等国語科教育法A	58	2
林 俊光	社会福祉学科	12月12日・2講時	児童福祉論2 A a	132	3
持留 浩二	英米学科	12月13日・1講時	Intermediate Communication 2 A 29	39	2
満田 久義	公共政策学科	12月13日・3講時	環境と開発A	83	3
小林 隆	教育学科	12月13日・3講時	初等社会科教育法A	62	4

結果として、一つの授業あたりの平均参観者数は2, 3名、最高で6名となった。この参観者数をどう見るかは難しい問題である。参観者の多くは、授業公開を企画した教授法開発室室員なので、室員外教員の参観者は、各授業1名ないしゼロとなる。少数でも自発的に参観に来て頂いた教員がおられたのだから成功、と考えることもできる。参観者の大半を占める室員も、参観により得るところがあったらう。

しかし、授業能力の水準向上のためには、より多くの教員の参加が望ましいには違いない。さらに多くの教員に自発的に参加して頂けるような体制作りが当面の課題である。

授業公開を終了後、教授法開発室室長達富洋二氏の発案で、授業公開協力教員、および授業参観に来られた先生方をまじえて、勉強会を開催した。そこでは、大きく分けて2つの検討課題が浮上したように思う。以下、その2点を検討する。

1 「授業公開アンケート」を意味あるものにする

1.1 授業公開参観者アンケートのあるべき方向性

授業公開に参観に来られた先生方を対象に、「授業公開アンケート」への回答をお願いした。アンケート内容は次の通り。

- 1 本授業について
 - ・ 授業方法について
 - ・ 教具・教材・板書等について
 - ・ その他
- 2 授業公開の取り組みについて
 - ・ 役立った点について
 - ・ 授業公開をさらに発展させるためのご意見をお聞かせください。
- 3 その他

前年度のアンケートにあった、「この授業をみて自分の授業に役立つ点があったか」といった項目はなくなっている。「授業を見せて頂くのに、評価するような項目があるのは失礼で書きにくい」という声があったためである。その結果今回は、上のような「役立った点」や取り組み全体に対するアンケートという側面を前面に出すこととなった。しかし、アンケート結果に特に新味はなく、まだ改善の余地はある。

本来アンケートをとる理由は、授業公開の効果を確かめ、今後に生かすためであるはずだ。決して「出席のアリバイ作り、や、成果の演出、のためであってはならない。これは授業アンケートについても言える。アンケート結果が如何にその後を生かされるか、の道筋が作られていなければ、FD活動のアリバイ作り、つまり対外的な演出でしかない。

もちろん、対外的な演出は「必要」である。外から見えない地味で地道な努力をしても、たとえそれで学生の満足度は上がったとしても、外部評価が高まるとは限らない（その地味で地道な努力こそが、ゆくゆくは大学の外部評価をも高めるのだ、と筆者は信ずるが…）。そしてFD活動に関する外部評価を得ることは大学の存続にとって今や必須項目である。「外部」に分かりやすい成果を提示する「必要」があるのは事実である。つまり儀式としての、いわば「ふり」としてのFD活動も、それはそれで必要性がないわけではない。

しかし対外的な演出としてのみ行うFD活動（実情としてはそれが従来のFD活動の実態であったらう）の時期は過ぎた。入学する学生の学力低下、学力格差は年々問題化している。これまで大学教育の課題となることすら考えられなかった「入学前教育」「初年

次教育」「リメディアル（補習教育）」等を行はざるを得ない状況にある。「ふり」ではなく実質あるFD活動を行う「必要」に迫られている、というのが大学の現状である。

その「必要」を満たす方法、方向をあぶりだすためのアンケート項目を工夫しなければならない。

1.2 「歩み寄り」のノウハウをさぐるためのアンケート

知っていて当然と思われる知識についていちいち解説しなければ授業を理解できない学生にいらだつ場面も多くなっていることだろう。それでも、学生に知識欲がないわけではない。知識の輝きとは何か、学ぶにはどうすればいいか、皆目分からない学生に、少しだけ歩み寄ってあげることで、彼らの知識欲を目覚めさせられる場合がある。いったん知識欲を目覚めさせてあげることができれば、学生は自発的にその欲を追求するようになる。

そして多くの学生が学ぶためのノウハウを身につけていないのと同様、われわれ教員の多くも、そうした歩み寄りのためのノウハウを身につけていない。どうすれば、わからない学生に分からせ、学問に感動させることができるのか。そうした技術・ノウハウについて考えたこともなければ、当然、知ってもいない。

多くの教員にとって、そのようなことは今まで考える必要のなかった事柄だろう。しかし「今」は考えざるを得ない状況なのだ。やや極端な、そして皮肉な言い方をすれば、殿様商売をしている場合ではなくなった、ということだろう。

どうすれば、学生に歩み寄ることができるのか。われわれはその方法を学び、身につけざるを得ない状況にある。そうしなければ自身の研究生活の基盤が危うくなるからだ。本学のような宗教系大学も決して例外ではない。そうした方法を探り、共有化するために、授業公開、そして授業アンケートの質問項目はある。

マイクの使い方や板書の仕方等、案外ちょっとした工夫で、学生の理解度が上がる場合がある。そのちょっとした工夫で、われわれは生き延びることができる。だからその工夫のノウハウを探るためにアンケートによって授業の受け手の反応を調査するのだ。

その授業に何が必要か。何が不要か。なすべき工夫は何か。どの点を改善すべきか。どうすればより魅力的な内容になるのか。それらが明らかになれば、「歩み寄り」の方法が見えてくる。

1.3 「授業アンケート」との連動

「授業公開アンケート」と、学生を対象に実施している「授業アンケート」とは、教員が自らの授業のあり方を振り返り、反省するきっかけを作るべきものである点で、方向性を一にする。それならば両者は連動すべきものである。「授業アンケート」で学生からの視点、「授業公開アンケート」では教員からの視点で、授業がどう見られたかをモニタリングし、両者を総合して、有効な授業方法の開発に生かす、という道筋になる。

現在の「授業公開アンケート」項目に、もう少し教員独自の視点を生かした項目、例えば「授業を受ける学生の様子はどうであったか」「自分の授業と比べて学生の反応はどうであったか、その原因はどこにあると考えられるか」「自分の授業方法のどのような点を反省させられたか」といった項目が付加されても良いように思われる。

1.4 公開の「仕方」をアンケートする

教員は多忙である。1コマを費やして教員の授業を参観するのは、その時間になされるべき実務を他の時間をやりくりしてこなすなど、相当の「体力勝負」となる。そのエネルギーに見合った成果が得られるような体制は、率直に言って、まだできあがっていない。これも皮肉な言い方をすれば、何かを得るために授業を参観するというよりは、事実上その時間はFD活動に献上するボランティア活動となっていると言ってもよいかもしれない。自然、アンケート結果も型どおりで切実に欠ける。

授業公開に意味がないと言うのではない。意味を生むものにすべきだと言いたいのである。そのためには、どのような実施形態ならば授業公開に参加しやすいかを、アンケート調査するとよいのではないか。どのような授業ならば見に行きたいか。どのような公開形態なら出かけやすいか、成果が得られると考えられるか。どのような結果が得られるならば参加したいか。そうした要望を集約すれば、参観者数アップのための方策も考えやすくなるだろう。

1.5 勉強会を前提としたアンケート項目

今回の授業公開終了後の勉強会では、授業公開をめぐるさまざまな意見が聞かれ、有意義な時間となった。授業公開実施後に、その成果を確認し集約する場が用意されていれば、それなりの成果を期待できる。

アンケート項目もできれば、こうした勉強会の開催を前提として設定するのが望ましい。「成果」の確認に直結するような項目であれば、勉強会の進行もスムーズになる。例えば、「教室の後ろから見ると、どういった点を改善すれば授業がどのようにより良くなると思われたか」、「どういう授業活動が効果を上げていたか」、「具体的にどのような点を自分の授業に取り入れたいと思ったか」といった項目が考えられる。

2 授業公開の実施形態について

2.1 授業ノウハウ共有の意識

次に、授業公開の実施形態を検討する。自分の授業を公開するのは、自分の手の内を明かすのと同じである。そこに自分なりの工夫があるならば、それを無料公開することになる。その工夫が自分の独自性を保証するようなものならば、それを公開してしまうことにはためらいがあるだろう。

学生の満足度に生活がかかっている予備校教員は、授業ノウハウの取得に貪欲である。評判の高い授業があれば、盗み見してでもそのノウハウを得たいと考える。カリスマ教師の授業に、親しい学生をスパイとして送り込む予備校教員の話も聞く。そうした姿勢があればこそ授業技術も高まり、大学のリメディアル授業に予備校教員が駆り出されるという事態も生まれたのだろう。

つまり有効な授業ノウハウは、本来貴重で有料のものである。苦勞してノウハウを獲得し、それを糧に生活している教員であれば、そう簡単に「秘伝の技」を公開したりしない。公開するのならば入場料（講演料）を取るなり、出版して印税をとるなりして元を取ろう

とするだろう。

こころよく授業の無料公開に応じ、参観に来る教員もまばら、というのは、おおよその話、われわれがさほど素晴らしい授業ノウハウを持っていないからだ。持ってないところから、お互いの授業を批判し合うことによって、ノウハウを構築しようとしているわけである。

要するに、ゼロからノウハウを構築する、という気概、姿勢がなければ、授業公開は成果を生まない。試行錯誤しながら、自分たち独自のノウハウを構築していこうという意識・姿勢があってはじめて、お互いに批判しあい、コーチしあう、という授業公開の場が意味を帯びてくる。何もないところから、うまく使える道具を作り上げ、共有していくために、お互いの手の内をさらす。そうした意識がまず必要だと思われる。何となく授業を公開し参観するならば、その成果も何となくうやむやになる。

2.2 成果を得るためのコンセンサスづくり

授業公開が成果を上げるには、お互いに手の内を見せ合い批判しあう作業によって、有効な授業方法を見つけ出すという意識がまず必要である。たいくつな授業はどこがたいくつなのか。どこを変えれば、見違えるように印象が変わるのか。これには、客観的な視点が必要だろう。例えば自分の授業を録画して何度も検討するか（熱心な予備校教員はしばしばこれを実行する）、そうでなければ他人に見てもらって批評してもらう。批評する側は自分のことは棚に上げてでも、どこが悪いのか、良いのか、真剣にコーチしなければならない。凡才同士がコーチしあった場合、たいした成果は上がらないのではないかとも思われるが、そんなことはない。実行者と、なにもせず傍からそれを見て助言する者に分けたグループのほうが、全員実行者のグループより良い成果が上がるという実験結果も存在する。

こうした相互活動をスムーズに行うには、それなりの制度作り、システム作りが必要になる。ただ他教員の授業を見せて頂くだけならば、それを批判し評価するようなコメントをするのは失礼と感じられてしまう。好意で食事をご馳走して頂いたのに、その食事をまずいと言ってけなすようなものだからだ。

そうではなく、お互いの料理の味を高めるために、お互いに食べさせあい批判しあう、というコンセンサスとルールづくりが必要なのだ。そしてそれを支える制度、システムが必要なのだ。

2.3 研究授業という形態

どのようなシステムなら、相互批判がスムーズになるだろうか。小学校、中学校では当然のように実施される「研究授業」の形態が、もっともこの目的に即したモデルになる。プレゼンターとしての授業者数名の授業を、多くの参観者が見たあと、みなで批判する。厳しい批判が遺恨を残さないとも限らないが、基本的には、公開された授業を叩き台にして、よりよい教育方法をさぐる、というコンセプトであるはずだ。

教育学部でもなければ、大学で「研究授業」を経験することはまずない。しかしこれからは違うだろう。授業公開がありうるのならば、「研究授業」に指定されたひとつの授業を皆で参観し（場合によっては教室でなく大会場で）、批判する形態のほうがずっと能率

的である。みな、授業を見て勉強するつもりで参観にやってくるし、授業者は色々批判されて当然と考え、それによって勉強しようという心構えがある。批判しあうためのお膳立てが整っている。特に心構えもなく、色々な授業を見るよりはずっと良い。

ひとつの授業に、さまざまな視点からの批判がなされる点も良い。お互いに対立する意見、批判も出てくるだろう。そうした多角的な視点から批判されることによって、より多くの場に通用する授業スキルも見出しやすくなる。

研究授業に指定されたいくつかの授業に絞って参観する形態ならば、授業の相互批評から生まれた、みなで共有できる財産としての授業スキルをアーカイブ（保存記録）化するのも容易である。

2.4 一部参観、お勧め時間帯指定方式

1コマを費やして授業参観が教員には負担であると先に述べた。それを解消するための方策を提案する。

当面考えられるのが、参観者は公開されている授業に出入り自由とし、授業時間内のいつでも見たい時間だけ見てよしとする。これならば参観者の負担はだいぶ減る。しかし授業公開する教員が出入りを嫌う場合、実施が困難になるという問題点がある。

類似の案として、お勧め時間帯の指定がある。授業公開する教員が、あらかじめその授業のどの時間帯を特に見てほしいか指定しておく。参観者は、その時間帯に訪れて、授業の`ハイライト、だけ見て帰ればよい。ただしこれも、授業中の参観者の出入りが嫌われる場合、実施困難になる。

2.5 プレゼンテーション方式

研究授業に近い案として、時間制限付きのプレゼンテーション方式がある。これは教室でなく、会議室でもよい。広い会場に授業を受ける学生（教員でもまったくかまわない）、および参観者が集まり、授業者は15分程度の制限時間内で、`ハイライト、授業を行う。多くの場合、ひとコマすべて参観しなくとも、良い授業かどうかは感じられるものである。そして特に、ある特定の授業スキルに焦点を当ててプレゼンテーションする場合、そのスキルを使用する部分だけ見せれば、前後はなくとも大きな支障はない。むしろないほうがそのスキルに集中して検討できる。文章の訓練をするのに、まず短い文章を書かせ、習熟させれば、おのずと長文を書くのにも不自由しなくなるのに似ている。

この方式は、教員が一同に会する「教員研修」の場などに適している。壇上で何人かの授業者が、それぞれが核とする授業スキルを中心にした15分程度の授業を行い、ポイントを解説し、質疑応答する。教員のほぼ全員が一度に参加できる点で、非常に能率的である。また授業の焦点と実施時間が絞られるため、参観者の負担も少ない。検討の価値ある公開形態と思われる。

2.6 ビデオ化

すでに本学では実施された公開形態である。あらかじめひとコマ分の授業を録画し、ポイントとなりそうな部分だけを編集して15分程度取り出す。これを「教員研修」の場で上映する。プレゼンテーション形式のビデオ版、といった趣である。

この公開形態は、各授業の「ハイライト」だけを見ることができ、時間も短いので参観者の負担が少ない、というメリットがある。巻き戻し再上映も容易である。しかし、録画、および録画テープの編集作業に、時間と経費が相当にかかる点がデメリットである。

本学での実施時には、「批判」の時間は設けられなかった。上映するだけでなく、そのポイントを解説した上で、質疑応答および批判を行うならば、有効な授業公開の形態の一つになるだろう。

2.7 授業の種類選別と「見どころ」のメニュー化

授業方法を共有できる科目ばかりではない。中には、その授業の担当教員にしかできない授業内容で、他の教員が参観しても参考にしようがない授業もある。そうすると、方法を共有するのに適した授業は、ある程度限られているかもしれない。例えば全学共通科目など、相互批判、方法の共有に適した授業にしぼって、公開科目とするべきではないか。

今回の授業公開は、達富室長による「授業アンケート」結果の分析から始まった。板書の評判が良い教員、パワーポイントの使用法が評判良い教員、学生とのコミュニケーションのとり方が巧みな教員、といった観点から授業をピックアップし、公開へのご協力をお願いした。「授業のどこを見て欲しいか」についても、あらかじめ授業者にアンケートをとり、参観者にプリントを配布した。これが、授業参観の目的を明確化するのにある程度の成果を上げたと思われる。「授業公開アンケート」の結果が型どおりだったが、それでも見るべきポイントは具体化してきたように思う。

つまり、公開に適した授業を選択した上に、その授業の何を参観者にもらうのか、公開授業のコンセプトをあらかじめ明確化し、参観者がそれを目当てに参観に訪れることができるよう、メニュー化するのが望ましい。自分に必要なメニュー項目を選択して参観することができれば、授業公開はよい手ごたえのあるもの、成果を予想できるものになる。成果の予想できる授業参観ならば、教員の参加への意識も高まるだろう。

結び——広報・集客の方法

いつまでも室員の自給自足状態を続けるわけには行かない。授業アンケートとの連携により、授業能力を向上させる必要性を意識して頂き、そのために授業公開への参加が効果的であるような体制をつくることで、参観者を増やしたい。

例えば従来どおり特定の授業にご協力をお願いして公開するのか、授業公開週間を設定してどの授業も参観可とするのか、授業者が会場にプレゼンターとして登場するのか、今後も検討を進めなければならない。また、店を開けてお客の集まるのを待つのか、最低いくつかの授業を参観するようしぼりかけるのか、教員研修として全員参加で一堂に会して行うのか、検討課題は多い。よりよい公開形態をさぐっていききたい。

FD Review

FD Review

e-Learning

e-Learning の活用

－教授法としての成果と課題－

教授法開発室長 達富洋二

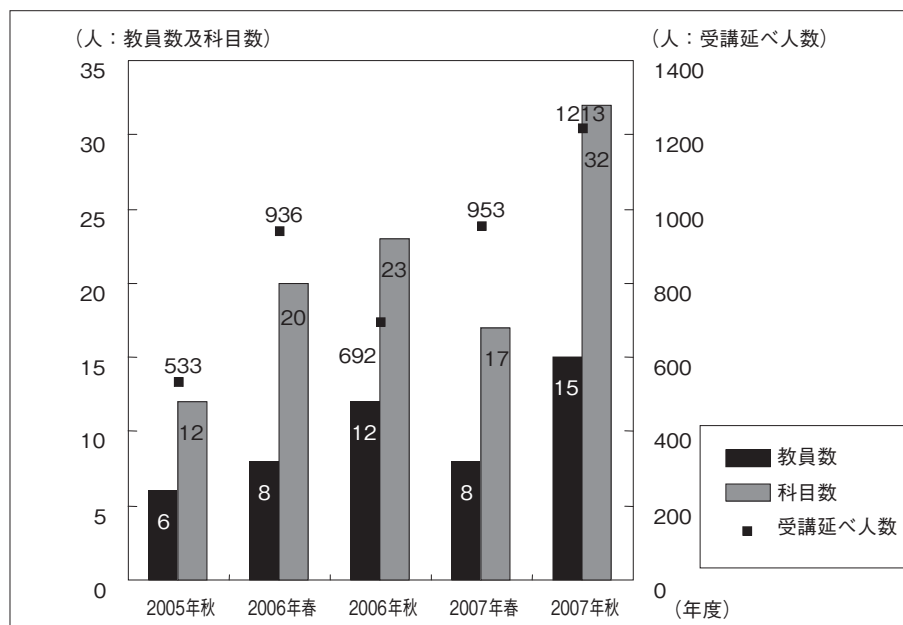
協力：メディア教材開発・知財課

本稿執筆にあたって、アンケートの実施、統計処理、分析など、メディア教材開発・知財課の全面的な協力を得た。感謝するとともに、お礼を申し上げる。

1. e-Learning 使用状況

1.1 2005年から現在までの使用状況

	教員数	科目数	受講生数
2005年秋学期	6	12	533
2006年春学期	8	20	936
2006年秋学期	12	23	692
2007年春学期	8	17	953
2007年秋学期	15	32	1,213



1.2 使用状況の変化と背景

本学では2005年度秋学期からe-Learningの導入を図っている。利用教員数及び科目数は、2007年春学期に一度減少しているが、学期を重ねるごとに増加している。2007年秋学期の飛躍的な伸びは、教員への事務局からの積極的な勧誘とe-Learningを既に利用している教員からe-Learningに関心のある教員への紹介によるものと考えられる。

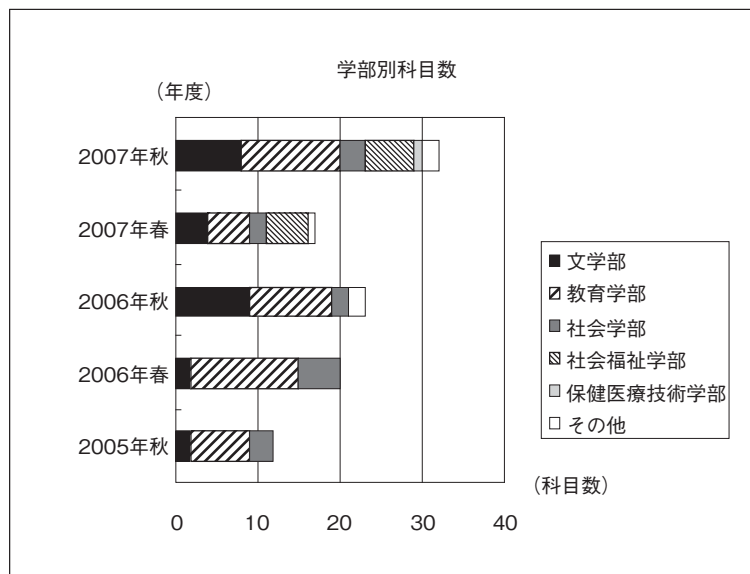
2006年秋学期、春学期から3科目増加しているにもかかわらず受講生数が大幅に削減(244名)した要因は、大教室授業の2科目の削減による。

2007年春学期、前年秋学期と比較して6科目削減したにもかかわらず、受講生が増加(261名)している要因は、社会福祉学部関連の老人福祉論と就職特別講座「社会福祉士受験講座」の受講生増加(326名)による。

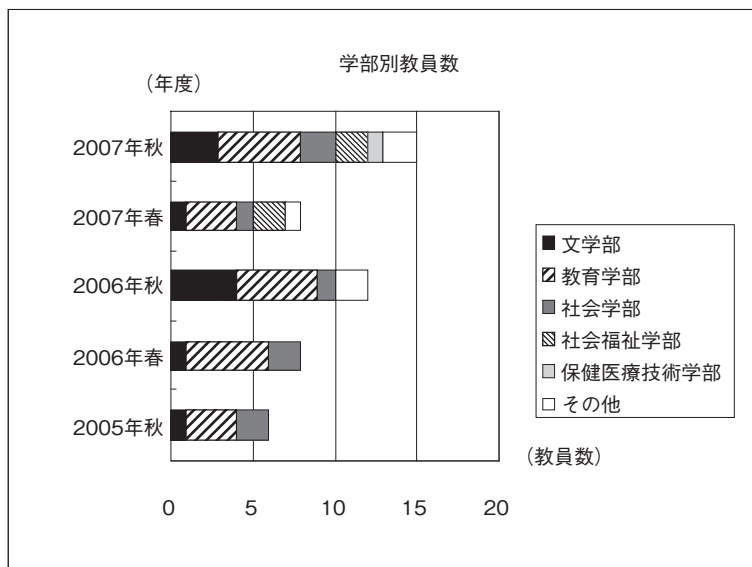
2005年秋学期に運用開始したe-Learningシステムは、2007年秋学期には教員数が2.5倍、科目数約2.7倍、受講生約2.3倍になっている。

2. e-Learning 使用状況

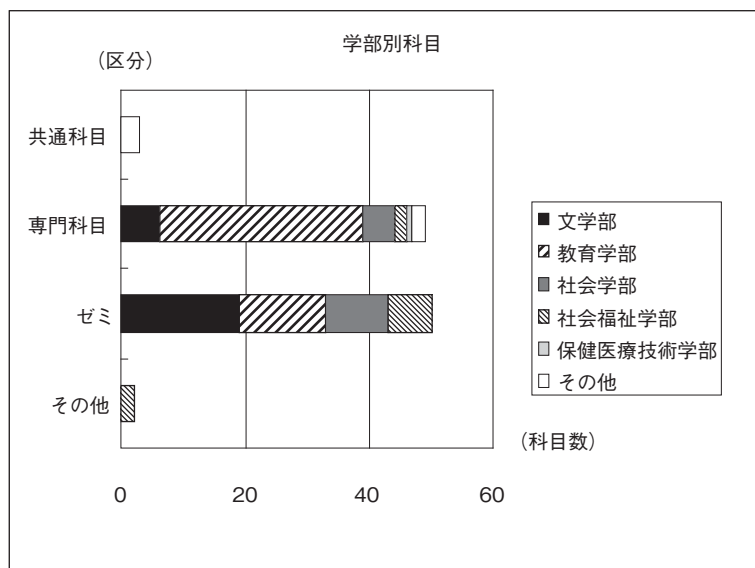
2.1 学部別 e-Learning 使用科目数の推移



2.2 学部別 e-Learning 教員数の推移



2.3 科目種別 e-Learning 使用状況



3. 教員へのアンケート

e-Learningを導入することの一般的な効果及び、e-Learningを授業で使用している本学教員へのアンケート結果は次の通りである。

3.1 成果と考えられることから

大学の授業にe-Learningを導入することで期待できることとして、一般的には以下のことがらあげられる。

- A 学生が自律的に学習を進めることが可能である。
- B 学生に授業内容をわかりやすく伝えることが可能である。
- C 活発な議論により授業内容をより深めることが可能である。
- D 学生個々の学習状況や理解度を把握することにより学生個別に効果的な指導をすることが可能である。

本学の教員からは以下のような成果の声がある。

- ① 学生相互の進捗状況を把握することができた。
- ② 教員が学生の取り組みの様子を把握することができた。
- ③ 教員が提出物の管理をすることができた。
- ④ 講義管理ができた。
- ⑤ 課題提出確認とその課題へのコメント返信の作業が簡潔に処理できた。
- ⑥ 成績管理の負担が軽減できた。
- ⑦ 講義で説明できなかった情報や内容を、e-Learningを使って掲載することによって学生への教育サービスが高まった。
- ⑧ 時間不足の授業を補うことができた。
- ⑨ 教材箱に板書事項や教材をあらかじめファイル化して収めることによって、授業進行がスムーズに進められた。
- ⑩ フォーラム機能を利用することによって、学生間のコミュニケーション、教員と学生間のコミュニケーションが活性化できた。
- ⑪ 講義内容や講義方法の改善に時間をかけることができた。

3.2 課題と考えられることから

大学の授業にe-Learningを導入することの課題として考えられることとして、一般的には以下のことがらあげられる。

- a 学生のモチベーションを維持させる工夫が必要である。
- b 学生の理解を促す講義コンテンツの制作の技術が必要である。
- c 議論を活性化させるための工夫が必要である。
- d 効果的な個別指導の実施方法について検討が必要である。

本学の教員からは以下のような成果の声がある。

- ① e-Learningの説明とe-Learningへの打ち込みに時間がかかり、授業時間を割かな

ければならなかった。

- ② 履修登録の時期にも関連するが、第1回目の授業で使用できなかった。
- ③ 「管理メニュー」によるサイト管理が難解（フォーラムの設定が煩雑）。
- ④ 全体的にコンテンツを作成するまで作業量が多い。
- ⑤ 複数の授業で e-Learning システムを利用している場合、授業を切り替えてもどの授業に切り替わったか、直観的にわかりにくい。
- ⑥ 携帯電話からの送信や投稿機能がない。
- ⑦ サンサーラ等課題提出期に使える端末が少ない。

3.3 要望

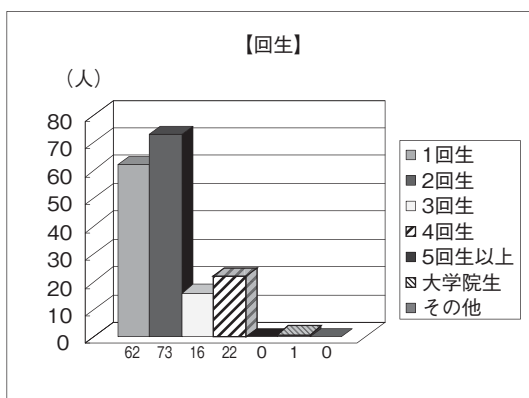
- ① 全体的にインターフェースを改善してほしい。
- ② コンテンツを作成するまで作業量が多いので、改善してほしい
- ③ 学生マニュアルをもっと詳しく書いてほしい。
- ④ 携帯電話からの送信や投稿機能がほしい。
- ⑤ 教室設置 PC ならびにサンサーラ PC を増やしてほしい

4. 学生へのアンケート

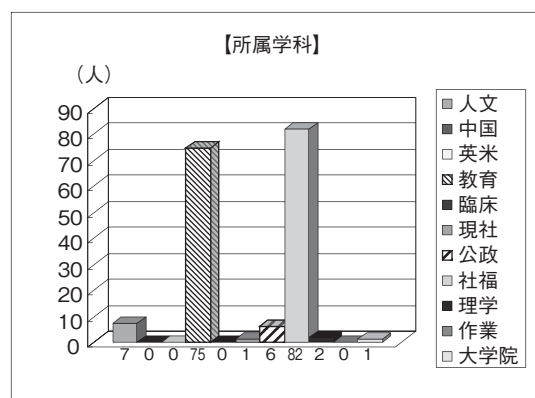
本学の授業において e-Learning を学習を進めている学生へのアンケート結果は次の通りである。

4.1 e-Learning の使用についての基本調査（2007 年度春学期）

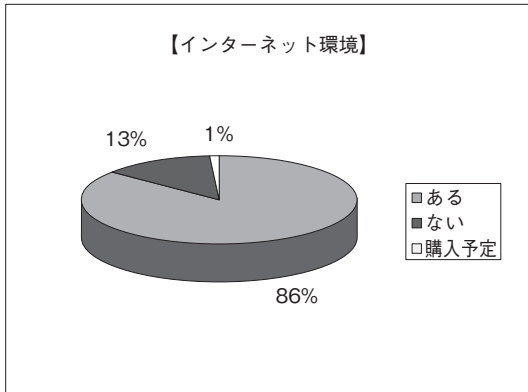
4.1.1 e-Learning を使用している学生（回生別）



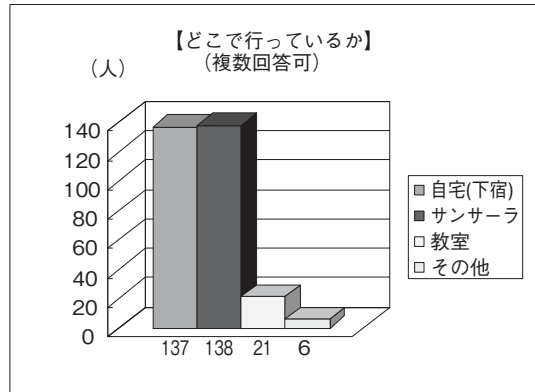
4.1.2 e-Learning を使用している学生（学科別）



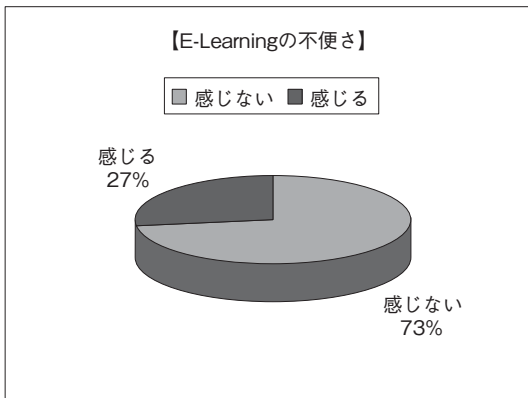
4.1.3 学生のインターネット環境



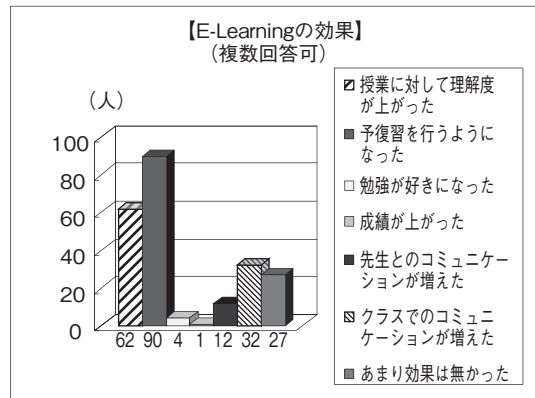
4.1.4 e-Learning を行っている場所



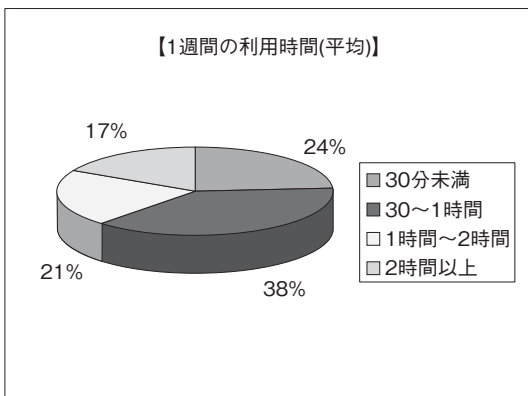
4.1.5 e-Learning に不便さを感じるか



4.1.6 e-Learning の効果

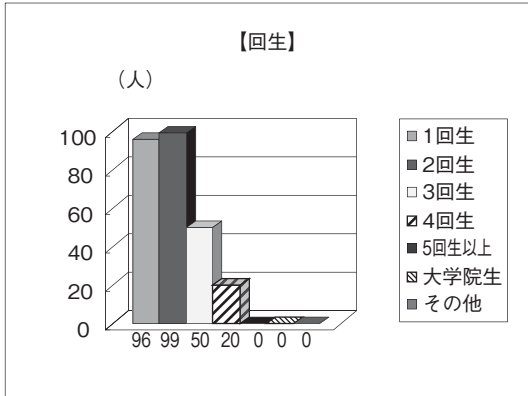


4.1.7 1週間の利用時間(平均)

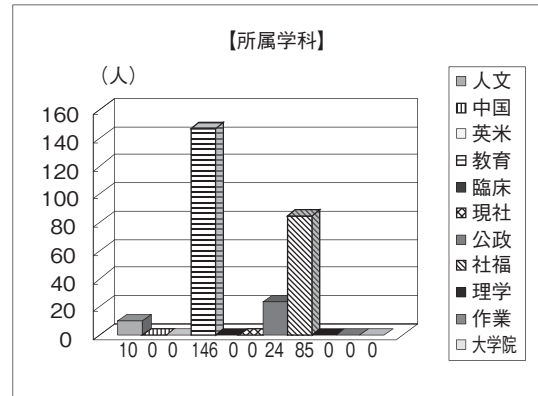


4.2 e-Learning の使用についての基本調査 (2007 年度秋学期)

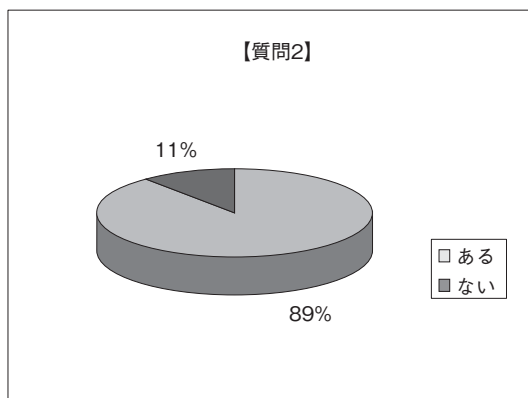
4.2.1 e-Learning を使用している学生(回生別)



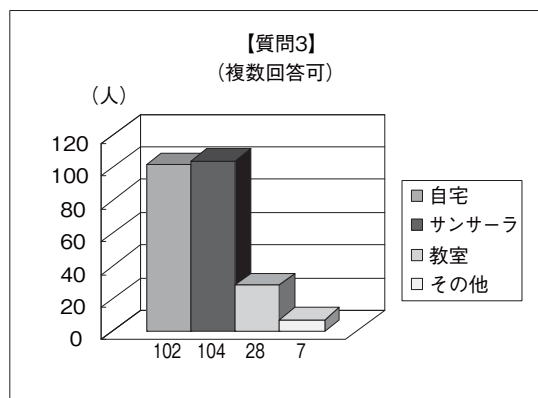
4.2.2 e-Learning を使用している学生(学科別)



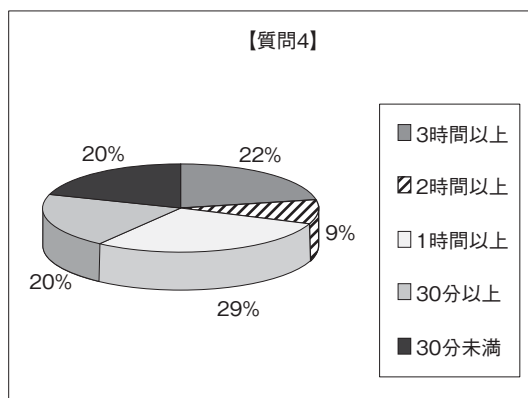
4.2.3 学生のインターネット環境



4.2.4 e-Learning を行っている場所



4.2.5 1週間の利用時間(平均)

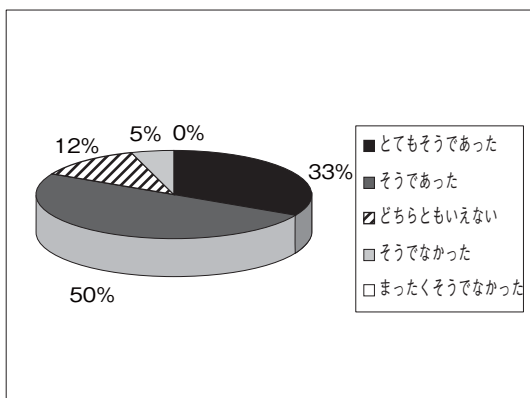


4.3 e-Learning の使用についての春学期と秋学期の比較

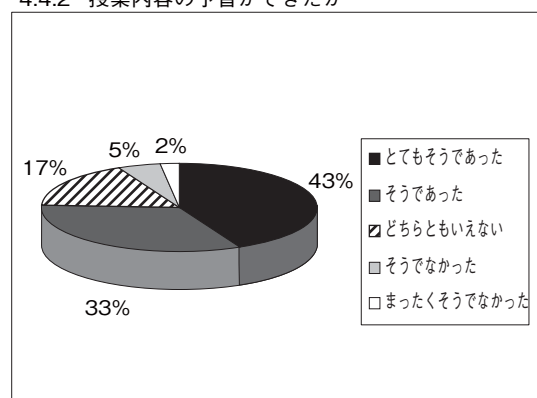
- ① 利用者数の増加により3回生、教育学科の利用者が春学期より増加。
- ② インターネットの環境については、「ある」が89%で春学期より3%増加。
- ③ e-Learning の利用場所については、春学期と同様にサンサーラの利用が多い。
- ④ e-Learning の1週間平均利用時間については、30分以上の時間が11%増加。30分未満が2%減少。
- ⑤ 1回の授業についての予習復習時間は、60分以上が46%、30分以上が15%、30分未満が24%、全くしなかったが15%。
- ⑥ 学習に必要な情報取得については、85%が「そうであった」と回答。
- ⑦ 授業内容の予習については、76%が「そうであった」と回答。
- ⑧ 授業内容の復習については、58%が「そうであった」と回答。
- ⑨ 授業時間外の学習状況については、77%が「進んだ」と回答。
- ⑩ 授業時間外のチーム内交流については、57%が「できた」と回答。
- ⑪ 学習内容の理解については、80%が「深まった」と回答。
- ⑫ 学習内容の蓄積や整理については、82%が「できた」と回答。
- ⑬ 授業時間外の教員指導については、49%が「できた」と回答。
- ⑭ 教員との交流については、37%が「できた」と回答。30%が「できなかった」と回答。
- ⑮ 「質問が容易にできたか」という質問については、41%が「できた」と回答。
- ⑯ 質問に対する答えとその理解度については、54%が「できた」と回答。
- ⑰ 講義全体の流れの把握については、69%が「できた」と回答。
- ⑱ 欠席しても授業の内容が把握できたかという質問については、53%が「できた」と回答。

4.4 e-Learning を利用した学習状況 (2007 年度)

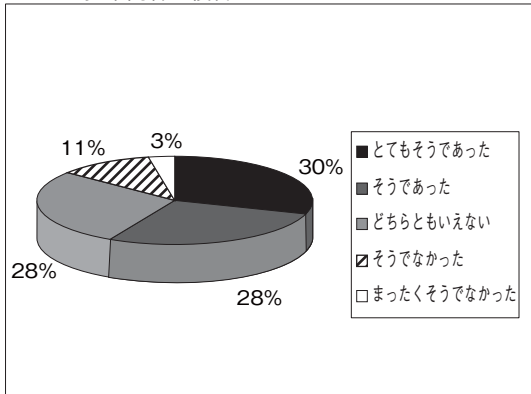
4.4.1 学習に必要な情報を習得することができたか



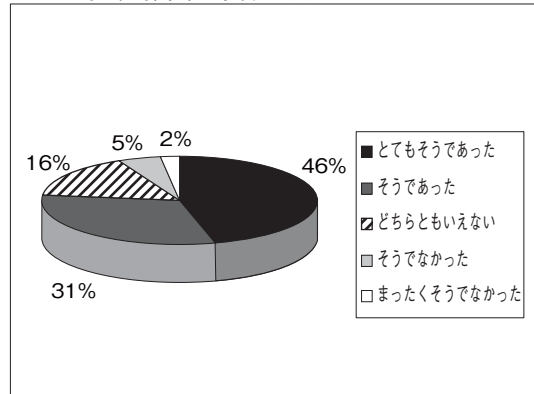
4.4.2 授業内容の予習ができたか



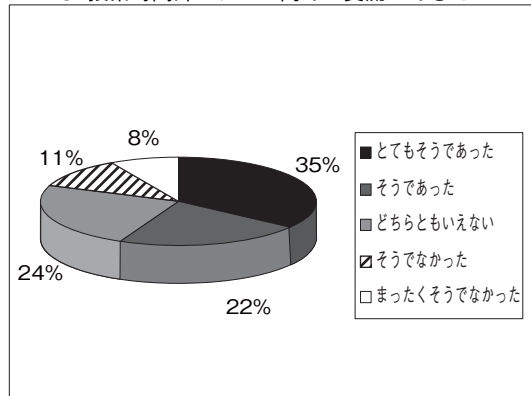
4.4.3 授業内容の復習ができたか



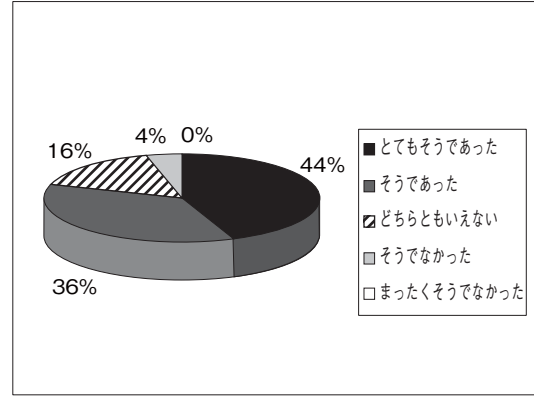
4.4.4 授業時間外に学習がすすんだか



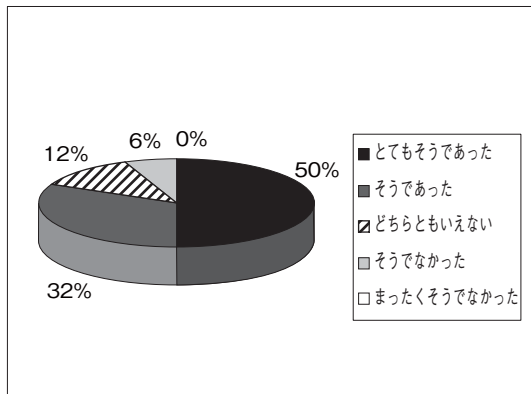
4.4.5 授業時間外にチーム内での交流ができたか



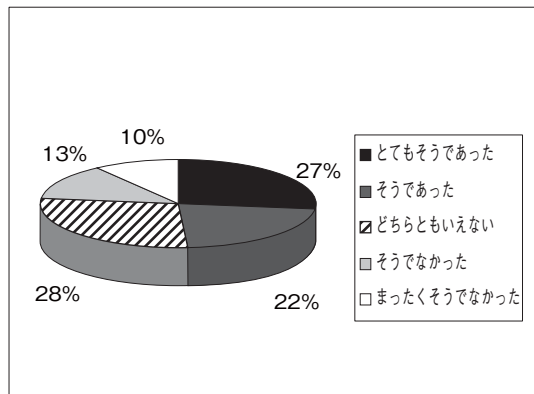
4.4.6 学習内容の理解が深まったか



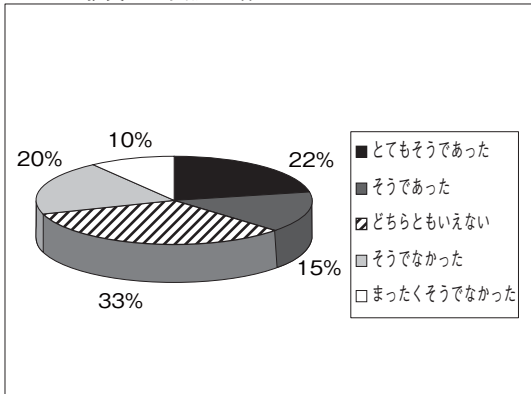
4.4.7 学習内容の蓄積や整理ができたか



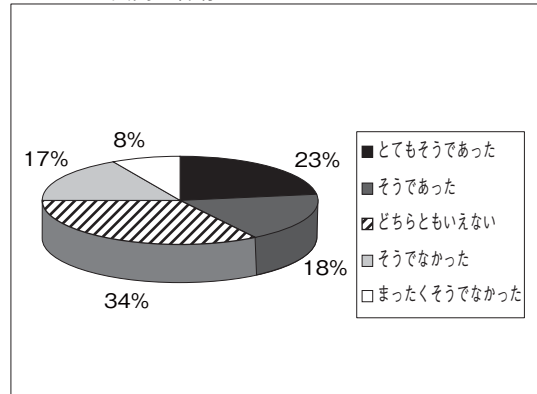
4.4.8 授業時間外に教員の指導を受けることができたか
(週1回の返信)



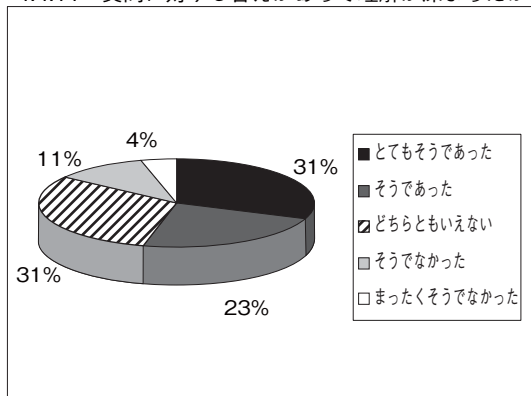
4.4.9 教員との交流が増えたか



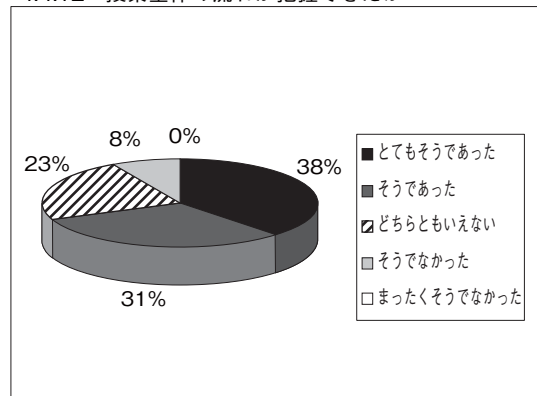
4.4.10 質問が容易にできたか



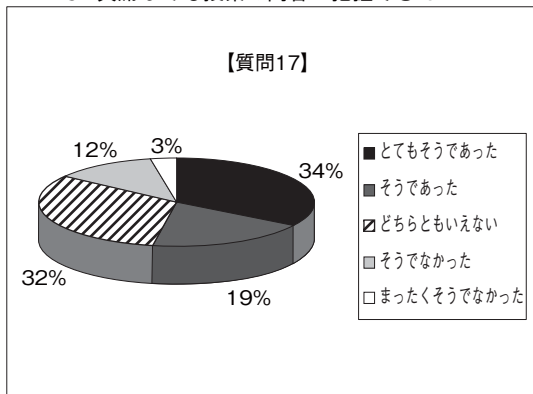
4.4.11 質問に対する答えがあって理解が深まったか



4.4.12 授業全体の流れが把握できたか



4.4.13 欠席しても授業の内容が把握できたか



4.5 e-Learning を利用した学生の意見（2007 年度）

学生からは、「課題作成に努力を要するため負担が大きい」という声を聞くが、「学習の成果が記録として残る」、「細かな情報を互いに交換できる」、「PC 操作に慣れた」、「他の科目でもっと使えたらいい」などの高い評価を得ている。しかし、エンドユーザである学生からの切実なシステム改善等について、次のような要望がある。

- ① 大学で自由に使えるパソコンが少ない。増やして欲しい。
- ② パソコンからしか見れないことがやはり不便に感じる。
- ③ 携帯電話からのアクセスができない点。書き込みはできなくても、閲覧だけでもできるようにして欲しい。
- ④ ワードソフトのような文章の体裁を整える機能があるともっと使いやすくなる。改善して欲しい。
- ⑤ 毎回パスワードで迷いました。すぐにログインできる環境にして欲しい。
- ⑥ しっかりとした返信をして評価してくれる先生もいれば、課題だけ出して、提出した後はいっさい評価してくれない先生もいたので、効果的に使えていない先生の授業には導入しないで欲しい。

5. 成果と課題／メディア教材開発・知財課からの考察

2004 年 10 月から 3 年計画で開発・運用を行ってきた e-Learning システムは、この秋でひと区切りの年度となる。

導入当初の目的、『教員と学生が「使え」「使える」 e-Learning システムの構築』は、使用状況ならびに学生アンケート等から見る限り十分達成できたといえる。また、使用する各教員のニーズに応じて、機能を追加・開発してきており、「お知らせ」、「教材箱」、「フォーラム」、「アンケート」などの機能を運用して、講義時間外においても学習内容についてディスカッションが行われ、学習支援や授業改善の一環となっている。

しかし、教員・学生から共通した機能改善の要望や今後 e-Learning システムを継続して運用する場合、次の課題もある。

5.1 機能改善の要望

- (1) 携帯電話からの送信・投稿機能の追加。
- (2) インターフェースの改善。
- (3) 大学で自由に使えるパソコンの増設。
- (4) コンテンツを作成するまで作業量の軽減。

5.2 現行 e-Learning システムの課題

- (1) 通学課程での普及。
- (2) 情報環境の整備。
- (3) 携帯電話の活用。
- (4) インターフェースの改善。

- (5) コンテンツを作成するまで作業量の軽減。
- (6) 通学・通信とのシステム融合。

現行のシステムでは、コンテンツの相互運用性を保証するための標準規格（SCORM：スコーム）になっていない。将来的に通学・通信とのシステム融合を考えると大きな障害となる。この課題を解決するためには、オープンソース XOOPS で運用している e-Learning システムを他のオープンソースへの変更が必要である。

次年度に向け、さらに教育開発課、情報システム課と連携をとり、「学習成果」が見える e-Learning システムの構築・運用ならびに教員への積極的な広報を実施し、e-Learning システムを本学に定着させていきたい。

6. 成果と課題／教授法開発室からの考察

6.1 機能

6.1.1 フォーラム

- ①フォーラムには、フォーラムとグループフォーラムの2種類ある。
- ②フォーラムは、学生間のディスカッションができる機能で、学習内容の蓄積も可能。
- ③学生をいくつかのグループに分け、課題などに対する各グループの意見等を投稿し、討論できるのがグループフォーラム。
- ④課題を与え、その課題に対する意見をフォーラム機能を使って投稿させ、その投稿した回数を学生評価に使用することもできる。
- ⑤実習系・ゼミ系の授業で活用することにより、学生のコミュニケーション能力向上に役立てることが可能。
- ⑥教員は、全てのグループフォーラムを閲覧・書き込みすることができる。
- ⑦学生の学習状況が把握でき、適切なアドバイスが可能。
- ⑧添付ファイルの蓄積も可能であることから、様々な学習内容を蓄積・共有するといった使用方法も考えられる。

6.1.2 教材箱

- ①教材箱は、各講義で使用する講義資料を事前にアップロードしておき、学生がいつでも閲覧できる。
- ②事前に教材箱に保存した講義資料を学生がプリントアウトし、講義で使用することができる。（配付する労力削減）
- ③講義のポイントを提供することによって、学生の理解度が高まる。
- ④学生の学習状況を把握することにより、課題を提供することが可能。
- ⑤予定していた授業内容が達成できなかった場合、資料を提供することにより、大幅な授業ロスを防ぐことができる。
- ⑥講義で使用する様々な資料を、蓄積・整理・活用することができる。（使い回し、共有が可能）

6.1.3 教材箱

- ①学生から様々なアンケートをとることができる。
- ②アンケート回答後は、それらのデータを集計・分析することができる。
- ③結果をグラフ化することができる。
- ④アンケートによって学生の学習状況が把握できる。

6.1.4 記述試験

- ①記述式の試験を行うことができる。
- ②各講義の終了時等に小テストを行い、学生の理解度を確認することができる。
- ③学生からの回答を評価することも可能。

6.1.5 学習の記録

- ①学生に課題を出し、学生から課題提出の後、提出された課題を評価したり、コメントを添えたりすることができる。
- ②成績管理も可能。
- ③評価及び評価の累計が正確にできる。
- ④各講義の終了時等に小テストを行い、学生の理解度を確認することができる。

6.1.6 学習指導案の作成と閲覧

- ①教材箱の機能をもとに、学生から提出された学習指導案をチェックする機能。
- ②提出された学習指導案をもとに、学生間で指導案の学び合いが可能。
- ③教育職員免許状課程等の講義に有効。

6.1.7 メール配信

- ①グループ単位または一括でメールを送信することができる。
- ②教員からのメールの着信を携帯電話でも確認できる。
- ③大学のメールアドレス以外に、最大2つのメールアドレスが指定できる。

6.2 機能を生かす教授法

これらの機能は有効な教授法として活用することが可能である。どの機能も学生の主体的な学習を支援するためのものであると考えられる。しかし、メール配信を除く機能を学生が活用する場面には、教員は存在しない。一人の学生あるいは複数の学生、つまり、学生のみでの学習の場面となる。だからこそ、そこに不明確な指示や操作が存在してはならない。学習内容の指示であれ、操作方法であれ、本来の学習以外のことがらで学生が迷うことになれば、ここに学習の効果を期待することはできない。そのためには、e-Learningの機能そのものが、教員にとっても学生にとっても簡便なものでなければならない。

育
教
前
学
入

FD Review

FD Review

入学前教育の実施結果報告および課題

教授法開発室員 榎本福寿

1. はじめに

「今まで大学で授業は一度も受けたことがなかったので、今回の体験授業はとても学校の雰囲気を知る良い体験になった。」

「くわしい知識がなくても、授業がちゃんと理解できてよかったです。楽しく授業を受けられました。」(以上、文学部受講者)

「先生たちの話がすごく良かった。この4年間頑張ろうと思った。」

「各授業とも何を目的にして学ぶのかがよくわかった。話もわかりやすく、来てよかったです。」(以上、教育学部受講生)

2007年度初めて実施した授業体験コースの入学前教育は、受講者に大変好評であった。上記の感想はその一端に過ぎない。ほかにも「4月に入学するのがすごく楽しみになりました。入学後さらに多くのことを学びたいと思いました。」「早く大学で授業を受けたいと思った!!!」などの、入学後の学習に早くも熱い期待を募らせていることをうかがわせるものまで、各学部にわたって散見する(個々の事例は、110頁以下参照)。

もちろん、入学前教育としての体験授業そのものに全く問題が無いわけではない。実施に伴う様々な課題のほか、実施を踏まえ入学前教育の内容・時期・効果などの妥当性についても改めて検討なり検証なりする必要がある。入学前教育として、並設するレポート作成コースはすでに長年実績をつんできているが、今回から入学前教育に2コースを設けたこのありかたも点検すべき対象となる。また、入学前教育を取り巻く環境は決して良好とはいえないなかで、本学が取り組む入学前教育の将来にわたるあり方を模索する上でも、実施後のアンケート、調査結果やデータ類を整理・点検し、その結果をさし当たっては共有しておくことも必要であろう。これらの点を踏まえ、2007年度入学前教育の実施結果を以下に報告する。

2. 入学前教育の実施概要

まず〈入学前教育の目的〉であるが、本学では、これを「入学後の学部・学科(コース)における専門教育への導入」とし、具体的には次の4項目を柱に据える。

- ・学部(学科)教育に対する理解の促進
- ・学習意欲(モチベーション)の向上
- ・学習に対する意識付け
- ・学習への不安緩和

〈入学前教育の対象者〉は、レポート作成に限定していた昨年度まで公募制推薦入試入学手続完了者を含めていたが、本年度からはこれを除き、12月中に最終入学手続者データが揃う入試の各入学手続完了者とする。各入試種別ごとの対象者数の内訳は次の通り。

- ・AO 選抜——27 名
- ・特別推薦
 - 指定校——157 名
 - 課外活動——31 名
 - スポーツ強化枠——21 名
- ・同窓——36 名
- ・帰国生徒——2 名
- ・宗門後継者——32 名
- 合計——306 名

〈入学前教育の形態〉は、昨年度まで実施してきたレポート作成に、新たに本学において開講する授業を体験受講する授業体験を併せて2種別とする。このレポート作成コースと授業体験コースのいずれか一方を任意に選択することを基本とし、両コース併習も認めている。コースごとの入試種別・学部・学科別の実施内容は次の通り。

——レポート作成コース——

〔AO 選抜〕

英米学科

- ① 英文読解、英文聴解
- ② 英作文
- ③ 電話インタビュー（ネイティブである本学専任教員1名、外国人契約教員1名の計2名との電話での会話。15分程度）

教育学科

課題について調べた結果をまとめ、感想文を書く。参考にした図書等の資料を明記する。

公共政策学科

3つのテーマの内1つを選択し、テーマに関する図書（1冊）の内容をまとめ、その図書に対する意見を書く。図書名・著者名等を明記する。

社会福祉学科

- ① 課題図書を読み、全体の要約と感想を書く。
- ② 課題図書を読み、レポートを作成する。また、関連する新聞記事・図書を読んでまとめる。新聞記事はコピーを添付し、図書は書名を明記する。

理学療法学科

図書（参考として6冊提示）などを参考のうえ課題に答える。

作業療法学科

図書（参考として2冊提示）などを参考のうえ課題に答える。参考にする図書は別のものでも許可する。

※ 上記学科以外はAO入試を実施していない。

※ 英米学科の③を除き、他は全て提出レポートに添削を加えて返却。

[特別推薦（指定校・課外活動・スポーツ強化枠）、同窓、帰国生徒、宗門後継者]

人文学科

コース別（浄土・仏教、仏教芸術、日本史、アジア史、地域文化、日本語日本文学）に設定した課題について、自由に選択のうえレポートを作成する。

中国学科

課題について、レポートを作成する。

英米学科

課題について、英作文を作成する。

教育学科

課題について調べた結果をまとめ、感想を書く。参考にした図書等の資料を明記する。

臨床心理学科

指定したレジメ（事前学習）を学習し、練習問題を解く。

現代社会学科

3つのテーマの内1つを選択し、それに関わる図書を読み、内容をまとめ関連した新聞記事の内容と関係づけてレポートを作成する。図書名等を明記する。

公共政策学科

3つのテーマの内1つを選択し、テーマに関する図書（1冊）の内容をまとめ、その図書に対する意見を書く。図書名・著者名等を明記する。

社会福祉学科

指定した新聞記事を読み、感想と意見を書く。

理学療法学科

図書（参考として6冊提示）などを参考のうえ課題を考える。

作業療法学科

図書（参考として2冊提示）などを参考のうえ課題に答える。参考にする図書は別のものでも許可する。

宗門後継者

日常勤行を暗誦し、僧侶となる決意について書く。

※全て添削して返却。

——授業体験コース——

〔AO 選抜、特別推薦、同窓、帰国生徒、宗門後継者〕

実施日：平成20年3月2日（日）

① 10:30～11:00 自校教育 30分

本学の歴史や建学の理念などを中心に佛大人としてのアイデンティティの自覚を促す

担当：学長

* 11:00～11:15 教室移動（5教室に分かれる）

② 11:15～11:45 各学部の学びの導入 30分

各学部の教育目的等についてのガイダンス

文学部担当：原田敬一

教育学部担当：橋本憲尚

社会学部担当：的場信樹

社会福祉学部担当：伊部恭子

保健医療技術学部担当：日下隆一

③ 11:45～12:30 各学部の体験授業（午前の部） 45分

知的好奇心を喚起するテーマ、わかりやすい内容の授業

文学部

テーマ：＜歴史と文化＞近代日本と中国の文化交流について——「黒船」と留学と和製漢語

担当：清水稔（所属：人文学科）

教育学部

テーマ：臨床心理学の魅力

担当：牧剛史（所属：臨床心理学科）

社会学部

テーマ：犯罪と刑罰の社会学

担当：松永寛明（所属：現代社会学科）

社会福祉学部

テーマ：変容する現代社会と社会福祉の役割

担当：朴光駿（所属：社会福祉学科）

保健医療技術学部

テーマ：保健医療技術学入門

担当：木戸隆宏（所属：作業療法学科）

④ 12:30～13:15 休憩（昼食） 45分

⑤ 13:15～14:00 各学部の体験授業（午後の部） 45分

文学部

テーマ：中国語入門

担当：李冬木（所属：中国学科）

教育学部

テーマ：「教育」とは—教員生活から考えたこと—

担当：小林隆（所属：教育学科）

社会学部

テーマ：身の回りの材料と社会

担当：林隆紀（所属：公共政策学科）

社会福祉学部

テーマ：変容する現代社会と社会福祉の役割

担当：朴光駿（所属：社会福祉学科）

保健医療技術学部

テーマ：リハビリテーション概論

担当：日下隆一（所属：理学療法学科）

3. 入学前教育の実施結果

(1) 全体総括——両コースの受講者比率——

入学前教育の実施結果について、レポート作成コースの場合はその受講者数を、また授業体験コースではその受講者数をそれぞれ数値化し、入試種別ごとと学部・学科ごととに分けてまとめたのが下記の表1～8である。

本学では、入学前教育を入学の条件としたり、強制ないし誘導したりなどもしていない。レポートの提出または授業の出席は、どこまでも任意による。表の数字は、そうした点でも入学前教育に寄せる興味・関心、さらには期待等を、そのまま反映するはずだが、表1はレポート作成コースの受講者数を、また表2は授業体験コースの受講者数を、それぞれ入試種別・学部・学科ごとに分けて表示している。レポート作成コースと授業体験コースの受講者は、入学前教育の全対象者306名のうち、前者が108名、後者が168名にのぼる。このなかには両コースを受講した61名を含む。それを除く215名、割合では全対象者の7割が受講したことになる。

全般にわたり、授業体験コースの受講者がレポート作成コースのそれを数の上で大きく上回っている。その差は、2つのコースのそれぞれ一方だけの受講者数に顕著なあらわれをみせる。授業体験コースだけの受講者の数（表4）が、レポート作成コースだけの受講者の数（表3）の倍をはるかに越える。そして数の上では、両コースを受講した者の数がレポート作成コースだけの受講者数を優に上回る。

レポート作成コースを受講するについては、体験授業当日の事情や遠距離等の理由その他による止むを得ない場合も当然あるはずだから、授業体験コースの優位は表の数字以上のものとみななければならない。

(2) 入試種別ごとの受講者の動向

入試種別ごとの受講者の数は、バラツキが大きい。少ない方では、特に特別推薦のスポーツ強化枠が著しく、対象者21名のうち、2つのコースの受講者はもとより、授業体験だけの受講者ですら皆無である。宗門後継者でも、対象者32名のうち、授業体験だけの受講者が3名、両コースの受講者に至ってはわずかに1名にとどまる。

これとは対照的に、AO選抜は、対象者27名のうち、授業体験コースだけの受講者が9名、両コースの受講者が13名、全体の81.5%が授業体験コースを受講している。さらに、特別推薦の指定校と課外活動も、授業体験コースだけの受講者がそれぞれ69名と11名、また両コースの受講者がそれぞれ37名と8名、授業体験コースの受講者の割合としては、それぞれの入試種別の入学前教育対象者全体の67.5%と61.3%を占める。これに続くのが、同じく50.0%の帰国生徒、44.4%の同窓である。対象者がわずかに2名にとどまる帰国生徒は措くとしても、これら授業体験コース受講者の多いグループ、すなわちAO選抜(81.5%)、指定校(67.5%)、課外活動(61.3%)、同窓(44.4%)などと、その少ないグループ、上記のスポーツ強化枠(0%)、宗門後継者(12.5%)との差異は余りにも大きい。

ただ、少ないグループが入学前教育の低調を直ちに意味するというほど単純に割り切れるものでもない。レポート作成コースだけの受講者数では、スポーツ強化枠が対象者21名中5名が受講、さらに宗門後継者になると32名中14名が受講、割合ではそれぞれ23.8%と43.8%にのぼる。他の入試種別では、同窓の16.7%がせいぜいこれに次ぐ程度でしかない。全入学前教育対象者のうち、レポート作成コースだけの受講者の占める割合が15.4%だから、これを遙かに上回る数値でもある（表3）。授業体験コースの受講者数の少ない背景に、このレポート作成コース受講者の数の多さが歴然として存在する。両コースは、いわば相関的な関係にある。この点を踏まえた上で、各入試種別ごとにきめ細かな入学前教育の実施に向けた対応が今後の課題となる。

(3) 学部・学科別の受講者の動向

学部・学科別に集計した数字にも、バラツキが目立つ。レポート作成コースでは、受講率の62.5%に達する高い教育学部（臨床は85.7%）と16.7%にとどまる低い社会学部（現社は14.6%）との間に45%以上の差がある。授業体験コースでは、全般に受講率は高いが、それでも保健医療技術学部の100%に対して、文学部は45.9%にとどまる（表1、2）。そしてここでも、各学部・学科は、受講者の多寡によりほぼ2グループに分かれる。

興味深いのは、レポート作成コースと授業体験コースとのそれぞれの数字が連動する点

である。すなわちレポート作成コースの受講者数の多い教育学部（62.5%）と次いで多い保健医療技術学部（50%）とは、授業体験コースの受講者数も、それぞれ68.8%、100%と1、2位の高い数値を示す。逆に、残り3学部は、レポート作成コースと授業体験コースとの各数値を並べて示せば、文学部が38.7%と45.9%、社会学部が16.7%と56.4%、社会福祉学部が29.5%と52.5%というように両コース共に低い数値にとどまる（表1、2）。

このあらわれには、実は裏がある。それが、両コース受講者数の割合である。両コース受講者の多い学部として43.8%の教育学部と50%の保健医療技術学部が突出しているが、共に上述のとおりレポート作成コース、授業体験コースの各受講者数の割合も高い。対照的に残り3学部とも、両コース受講者の割合は低く、それぞれ文学部が14.4%、社会学部が14.1%、社会福祉学部が14.8%とほぼ同様の低い数値にとどまっている（表8）。両コース受講者の数が、入学前教育全体に対する各学部の傾向を端的に映し出しているといっても過言ではない。

（4） 出身地域別の受講者の動向

入学前教育の受講者を出身地域別にみると、レポート作成コースと授業体験コースとの違いが際立つ。場所の限定を受けないレポート作成コースは、入学試験受験生、合格者、入学前教育対象者の出身地域ごとの多寡に応じた受講者数の地域分布を示すはずである。対象者が多い地域であれば、受講者の数値も当然上がる。ほぼそうした期待どおりのあらわれを示す反面、実態は、とりわけ京都市や近畿の各府県がむしろそれとは逆の顕著な傾向を辿る（表9）。

たとえば2008年度入試結果においては、近畿各府県の本学入試合格者の数は京都府の1002名を筆頭に、滋賀県530名、大阪府454名、兵庫県273名、奈良県129名、和歌山県81名の順である（2009大学案内『find』）。レポート作成コースだけの受講者の数はその順位に反し、滋賀県出身者はたかだか2名に過ぎない。兵庫県の1名も余りに少ない。他地域では、福井、熊本各県に3名、愛媛県にも2名いる。実は、大阪府の7名、さらに京都市内の9名でさえ、もとより期待を大きく裏切っている。

このレポート作成コースだけの受講にあき足らずに向かった先が、授業体験コースである。授業体験コースだけの受講者は、わずか2名を除いて全てを近畿各府県出身者が占める。その割合は、上記各府県別合格者の数にほぼ対応する。（表10）。この授業体験コースと併せてレポート作成コースも受講した両コース受講者にしても、ほとんど全てが近畿各府県出身者が占め、他地域出身者は3名にとどまる（表11）。こうした点では、まさに授業体験コースが近畿圏出身者にとって格好の入学前教育の形態だったことになる。また同時に、通える範囲内であれば、大学の授業を積極的に受講しようとする意欲や期待をそこに読み取ることができる。両コース受講者のなかでは、大阪府出身者の15名（全体の24.6%）が京都市内出身者全体の16名（同26.2%）に拮抗してもいるが、これまたその高い意欲や期待のあらわれだったに違いない。

出身地域によるこの偏りは、入学前教育を考える上にはなほだ示唆に富む。入学前教育に授業体験コースを新設したけれども、結果的にほとんど近畿圏出身者にしかそれが機能しなかった点の一つ。とはいえ、近畿圏出身者に限定して、入学前教育を授業体験コース

一本に絞り込んでしまっただけでは失当である。授業体験コース受講者は、入学前教育対象者全体の54.9%（168名。表2）を占めるが、その36.3%（61名）、すなわち優に3分の1を越える者がレポート作成コースも受講している事実は決して無視できない。

もう一つが、レポート作成コースの受講者数の少ない点に関する点である。レポート作成コースだけの受講者は、入学前教育対象者全体のなかでは、わずかに15.4%（47名、表9）に過ぎない。しかし、それに両コース受講者を含めれば、全体の35.3%（108名、表1）にのぼる。両コースの受講を可とした今回の措置が功を奏したことになるが、さればこそ、なおいっそうレポート作成コースの内容の充実をめざすべきであろう。授業体験との差異化を図りながら、レポート作成ならでは、その特質を生かした取組が望まれる。それらとはまた別に、近畿圏外の受講者や体験授業に止むを得ず出席できない者などを含むより広汎かつ多様な受講生に向けたIT活用等も、おのずから課題となるはずである。すでに「入学前eラーニング」制度を導入し、その受講マニュアルまでネット上に公開している大学さえ、今や決してめずらしくはない。

4. 受講者に対するアンケート調査結果（1）

——両コースの全体集計——

入学前教育の受講者を対象にアンケート調査を実施しているため、以下にはその結果について報告する。アンケートの質問項目など実施内容は後に一括して示す。

受講者全員を対象としたが、コースにより回答率に大きな違いがある。授業体験コースでは、全受講者168名のうち、94.6%の159名から解答を得た。レポート作成コースは、文書による依頼ということもあり、入試種別ごとに示せば、AO選抜が受講者16名のうち10名の62.5%、特別推薦・同窓・帰国生徒が受講者78名のうち58名の74.4%と回答率が低い。この低さは、アンケート結果そのものに影響を及ぼすほどではないにせよ、無視はできない。学部別では、同じく特別推薦・同窓・帰国生徒であるが、社会学部が9名のうち5名、社会福祉学部が14名のうち9名、それぞれ回答率は55.6%、64.3%にとどまる。

回答率は全般に低調だったとはいえ、個別の内容まで評価が低いわけではない。レポートに関しては特に内容にかかわって重要な2つの項目、すなわち課題と添削ともに、どの結果をみても評価はむしろ高い。まず課題内容について「適当であった」と評価する割合では、それぞれ特別推薦・同窓・帰国生徒が受講者全体（58名）の83%（48%）、AO選抜が全体（10名）の80%（8名）、以下、特別推薦・同窓・帰国生徒の各学部別に、文学部が全体（20名）の85%（17名）、教育学部が全体（23名）の83%（19名）、社会学部が全体（5名）の100%（5名）、社会福祉学部が全体（10名）の70%（7名）である。同じく添削内容に「満足した」とする受講者の割合をそれぞれ数値だけ示せば、85%（特別推薦・同窓・帰国生徒）、90%（AO選抜）、95%（文学部）、82%（教育学部）、60%（社会学部）、80%（社会福祉学部）である。2つの項目とも、全体の優に8割を越える受講者が高く評価している。

そしてその高い数値を裏付けるのが、それぞれ「入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心がもてましたか」と「入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思われましたか」とのこの2つの質問に対する回答である。便宜、前

者を「関心」、後者を「役立」と略称するとして、特別推薦・同窓・帰国生徒全体では、前者（もてた）が71%、後者（思った）が83%、AO選抜では、前者が90%、後者に至っては100%に達する。とりわけ後者の、レポート作成が大学の授業に「役立」として積極的に評価する受講者の比率は、このコースの入学前教育として果たす役割や意義がけっして小さくはなかったことを端的にものがたる。

もう一方の授業体験コースに対しては、受講者の評価はレポート作成コースを上回る。受講直後にアンケートを実施したことも奏功して、上記の通り94.6%の回答率だから、数値の信頼度も高いはずである。レポート作成コースと比較して、同じアンケート項目の「関心」と「役立」のうち、前者、すなわち授業体験が大学の授業に関心をもつ契機となったとする受講者の比率が、全体（154名）でもその84%（129名）、AO選抜では100%（21名）を占める。「役立」も、それぞれ全体が82%（129名）、AO選抜が90%（19名）と高い割合を示す。AO選抜は「関心」「役立」ともに数値が極めて高いが、あい似た傾向をみせるのが、それぞれ教育学部の97%と94%、社会福祉学部の93%と90%、保健医療技術学部の100%と100%である。いわば実学系学部の受講者に集中している。これらの受講者に対しては、入学前教育の意義、そしてその効果もとりわけ大きかったに相違ない。

授業体験コースの入学前教育は、大きく自校教育、各学部の学びの導入（ガイダンス）、そして午前と午後2回行われた各学部の体験授業をもって構成されているが（前掲スケジュール表参照）、これら授業の内容についても、概ね好評である。大学の授業の質を保ちながら、受講者にとって未知の体験であることに十分配慮して、できるだけ楽しく分かり易く教えることを講師（本学専任教員）に心懸けてもらったその成果が顕著にあらわれている。これが上述の「関心」や「役立」の高い評価に繋がっていてもいるはずである。特に自校教育については、本学の歴史や建学の理念などといったおよそ受講生にとって馴染みのない内容ただけに、平均すると70%を越える受講者が「わかりやすかった」と回答したことは特筆に値する。学長みずからが先頭に立って受講者を本学入学後の学習の動機付けあるいは佛大人としてのアイデンティティの自覚を促すことの意義は、極めて大きい。今後このさらに充実した展開に向けた取り組みが課題である。

5. 受講者に対するアンケート調査報告（2）

——授業体験コース参加目的ほか——

ところで、授業体験コースのアンケートをめぐっては、このコースだけに設けた質問項目が3つある。それが、「授業体験コースに参加した目的は何ですか」という参加目的と、「大学生になることに不安を感じていましたか」という受講前の意識、そしてこれに「感じていた」と回答した者を対象とした「大学生になる不安は少なくなりましたか」という受講結果の都合3項目である。後者は、入学前教育（体験授業）の受講前と後で受講者の意識がどう変化したか、いわば教育効果を見極めるために設けた項目である。

まず参加目的だが、各項目別では④の「大学の雰囲気を知るため」が全般に最多である。これに、⑦の「大学での授業内容を知るため」が続く。この④と⑦とは、AO選抜（14名と16名）、同窓（8名と8名）、社会福祉学部（22名と24名）、保健医療技術学部（7名と8名）では拮抗あるいは逆転する。そして⑦の「大学の授業内容」に相通、類同する内

授業体験コース アンケート集計

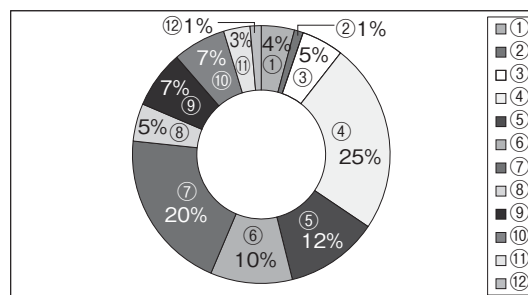
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	20
②	自宅が大学に近かったため	5
③	通学方法などを確認するため	25
④	大学の雰囲気を知るため	115
⑤	友人を作るため	56
⑥	大学生活に不安があったため	49
⑦	大学での授業内容を知るため	97
⑧	自校教育について聞きたかったため	22
⑨	各学部のガイダンスが聞きたかったため	35
⑩	体験授業の内容に興味があったため	32
⑪	教員のことを知るため	16
⑫	特に具体的な目的はない	6

回答者数合計 478

受講者数 168人 回答者数 159人 回答率 94.6%



容の項目として⑧「自校教育」、⑨「各学部のガイダンス」、⑩「体験授業」などを一括することができるはずだから、これら授業に関連した項目に多くが集中していることになる。全体集計では、合計すると186名に達し、115名の④を大きく上回る。授業体験の趣旨にそぐした参加目的を、受講者の多くが共有していたということ、このことは重要である。

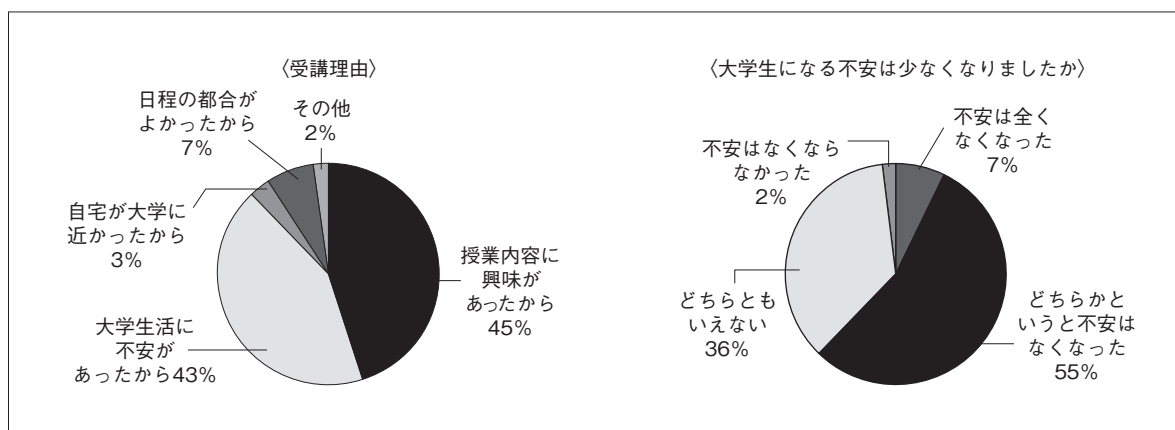
なぜなら、もう一つの質問項目である「大学生になることに不安を感じていましたか」にそれが関連をもつからである。この質問には、「感じていた」と答えた受講者が圧倒的多数（69%）を占める。こうした不安こそが、参加目的につながっているはずである。参加目的の回答の⑥「大学生活に不安があったため」は、そのつながりに直結する項目であり、全体でも、調査対象者159名のほぼ3割に当たる49名がこの⑥を挙げている。大学生になることや大学生活に不安を感じているから、授業関連の項目を回答として挙げた、すなわち入学前教育の受講理由の多くに不安がかかわっている。

その不安が授業体験によって解消あるいは軽減したのかを問うのが、「大学生になる不安は少なくなりましたか」である。最多が「どちらともいえない」である。わずか1日の授業体験だけで不安が解消されることなどもともと想定外ただけに、「不安は全くなかった」がそれに次ぐこと、そしてこの2つの回答数を合計すると、全体133件のうちの111件、割合では80%を越えることも改めて注目に値する。「不安はなくならなかった」は、20%にも満たない。このアンケートがもともと「大学生になることに不安を感じていた」を選択した者を対象としていたことをここに考えあわせれば、授業体験によって不安を抱いていた者が大幅に減少したということ、たかだか1日限りの、それもほんの数時間の授業でしかなかったけれども、ことほどさように授業体験のもつ意味、またそのもたらす効果も大きかったことになる。

ここで、こうした本学のアンケート結果を他大学の例と比較してみる。比較の対象として、初年次教育に実績をもち、中央教育審議会大学分科会大学教育部会で「初年次教育の現状と課題～“移行”問題を中心に～」(2006年11月8日)と題する報告も行っている濱名篤氏(関西国際大学理事長・学長)が大学教務部課長相当者研修会(平成18年度。私学研修福祉会主催、日本私立大学協会協力)において発表(テーマは「大学のユニバーサ

ル化と学習支援)に使用した資料掲載の関西国際大学の事例を参照する。同大学では、2003年度から入学前教育を開始し、教育目標に「大学教育に対する事前の教育機会の提供」を掲げ、入学手続者全員(希望者)を対象に入学前の2月～3月の間「スタディ・スキルズ」「ゼミナール入門」「生活サポート」「タイムマネジメント」「コミュニケーションワーク」等の科目を開講・実施している(2005年度)。

この受講者を対象に実施したアンケート結果を、下に掲げた2つの表があらわす。



<受講理由>の回答は実質的に4通りしかなく、12通りの選択肢を設けている本学のものとは違うものの、全てが重なる。最多が45%の「授業内容に興味があったから」である。これに当たる本学のアンケート項目は、前述の通り授業関連の⑦～⑩であり、合計して約40%だから、ほとんど大差ない。大きく差の開くのが「大学生活に不安があったから」である。関西国際大の43%に対して、本学はわずか10%にすぎない。関西国際大のばあい、「授業内容の興味」ともう1つ「大学生活の不安」が受講者を入学前教育に向かわせているが、本学では、④の「大学の雰囲気を知るため」が25%、⑤の「友人を作るため」も12%を占めるように、受講者が大学に対して期待を強くもち、それが受講を促していたとみることができる。

一方、<大学生になる不安は少なくなりましたか>の項目では、関西国際大が「不安は全くなかった」の7%、「どちらかという不安はなくなった」の55%という結果を出している。6割を越える受講者が濃淡の違いはあれ前向きに評価したこの結果は、2ヶ月という期間、初年次教育関連の科目の教育に熱心に取り組んだ成果であろう。本学の授業体験コースの今後のあり方を考える上に、この成果は極めて示唆に富む。

6. 受講者に対するアンケート調査結果 (3) ——授業体験コース受講者の「感想」——

本稿の冒頭に紹介した通り、授業体験コース受講者の反応は、極めて良好である。授業終了後にアンケート用紙の自由記述欄にとりどりに書き綴った「感想」からは、受講者のそれこそ弾むような生の率直な意見が聞こえてきそうでもある。これに解釈を加えたり、あるいは内容ごとにまとめたりするまでもないであろう。意見や感想にとどまらず、積極的な提言等も少なくないので、今後の参考に資すべく、手を加えずに全文を各学部ごとに掲載する。

<文学部>

体験授業を受けた感想

- ・先生が普通やった。
- ・大変そうやなあーって思いました。
- ・中国語おもしろかったです。
- ・中国語が、思ってたのよりも楽しそうだった。
- ・くわしい知識がなくても授業がちゃんと理解できてよかったです。楽しく授業を受けられました。
- ・どちらもわかりやすくおもしろかった。人文学科だけど中国語に興味を持てた。
- ・思ってた以上に興味を持つことができた。
- ・高校の授業よりも自由度が高く、とても楽しかったです。
- ・楽しかった。
- ・良かった。
- ・午後の授業は楽しかったです。
- ・おもしろかった。
- ・今まで知り得なかった深い部分を知ることが出来たように思う。中国語は日本語に似ていてやりやすいと思った。
- ・今まで習ってきた知識と今回のガイダンスと比べ、少しの違いが生じてきていて、驚いた。
- ・今まで大学で授業は一度も受けたことがなかったので、今回の体験授業はとても学校の雰囲気を知る良い体験になったので、このような取り組みを続けていくべきだと思う。
- ・とてもわかりやすく、よかったです。
- ・中国語を少し覚えられてよかったです。
- ・話がわかりやすくよかったです。
- ・中国学科の体験授業がおもしろかった。
- ・意外に中国語おもしろかった。
- ・とても難しくついていけなかった。
- ・とてもわかりやすく楽しかったです。
- ・大学での授業がどのようなものか少しわかってよかったです。
- ・午後の授業が参加型でおもしろかった。
- ・雰囲気が柔らかくよかったです。
- ・丁寧に教えてくれてよかったです。
- ・大学の雰囲気がわかってよかったです。
- ・先生がおもしろかった。
- ・中国語が楽しかったです。(同2名)
- ・とても楽しく中国語に興味がわきました。
- ・大学の雰囲気がわかってよかったです。

入学前教育（授業体験コース）で実施して欲しかった事。

- ・サークル紹介とか。
- ・在校生のなんか。

- ・ヒンドゥー語。
- ・大学内の案内ツアー。
- ・誰が同じ学科かわからなかった。
- ・せっかくの体験授業なので2時間だけでなくもっと授業を増やしてほしい。
- ・サークル見学。
- ・英語のこと。
- ・学科ごとに体験授業をしてほしいです。

<教育学部>

体験授業を受けた感想

- ・今まであまり考えたことのない視点で授業を受けることが出来て楽しかった。
- ・教室という言葉にはいろんな意味があるんだなと思いました。
- ・なんか、イメージしている授業と違っていた。なんかただ書くだけってイメージだったので、いろんなことを話してくれて楽しく授業が受けれました。
- ・先輩たちの話がすごく良かった。この4年間がんばろうと思った。
- ・とてもよかったです。いろんな友達と知り合う機会を作ってくださってありがとうございました！
- ・おもしろかった。この大学にして、よかったと改めて思った。
- ・自分の興味のある内容の勉強がこれからできるので、今日の体験授業を楽しみにしていました。実際に授業を聞いてて本当にわかりやすく楽しかった。
- ・大学の授業が楽しみになりました。
- ・各授業とも何を目的にして学ぶのがよくわかった。話もわかりやすく来てよかったと思う。
- ・すごく楽しかったです。大学はもっときっちり授業をするのかなと思っていたのですが、そうではなくわかりやすく具体的に楽しい授業だったので、大学は楽しみになりました。
- ・あっという間に時間が過ぎました。
- ・先生1人1人がおもしろくて、とても説明がわかりやすかったです。不安が消えました。
- ・教師という職業について、考えることを初めてしたのでおもしろかったです。大学に入ってからもっと色々学びたいと思いました。
- ・話がわかりやすく、楽しくてよかったです。
- ・自分の興味あることについての話は楽しかったです！ 4月に入学するのがすごく楽しみになりました！ 入学後にさらに多くのことを学びたいと思いました。
- ・教育のことを早く学びたい、知りたいと思いました。
- ・おもしろくてすぐに時間が過ぎました。もっと聞きたいと思いました。
- ・たのしかったです。
- ・話だけじゃなく、スライドやみんなと教育について考えたりできたのですごくわかりやすかった。先生がとても楽しくておもしろかった。
- ・先生がおもしろかった！ 早く大学で授業を受けたいとおもった！
- ・すごくわかりやすい話し方で、内容もすごく感心するものでした。体験授業に参加してよかったです。
- ・臨床心理の時の絵を描く授業は楽しかったです。教育のことについても深いことが知れてよかったです。
- ・大学生として実感がわいてきた。

- ・普段わかっているようで実はわかっていない「教育」「心理学」について簡単にはあるが、話が聞けてよかった。
- ・先生の授業がわかりやすかった。
- ・おもしろかった。
- ・午前、午後ともに楽しい授業だった。とても改めて興味を持ちました。
- ・高校の授業と少しちがっていた。
- ・かたくるしい先生ばっかかと思ったけどそうじゃなくてたのしかった。友だちつくれるか不安かも。早く4月になってほしいと思いました。

入学前教育（授業体験コース）で実施して欲しかった事。

- ・十分です。楽しかったです。
- ・今回の内容がすごくよかったです。
- ・時間を増やしてほしい。

<社会学部>

体験授業を受けた感想。

- ・環境学はとても身近なことなので興味がわいた。
- ・むずかしい内容で大学に入って、とても努力しないといけないと思いました。高校との勉強のやり方の違いがわかりました。
- ・どんな感じなのかがわかったのでよかった。
- ・大学で受ける授業の雰囲気を知れてよかったです。
- ・大学の授業は楽しみでもあり、難しそうでもあるなと思った。
- ・高校の授業とは印象がとても異なった。
- ・むずかしかった。
- ・勉強になりました。
- ・むずかしい内容だったが、説明がわかりやすかった。
- ・短い時間だったと思うけど、大学の雰囲気がわかってよかった。
- ・楽しかった。
- ・まあまあおもしろかった。
- ・わかりやすく楽しかった！！
- ・わかりやすく4月から楽しみです。
- ・参考資料や教科書がなかったため、いまいち話に入りにくかった。先生の授業がおもしろかった。
- ・高校と大学の授業の違い。
- ・専門的な内容になってきて、すごく楽しかった。
- ・環境のことを学ぶのが、すごく自分に取り入れやすかったです。
- ・午後の授業は自分の興味のあることだったので、受けて本当によかったです。
- ・大学の授業がどんななのかわかった。
- ・おもしろかった。90分の長さは不安だけど、授業が楽しみになった。
- ・内容が難しくてよくわからなかった（午前）。聞き取りやすく、わかりやすかった（午後）。

- ・今まで知らなかったこと、考え方を知った。高校と違う内容の細かい教え方だった。
- ・大学でどのようなことを学ぶか具体的にわかって、これからのために役立つと思った。
- ・楽しかった。
- ・高校の授業とは全然違っていた。難しかったけど入学する前にいい経験になった。
- ・どんな感じがよくわかった。
- ・興味深かった。
- ・すごく楽しかったです。今日来てよかったです。
- ・大学の授業の雰囲気を知ることが出来た。
- ・難しい授業もあったけどわかりやすかったです。

入学前教育（授業体験コース）で実施して欲しかった事。

- ・大学の仕組みや受ける授業の数や単位制の仕組みが知りたかったです。
- ・最初の移動の時、なぜ一学科ごとに移動させなかったのですか？あれだけ同時にやったら混乱が生じるのがなぜわからなかったのですか？
一学科ごとならスムーズにかつ迷子になる可能性はかなり低くなると思われませんが、自分は迷いませんでしたが、一人迷っていた人もいましたよ。
最後に「迷子にならないように注意してください」と言った先生、ものすごくおもしろかったです。迷子になっても仕方ないです、あれは。
- ・資料に沿って話を進めてほしかった。
- ・交流会みたいな時間がほしかった。
- ・ディベートを何人かのグループと作りやってみたかった。

<社会福祉学部>

体験授業を受けた感想。

- ・良かったと思います。
- ・物事のとらえ方とか、考え方が少し変わったと思う。
- ・とてもおもしろい内容だった。
- ・わかりやすくてよかったです。いろいろ学べました。
- ・思ったよりおもしろかった。
- ・授業が体験できて良かった。
- ・初めよりは不安もなくなったし、早く学びたいと思った。
- ・わかりやすくて、納得できるような授業だった。
- ・大学の授業の雰囲気がわかって良かったと思います。（同2名）
- ・台湾の貴重な話も聞けてとても勉強になった。また来年話を聞きたいと思う。
- ・パソコンを使ってスライドなど見て、こんな風に勉強すると聞き、わかりやすかったです。いろいろなことを知るためには土台が重要だということ学びました。
- ・難しかった。
- ・簡単なクイズも交えながらだったので、おもしろかった。
- ・これからどんな勉強をしていくのかが少しだけわかった。

- ・大学の事でわからなかった事がたくさんわかり、よかったです。
- ・大学に少しでも慣れておくため。
- ・よくわかった。
- ・私が知らなかった事や現在の社会（東アジア）の事がわかったし、福祉についてもっと興味を持てた。
- ・今からたくさん勉強してから、大学へ入学したいと思った。
- ・いろいろな方法を使って話されたのでわかりやすかったです。
- ・スライドなど使って授業をしていたのは、あまり高校の授業と変わらないだと思った。そして、いろんな例を使って説明してくれたのがわかりやすくて、おもしろかった。
- ・先生の話は聞きやすかった。
- ・難しい内容だったが、パソコンなどの資料と、先生のわかりやすい説明のおかげで少しはついていけたと思う。
- ・今まで勉強した事のないちょっと変わった授業を経験できて良かった。

入学前教育（授業体験コース）で実施して欲しかった事。

- ・自己紹介。
- ・先輩からのワンポイントアドバイスのもの。
- ・資格ごとにこの履修科目を取ればいいのか教えて欲しかった。

<保健医療技術学部>

体験授業を受けた感想

- ・話がわかりやすく、聞きやすかったです。
- ・おもしろかった。
- ・早く入学して専門知識を身につけていきたいと思った。
- ・楽しかったです！
- ・どのような事をこれから学んでいくかがよくわかった。
- ・大学に入ってからの大変さや、何を学ぶかなどよくわかりました。
- ・すごい緊張した雰囲気で行なわれると思っていたけど、すごい楽しく受けられました。大学の授業もとても関心が持てました。
- ・楽しかったです。また、4月から来るのが楽しみになりました。

7. 入学前教育の実施に伴う課題

——今後の展開に向けた振り返り——

さて、こうして今回初めて実施した授業体験を始め、入学前教育全体として想定をはるかに越えた確かな手応えを得ることができた。従来は入学前教育としてただそれだけで実施していたレポート作成に授業体験を加えた2コース制としたこと、対象者を、すでに実施率（入学手続完了者に対するレポート作成・提出者の割合）が55.1%にまで落ちていた公募制推薦を外して特別推薦等に限定したこと、また実施体制を整備し、とりわけ担当者の並々ならぬ理解と協力を得たことなど、確かにこれら改善に向けた取組の成果には違い

ないが、それ以上に、理由としてまず挙げるべきは、むしろ受講者のこの入学前教育に寄せる期待の高さであろう。上記の実施結果、アンケート結果とも、そのことを如実にものがたる。

また一方、今後の入学前教育に対する本学の取り組みを考える上にも、今回挙げた実績は重要である。入学前教育の目的自体も、この実績を踏まえ、見直しを含めた検討が必要である。その一助として、ここでは入学前教育の目的・内容などをめぐって、過去に遡り経緯を振り返りながらいくつか課題を取り上げてみる。

入学前教育を始めた当初は、特別推薦等の入試合格者を対象に本学入学までの相当長期にわたる期間、学習意欲あるいはモチベーションを維持・継続させることを主目的としていたが、実施3年後の2005年度末に、「入試種別によって各学部・学科から様々な意見が出され、最終的には完全な共通の目的をまとめられなかった」（教授法開発室「平成17年度AO選抜（以下略）入試対象者への入学前教育実施について」と題する資料。2005年4月19日）という状況のなかで、実施目的として掲げたのが次の3点である。

- (1) 入学後の学部・学科（コース）における専門教育への導入
- (2) 大学生としての基礎学力の自己把握とその習得
- (3) 新入生の入学までのモチベーション持続

(2) に関しては、すでに2001年度春学期オリエンテーション時に「学生自身に、自らの基礎学力、一般教養学力について自覚させ、自立的学習への課題を明確にさせる」ことを目的とした基礎学力調査を新入生を対象に開始していたこと、さらに2004年度からは同時期に新入生対象の英語基礎力調査にも踏み切っていたことなどが背景にある。

これら(1)～(3)を目的とした実際の入学前教育の実施内容は、入試種別によって異なる。大別して2種類あり、対象者の最も多い特推・公募推以下は、学部・学科ごとに課題図書や設題を選定また指定し、それに即してレポートの作成・提出を課し、そのレポートを添削した後に返却するというかたちをとる。AO選抜は、対象者が少なく、よりきめ細かな内容となっている。各学科ごとの実施内容は次の通り。

- 英米学科：①指定した英文の要約と感想文作成（英文）
 - ②MD録音の英語を聞き問題を解答
 - ③ネイティブスピーカーとの電話コミュニケーション
 - ①～③の課題を4回実施（11月、12月、1月、2月）。全て添削のうえ返却。
- 公共政策学科：
 - ①身近な地域の問題の状況説明、問題点、解決策を考えさせる（探求計画書 400字）
 - ②添削された探求計画書をもとに、その問題を取り上げた新聞・雑誌等を図書館等で探してまとめる（中間報告書 800字）
 - ③添削された探求計画書、中間報告書から見解をまとめる（最終報告書 2000字）
 - ④特別推薦・公募制推薦と同様の入学前教育の課題以上を実施（①11月、②12月、③2月、④12月）。全て添削のうえ返却。

○ 社会福祉学科：

- ①新聞・雑誌等から自分の関心ある内容を要約
- ②指定教材（英字）の翻訳と要約および感想まとめ
- ③指定教材（通信教育部発行教材）の感想まとめ

①②の課題を4回実施（11月、12月、1月、2月）。③の課題を実施（12月）。全て添削のうえ返却。

本学が実施したこの入学前教育の内容は、当時すでに全国の大学に広がり始めていた入学前教育のごく一般的な傾向にそうものであった。山本以和子「リメディアル教育の現状～大学アンケートから～」(『Between』No.176。2001年7・8月)がプレアドミッション教育に関するアンケート調査を基にとりまとめた表は、各大学での実際の取組事例を内容ごとに分類して次のように示す。

	国公立大学	私立大学
本を読む	3	10
読書感想文	5	19
課題を課す	1	20
小論文・レポート作成	3	31
講義を実施	2	2
英語を使用した学習	2	18
高校教科書の復習	1	5
合宿の実施	2	0
討論会の実施	0	2
見学会の実施	0	1
ガイダンスの実施	0	6

この山本氏のアンケート調査結果を採りあげている『多様化する学生に対応した教育改革——大学教務研究委員会研究報告——』（日本私立大学協会発行。2004年4月）も「多様化する学生に対応した教育取り組みに関するアンケート」(私大協が2002年11月に実施)の集計結果について次のように述べている。

実施内容の内訳は、「レポート・小論文課題図書など大学教育への動機づけとなるものを中心に実施している」37.2%、「補習教育を自大学の教員で実施している」10.0%、「補習教育を予備校・高校等にアウトソーシングして実施している」3.1%、「補習教育を自大学の教員と他大学・専門学校・高校の教員で実施している」0.6%の順となっています（113ページ）。

こうした全国の大学の動向を踏まえ、本学の入学前教育をめぐって懸案であった共通の目的について議論を重ね、平成18年度入学前教育は「学部または学科専門教育への導入

教育を共通の実施目的とした上で、それに即した学部・学科コンセプトを明らかにすること」（「平成18年度入学前教育について」と題する教務委員会資料。2005年5月18日）が提起されている。またこれに併せ、仏教精神に立脚する大学として「本学独自の入学前教育を実施すること」を検討課題とすべきことに言及している。後者は、今回の授業体験コースの入学前教育の皮切りに位置する自校教育として実現をみているが、ほぼこの提起の延長上に本学の入学前教育は位置する。

今日、入学前教育に対する各大学の取組は、まさに多様・多彩である。インターネットを利用した「入学前eラーニング」制度の普及も、もはや時間の問題でしかない。ただ、しかし先進的な取組ばかりに目を奪われる愚は避けなければならない。新たな展開は、むしろ導入教育の一環としてどうこれを実質化するかにかかっている。前掲私大協の『多様化する学生に対応した教育改革』は、入学前教育を、補習教育・リメディアル教育、大学への転換教育、進路教育・キャリア教育などと並ぶ広義の導入教育として位置づける。そしてあるべき導入教育について次のように提言する。

ユニバーサル化時代を迎えた大学の一年次教育が担うべき役割は、「①未履修科目の補習、②基礎学力不足への補習、③学習スキルの教授、④学問研究方法の教授、⑤学習習慣の確立、⑥大学生活から社会生活の転換」と幅広いものがありますが、導入教育の実施目的・実践内容は、入学者のタイプを含めて大学の属性によって異なることは言うまでもなく、各大学は自らの教育理念と目的に基づいて、高校の課程と違う大学の初習教育プログラムの実施内容を独自にデザインすべきであると考えられます。

入学前教育をそれだけで実施するのではなく、広くこうした導入教育の一環としてそれとの有機的な連携をはかることがまずもって課題である。それには、本学の属性や教育理念（建学の精神）に基づく体系的な教育プログラムに組み入れ、大学の授業としてまず真っ先に受講する、すなわち導入教育の先駆けに当たる教育としての確たる位置づけが前提となるであろう。もちろん、昨年度学生支援GPとして採択された縁プログラムとその教育の体系性のなかで繋げることも、これまた大きな課題である。これらなお越えなければならない幾多の課題解決に向けた取組を、それこそ大きな期待を込めて待ち望んでいることを今回のアンケートは訴えてもいるはずである。

レポート作成コース 受講者数【表1】

	AO 選抜		特別推薦						宗門後継者		同窓		帰国生徒		学科合計				学部合計				総合計					
	指定校		課外活動		スポーツ		入学		入学		入学		入学		入学		入学		入学		入学		入学		入学			
	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数	入学 手続者数	受講者数		
人文	浄土 / 仏教	-	-	1	1	-	1	-	-	0	0	-	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	仏教芸術	-	-	0	0	-	0	-	-	0	0	-	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	日本史	-	-	1	1	2	1	32	15	8	2	-	-	81	35	43.2%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	アジア史	-	-	0	0	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	地域文化	-	-	4	1	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	日本文学	-	-	6	1	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
中国	-	-	0	0	-	0	-	-	1	0	-	-	-	5	0	0.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
英米	5	1	12	4	3	2	-	-	4	1	1	1	25	8	32.0%	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
教育	4	2	28	18	-	-	4	3	4	1	1	1	41	24	58.5%	0	4	2	2	2	2	2	48	30	62.5%	-	108	
臨床	-	-	2	1	2	2	1	-	2	2	-	-	7	6	85.7%	-	-	-	-	-	-	-	78	13	16.7%	-	-	
現社	-	-	32	7	1	0	9	-	6	0	-	-	48	7	14.6%	-	-	-	-	-	-	-	61	18	29.5%	-	-	
公共	6	4	15	2	3	0	3	-	3	0	-	-	30	6	20.0%	-	-	-	-	-	-	61	18	29.5%	-	-		
社福	6	4	38	11	9	1	2	-	6	2	-	-	61	18	29.5%	-	-	-	-	-	-	61	18	29.5%	-	-		
理学	3	2	-	-	-	-	-	-	2	0	-	-	5	2	40.0%	-	-	-	-	-	-	8	4	50.0%	-	-		
作業	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	2	66.7%	-	-	-	-	-	-	8	4	50.0%	-	-		
入試種別合計	27	15	157	55	31	10	21	5	36	8	2	2	306	108	35.3%	0	0	0	0	0	0	306	108	35.3%	35.3%	35.3%	35.3%	35.3%
	55.6%		35.0%		32.3%		23.8%		22.2%				46.9%		35.3%								35.3%					

授業体験コース 受講者数（入学手続者数に対する受講者数の割合）【表2】

	AO選抜		特別推薦											学部合計	総合計														
	入学手続者数	申込者数	指定校	課外活動						宗門後継者					同窓	帰国生徒	学科合計			入学手続者数	申込者数	受講者数							
				入学手続者数	申込者数	受講者数	入学手続者数	申込者数	受講者数	入学手続者数	申込者数	受講者数	入学手続者数				申込者数	受講者数	受講率(%)				入学手続者数	申込者数	受講率(%)				
人文	-	-	27	17	16	7	8	2	0	0	32	5	4	8	5	4	-	-	32	34	32	39.5							
中国	-	-	3	2	2	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	4	4	4	80.0	55	51	45.9				
英米	5	4	12	8	7	3	3	-	-	-	-	-	-	4	1	1	1	1	15	17	15	60.0							
教育	4	3	28	24	24	-	-	4	1	0	-	-	-	4	2	2	1	0	29	30	29	70.7	35	33	68.8				
臨床	-	-	2	1	1	2	2	1	1	0	-	-	-	2	1	1	-	-	4	5	4	57.1							
現社	-	-	32	21	20	1	0	9	0	0	-	-	-	6	2	2	-	-	22	23	22	45.8	78	44	56.4				
公共	6	6	15	11	11	3	3	3	0	0	-	-	-	3	2	2	-	-	22	22	22	73.3							
福祉	6	4	38	28	25	9	4	2	1	0	-	-	-	6	1	1	-	-	32	38	32	52.5	61	38	52.5				
理学	3	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	-	-	5	5	5	100	8	8	100				
作業	3	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	3	100							
入試種別合計	27	23	157	112	106	31	20	19	21	3	0	32	5	4	36	17	16	2	1	168	181	168	54.9	306	181	54.9			
	81.5%		67.5%			61.3%			0.0%			12.5%			44.4%			50.0%		54.9%		54.9%	54.9%			54.9%			

受講率＝受講者数÷入学手続者数

人文学科（課外活動）は、申し込みをせずに当日参加した者が1名いた為、受講者数が申込者数を上回った。

入試種別受講者数

入試種別受講者数（レポート作成コースのみ）【表 3】

入試種別	手続完了者数（名）	受講者数（名）	受講率（％）	受講者数内訳（％）
A O 選抜	27	2	7.4	4.3
特別推薦（指定校）	157	18	11.5	38.3
特別推薦（課外活動）	31	2	6.5	4.3
特別推薦（ｽﾎﾟｰﾂ強化枠）	21	5	23.8	10.6
同窓	36	6	16.7	12.8
宗門後継者	32	14	43.8	29.8
帰国生徒	2	0	0.0	0.0
合計	306	47	15.4	100

入試種別受講者数（授業体験コースのみ）【表 4】

入試種別	手続完了者数（名）	受講者数（名）	受講率（％）	受講者数内訳（％）
A O 選抜	27	9	33.3	8.4
特別推薦（指定校）	157	69	43.9	64.5
特別推薦（課外活動）	31	11	35.5	10.3
特別推薦（ｽﾎﾟｰﾂ強化枠）	21	0	0.0	0.0
同窓	36	14	38.9	13.1
宗門後継者	32	3	9.4	2.8
帰国生徒	2	1	50.0	0.9
合計	306	107	35.0	100

入試種別受講者数（両コース）【表 5】

入試種別	手続完了者数（名）	受講者数（名）	受講率（％）	受講者数内訳（％）
A O 選抜	27	13	48.1	21.3
特別推薦（指定校）	157	37	23.6	60.7
特別推薦（課外活動）	31	8	25.8	13.1
特別推薦（ｽﾎﾟｰﾂ強化枠）	21	0	0.0	0.0
同窓	36	2	5.6	3.3
宗門後継者	32	1	3.1	1.6
帰国生徒	2	0	0.0	0.0
合計	306	61	19.9	100

学部・学科別受講者数

学部・学科別受講者数（レポート作成コースのみ）【表6】

学部・学科	手続完了者数（名）	受講者数（名）	受講率（%）	受講者数内訳（%）
人文学科	81	24	29.6	51.1
中国学科	5	0	0.0	0.0
英米学科	25	3	12.0	6.4
文学部	111	27	24.3	57.4
教育学科	41	7	17.1	14.9
臨床心理学科	7	2	28.6	4.3
教育学部	48	9	18.8	19.1
現代社会学科	48	2	4.2	4.3
公共政策学科	30	0	0.0	0.0
社会学部	78	2	2.6	4.3
社会福祉学科	61	9	14.8	19.1
社会福祉学部	61	9	14.8	19.1
理学療法学科	5	0	0.0	0.0
作業療法学科	3	0	0.0	0.0
保健医療技術学部	8	0	0.0	0.0
合計	306	47	15.4	100

学部・学科別受講者数（授業体験コースのみ）【表7】

学部・学科	手続完了者数（名）	受講者数（名）	受講率（%）	受講者数内訳（%）
人文学科	81	21	25.9	19.6
中国学科	5	4	80.0	3.7
英米学科	25	10	40.0	9.3
文学部	111	35	31.5	32.7
教育学科	41	12	29.3	11.2
臨床心理学科	7	0	0.0	0.0
教育学部	48	12	25.0	11.2
現代社会学科	48	17	35.4	15.9
公共政策学科	30	16	53.3	15.0
社会学部	78	33	42.3	30.8
社会福祉学科	61	23	37.7	21.5
社会福祉学部	61	23	37.7	21.5
理学療法学科	5	3	60.0	2.8
作業療法学科	3	1	33.3	0.9
保健医療技術学部	8	4	50.0	3.7
合計	306	107	35.0	100

学部・学科別受講者数(両コース) 【表8】

学部・学科	手続完了者数(名)	受講者数(名)	受講率(%)	受講者数内訳(%)
人文学科	81	11	13.6	18.0
中国学科	5	0	0.0	0.0
英米学科	25	5	20.0	8.2
文学部	111	16	14.4	26.2
教育学科	41	17	41.5	27.9
臨床心理学科	7	4	57.1	6.6
教育学部	48	21	43.8	34.4
現代社会学科	48	5	10.4	8.2
公共政策学科	30	6	20.0	9.8
社会学部	78	11	14.1	18.0
社会福祉学科	61	9	14.8	14.8
社会福祉学部	61	9	14.8	14.8
理学療法学科	5	2	40.0	3.3
作業療法学科	3	2	66.7	3.3
保健医療技術学部	8	4	50.0	6.6
合計	306	61	19.9	100

都道府県別受講者数
(レポート作成コースのみ) 【表 9】

都道府県	受講者数	パーセント
京都市右京区	5	10.6
京都市下京区	1	2.1
京都市山科区	1	2.1
京都市中京区	1	2.1
京都市伏見区	1	2.1
京都市外	5	10.6
滋賀県	2	4.3
大阪府	7	14.9
兵庫県	1	2.1
奈良県	4	8.5
和歌山県	2	4.3
北海道	1	2.1
富山県	1	2.1
福井県	3	6.4
静岡県	1	2.1
愛知県	1	2.1
鳥取県	1	2.1
島根県	1	2.1
山口県	1	2.1
愛媛県	2	4.3
高知県	1	2.1
福岡県	1	2.1
熊本県	3	6.4
合計	47	100.0

都道府県別受講者数
(授業体験コースのみ) 【表 10】

都道府県	受講者数	パーセント
京都市右京区	11	10.3
京都市下京区	4	3.7
京都市左京区	6	5.6
京都市山科区	2	1.9
京都市上京区	1	0.9
京都市西京区	7	6.5
京都市中京区	2	1.9
京都市東山区	2	1.9
京都市南区	3	2.8
京都市伏見区	4	3.7
京都市北区	3	2.8
京都市外	16	15.0
滋賀県	16	15.0
大阪府	18	16.8
兵庫県	5	4.7
奈良県	3	2.8
和歌山県	2	1.9
岡山県	1	0.9
高知県	1	0.9
合計	107	100

都道府県別受講者数
(両コース) 【表 11】

都道府県	受講者数	パーセント
京都市右京区	4	6.6
京都市左京区	2	3.3
京都市山科区	2	3.3
京都市上京区	3	4.9
京都市西京区	1	1.6
京都市伏見区	3	4.9
京都市北区	1	1.6
京都市外	12	19.7
滋賀県	9	14.8
大阪府	15	24.6
兵庫県	1	1.6
奈良県	4	6.6
和歌山県	1	1.6
広島県	1	1.6
香川県	1	1.6
高知県	1	1.6
合計	61	100

入学前教育 アンケート集計結果

レポート作成コース アンケート集計 AO 選抜

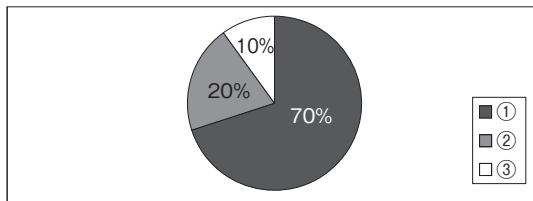
受講者数 16人 回答者数 10人 回答率 62.5%

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	7
②	わかりにくかった	2
③	どちらともいえない	1

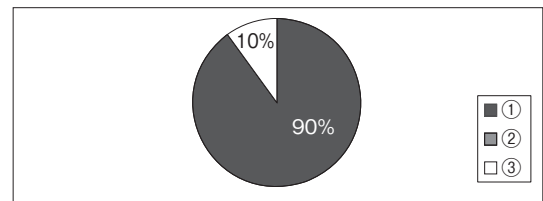
回答者数合計 10



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	9
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	1

回答者数合計 10



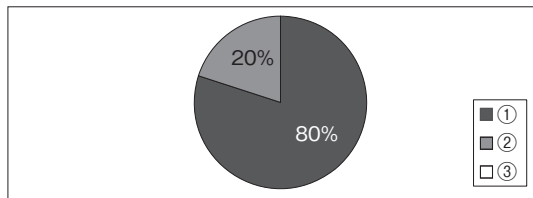
Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

第1課題

①	適当であった	8
②	簡単すぎた	2
③	難しすぎた	0

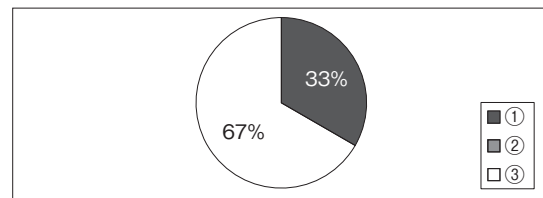
回答者数合計 10



第2課題 (英米学科・社会福祉学科のみ回答)

①	適当であった	1
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	2

回答者数合計 3



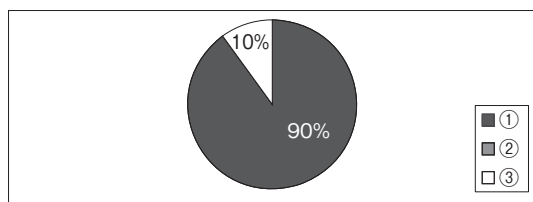
Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

第1課題

①	満足した	9
②	満足しなかった	0
③	どちらともいえない	1

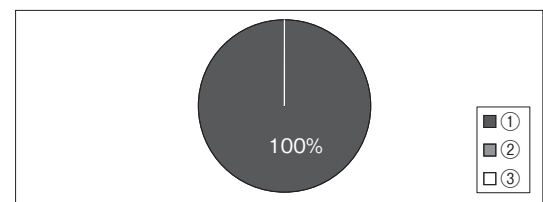
回答者数合計 10



第2課題 (英米学科・社会福祉学科のみ回答)

①	満足した	3
②	満足しなかった	0
③	どちらともいえない	0

回答者数合計 3

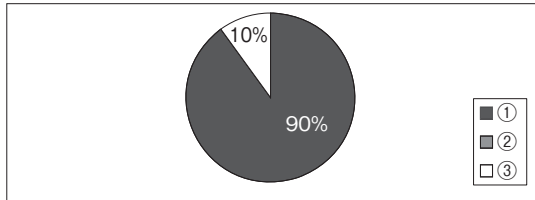


第3課題（英米学科の場合は電話インタビューについて回答してください）
回答なし

Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	9
②	早すぎた	1
③	遅すぎた	0

回答者数合計 10

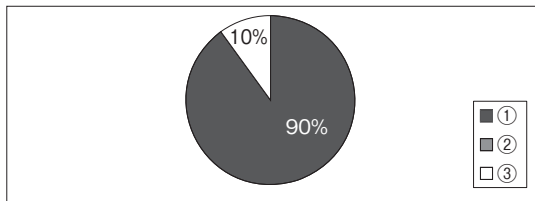


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	9
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	1

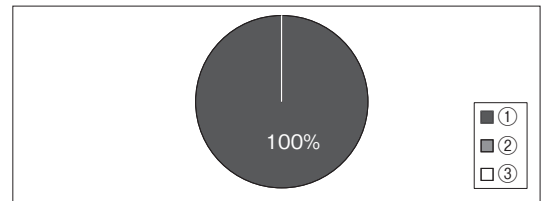
回答者数合計 10



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思いませんか？

①	思った	10
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	0

回答者数合計 10



入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）

【社会福祉学科】

- ・添削の内容がわかりやすかった。
- ・課題図書を見つけるのに苦労した。
- ・福祉の面に改めて興味をもてましたが、保育の面のこともしたかったと思いました。

【理学療法学科】

- ・レポート作成とは別に、大学入学後に必要となる教科の予習課題も出来ることならやりたいと思いました。

【作業療法学科】

- ・添削していただいたものを、もう一度私自身でやり直し、見てほしかったです。

※英米学科、教育学科、公共政策学科の記述なし

レポート作成コース アンケート集計 特別推薦・同窓・帰国生徒

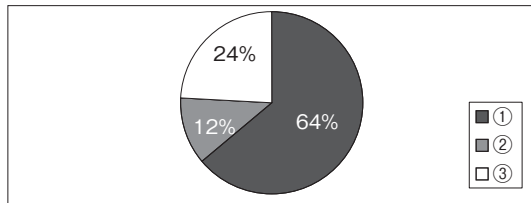
受講者数	78人	回答者数	58人	回答率	74.4%
------	-----	------	-----	-----	-------

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	37
②	わかりにくかった	7
③	どちらともいえない	14

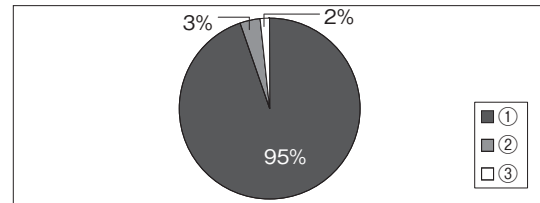
回答者数合計 58



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	55
②	早すぎた	2
③	遅すぎた	1

回答者数合計 58

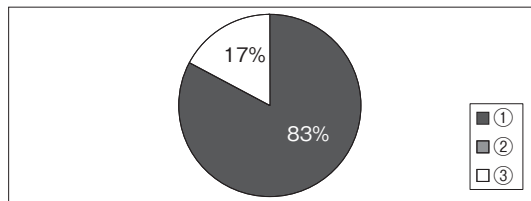


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	48
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	10

回答者数合計 58

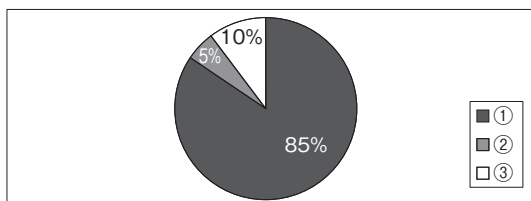


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	49
②	満足しなかった	3
③	どちらともいえない	6

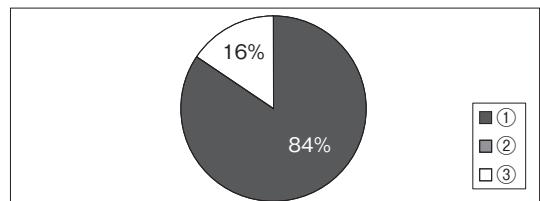
回答者数合計 58



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	49
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	9

回答者数合計 58

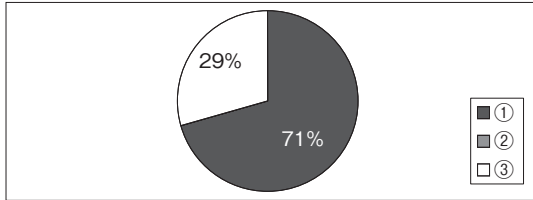


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	41
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	17

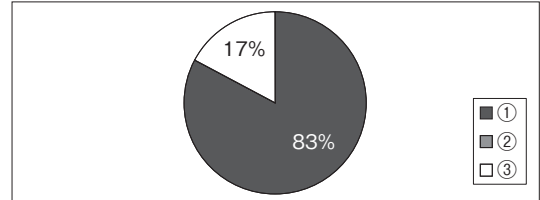
回答者数合計 58



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思われましたか？

①	思った	48
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	10

回答者数合計 58



Q5 入学前教育で実施してほしいこと（解答方法、課題内容など）。

【人文学科日本史コース】

- ・プレ講義などがあれば、参加したかったです。
- ・添削して線を引いてもらったところの何がよかったのかなど書いていただけるとさらに嬉しかったと思います。

【人文学科日本語日本文学コース】

- ・大学で一般で受験した人と同等についていくための対策（どの本を買って予習しておいたほうがいいかなど）。

【教育学科】

- ・生徒同士の会話の場を作ればよいと思いました。
- ・英語などの宿題も出してほしいです。

【社会福祉学科】

- ・課題内容をもう少し簡単にしてほしいです。（入学前教育（授業体験コース？）の昼休みが短く、食事する時間があまりなかったので、もう少し時間を長くしてほしいです。）
- ・その学科ごとの大学の授業についての説明を詳しく見聞きしたかった。（授業体験コース？）

※臨床心理学科、現代社会学科、公共政策学科では、記述なし

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【文学部】

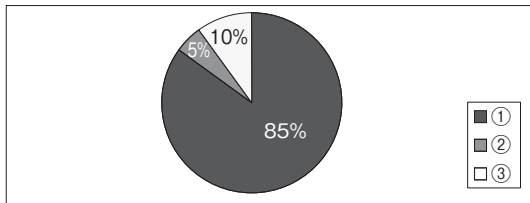
受講者数	27人	回答者数	20人	回答率	74.1%
------	-----	------	-----	-----	-------

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	17
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	2

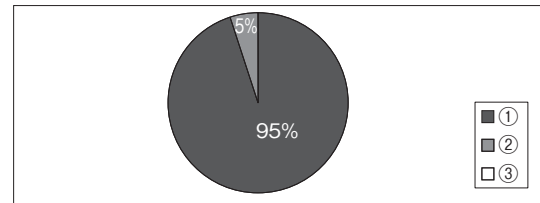
回答者数合計 20



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	19
②	早すぎた	1
③	遅すぎた	0

回答者数合計 20

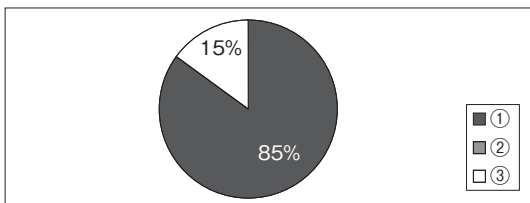


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	17
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	3

回答者数合計 20

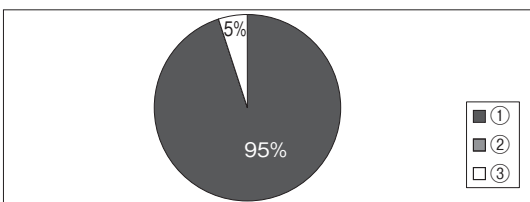


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	19
②	満足しなかった	0
③	どちらともいえない	1

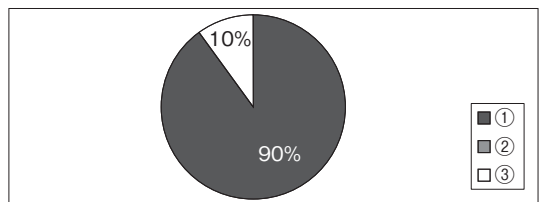
回答者数合計 20



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	18
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	2

回答者数合計 20

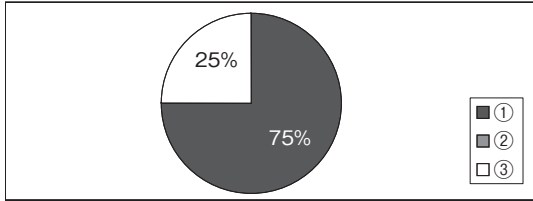


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	15
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	5

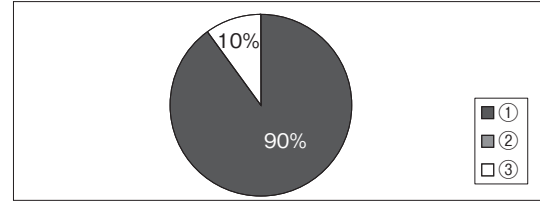
回答者数合計 20



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	18
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	2

回答者数合計 20



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

【人文学科日本史コース】

- ・プレ講義などがあれば、参加したかったです。
- ・添削して線を引いてもらったところの何がよかったのかなど書いていただけるとさらに嬉しかったと思います。

【人文学科日本語日本文学コース】

- ・大学で一般で受験した人と同等についていくための対策。（どの本を買って予習しておいたほうがいいかなど）

※人文学科浄土・仏教コース、アジア史コース、地域文化コース、英文学科の記述なし

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【人文学科】

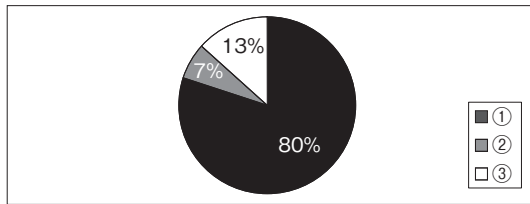
受講者数 20人 回答者数 15人 回答率 75.0%

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	12
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	2

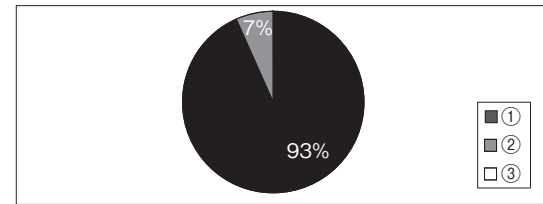
回答者数合計 15



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	14
②	早すぎた	1
③	遅すぎた	0

回答者数合計 15

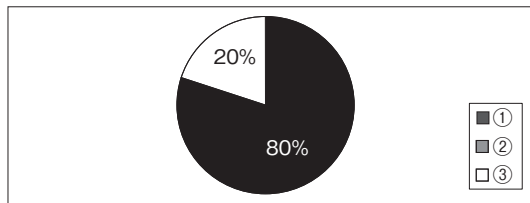


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	12
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	3

回答者数合計 15

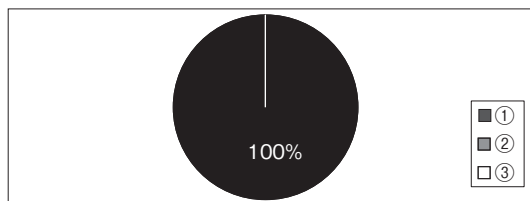


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	15
②	満足しなかった	0
③	どちらともいえない	0

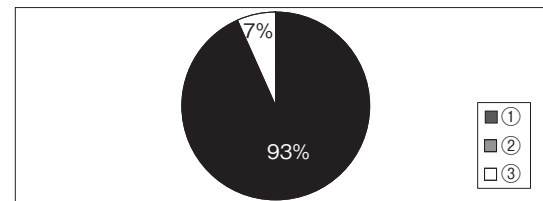
回答者数合計 15



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	14
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	1

回答者数合計 15

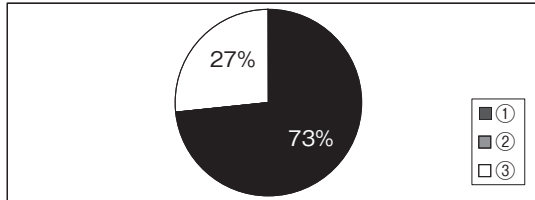


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	11
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	4

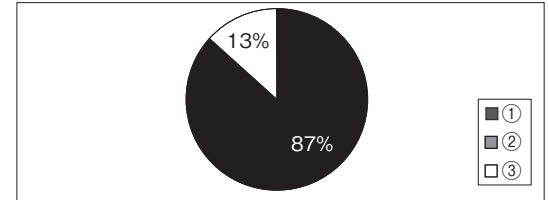
回答者数合計 15



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	13
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	2

回答者数合計 15



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

【日本史コース】

- ・プレ講義などがあれば、参加したかったです。
- ・添削して線を引いてもらったところの何がよかったのかなど書いていただけるとさらに嬉しかったと思います。

【日本語日本文学コース】

- ・大学で一般で受験した人と同等についていくための対策（どの本を買って予習しておいたほうがいいかなど）。

※浄土・仏教コース、アジア史コース、地域文化コースの記述なし

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【英米学科】

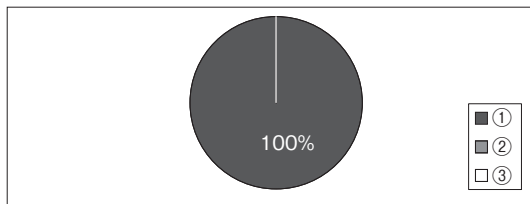
受講者数	7人	回答者数	5人	回答率	71.4%
------	----	------	----	-----	-------

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	5
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	0

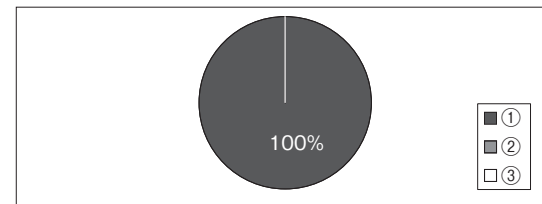
回答者数合計 5



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	5
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	0

回答者数合計 5

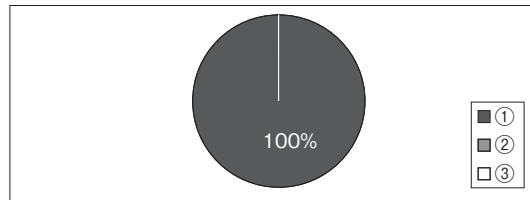


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	5
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	0

回答者数合計 5

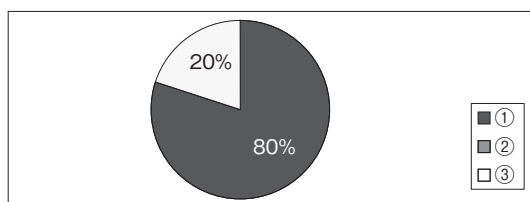


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	4
②	満足しなかった	0
③	どちらともいえない	1

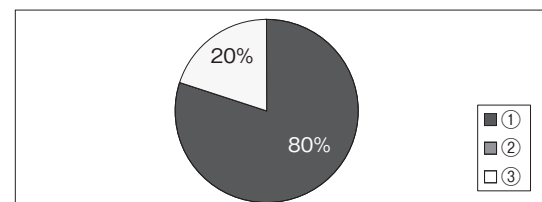
回答者数合計 5



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	4
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	1

回答者数合計 5

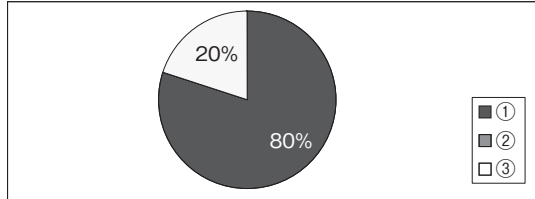


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	4
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	1

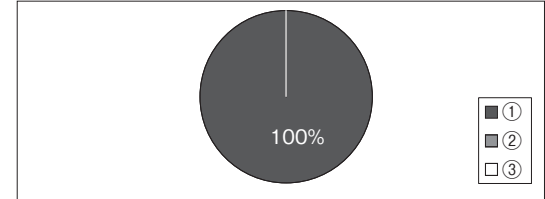
回答者数合計 5



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思われましたか？

①	思った	5
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	0

回答者数合計 5



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

記述なし

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【教育学部】

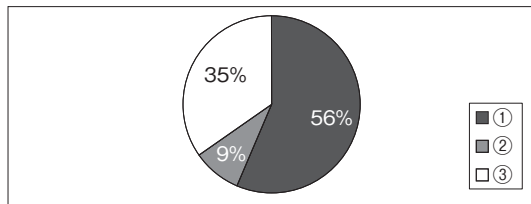
受講者数	28人	回答者数	23人	回答率	82.1%
------	-----	------	-----	-----	-------

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	13
②	わかりにくかった	2
③	どちらともいえない	8

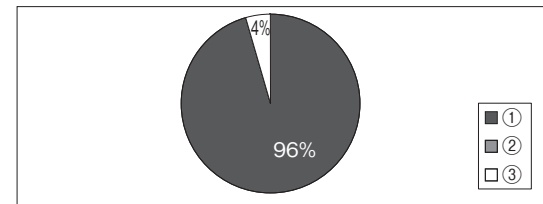
回答者数合計 23



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	22
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	1

回答者数合計 23

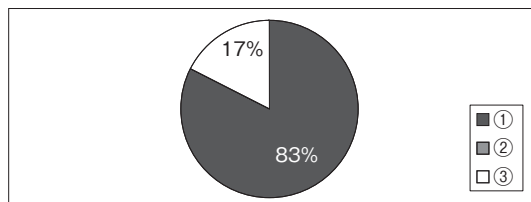


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	19
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	4

回答者数合計 23

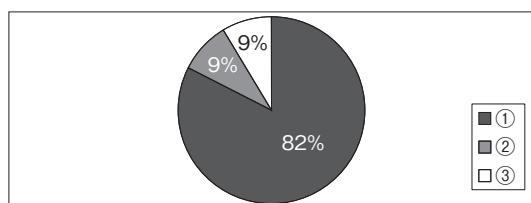


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	19
②	満足しなかった	2
③	どちらともいえない	2

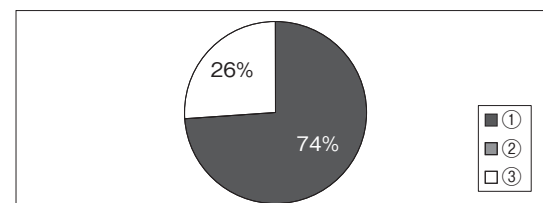
回答者数合計 23



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	17
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	6

回答者数合計 23

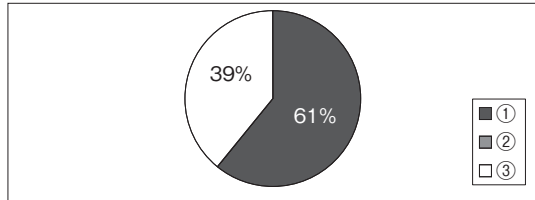


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	14
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	9

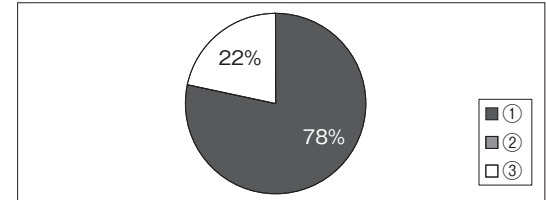
回答者数合計 23



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思われましたか？

①	思った	18
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	5

回答者数合計 23



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

【教育学科】

- ・生徒同士の会話の場を作ればよいと思いました。
- ・英語などの宿題も出してほしかったです。

※臨床心理学科の記述なし

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【教育学科】

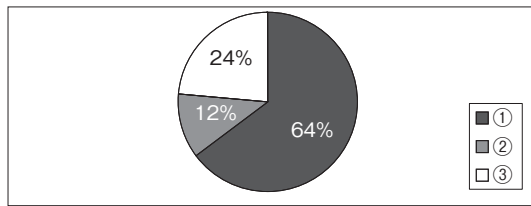
受講者数 22人 回答者数 17人 回答率 77.3%

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	11
②	わかりにくかった	2
③	どちらともいえない	4

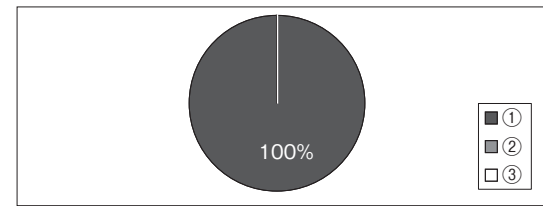
回答者数合計 17



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	17
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	0

回答者数合計 17

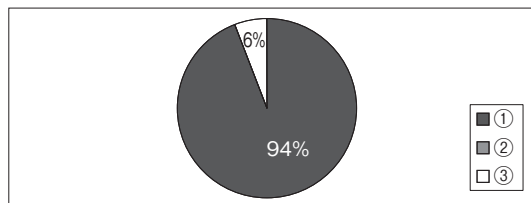


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	16
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	1

回答者数合計 17

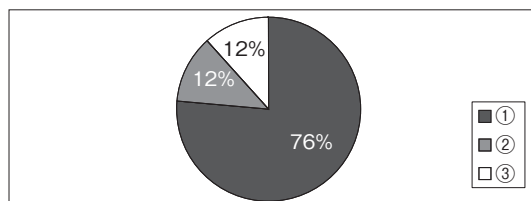


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	13
②	満足しなかった	2
③	どちらともいえない	2

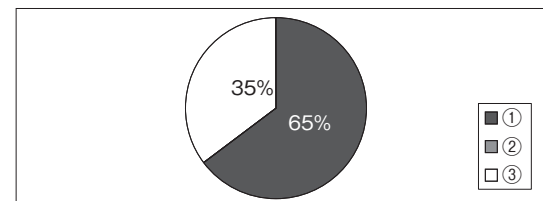
回答者数合計 17



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	11
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	6

回答者数合計 17

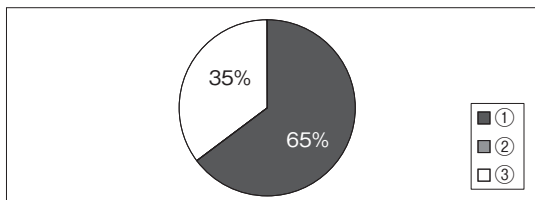


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	11
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	6

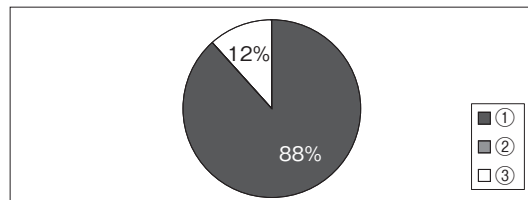
回答者数合計 17



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	15
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	2

回答者数合計 17



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

- ・生徒同士の会話の場を作ればよいと思いました。
- ・英語などの宿題も出してほしかったです。

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【臨床心理学科】

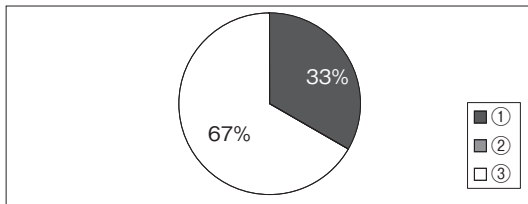
受講者数	6人	回答者数	6人	回答率	100%
------	----	------	----	-----	------

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	2
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	4

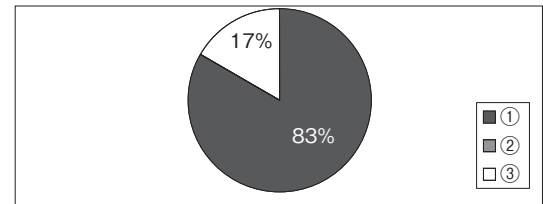
回答者数合計 6



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	5
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	1

回答者数合計 6

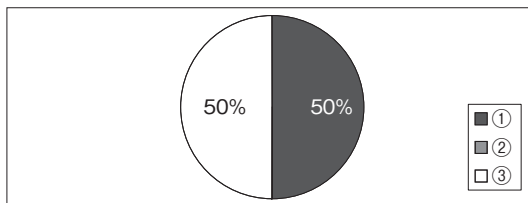


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうか？

①	適当であった	3
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	3

回答者数合計 6

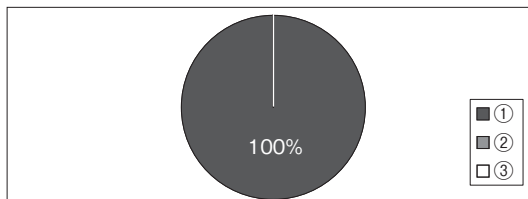


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	6
②	満足しなかった	0
③	どちらともいえない	0

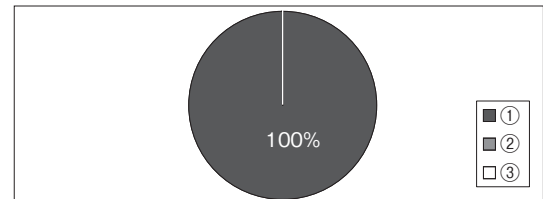
回答者数合計 6



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	6
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	0

回答者数合計 6

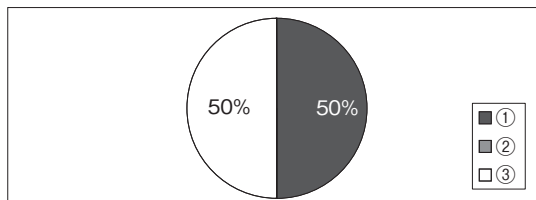


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	3
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	3

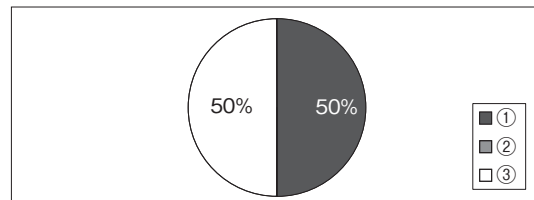
回答者数合計 6



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	3
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	3

回答者数合計 6



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

記述なし

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【社会学部】

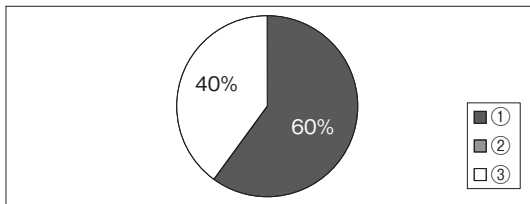
受講者数	9人	回答者数	5人	回答率	55.6%
------	----	------	----	-----	-------

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	3
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	2

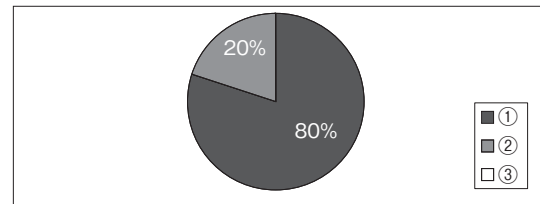
回答者数合計 5



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	4
②	早すぎた	1
③	遅すぎた	0

回答者数合計 5

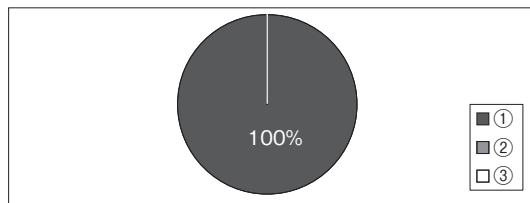


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	5
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	0

回答者数合計 5

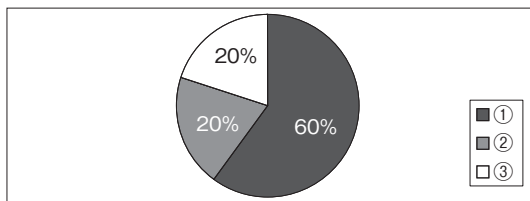


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	3
②	満足しなかった	1
③	どちらともいえない	1

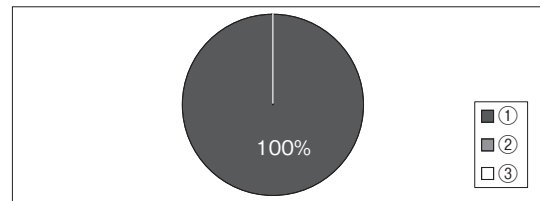
回答者数合計 5



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	5
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	0

回答者数合計 5

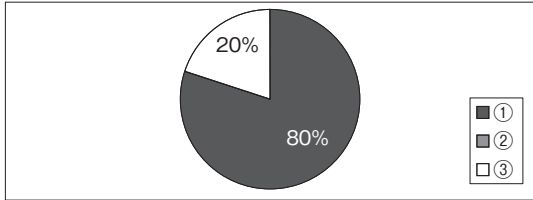


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	4
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	1

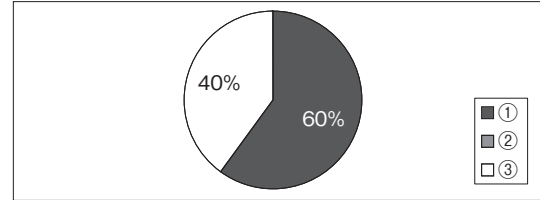
回答者数合計 5



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思われましたか？

①	思った	3
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	2

回答者数合計 5



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

記述なし

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【現代社会学科】

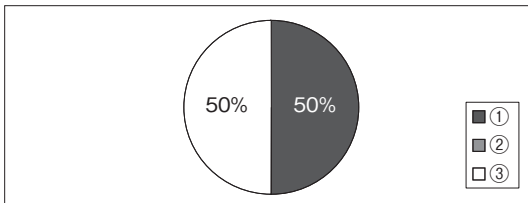
受講者数 7人 回答者数 4人 回答率 57.1%

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	2
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	2

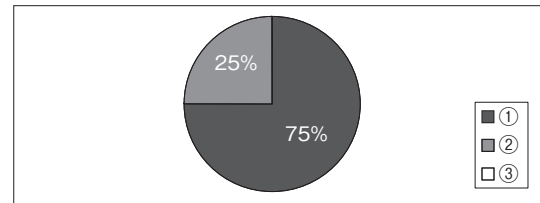
回答者数合計 4



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	3
②	早すぎた	1
③	遅すぎた	0

回答者数合計 4

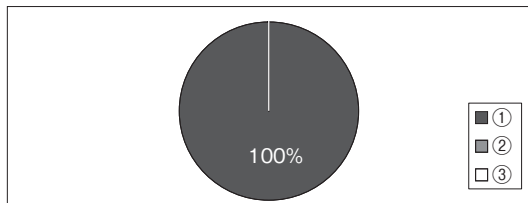


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	4
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	0

回答者数合計 4

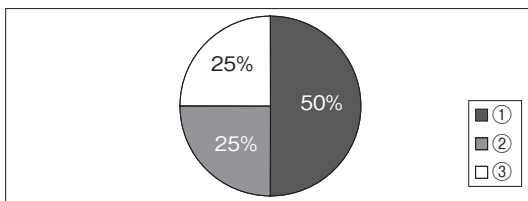


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	2
②	満足しなかった	1
③	どちらともいえない	1

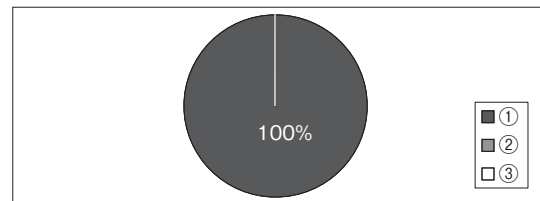
回答者数合計 4



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	4
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	0

回答者数合計 4

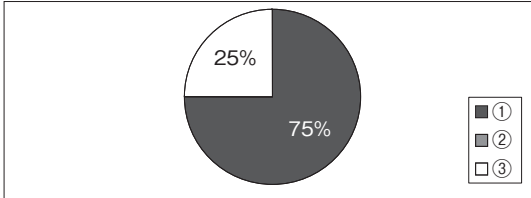


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	3
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	1

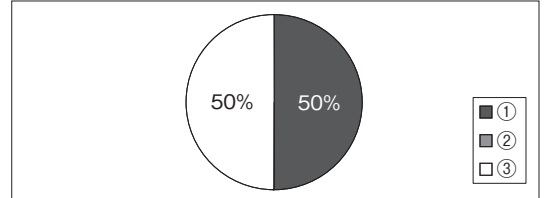
回答者数合計 4



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	2
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	2

回答者数合計 4



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

記述なし

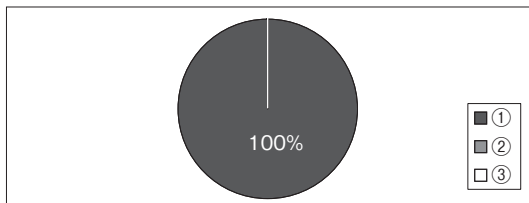
レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【公共政策学科】

受講者数 2人 回答者数 1人 回答率 50.0%

Q1 実施方法について

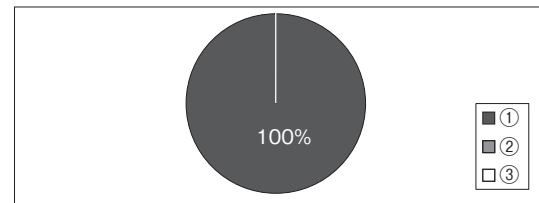
Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	1
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	0



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

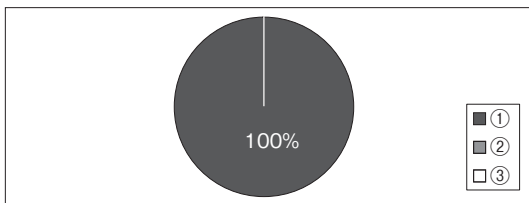
①	適当であった	1
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	0



Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

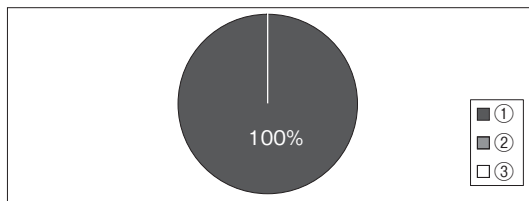
①	適当であった	1
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	0



Q3 添削等について

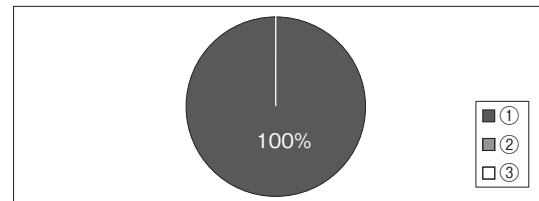
Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	1
②	満足しなかった	0
③	どちらともいえない	0



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

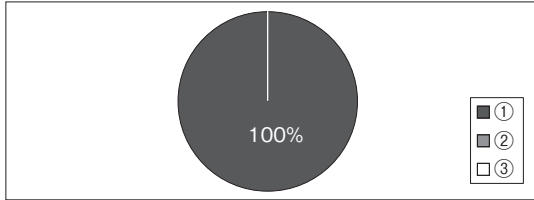
①	適当であった	1
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	0



Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

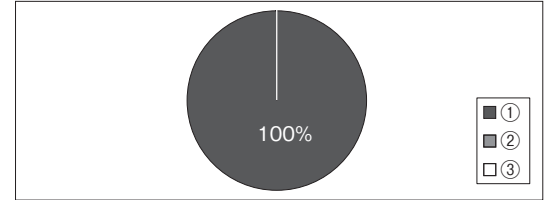
Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	1
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	0



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	1
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	0



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

記述なし

レポート作成コース アンケート集計
特別推薦・同窓・帰国生徒【社会福祉学部】

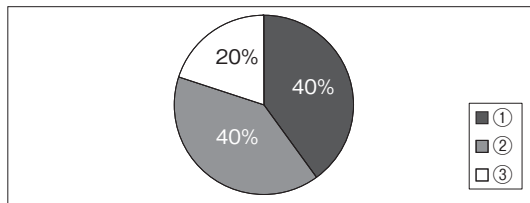
受講者数 14人 回答者数 10人 回答率 71.4%

Q1 実施方法について

Q1-1 今回のレポート課題の出題形式(論述・要約など)について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	4
②	わかりにくかった	4
③	どちらともいえない	2

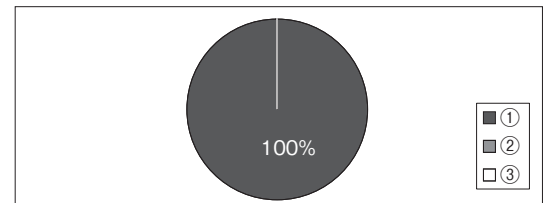
回答者数合計 10



Q1-2 提出期限について、いかがでしたか？

①	適当であった	10
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	0

回答者数合計 10

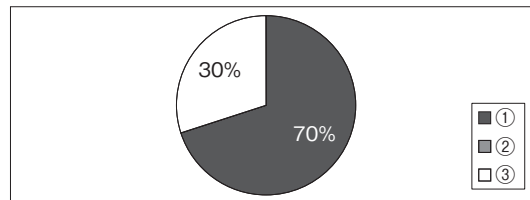


Q2 課題について

Q2-1. 課題について、内容はどうでしたか？

①	適当であった	7
②	簡単すぎた	0
③	難しすぎた	3

回答者数合計 10

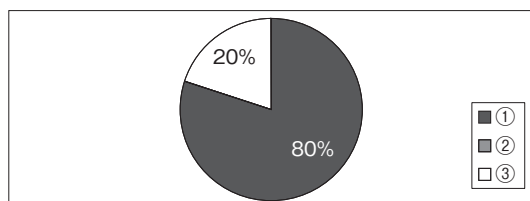


Q3 添削等について

Q3-1. 添削等の内容について、満足しましたか？

①	満足した	8
②	満足しなかった	0
③	どちらともいえない	2

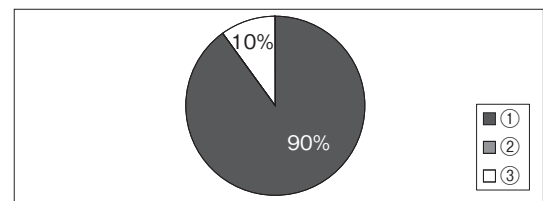
回答者数合計 10



Q3-2. 添削等の返却の時期について、いかがでしたか？

①	適当であった	9
②	早すぎた	0
③	遅すぎた	1

回答者数合計 10

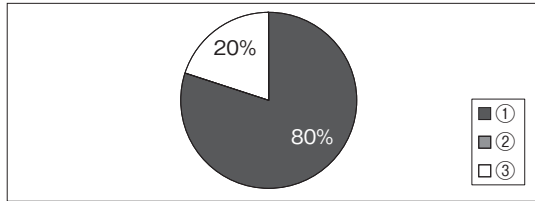


Q4 入学前教育（レポート作成コース）について

Q4-1 入学前教育（レポート作成コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	8
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	2

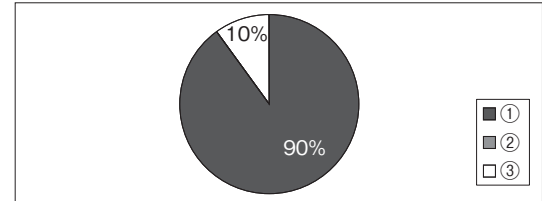
回答者数合計 10



Q4-2 入学前教育（レポート作成コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	9
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	1

回答者数合計 10



Q 5 入学前教育で実施してほしかった事（解答方法、課題内容など）。

- ・課題内容をもう少し簡単にしてほしかったです。（入学前教育（授業体験コース？）の昼休みが短く、食事する時間があまりなかったため、もう少し時間を長くして欲しかったです。）
- ・その学科ごとの大学の授業についての説明を詳しく見聞きしたかった。（授業体験コース？）

授業体験コース アンケート集計

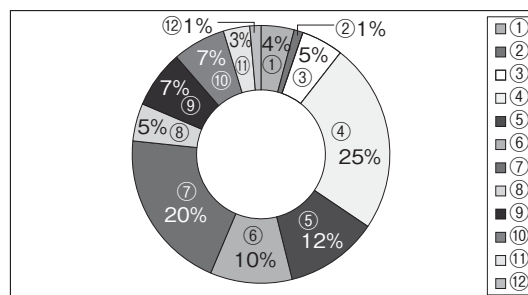
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	20
②	自宅が大学に近かったため	5
③	通学方法などを確認するため	25
④	大学の雰囲気を知らため	115
⑤	友人を作るため	56
⑥	大学生活に不安があったため	49
⑦	大学での授業内容を知るため	97
⑧	自校教育について聞きたかったため	22
⑨	各学部のガイダンスが聞きたかったため	35
⑩	体験授業の内容に興味があったため	32
⑪	教員のことを知るため	16
⑫	特に具体的な目的はない	6

回答者数合計 478

受講者数 168人 回答者数 159人 回答率 94.6%

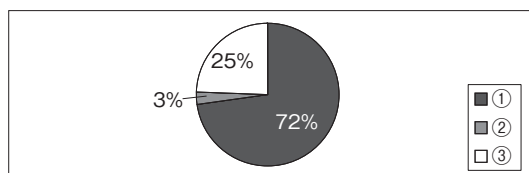


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	113
②	わかりにくかった	4
③	どちらともいえない	38

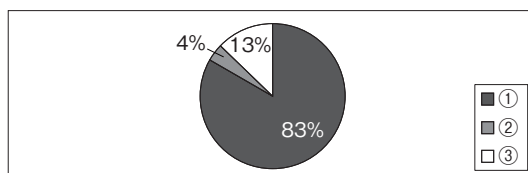
回答者数合計 155



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	131
②	わかりにくかった	6
③	どちらともいえない	20

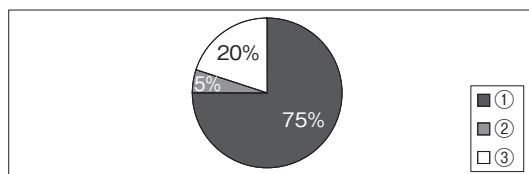
回答者数合計 157



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	117
②	わかりにくかった	8
③	どちらともいえない	31

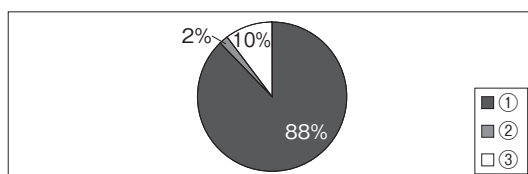
回答者数合計 156



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	129
②	わかりにくかった	3
③	どちらともいえない	15

回答者数合計 147

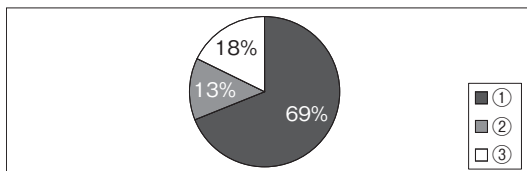


Q3 入学前教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	108
②	感じていなかった	21
③	どちらともいえない	28

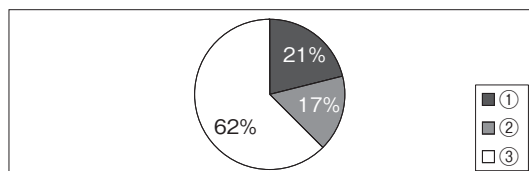
回答者数合計 157



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなかった	28
②	不安はなくならなかった	22
③	どちらともいえない	83

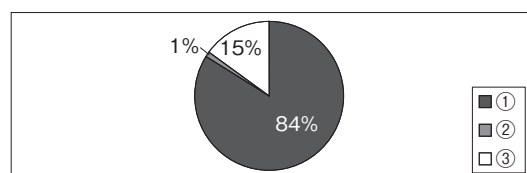
回答者数合計 133



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	129
②	持てなかった	2
③	どちらともいえない	23

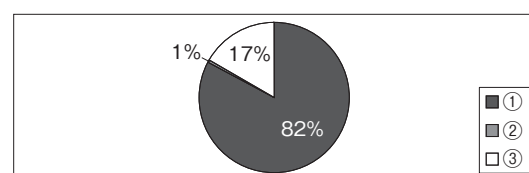
回答者数合計 154



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	129
②	思わなかった	1
③	どちらともいえない	26

回答者数合計 156



授業体験コース アンケート集計 AO 選抜

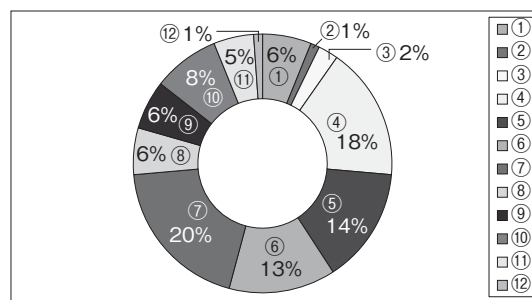
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	5
②	自宅が大学に近かったため	1
③	通学方法などを確認するため	2
④	大学の雰囲気を知らため	14
⑤	友人を作るため	12
⑥	大学生活に不安があったため	11
⑦	大学での授業内容を知るため	16
⑧	自校教育について聞きたかったため	5
⑨	各学部のガイダンスが聞きたかったため	5
⑩	体験授業の内容に興味があったため	7
⑪	教員のことを知るため	4
⑫	特に具体的な目的はない	1

回答者数合計 83

受講者数 22人 回答者数 21人 回答率 95.5%

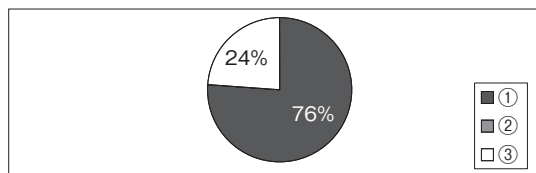


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	16
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	5

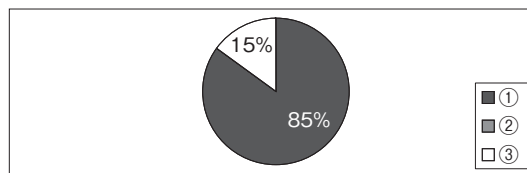
回答者数合計 21



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	17
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	3

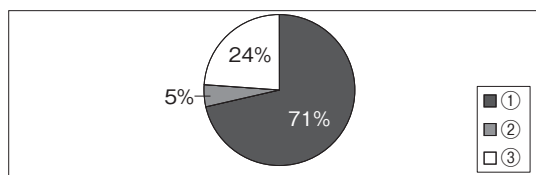
回答者数合計 20



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	15
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	5

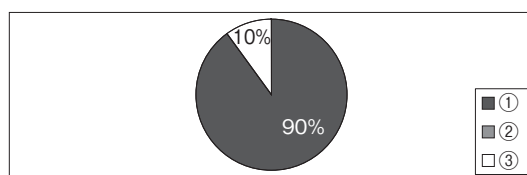
回答者数合計 21



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	18
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	2

回答者数合計 20

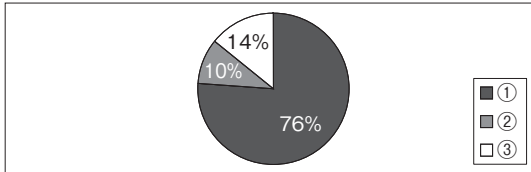


Q3 入学前教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	16
②	感じていなかった	2
③	どちらともいえない	3

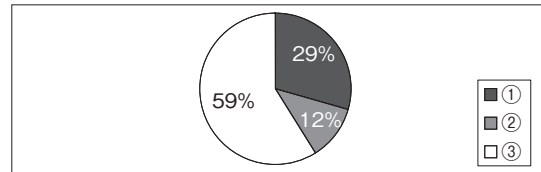
回答者数合計 21



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなかった	5
②	不安はなくならなかった	2
③	どちらともいえない	10

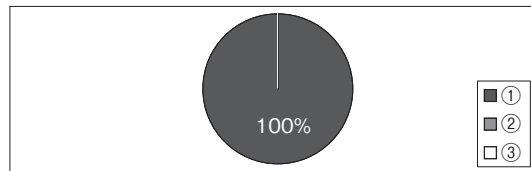
回答者数合計 17



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	21
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	0

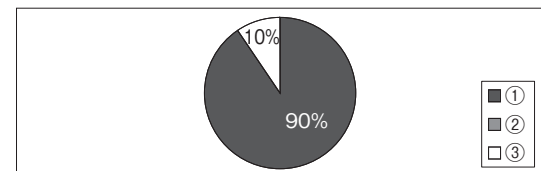
回答者数合計 21



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	19
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	2

回答者数合計 21



授業体験コース アンケート集計 特別推薦

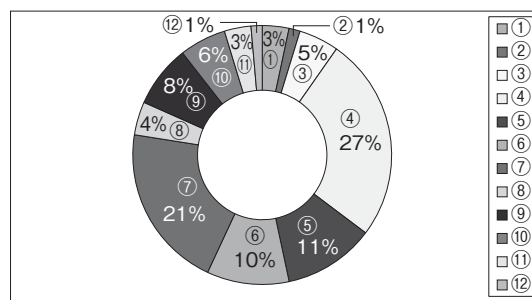
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	12
②	自宅が大学に近かったため	4
③	通学方法などを確認するため	18
④	大学の雰囲気を知らため	89
⑤	友人を作るため	39
⑥	大学生活に不安があったため	36
⑦	大学での授業内容を知るため	72
⑧	自校教育について聞きたかったため	14
⑨	各学部のガイダンスが聞きたかったため	27
⑩	体験授業の内容に興味があったため	21
⑪	教員のことを知るため	11
⑫	特に具体的な目的はない	5

回答者数合計 348

受講者数 125人 回答者数 118人 回答率 94.4%

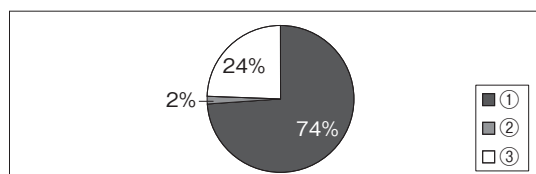


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	85
②	わかりにくかった	2
③	どちらともいえない	28

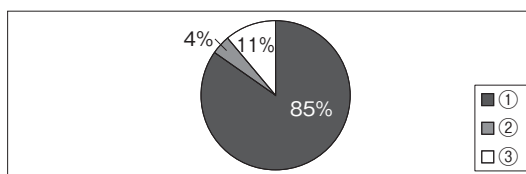
回答者数合計 115



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	100
②	わかりにくかった	5
③	どちらともいえない	13

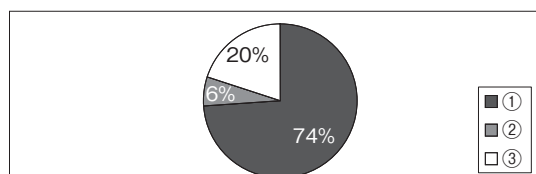
回答者数合計 118



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	85
②	わかりにくかった	7
③	どちらともいえない	23

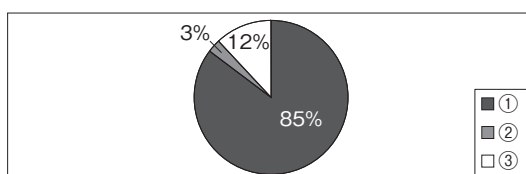
回答者数合計 115



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	92
②	わかりにくかった	3
③	どちらともいえない	13

回答者数合計 108

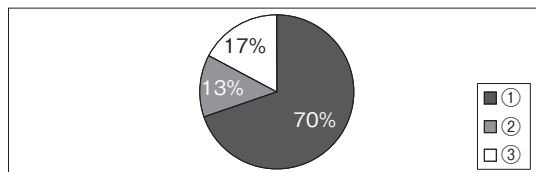


Q3 入学前 教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	81
②	感じていなかった	15
③	どちらともいえない	20

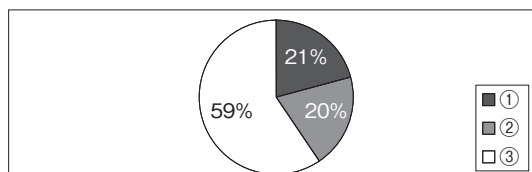
回答者数合計 116



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなかった	21
②	不安はなくならなかった	20
③	どちらともいえない	60

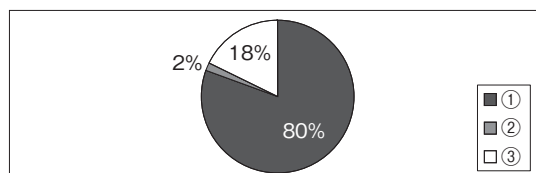
回答者数合計 101



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	91
②	持てなかった	2
③	どちらともいえない	20

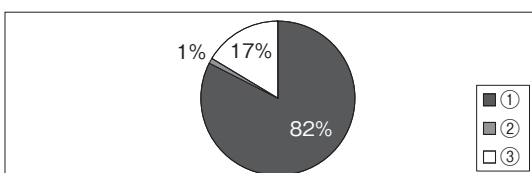
回答者数合計 113



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	95
②	思わなかった	1
③	どちらともいえない	19

回答者数合計 115



授業体験コース アンケート集計 同窓

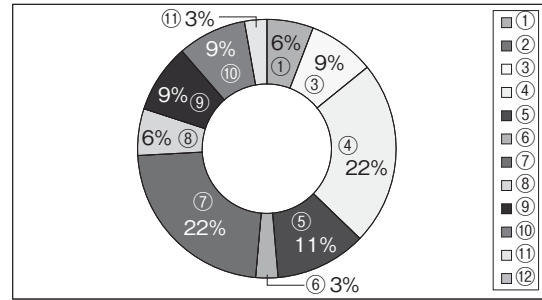
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	2
②	自宅が大学に近かったため	0
③	通学方法などを確認するため	3
④	大学の雰囲気をを知るため	8
⑤	友人を作るため	4
⑥	大学生活に不安があったため	1
⑦	大学での授業内容を知るため	8
⑧	自校教育について聞いたかったため	2
⑨	各学部のガイダンスが聞いたかったため	3
⑩	体験授業の内容に興味があったため	3
⑪	教員のことを知るため	1
⑫	特に具体的な目的はない	0

回答者数合計 35

受講者数 16人 回答者数 14人 回答率 87.5%

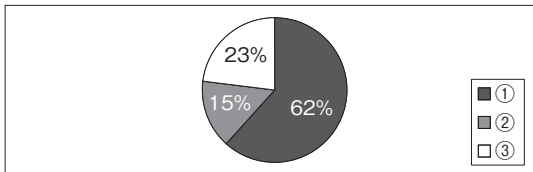


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	8
②	わかりにくかった	2
③	どちらともいえない	3

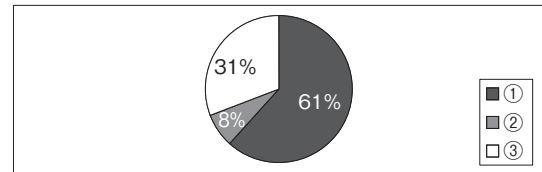
回答者数合計 13



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	8
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	4

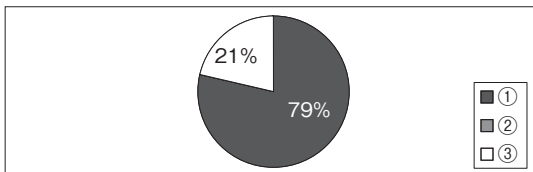
回答者数合計 13



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	11
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	3

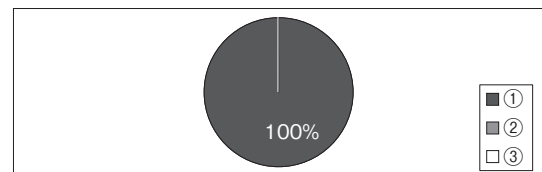
回答者数合計 14



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	13
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	0

回答者数合計 13

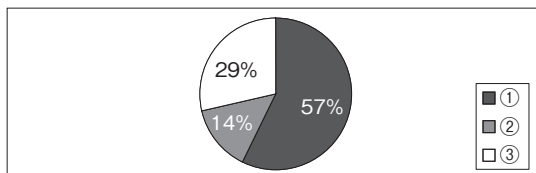


Q3 入学前教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	8
②	感じていなかった	2
③	どちらともいえない	4

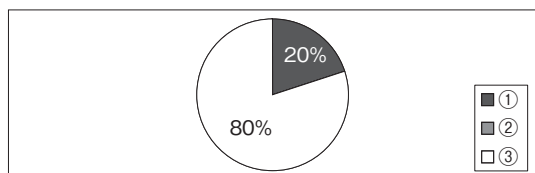
回答者数合計 14



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなかった	2
②	不安はなくならなかった	0
③	どちらともいえない	8

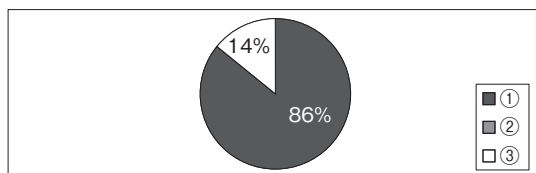
回答者数合計 10



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	12
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	2

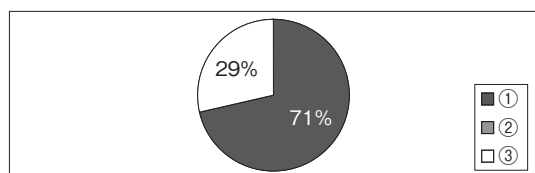
回答者数合計 14



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	10
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	4

回答者数合計 14



授業体験コース アンケート集計 文学部

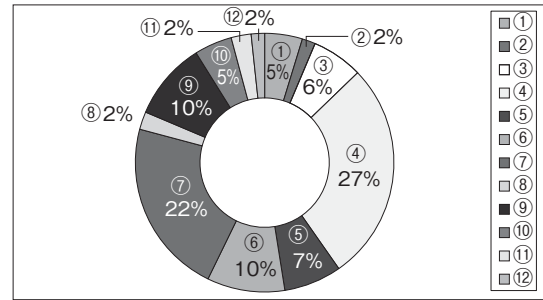
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	6
②	自宅が大学に近かったため	2
③	通学方法などを確認するため	8
④	大学の雰囲気を知らため	34
⑤	友人を作るため	9
⑥	大学生活に不安があったため	12
⑦	大学での授業内容を知るため	27
⑧	自校教育について聞いたかったため	3
⑨	各学部のガイダンスが聞いたかったため	12
⑩	体験授業の内容に興味があったため	6
⑪	教員のことを知るため	3
⑫	特に具体的な目的はない	2

回答者数合計 124

受講者数 51人 回答者数 48人 回答率 94.1%

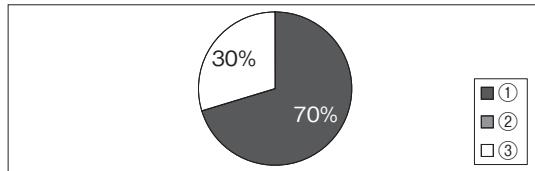


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	33
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	14

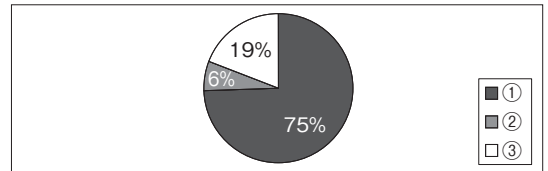
回答者数合計 47



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	35
②	わかりにくかった	3
③	どちらともいえない	9

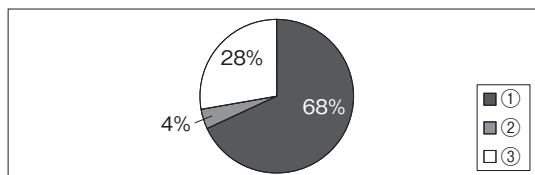
回答者数合計 47



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	32
②	わかりにくかった	2
③	どちらともいえない	13

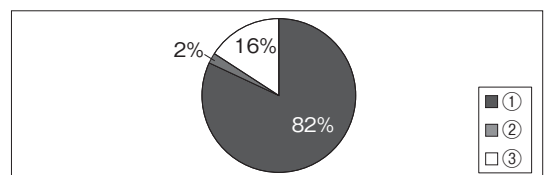
回答者数合計 47



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	36
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	7

回答者数合計 44

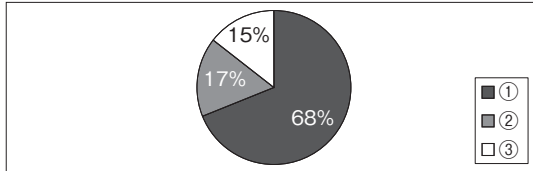


Q3 入学前教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	33
②	感じていなかった	8
③	どちらともいえない	7

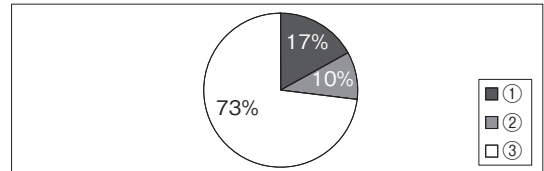
回答者数合計 48



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなくなった	7
②	不安はなくならなかった	4
③	どちらともいえない	30

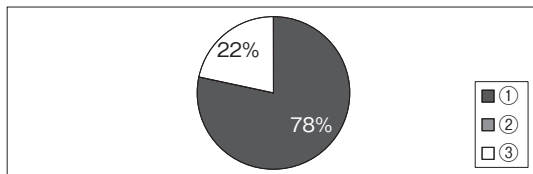
回答者数合計 41



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	36
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	10

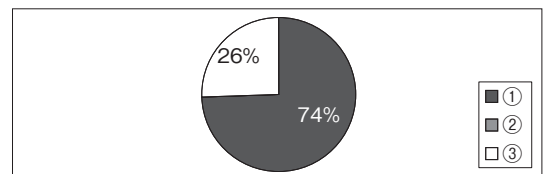
回答者数合計 46



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	35
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	12

回答者数合計 47



授業体験コース アンケート集計 教育学部

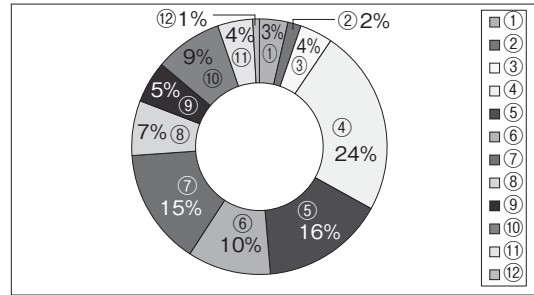
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	4
②	自宅が大学に近かったため	2
③	通学方法などを確認するため	5
④	大学の雰囲気を知らため	27
⑤	友人を作るため	18
⑥	大学生活に不安があったため	12
⑦	大学での授業内容を知るため	17
⑧	自校教育について聞きたかったため	8
⑨	各学部のガイダンスが聞きたかったため	6
⑩	体験授業の内容に興味があったため	10
⑪	教員のことを知るため	5
⑫	特に具体的な目的はない	1

回答者数合計 115

受講者数 33人 回答者数 32人 回答率 97%

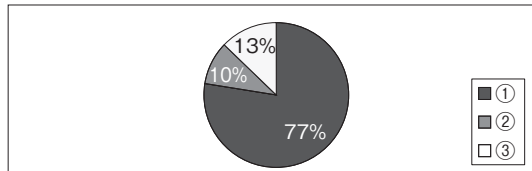


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	24
②	わかりにくかった	3
③	どちらともいえない	4

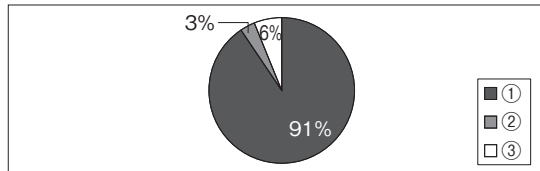
回答者数合計 31



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	29
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	2

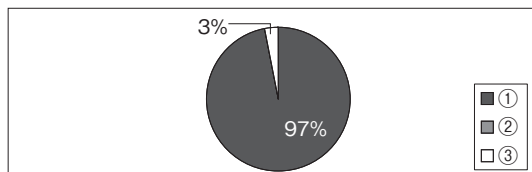
回答者数合計 32



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	31
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	1

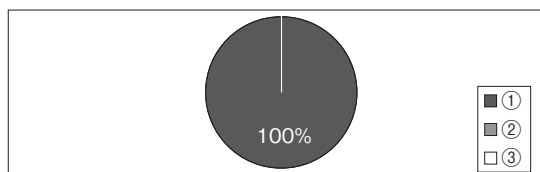
回答者数合計 32



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	32
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	0

回答者数合計 32

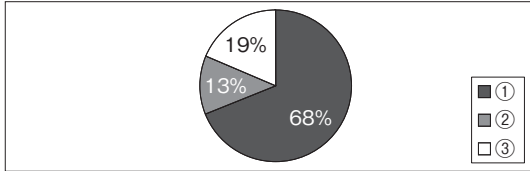


Q3 入学前教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	22
②	感じていなかった	4
③	どちらともいえない	6

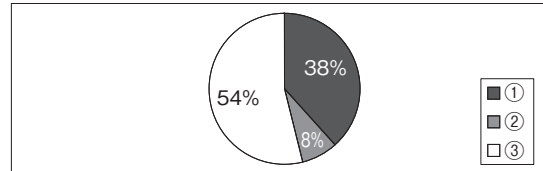
回答者数合計 32



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなかった	10
②	不安はなくならなかった	2
③	どちらともいえない	14

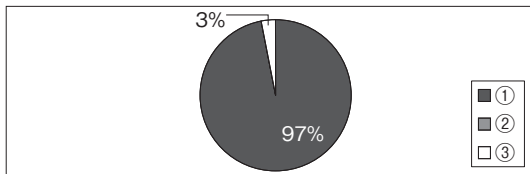
回答者数合計 26



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	31
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	1

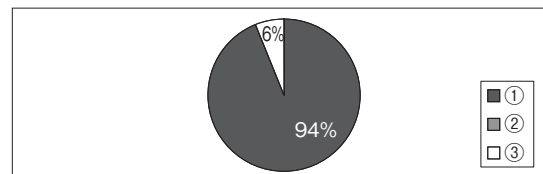
回答者数合計 32



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	30
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	2

回答者数合計 32



授業体験コース アンケート集計 社会学部

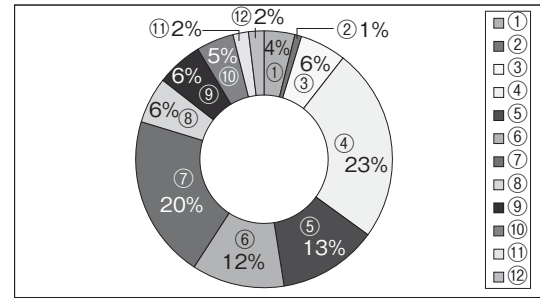
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	4
②	自宅が大学に近かったため	1
③	通学方法などを確認するため	6
④	大学の雰囲気を知らため	25
⑤	友人を作るため	13
⑥	大学生活に不安があったため	12
⑦	大学での授業内容を知るため	21
⑧	自校教育について聞きたかったため	6
⑨	各学部のガイダンスが聞きたかったため	6
⑩	体験授業の内容に興味があったため	5
⑪	教員のことを知るため	2
⑫	特に具体的な目的はない	2

回答者数合計 103

受講者数 44人 回答者数 39人 回答率 88.6%

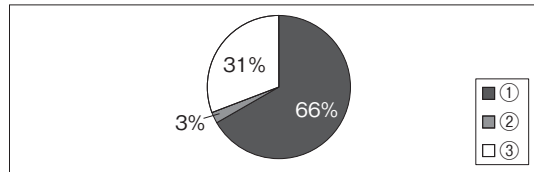


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	26
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	12

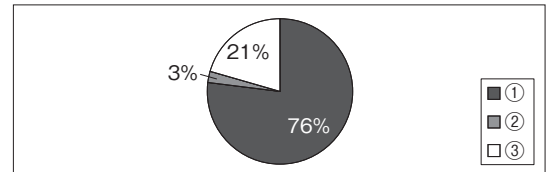
回答者数合計 39



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	30
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	8

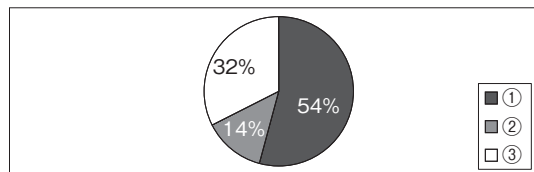
回答者数合計 39



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	20
②	わかりにくかった	5
③	どちらともいえない	12

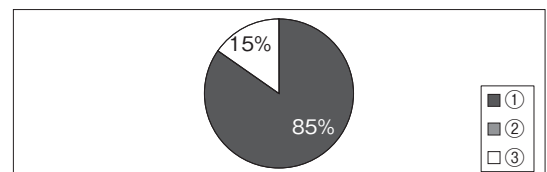
回答者数合計 37



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	28
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	5

回答者数合計 33

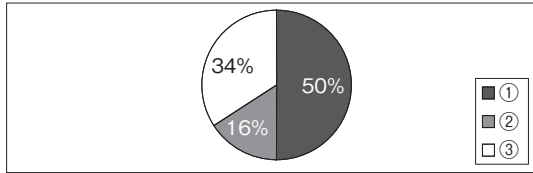


Q3 入学前教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	19
②	感じていなかった	6
③	どちらともいえない	13

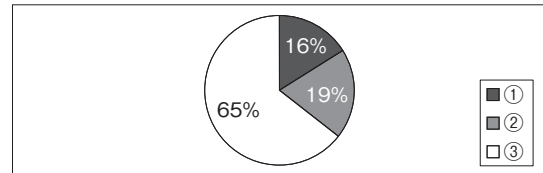
回答者数合計 38



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなかった	5
②	不安はなくならなかった	6
③	どちらともいえない	20

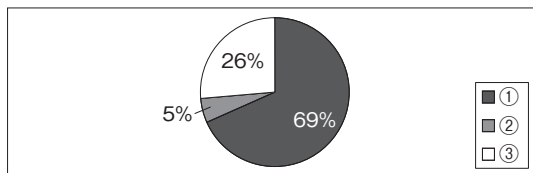
回答者数合計 31



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	26
②	持てなかった	2
③	どちらともいえない	10

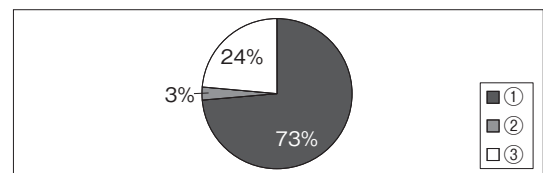
回答者数合計 38



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	28
②	思わなかった	1
③	どちらともいえない	9

回答者数合計 38



授業体験コース アンケート集計 社会福祉学部

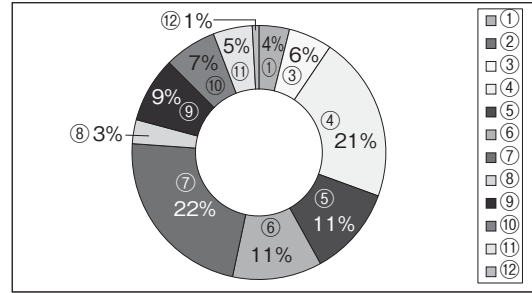
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	4
②	自宅が大学に近かったため	0
③	通学方法などを確認するため	6
④	大学の雰囲気を知らため	22
⑤	友人を作るため	12
⑥	大学生活に不安があったため	12
⑦	大学での授業内容を知るため	24
⑧	自校教育について聞いたかったため	3
⑨	各学部のガイダンスが聞いたかったため	9
⑩	体験授業の内容に興味があったため	7
⑪	教員のことを知るため	5
⑫	特に具体的な目的はない	1

回答者数合計 105

受講者数 32人 回答者数 32人 回答率 100%

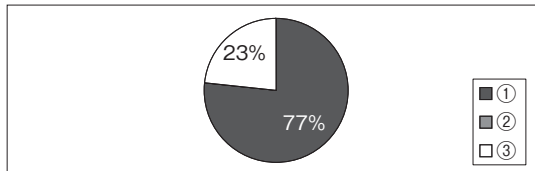


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	23
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	7

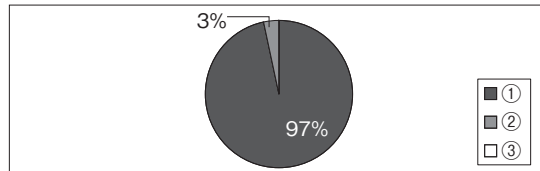
回答者数合計 30



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	30
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	0

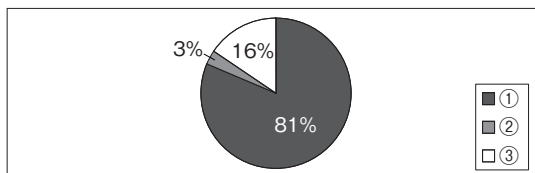
回答者数合計 31



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	26
②	わかりにくかった	1
③	どちらともいえない	5

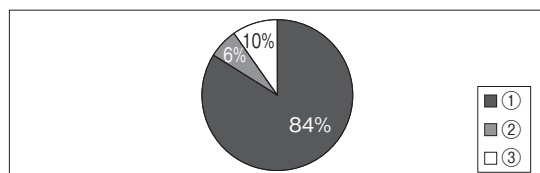
回答者数合計 32



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	26
②	わかりにくかった	2
③	どちらともいえない	3

回答者数合計 31

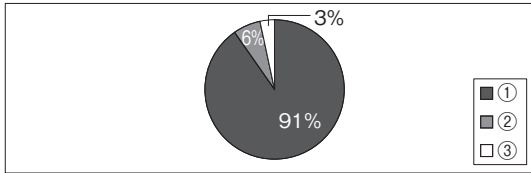


Q3 入学前教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	28
②	感じていなかった	2
③	どちらともいえない	1

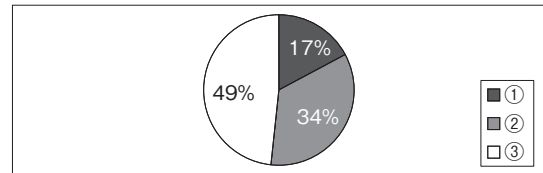
回答者数合計 31



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなかった	5
②	不安はなくならなかった	10
③	どちらともいえない	14

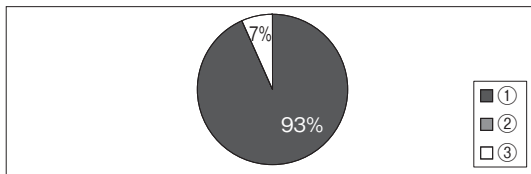
回答者数合計 29



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	28
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	2

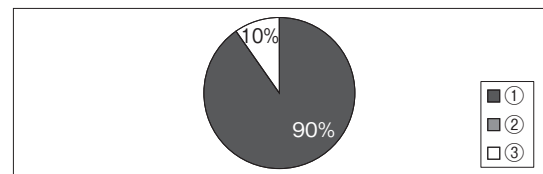
回答者数合計 30



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思われましたか？

①	思った	28
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	3

回答者数合計 31



授業体験コース アンケート集計 保健医療技術学部

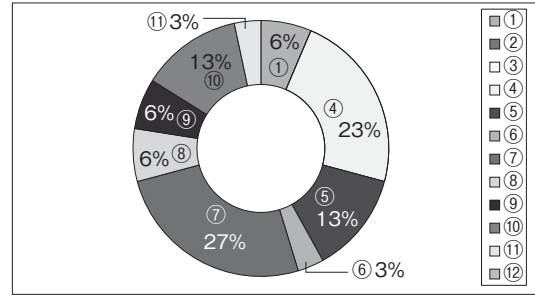
Q1 参加目的

Q1-1 授業体験コースに参加した目的は何ですか？（複数回答可）

①	日程の都合が良かったため	2
②	自宅が大学に近かったため	0
③	通学方法などを確認するため	0
④	大学の雰囲気を知するため	7
⑤	友人を作るため	4
⑥	大学生活に不安があったため	1
⑦	大学での授業内容を知るため	8
⑧	自校教育について聞きたかったため	2
⑨	各学部のガイダンスが聞きたかったため	2
⑩	体験授業の内容に興味があったため	4
⑪	教員のことを知するため	1
⑫	特に具体的な目的はない	0

回答者数合計 31

受講者数 8人 回答者数 8人 回答率 100%

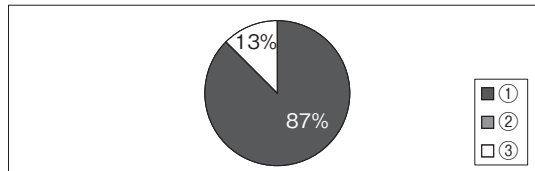


Q2 実施内容について

Q2-1 自校教育について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	7
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	1

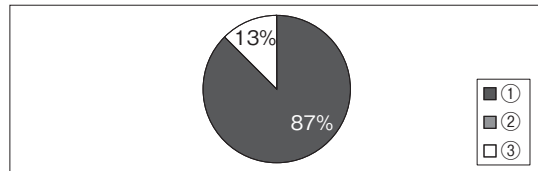
回答者数合計 8



Q2-2 各学部の学びの導入（ガイダンス）について、いかがでしたか？

①	わかりやすかった	7
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	1

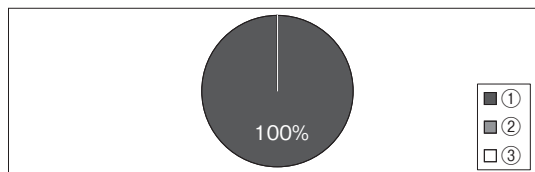
回答者数合計 8



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午前の授業）

①	わかりやすかった	8
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	0

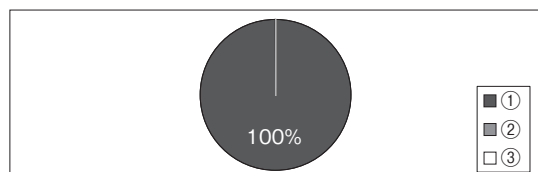
回答者数合計 8



Q2-3 各学部の体験授業について、いかがでしたか？（午後の授業）

①	わかりやすかった	7
②	わかりにくかった	0
③	どちらともいえない	0

回答者数合計 7

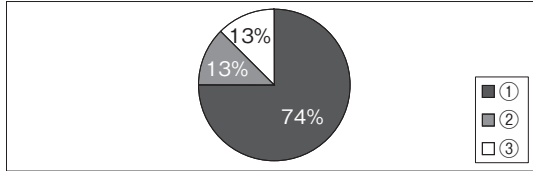


Q3 入学前教育（授業体験コース）について

Q3-1 大学生になることに不安を感じていましたか？

①	感じていた	6
②	感じていなかった	1
③	どちらともいえない	1

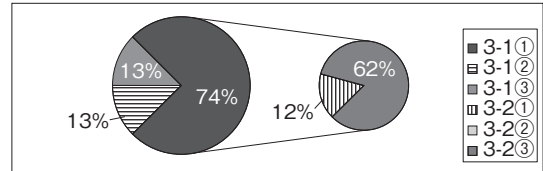
回答者数合計 8



Q3-2 大学生になる不安は少なくなりましたか？（Q3-1 で①を選択した人のみ）

①	不安は全くなくなった	1
②	不安はなくならなかった	0
③	どちらともいえない	5

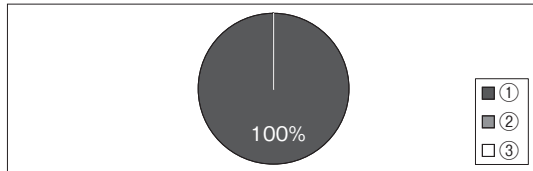
回答者数合計 6



Q3-2 入学前教育（授業体験コース）を受けて、大学の授業に関心が持てましたか？

①	持てた	8
②	持てなかった	0
③	どちらともいえない	0

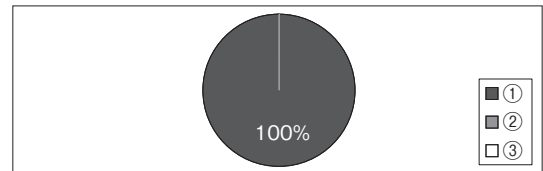
回答者数合計 8



Q3-3 入学前教育（授業体験コース）は、大学の授業に役立つと思えましたか？

①	思った	8
②	思わなかった	0
③	どちらともいえない	0

回答者数合計 8



（集計：山本 理絵）

FD Review

FD Review

FD
フォーラム

基調講演とシンポジウム

2008年3月8日 於：立命館大学 文責 清水 稔

1. 趣旨説明：木野茂（立命館大学 大学教育開発・支援センター教授、
第13回FDフォーラム企画検討委員会委員長）

- ① 基調講演の予定者寺崎昌男（立教大学 大学教育開発・支援センター顧問他）氏が急病のため基調講演が取りやめとなり、シンポジスト3名による講演（話題提供）からスタートすることとなる。
- ② 21世紀に入って社会の変化が多様性と複雑化の度合いをますます強めるなかで、大学教育におけるFD活動の推進も、そのような変化と無縁ではない。ここで大学教育と現代社会の関係はどうあるべきかをあらためて問い直すことが重要である。現代社会の社会とは、国際社会・知識情報化社会・企業社会・地域社会・高齢化社会等々様々な側面を持つ。こうした多様な社会のニーズに大学はどう応えていけるのか、また大学教育の側は社会に何を求めているのか、この双方向的な視点から大学と社会に関する意見の交換を行う。

2. 話題提供

2.1 FD義務化を控えて 中村正（学校法人立命館 常務理事〈教学担当〉）

- ① 立命館大学での教育開発の概要説明
- ② 学習者が中心となる教育
- ③ 学びのコミュニティ
 - a. 大規模校の特性の発揮
 - b. 青年期の多様な移行期の支援
 - c. 相互の学びあいを豊かに展開
 - d. 社会貢献による学びと地球市民の育成
 - e. 参加・参画のカタチ
 - f. 初年次教育から卒業研究までの一貫性とカリキュラム
- ④ 学びのシステムとスタイル
 - a. 学びの環境をつくる・・・ Semester制度の実質化
 - b. カリキュラムツリー・・・ カリキュラムポリシーの明確化
 - c. カリキュラムマップ・・・ 科目の到達目標の明確化
 - d. 学生の学習実態の把握
- ⑤ 自発的なFDにするために・・・ 学習者の目線
- ⑥ 脱学習としての学び・・・ 自己展開する学習
- ⑦ コミュニケーションとしての授業・・・ 学習者の知識獲得の過程を知る
- ⑧ 教える組織の専門家として力量の開発・・・ 学習者の視点に立つ

2.2 学生・大学に求められる大学教授職の使命～FDの本質と今後の可能性

飯吉弘子（大阪市立大学 大学教育研究センター准教授）

- ① 産業界が学生に求めている力・・・行動力・創造力に結びつく自発的知的拡張性、換言すれば専門分野を超えた汎用的な力（新しい教養）
- ② 大学教育に求められるもの・・・学生が自分で考える力、自己を相対化する力、大学教育はそのために思考・問題発見解決の多様な方法やプロセスを教えることにある。
- ③ 問われる大学教授職の使命・・・大学教員の使命はその専門性の中に閉じこめることではなく、専門分野において知のさらなる発見創造をし、他分野との連携の中で自己の分野を応用あるいは統合しつつ相対化し、それらを教育の中で知の体系として分かりやすく理解させることである。
- ④ FDの本質と今後の可能性・・・FDとは、大学全体として大学教授職に求められる本質的な専門性および教授職の使命感を向上することで、大学全体で質の高い教育を実現することである。それを担保するためには、大学（界）における個人の意識改革、自らの教育を含む専門能力向上への動議付けを推進する大学システムを構築することである。

2.3 高校教員と学生の視点から 滝紀子（学校法人河合塾 教育研究部部長）

- ① 志望大学決定で学生が重視した項目・・・トップ3（入試難易度、設置学部学科、入試科目・出題傾向）は、この9年間変化していない。
- ② 受験指導で先生が重視した項目・・・トップ3（入試難易度、設置学部学科、入試科目）は、①と同様この9年間変わってはいない。
- ③ 高校教員対象の進路研究会のテーマ・・・理工系、医学薬学系、福祉系、情報系、法学経済系の実学に集中している。
- ④ 工学系の大学の現状から・・・工学離れ、基礎能力（数理等）の欠如
- ⑤ 求められる能力・教育・・・地球的視点から多面的に思考する能力、技術者倫理、基礎教育の充実、日本語あるいは外国語によるコミュニケーション能力の養成、自主的・継続的に学習する能力、創成能力等
- ⑥ 統計を使いながら、高校生・大学生の意識を垣間見ることのできる貴重な報告がなされたが、紙面の関係もあるので、ここで止めることにする。
- ⑦ さいごにFDにかかわる指摘を佐藤浩章愛媛大学准教授の発言をふまえて述べられた部分を紹介すると、FDとは、最終的には学生の学びと成長を目指すものである。そのための施策として、
 - a. 大学で育てたい学生像の明確化や教育目標・方針の設定
 - b. それに基いて編成される各学部学科のカリキュラム・プログラムの開発支援
 - c. 個々の教員がカリキュラム・プログラムの趣旨を十分理解した上での授業展開
 - d. 個々の教員の授業や学生に対する指導能力の向上の支援
 等を大学において組織的に行うことが重要である。

3. 佛教大学のFDに活用していきたいこと

以上の報告の内容は、本学のFDにおいてすべてが活用すべき対象となる。

4. 所見

以上の報告は、今ただちに本学が取り組まねばならない初歩的な課題であり、その実質化にむけた貴重な内容をもっている。

第1ミニ・シンポジウム FD組織化への挑戦と課題

2008年3月9日 於：立命館大学 文責 達 富 洋 二

1. 趣旨説明／大塚雄作（京都大学 高等教育研究開発推進センター教授）

「本シンポジウムでは、いくつかの大学の『組織的』ということの考え方と、それに向けてのチャレンジを紹介していただき、また、FDに関するアカウンタビリティを示すために、どのような評価を共有していったらいいのかという点について、議論を深めていきたいと思います。」（資料集 p ①-4 より）

2. 話題提供

2.1 「FD組織化をどう捉え実践を位置づけるのか：島根大学の挑戦と課題」

山田剛史（島根大学 教育開発センター専任講師）

2.1.1 内容教育改革（FD）の必要性

2.1.2 島根大学教育開発センターの取り組み

2.1.3 FD組織化をどう捉え、実践を位置づけるのか

2.2 大学間連携によるFDへの挑戦と課題－大学間連携「地域ネットワークFD“樹氷”」の経験を通して

小田隆治（山形大学 高等教育研究企画センター教授）

2.2.1 “樹氷”の設立経緯

2.2.2 “樹氷”の活動内容

2.2.3 成果と課題

2.2.4 山形大学の大学間連携FDの挑戦

2.3 話題提供／FDの再定義と評価への挑戦と課題

沖裕貴（立命館大学 大学教育開発・支援センター教授）

2.3.1 カリキュラム・ポリシーとは

2.3.2 大学設置基準の改正

2.3.3 日本のFDの定義の変遷

2.3.4 評価について

2.3.5 カリキュラム・マップとは

2.3.6 改正によって求められる「理念～成績評価」の基本構造

2.3.7 教育改革総合指標の特徴と意義

3. 佛教大学のFDに活用していきたいことがら

3.1 具体的なことがら

- ・学生との「授業改善のための座談会」
- ・教員との「授業改善のための座談会」
- ・FDの取り組みを全学的に構造化することとその周知
- ・大学間連携FDへの取り組み
- ・全学としてのディプロマ・ポリシーの明確化
- ・各学部学科としてのディプロマ・ポリシーの明確化
- ・大学のディプロマ・ポリシーから導き出される授業内容の工夫
- ・各学部学科のディプロマ・ポリシーから導き出される授業内容の工夫

3.2 所見

単に授業アンケートや授業公開の実施だけではなく、どのような資質や能力をもった学生像(DP)を目指した大学教育を具現化するのかということを明確にするとともに、佛教大学の全教職員が「佛教大学の学生を教育する共同体」になるための具体的な方法を中長期的計画のもとに展開していかなければならないと考える。

第13回FDフォーラム 大学教育と社会—FD義務化を控えて—

第2ミニ・シンポジウム 大学の授業は社会の声に応えることができるのか？ ——学生と教員の声——

2008年3月9日 於：立命館大学 文責 松本真治

シンポジスト：松浦善満（和歌山大学 教育学部教授、同付属小学校長）

原 清治（佛教大学 教育学部教授、通信教育部長、教職支援センター長）

木野 茂（立命館大学 大学教育開発・支援センター教授）

情報提供者／協力者：立命館大学・佛教大学 学生有志

コーディネーター：松本真治（佛教大学 文学部英米学科准教授）

1. 分科会のねらい

授業改善は学生の利益のために行われるということには異論はなからう。しかしながら、ともすれば学生＝顧客的発想となり、学生におもねる授業改善につながりかねない。そこで学生を中心に据えた授業改善の対極として、どのような学生を社会に送り出すべきなのかという観点からの授業改善を考えることにも意義があろう。授業を受けることによって、学生は何を身につけることができるのかという観点からの授業改善である。大学が社会の声に迎合する必要はないが、それでも社会の存在を無視して大学は存在しえない。社会と授業のあり方をめぐって、教員、有志学生、フロアの参加者とともに今年も熱い議論を展開する。

2. 報告の概要

報告の展開としては、①有志学生の報告、②シンポジストから有志学生への質問・コメント、③シンポジストからの報告、④有志学生からシンポジストへの質問・コメント、⑤シンポジストからの補足、⑥フロアからの質問への応答、⑦全体討議、というものであった。

◇佛教大学有志学生の報告

- ・山本紘三（英米学科3回生）：コミュニケーション能力を養うためには少人数のディベート授業、課題を見つけそれを解決する能力を養うためにはグループで課題を見つけ、それを解決する授業が必要。
- ・藪中麻希（英米学科3回生）：大学の授業と自分の目標が合致していることが必要。どうすれば授業と学生の目標を合致させることができるのか、それを考えていくのがこれからの大学の課題ではないか。
- ・梶谷岳史（英米学科2回生）：与えられた問題を解答する課題ではなく、問題点自体を見つけ、そしてそれを解決するような課題を与えることが必要ではないか。

◇シンポジストからの報告

- ・松浦善満：和歌山大学における授業改善の実践例
- ・原 清治：大学生の年齢の多様化と社会人学生の学習ニーズ
- ・木野 茂：授業改善におけるコミュニケーションの重要性

3. 論 考

◇学生参加型のFD

昨年度の第12回FDフォーラムに引き続き、今回もコーディネーターとして学生を交えたミニ・シンポジウムを実施した。参加してくれた有志学生が必ずしも学生を代表しているとは言えないし、またその学生の意見が参考にならない場合もあるということも確かに事実であるが、これまでのようにFDを教員（または職員）中心に進めていくことだけが唯一の方法ではないということも正論ではなかろうか。授業アンケートがFD活動の一つとして定着した今、学生をも巻き込んだ別の形のFD活動を追及することにも大きな意義があろう。その意味でも、FDフォーラムにおいて学生参加型のシンポジウム・分科会があつてしかるべきで、昨年と今年のミニ・シンポジウムによってその先鞭をつけることができたとすれば、それだけでも大きな収穫である。

◇到達点

「社会」とは何かを大学の授業改善という点から考えた場合は、それは学生という窓を通して見た社会と考えてみてはどうだろうか。〈社会と大学〉ではなく、〈社会と大学の授業〉というつながりにおいては、その中間に学生という存在を無視することはできないであろう。授業はあくまでも学生のためにあるのだから。学生は社会というものをまったく知らないわけではなく、それなりに社会というものを意識している。では教員が社会とは何であるのかをよく知っているのかといえそうでもなく、必ずしも明確な共通の概念を持ち合わせているわけではない。従って、教員からの一方的な押し付け型ではなく、教員と学生の対話を通じて、社会に応えることのできる授業作りを展開していくべきではないだろうか。具体的には、授業アンケートという次元にとどまらず、授業の理念や到達目標の明確化からカリキュラム改善という次元に及ぶFD活動となるであろう。

第2ミニ・シンポジウムを終えるにあたり、3人のシンポジストに「大学の授業は社会の声に応えることができるのか？」という最後の質問をしたところ、「応えることができるだろう」「応えなければならない」「応えるために努力している」という答えを得た。そのポイントとしては、学生がどれだけ自学を深めることができるのかと、大学が学生の声を聞く準備ができているのか、ということが指摘された。

実は、シンポジストだけではなく有志学生に対しても「大学の授業は社会の声に応えることができるのか？」という質問をしたところ、7名中わずかに1名の手しか上がらなかった。有志学生は少なからずFDに関心を抱いていると思われるが、それでも教員と学生では相当の温度差があるようだ。これはすなわち、少なくとも教員の思いと学生の思いには何らかの隔たりがあると考えてもよいということであり、それは逆に言えば、教員だけが自己満足的にFD活動を展開しても、肝心の学生には届かないということもありうるわけで、学生の視点もFD活動に取り入れていかなければならないことを再認識させられた。

第3ミニ・シンポジウム 地域社会の中の大学

2008年3月9日 於：立命館大学 文責 近藤敏夫

1. 趣旨説明／河村能夫（龍谷大学 経済学部教授、教学部長）

従来から「地域社会の中の大学」という理念は語られてきたが、そこでの取り組みは大学の施設や研究成果を地域に還元するというものであった。しかし、このミニ・シンポジウムの共通認識は、地域社会の中で「共同教育 (cooperate education)」を実践していくというものである。基本は学生や院生が地域社会の中に入って学ぶということである。

2. 話題提供

2.1 地域社会をエンパワメントする「大津エンパワねっと」

筒井のり子（龍谷大学 社会学部教授）

- 2.1.1 大津エンパワねっと構想(学生と地域住民が相互にエンパワメントしあうネットワーク)
- 2.1.2 大学と地域をつなぐ特別講義（住民に講師依頼）、地域エンパワねっと協議会の創設
- 2.1.3 学内実施体制の整備（教授会、GP 推進委員会、オフィス設置、嘱託職員の採用）

2.2 地域でのボランティア活動を、いかにして正課プログラム群に組み立てるか

奈良英久（立命館大学 共通教務課ボランティアセンター職員）

- 2.2.1 立命館大学ボランティアセンターのミッションおよび特徴
- 2.2.2 立命館大学ボランティアセンターの概略
- 2.2.3 地域でのボランティア活動をいかにして正課プログラム群に組み立てるか

2.3 ソーシャル・イノベーション研究コースの取り組み

渡辺雄人（同志社大学 大学院総合政策科学研究科研修生）

- 2.3.1 地域社会の中へ！ 学外研究拠点の設置
- 2.3.2 学外実践施設「農縁館・結の家」、「つくだ農楽校」、「食育ファーム in 大原」
- 2.3.3 「あそびの達人教室」、「ふるさと日曜学校」、地域関心に合わせた講演会、イベント

2.4 大学と地域の連携による地域づくりの実践的研究

唐沢 民（同志社大学 大学院総合政策科学研究科博士前期課程2年次）

- 2.4.1 協働的实践が求められる背景、協働的实践及び社会実験
- 2.4.2 ワークショップ：地域リーダーやキーパーソンが出席する研究構想発表会や報告会
- 2.4.3 社会実験：「大原アートネットワーク」、「大原地域文化祭」

3. 佛教大学のFDに活用していきたいことがら

3.1 具体的なことがら

- ・ 学生と地域住民が相互に活性化しあう「共同教育」
- ・ GP 採択による資金調達および士気高揚
- ・ 学内実施体制の整備（オフィスの設置と嘱託職員の採用）
- ・ 大学院生の研究とリンクさせた常駐職員（オーバードクターなど）配置の学外実践施設
- ・ 地域の多様な人々との連携（市役所・町内会を通じた人脈の活用、住民の自発的参加の推進）
- ・ 地域連携活動の正課カリキュラムへの位置づけ

3.2 所見

地域社会で共同教育を実践するには住民と大学の双方に多くの労力が求められる。いわば対価を求めない労力、これを惜しまない姿勢が地域社会に関与するときには必要になる。また、地域の中に学生が入っていけば不測の事態が起こることは避けられない。その際の解決策は普段から大学の構成員と住民との間に信頼関係が築かれているかどうかによって左右される。今回の報告者のように、地域社会の中で日頃から土壌づくりをし、住民から信頼を得ていることが、共同教育には必要である。

第5分科会 「学び」の心と初年次教育

2008年3月9日 於：立命館大学 文責 有田和臣

1. 趣旨説明／巻本彰一（京都教育大学 准教授）

全入時代における学力低下は、人的財産をフルに活用しなければならない日本の置かれている立場において極めて深刻な問題である。この学力低下に対して、初年次教育において、「学び」の楽しさ、動機付け、将来の自己像等、を獲得させることと同時に学力アップを図るべく、導入教育、自校教育、リメディアル教育が行われてきた。この分科会では種々の取り組みを参考例としながら、今後の初年次教育のあり方を活発に議論する場としたいと考えている。（フォーラムパンフレットより）

2. 報告

2.1 龍谷大学理工学部の中年次教育

四ツ谷晶二（龍谷大学 理工学部教授）

2.1.1 龍谷大学／理工学部について、自己紹介、など

2.1.2 初年次教育／フレッシュャーズキャンプ、大学教員の意識、など

2.1.3 高大連携／教育連携校・関係校、平安高校におけるとりくみ、など

2.2 金沢工業大学における「初年次教育」の取組 —工学基礎教育センターの実践—

青木克比古（金沢工業大学 工学基礎教育センター教授）

2.2.1 工学基礎教育の背景と対応

2.2.2 工学基礎教育センターの開設と目的

2.2.3 e-ラーニングによる学習支援の例

2.2.4 教育情報のオープン化・共有化

2.2.5 高大連携の活動

2.2.6 全入時代の学習支援

2.3 京都教育大学における初年次教育

沖花彰（京都教育大学 教授）

2.3.I 導入教育

2.3.1 推薦入試合格者への入学前教育

2.3.2 基礎セミナー

2.3.3 新入生合宿研修

2.3.II ブリッジ科目

2.3.4 理科領域専攻科目物理学基礎、地学基礎

2.3.5 技術教育推薦 A 型入試合格者を対象に英語、数学の補習授業

2.3.Ⅲ 教員養成のスタートとして

2.4 「学び」の心と初年次教育

北岡崇（椋山女学園大学 国際コミュニケーション学部教授）

2.4.1 前置／「学び」の心と初年次教育について

2.4.2 学部改革および改革を導く理念の概要

2.4.3 学部理念の実現をめざす方策一特に「学び」の心と初年次教育に即して一

3 報告者 4 校に共通する「初年次教育」への認識 一本学 FD に生かせることから

本分科会で初年次教育への取り組みを発表した、龍谷大学・金沢工業大学・京都教育大学・椋山女学園大学の 4 校すべてが、新入生に対して宿泊を含む学外研修を課している。各校とも、「レポートの書き方」や「ノートの取り方」といったアカデミック・スキル習得にも抜き差しなく力を入れているのだが、決してそれがメインではない。

龍谷大学の場合は、上級生や大学院生も参加する「フレッシュャーズキャンプ」を実施し、友達作りの支援に大きなポイントを置いている。大学全入時代の学生に必要なのは、「コミュニケーションの充実」であり「学びあい」のスキルの獲得であると言う。「協力・共有・連携の楽しさ」を教える活動が主眼である。

金沢工業大学は、工学基礎教育センターを設置し、常駐する教員と学生との「こころのふれあい」を演出することによって、学生の「自己実現」への意識を育成しようとしている。

京都教育大学では、1 回生に新入生合宿研修のすべてを準備・計画させ、討論のテーマを設定してディスカッションをしたり、陶芸などの体験学習をしたり、ドッジボールなどのレクリエーションを行ったりする。

椋山女学園大学も、新入生・教員は全員参加、加えて上級生 20 名ほどの参加で、新入生と、先輩学生および教員との親睦をはかる。「コミュニケーションと表現の能力の開発・育成」が何よりも大事であると言う。

つまり 4 校すべてが、潤滑な人間関係を築く能力を育成する点に、初年次教育の重心を置いている。アカデミック・スキル以前に、まず人間関係だという認識である。今の学生は、他の学生や教員と潤滑な人間関係を築き、その関係を支柱にして学ぶ楽しさを実感する能力に欠けている。だから、学びの技術以前に、まず人間関係をうまく築けるよう、支援してやらねばならない。そのための仕掛けが「初年次教育」なのである。ここに、初年次教育の「今」の課題があると見ていいだろう。

第6分科会 教養教育と第二（初修）外国語教育

2008年3月9日 於：立命館大学 文責 岸田 恩

1. 趣旨説明／秋澤雅男（京都薬科大学 一般教育准教授）

現在の大学では、「教養科目」（通常「一般教養」と称される科目）の専門教員が「第二（初修）外国語」を担当するケースや、逆に、第二（初修）外国語の専門教員の多くが、一般教養科目を担当するケースも見受けられる。そこで本分科会では、「教養教育と第二（初修）外国語」の意味づけについて考える。そして、第二（初修）外国語について「一般教育科目を包含する広義の教養教育」（教養としての外国語）と捉えるのか、あるいは「教養教育に対し独自の位置づけを有するもの」（専門・実用としての外国語）と捉え、「第一外国語（英語）」との差異化を図ることが問題なのか等も考察したい。

（資料集 p.6 - 3・4 より）

2. 話題提供

2.1 外国語教育の「目標」をかنگえる－非英語・高等教育・生涯学習－

福島 祥行（大阪市立大学 大学院文学研究科フランス言語文化教室准教授）

- 2.1.1 外国語としてのフランス語
- 2.1.2 外国＝アメリカという構成
- 2.1.3 高等教育における外国語教育の目的
- 2.1.4 教授法と学習観
- 2.1.5 なにをなすべきか？

2.2 薬科大学における初修外国語教育と教養教育

畑 公也（神戸薬科大学 薬学部准教授）

- 2.2.1 神戸薬科大学の初修外国語教育の推移
- 2.2.2 薬科大学の特殊性
- 2.2.3 教養としての語学
- 2.2.4 教養演習系科目について

2.3 初修外国語を学ぶ意義をいかに説くか

松尾 剛（立命館大学 法学部准教授）

- 2.3.1 教養教育と初修外国語教育について
- 2.3.2 初修外国語学習に対する疑義について

2.3.3 大学教育における初修外国語実施の意義

3. 佛教大学のFDに活用していきたいことから

3.1 具体的なことから

- ・双方向的教育から、協働的教育（学生間の知識の相互理解が可能となる教育）への教授法の展開
- ・初年次教育としての「日本語指導」の必要性
- ・第二（初修）外国語におけるネイティブ教員の採用
- ・第二（初修）外国語に関する目標設定の明確化〔クラス・グレード制や検定試験用コースの導入等〕

3.2 所見

各先生とも、日本において英語の重視傾向が強まっていることへの懸念を示しておられたが、だからこそ、学生が第二（初修）外国語を学ぶ意義が、言語面のみならず、複眼的な「物」の見方を養うためにも重要とされた点は印象に残った。また、教員は、現在の学生が問う第二（初修）外国語の実施意義について、明確に「何のために教えるのか」等を答える必要があるとした点は、教授法という観点から参考になった。さらに、報告者や参加者から、外国語を学ぶ以前に日本語の習得が今の学生には絶対必要という声もあがり、学生の学力低下という問題の深刻さも改めて伺えた。

第7分科会 FD義務化時代の教員研修のあり方

2008年3月9日 於：立命館大学 文責 山本博子

1. 趣旨説明／浅若裕彦（大谷大学 文学部准教授）

目的は、各大学において組織的にFDを実施するために必要な知識とスキルを身につけることであり、目標は、他大学の事例を的確に批評する力を養い、自らの職場における組織的FDのフレームワークを構築することである。（資料集 p7-3 より）

2. 話題提供

2.1 「新任教員を対象とした研修プログラムの開発～立命館憲章の実現を目指して～」

金剛理恵（立命館大学 教育開発・支援センター職員）

- 2.1.1 はじめに
- 2.1.2 報告の流れ
- 2.1.3 イギリス調査の概要
- 2.1.4 イギリス高等教育情勢
- 2.1.5 PGCHE（高等教育視覚課程）の誕生
- 2.1.6 PGCHEの概要
- 2.1.7 本学の教育的特徴
- 2.1.8 立命館憲章
- 2.1.9 本学におけるFDの定義
- 2.1.10 研修プログラム開発にあたって
- 2.1.11 新たな研修プログラム案
- 2.1.12 前期セメスター
- 2.1.13 後期セメスター
- 2.1.14 フォローアップの仕組み
- 2.1.15 評価と修了証明
- 2.1.16 本研修の実施体制
- 2.1.17 さらなる教学創造へ

2.2 愛媛大学におけるFDの取組み

佐藤浩章（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室副室長、准教授）

- 2.2.1 はじめに（本発表の目的）
- 2.2.2 FDの定義

2.2.3 FD 実施組織

2.2.4 FD 活動内容

2.3 話題提供／組織的 FD づくりワークショップ

佐藤浩章（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室副室長、准教授）

2.3.1 組織的 FD とは？

2.3.2 非組織的 FD とは？

2.3.3 組織化の構成原理

2.3.4 組織化に役立つグラフィック

2.3.5 組織的 FD のフレームワークを作ろう

3. 佛教大学の FD に活用していきたいことがら

3.1 具体的なことがら

- ・FD 実施組織の整備
- ・新任教員の研修の実施
- ・FD スキルアップ講座（授業実施に必要な特定のスキルの向上を図る）の実施

3.2 所見

2 大学の事例紹介のみでなく、ワークショップを通して各自の大学の FD 業務の分析を行ったことは有意義であった。

第8分科会 授業支援の新しいあり方－大学としての授業支援の組織・体制作り－

2008年3月9日 於：立命館大学 文責 小林 隆

1. 趣旨説明／國安俊彦（京都外国語大学・短期大学専任講師）

来年度から大学におけるがFD義務化されるが、現在までにも、様々な方法による授業支援が行われている。例えば、公開授業・授業アンケートの活用・授業コンサルテーション・初年次教育・大学院生や学部生が関わる授業支援といったように、教員同士の共助や職員との連携、学生参画などの興味深い実践が展開されている。本分科会では、今後、大学としてどのような形で授業支援していくべきなのか、組織的に支援していくためにはどのようにすれば良いのか、といった問題について考える。

2. 話題提供

2.1 「徳島大学の全学FDプログラムにおける授業支援」

神藤貴昭（徳島大学 大学開放実践センター准教授）

2.1.1 徳島大学の全学FDについて

- ①FD基礎プログラム ②FDリーダーワークショップ ③授業コンサルテーション
- ④FDラウンドテーブル ⑤徳島大学教育カンファレンス ⑥教育の質を向上させるための学生ワーキンググループ

2.1.2 全学FDの今後

- ①日常化に向けて ②FD環境の構築 ③FD義務化に向けて

2.2 関西大学の授業支援体制

水越敏行（関西大学 特別顧問・大阪大学 名誉教授）

岩崎千晶（関西大学 大学院博士課程）

2.2.1 関西大学の全学FDについて

- ①各学部の授業の収録 ②新規採用教員への説明会 ③全学の公開セミナー

2.2.2 FDと日常の授業との乖離

2.2.3 全学授業支援グループの構成 FD委員会と授業支援グループの連携

2.2.4 今後の展開

2.3 法政大学における授業支援－初年次教育モデル授業展開－

藤田哲也（法政大学 文学部准教授）

2.3.1 法政大学におけるFDへの取り組み

2.3.2 学習・教育支援プロジェクトの一環としての「初年次教育モデル授業公開」の概要

2.3.3 日本のFDの定義の変遷

2.3.4 今後の課題

3. 佛教大学のFDに活用していきたいことから

3.1 具体的なことから

- ・FD 基礎プログラム（新任教員向け＝授業力向上の宿泊研修＝徳島大学）
- ・授業コンサルティング（授業記録に基づく授業研究会＝徳島大学・関西大学）
- ・教育の質を向上させるための学生ワーキンググループ
- ・授業作り、シラバス作りの研修会
- ・全学授業支援グループ（特に学生の授業サポートスタッフ＝関西大学）

3.2 所見

法政大学の藤田先生の「FDの目標はFD組織の解体」という言葉が頭の中に残っている。つまり、FDの主役は各学部や個人であり、FD組織が解体されても各学部や個人でFD活動が活発になされる状態が好ましいとのことである。そのためには、教育開発委員会を通じた各学部との更なる連携が重要である。また、日常の授業に関する業務を皆で楽しく学びながら行うといった日常の文脈に根を張ったFDのあり方を模索したい。大学教育が良くなって、結果的には教員の負担・負荷が少なくなるようなFD活動のあり方が理想である。

FD Review

大學教育研究の才一三

個人研究発表 D-1 FD・授業公開研究部会

2008年3月26日 於：京都大学 文責 社会福祉学部 藤松素子

1. 大規模私立大学における授業支援の組織経営と学生を活用した効果

遠海友紀・岩崎千晶（関西大学 大学院総合情報学研究所）

村上正行（京都外国語大学 マルチメディア研究センター）

- 1-1 関西大学における授業支援の取り組み
- 1-2 授業支援の組織体制
- 1-3 SA（Student Assistant）の活動内容と成果
- 1-4 まとめと今後の課題

2. 学生の学びに根ざしたFD

—理学療法教育におけるOSCEリフレクション法とFD実践—

平山明子（藍野大学 医療保健学部）

松下佳代（京都大学 高等教育研究開発推進センター）

- 2-1 OSCE-Rと学生の変化
- 2-2 総括的評価から学びの機会へ
- 2-3 学生の学びと教員の変化
- 2-4 新カリキュラムに向けての胎動
- 2-5 OSCE-RCafeの開催
- 2-6 展開のプロセス

3. 学生参画型FDイベント「あったらいいな！こんな授業」の開催

吉田雅章（和歌山大学 経済学部）

- 3-1 第1回「あったらいいな！こんな授業」
- 3-2 学生参画型授業改善演習「あったらいいな！こんな授業」の開講
- 3-3 第2回「あったらいいな！こんな授業」
- 3-4 学生参画型FDイベントの分析と検討

4. 6年間にわたる全学的なFD推進プログラム

川野卓二・神藤貴昭・宮田政徳・曾田紘二（徳島大学 大学開放実践センター）

4-1 第1期（2002～2004）

FD基礎プログラム・FDリーダーワークショップ・FD応用プログラム・FD推進ハンドブック（第1号）（第2号）（第3号）の作成

4-2 第2期（2005～2007）

FD基礎プログラム・FDリーダーワークショップ・授業コンサルテーション・授業研究会・FDラウンドテーブル・教員の資質を向上させるための学生ワーキンググループ・教育カンファレンス

4-3 第3期（2008～2010）

5. 佛教大学のFDに導入すべき事柄

5.1 具体的なことから

- ・学部生・院生・職員・教員の連携による授業支援組織体制の確立
- ・学生の変化への気づきと協働する教員集団の確立
- ・授業改善を新カリキュラムへ反映させる
- ・授業改善における学生の参画システム導入
- ・職員も含めたFDリーダーワークショップの導入

5.2 所見

あらためて何のためのFD活動なのかに立ち返る必要性がある。カリキュラム改革、教育目標の共有化、学びのコミュニティの確立に資する活動として位置づけるべきであろう。

初年次教育

FD Review

FD Review

FD 活動における「初年次教育」の重要性

—学生たちの「達成感」と「満足感」を導くために—

教学部長 八 木 透

佛教大学でFDの活動が始められて今年で9年目を迎えた。その間、さまざまな試行錯誤を繰り返しながら、少しずつではあるが、それでも着実に、私たちの活動は進化してきている。当初はなかなか必要性が認められず、実施率が上がらなかった授業評価アンケートも、昨年度は専任教員だけを見れば80%を越えるところまで上昇した。またE-Learningや授業公開なども、遅々とした歩みではあるが、少しずつ学内に広がりを見せてきている。さらに、これまで教授法開発室が中心となって取り組んできた事業である「入学前教育」や「基礎学力調査」においても、今年度の室員会議においてより効果が上がるような方策を模索中である。そこでは、「初年次教育」やいわゆる「導入教育」との繋がりにおいて、具体的な方法や内容に関して検討を進めてゆく必要があるといえるだろう。

上記のようなこれまでの活動内容を踏まえ、また今後の教授法開発室における取り組みについて考えたとき、今後より重要度が増してゆくであろうと思われる課題は、何といても「初年次教育」ではないかと思われる。一昔前と比べて、文章読解、表現能力などの基礎学力の低下が著しいといわれる昨今の新入生たちに対して、専門教育を始める前の、いわゆる導入教育の必要性が叫ばれているが、これからは本学においても、「初年次教育」の具体的な方法について検討を進めてゆくことが急務である。そこでは、本学独自の初年次教育のテキスト開発も含め、初年次教育の推進をFD活動の最重要課題と位置づけ、全教員が総力で取り組んでゆかねばならないと考える。

私はかつて、「大学の教員に一番求められているのは、いかにして学生たちを前向きにさせ、また学問研究における〈達成感〉と〈満足感〉を保持しながら卒業まで導くかである」と述べたことがある（『教授法開発室だより』第6号、2002年）。その考えは今もまったく変わっていない。ただ、その方法論については、以前とはいささか異なった想いを持つようになった。少し具体的に説明しよう。かつては、学生たちに学問研究に対する「達成感」や「満足感」を与えるためには、まずは個々の専門領域における教授陣の研究活動の質を高め、研究成果を講義の中でいかに学生たちに伝えるか。さらにその伝達によっていかに学生たちに好奇の目を開かせるかという、一種の心理的方法が重要であると考えていた。そして、それは決して機械的・具象的な方法ではなく、教員が学生を目線から当該研究の意義を分析し、その伝達方法を十分に摸索することから実現できるもの。つまり、相当以上に教員側の学生たちに対するまなざしや木目細やかな洞察など、いわばメンタルな要素が大きいと信じていたのである。もちろん、このような教員側のアプローチが学生たちに大きな影響を与え、結果として「達成感」や「満足感」に結びついてゆくことは十分にありうるだろう。その意味では、過去の考え方を否定するものではない。しかし今は、それ

以上に重要なことがあることに気づいたのである。それは第一に、学問研究の基礎となる知識や文章読解力、および表現力を学生たちの身に付けさせることではないかということだ。すなわちそれこそが「初年次教育」なのである。教員の熱い情熱と巧みな語り、ITを駆使した魅力溢れる教材、これらがいかに充実しようとも、学生たちが最低限の基礎学力を有していなければ、勉学に対する「やる気」を引き出すこともできなければ、結果として、「達成感」や「満足感」へは到底行き着くものではないだろう。やはりすべての前提として、「初年次教育」、「導入教育」がどうしても必要となるのである。

文部科学省の方針により、大学におけるFD活動が義務化された現在において、さまざまなFD活動にただ漫然と取り組んでゆくだけでは何も意味を成さなくなりつつある。要は具体的な達成目標を定め、そこに向かって個々の活動や取り組みをいかに実践してゆくかという、まさに活動の中身が問われている。本学では過去8年間の実績を礎として、具体的には「初年次教育」の実践を活動の一つの柱に据え、一方で、学生たちの「授業満足度」を少しでも向上させられるような工夫について模索し、また学生たちの授業や教育のあり方に対する率直な声を吸収できるようなシステムを構築してゆかねばならないと考える。

活動記錄

FD Review

FD Review

活動記録

2007年

- 4月1日(日) 『教授法開発室だより』15号刊行
- 4月3日(火) 基礎学力調査実施(1回生)
英語基礎力調査実施(1回生)
- 4月4日(水) 基礎学力調査実施(3回生)
- 4月19日(木) 第1回教授法開発室会議
- 4月25日(水) 第1回教育開発委員会
- 5月17日(木) 第2回教授法開発室会議
- 5月31日(木) 第2回教育開発委員会
私立大学情報教育協会第45回通常総会出席
(於アルカディア市ヶ谷、岸田恩)
- 6月7日(木) 臨時教授法開発室会議
- 6月14日(木) 臨時教育開発委員会
- 6月21日(木) 第3回教授法開発室会議
- 7月2日(月) ~20日(金)
春学期授業アンケート実施
- 7月3日(火) 春学期授業公開(1限「ブツダの教えH1」田中典彦)
- 7月5日(木) 春学期授業公開(2限「セルフヘルプ論H」中田智恵海)
- 7月6日(金) 春学期授業公開(3限「教育方法学Ha」西之園晴夫)
春学期授業公開(5限「自然地理学1H」植村善博)
- 7月7日(土) 私立大学情報教育協会 平成19年度全国大学IT活用教育方法研究発表
会参加(於アルカディア市ヶ谷、榎本福寿、岸田恩)
- 7月9日(月) 春学期授業公開(4限「近世文学講読1Ha」水谷隆之)
- 7月10日(火) 春学期授業公開(2限「行政学H」上田道明)
- 7月14日(土) 大学コンソーシアム京都 京都高等教育研究センター「第1回FDセミナー」
参加(於キャンパスプラザ京都、松本真治・山本博子)
- 7月18日(水) 春学期授業公開(3限「Basic Communication 1H5」マイケル・デービス)
- 7月19日(木) 第4回教授法開発室会議
第1回FD研究会(授業公開研究会)
- 7月26日(木) 第3回教育開発委員会
- 9月3日(月) 関西地区FD連絡協議会幹事校会議出席(於京都大学、達富洋二)
- 9月5日(水) 私立大学情報教育協会 平成19年度大学教育・情報戦略大会参加
(於アルカディア市ヶ谷、松本真治)
- 9月12日(水) 第5回教授法開発室会議
- 9月19日(水) 教員研修会
- 9月26日(水) 第4回教育開発委員会

- 10月1日(月) 『FD Review』 vol. 2 刊行
- 10月3日(水) 第6回教授法開発室会議
- 10月18日(木) ～19日(金)
平成19年度大学教務部課長相当者研修会参加
(於メルパルク名古屋、山本博子)
- 10月24日(水) 第5回教育開発委員会
- 10月31日(水) 第7回教授法開発室会議
- 11月7日(水) 第8回教授法開発室会議
- 11月14日(水) 第6回教育開発委員会
- 11月21日(水) 第9回教授法開発室会議
- 11月26日(月) 私立大学情報教育協会第46回臨時総会出席
(於アルカディア市ヶ谷、山本博子)
- 12月1日(土) 英語基礎力調査実施(1回生)
- 12月3日(月) 秋学期授業公開(1限「臨床心理学2A」牧剛史)
- 12月4日(火) 秋学期授業公開(1限「法然の生涯と思想A1」笹田教彰)
- 12月5日(水) 第10回教授法開発室会議
秋学期授業公開(2限「経済学A1」的場信樹)
- 12月6日(木) 秋学期授業公開(3限「児童ケア論A」岡本晴美)
秋学期授業公開(3限「福祉用具論A」得丸敬三)
- 12月8日(土) 大学コンソーシアム京都 京都高等教育研究センター
「第2回FDセミナー」参加(於龍谷大学、松本真治)
- 12月10日(月) 秋学期授業公開(3限「初等教育教科専門体育(小)Ab」山口孝治)
- 12月10日(月) ～1月24日(木)
秋学期授業アンケート実施
- 12月11日(火) 秋学期授業公開(2限「男女共同参画社会論A」大東貢生)
秋学期授業公開(4限「初等国語科教育法A」達富洋二)
- 12月12日(水) 第11回教授法開発室会議
秋学期授業公開(2限「児童福祉論2Aa」林俊光)
- 12月13日(木) 秋学期授業公開(1限「Intermediate Communication 2A29」持留浩二)
秋学期授業公開(3限「環境と開発A」満田久義)
秋学期授業公開(3限「初等社会科教育法A」小林隆)
- 12月19日(水) 第2回FD研究会(授業公開研究会)

2008年

- 1月12日(土) 英語基礎力調査実施(1回生)
関西地区FD連絡協議会「授業評価ワークショップ」
出席(於立命館大学、達富洋二)
- 1月16日(水) 第12回教授法開発室会議
- 1月23日(水) 第7回教育開発委員会
- 1月30日(水) 入学前教育体験授業担当者説明会

e-learning 説明会（メディア教材開発・知財課主催、於中会議室、教授法開発室員参加）

- 2月6日（水） 第13回教授法開発室会議
- 2月20日（水） 第8回教育開発委員会
- 3月2日（日） 入学前教育 授業体験コース実施
- 3月8日（土） ～9日（日） 大学コンソーシアム京都 2007年度第13回FDフォーラム
（於立命館大学、第2ミニシンポジウムコーディネーター 松本 真治、清水稔・達富洋二・近藤敏夫・有田和臣・小林隆・山本博子・岸田恩参加）
- 3月11日（火） 初年次教育学会設立大会参加（於同志社大学今出川キャンパス、達富洋二）
- 3月12日（水） 第14回教授法開発室会議
- 3月25日（火） 第9回教育開発委員会
- 3月26日（水） ～27日（木） 第14回大学教育研究フォーラム参加（於京都大学、達富洋二、藤松素子）
- 3月28日（金） 私立大学情報教育協会第47回通常総会出席（於アルカディア市ヶ谷山本博子）

FD Review

FD Review

FD Review

教授法開発室

2007 年度

室長 達富 洋二 (教育学科)
室員 松本 真治 (英米学科)
清水 稔 (人文学科)
有田 和臣 (人文学科)
小林 隆 (教育学科)
近藤 敏夫 (現代社会学科)
藤松 素子 (社会福祉学科)

事務局スタッフ

榎本 福寿 (教学部長 人文学科)
山本 博子 (教育開発課長)
岸田 恩 (教育開発課主任)
山本 理絵 (教育開発課契約専門職員)

2008 年度

室長 達富 洋二 (教育学科)
室員 有田 和臣 (人文学科)
榎本 福寿 (人文学科)
持留 浩二 (英米学科)
小林 隆 (教育学科)
近藤 敏夫 (現代社会学科)
藤松 素子 (社会福祉学科)
日下 隆一 (理学療法学科)

事務局スタッフ

八木 透 (教学部長 人文学科)
山本 博子 (教育開発課長)
岸田 恩 (教育開発課主任)
山本 理絵 (教育開発課契約専門職員)

FD Review vol.3

発行日 2008年7月1日
発行者 佛教大学教授法開発室
〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL (075) 491-2141 (代)

印刷者 株式会社 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麴屋町東入
TEL 075-343-0006 FAX 075-341-4476



BUKKYO UNIVERSITY